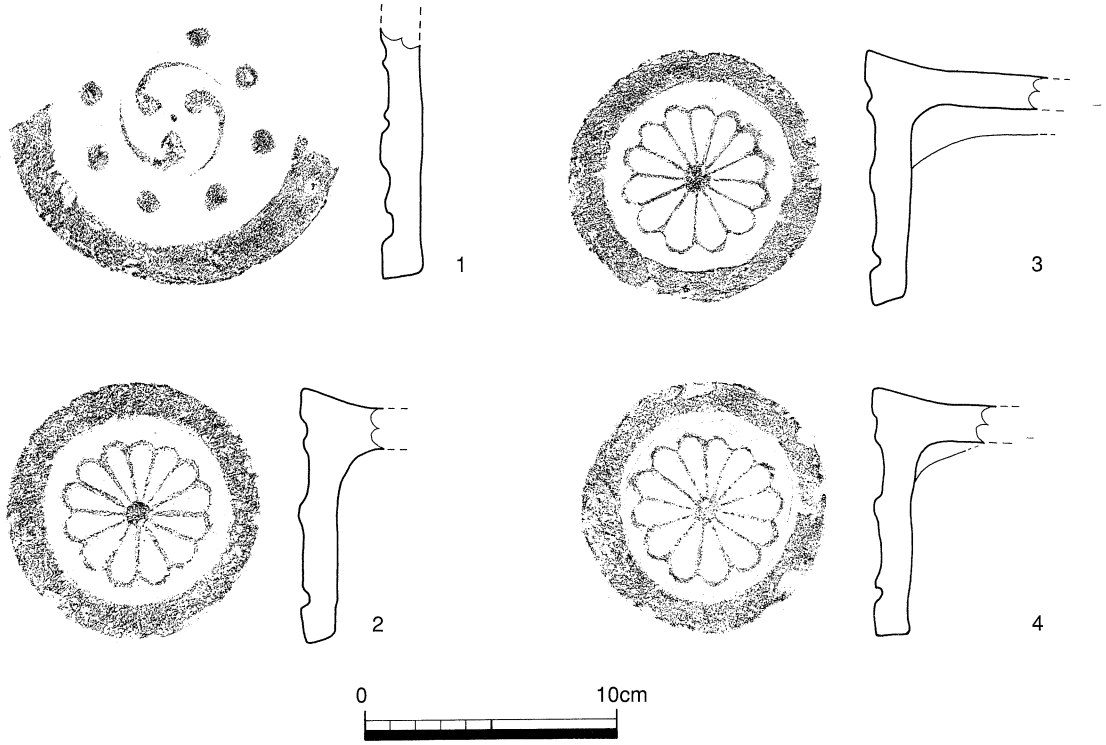


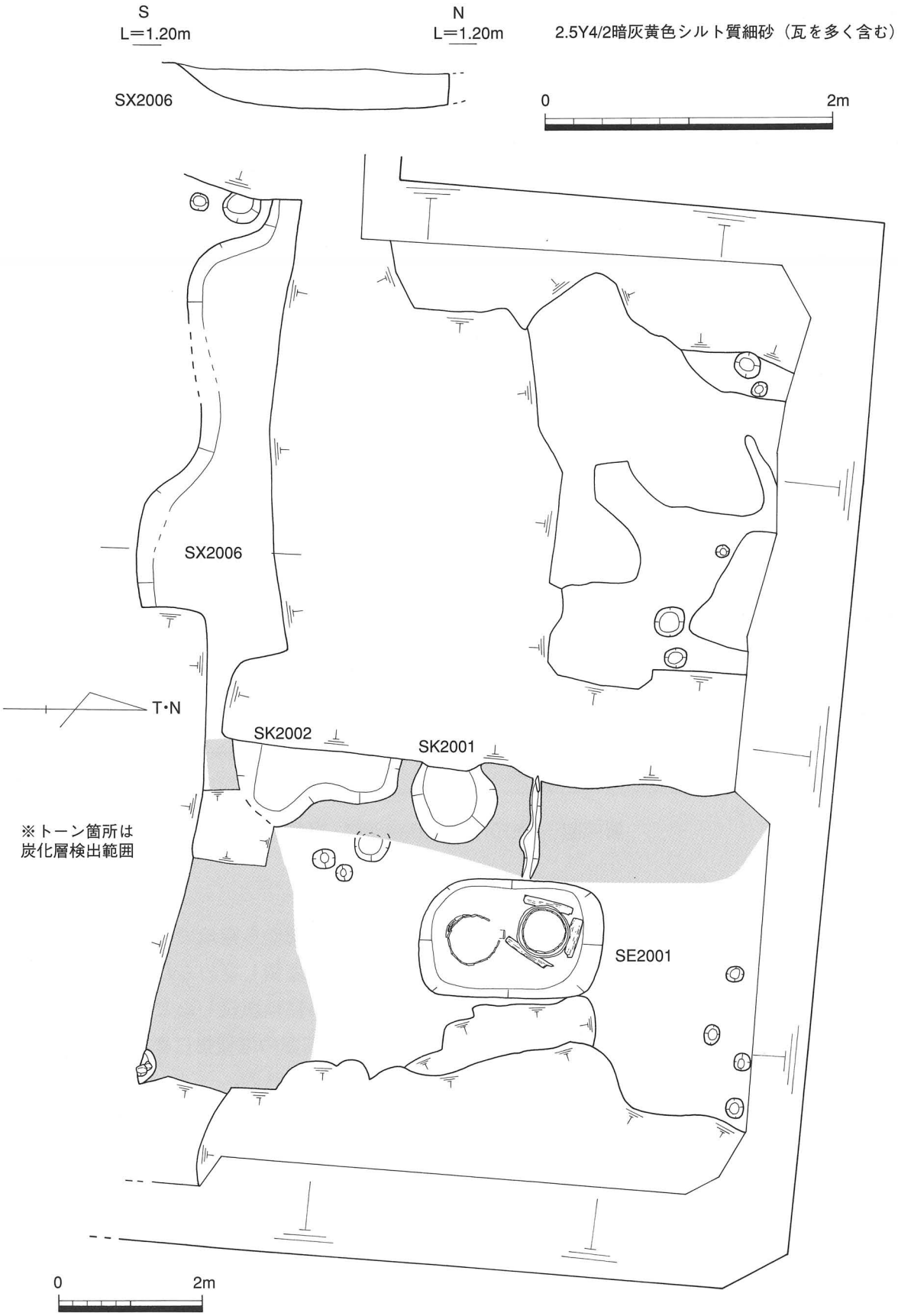
遺構名	報文番号	遺物種別	法量(cm)			胎土	色調		調整		焼成	備考
			長さ(現存長)	厚さ	幅(現存幅)		断面	器面	内面	外面		
SX2010	1	軒丸瓦	—	—	—	砂礫	灰N5/0	灰N4/0			良	巴
SX2010	2	菊丸瓦	3.3	1.6	—	砂礫少	灰N5/0	黄灰2.5Y6/1			良	菊
SX2010	3	菊丸瓦	7.2	1.3	—	砂礫少	灰N5/0	灰白5Y8/1			良	菊
SX2010	4	菊丸瓦	4.8	1.4	1.0	砂礫少	灰N4/0	灰N5/0			不良	菊

第189図　SX2010出土遺物実測図・観察表

B区第2面検出遺構（第190図）

B区では中央部に大きな撹乱坑が存在し，その壁面の堆積状況から窪地であることが窺われた（第10図）。窪地の範囲はSX2006が南面に相当し，炭化層が埋積し認められた西半部一帯と想定された。この窪地の最下層部となる第3面では，17世紀後半には埋没したと考えられるSX3004～3006を確認している。また当遺構面の上位では，19世紀前葉の堆積物に考えられる土壁及び瓦片を含んだ整地が認められ，窪地上面はこの間の所産と想定される。

一方，微高地上となる東半部ではSE2001，SP2001，2002を検出しているが，第1面で近代期の所産に考えられるSX1005の直下で認められ，出土遺物では幕末～明治期の所産が中心となっている。

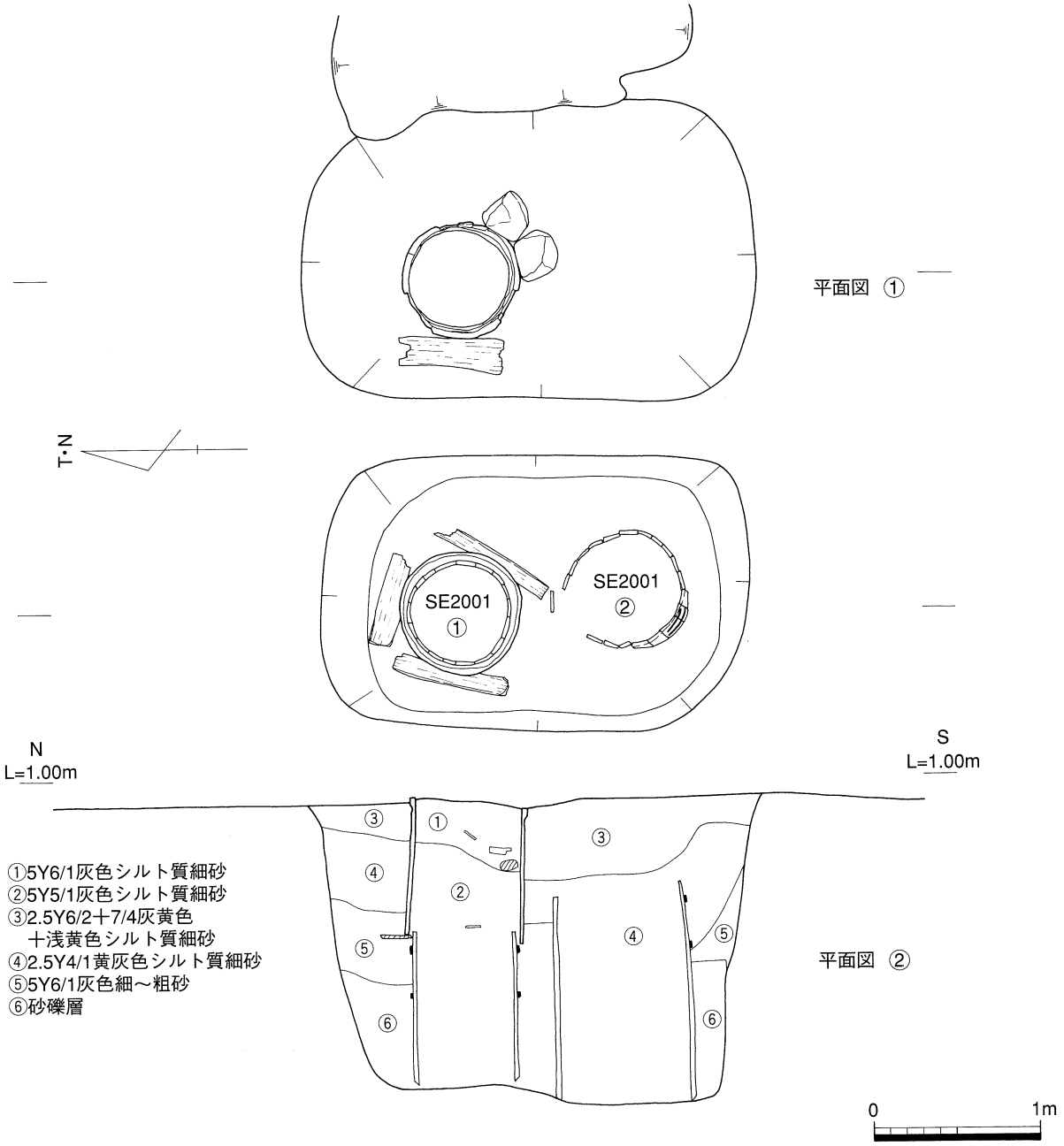


第190図　第２面Ｂ区遺構平面・土層図

SE2001（第191図）

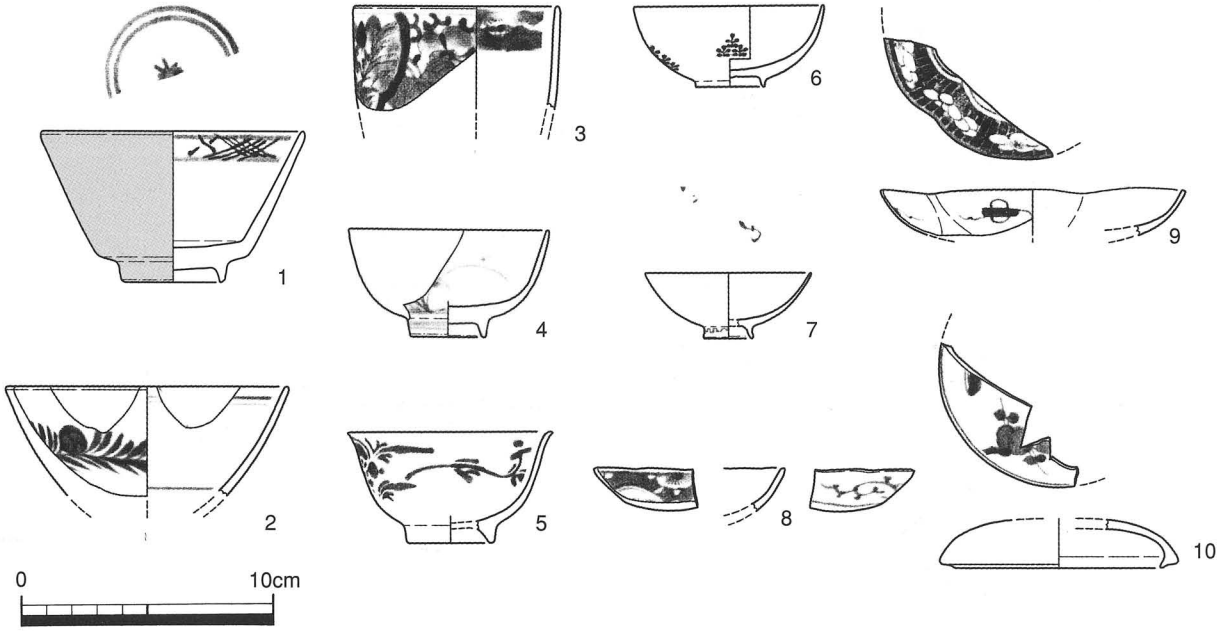
B区東半，第２面で確認した井戸である。検出した標高は0.85m，底面の標高は－0.8～－0.9mを測る。平面の形状は長方形で，２つの井側が認められる（北側：SE2001－①，南側：SE2001－②）。土層図６層の上位で湧水が認められた。SE2001－①の井側は２段遺存し，下段が木桶で，上段が土製である。井側の径は，それぞれ約60cmと70cmで，高さが90cm前後である。SE2001－②は，径が約80cm，高さが約120cmである。規格が異なるため，埋設された時期が異なる可能性もあるが，確認状況からは明確な判断ができない。

断面は急勾配の壁面で，底面はSE2001－②の下部でやや深くなっている。堆積状況は５・６層が井側の留め土である。平面図との対応では，平面図１が３層の上層部付近，平面図２が５層



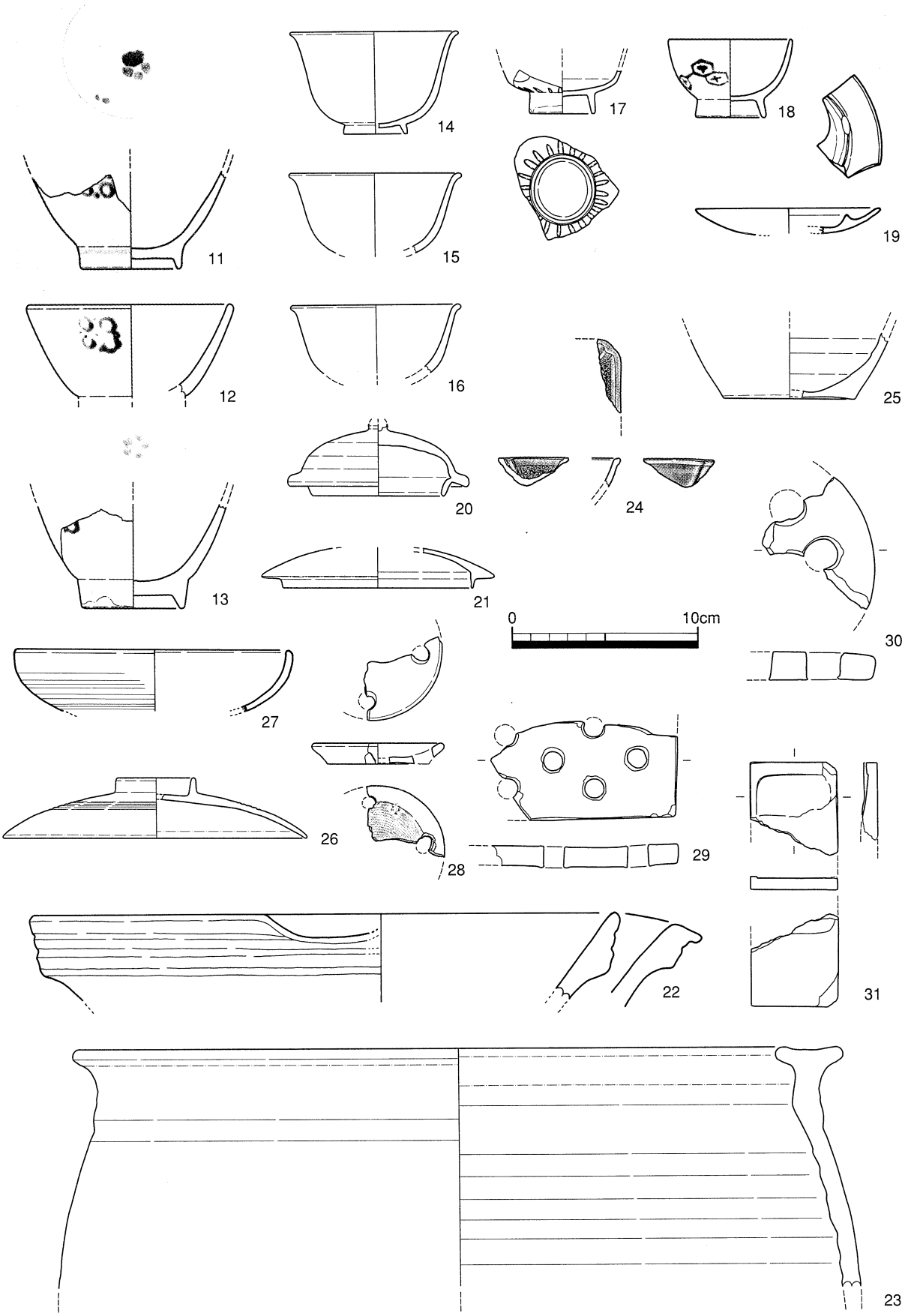
第191図　SE2001－①・②平面・土層図

の上層部付近である。平面図１では，土製の井側（SE2001－①）が認められ，更に上段を固定する板材と石材が一部で遺存している。平面図②では，SE2001－①の下段の木桶及びSE2001－②が現れる。この時点でも，SE2001－①の四方に組まれたと推定される上段部固定用の板材とSE2001－②の一部が欠損している。この状況から３・４層は，廃絶以降の撹乱を含んだ堆積層と考えられる。SE2001－①は少なくとも，更に１段あったことが考えられ，下段の高さを考慮すると井側の上端は，標高は1.7m前後であったことが想定される。また，第１面の確認では，同地点で当井戸を囲うような方形状のプランに集石及び石列が標高1.3m前後で検出されている（第８図）。この集石，石列については，現状では上述のように３・４層が撹乱を含んだ堆積物であり，その上位で確認されているため後世の所産と考えられるが，共伴する施設の可能性も否定できない。遺構の所属時期は，SE2001－①の出土遺物より幕末～明治期の埋没が考えられる。



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調１(胎土)	色調２(釉薬、内外色調)	色調３(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
SE2001	1	磁	碗	肥前	口:10.30 高:6.00 底:3.80	微	灰白色	外面:明オリーブ灰5GY7/1 内面:透明釉	呉須:淡・暗青色	内面:四方襷	大橋Ⅳ期	青磁染付,高台内にアルミナ砂付着
SE2001	2	磁	碗	肥前	口:1.10	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅴ期	
SE2001	3	磁	碗	肥前	口:8.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色		大橋Ⅴ期	
SE2001 掘方	4	磁	碗	肥前	口:7.85 高:4.25 底:2.90	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:オリーブ灰10Y5/2	外面:草花	大橋Ⅳ期	
SE2001	5	磁	碗	瀬美	口:7.95 高:4.35 底:3.30	微	灰白色	内外:透明釉	上絵:青・金		大橋Ⅴ期	端反碗
SE2001	6	磁	小坏	肥前	口:7.40 高:3.20 底:2.65	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色			
SE2001	7	磁	小坏	瀬美	口:6.55 高:2.60 底:1.90	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色 上絵:暗黒色			
SE2001	8	磁	皿	肥前	口:10.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色		大橋Ⅴ期	型打成形
SE2001	9	磁	皿	肥前	口:12.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅴ期	型打成形
SE2001	10	磁	蓋	肥前	最大径 :9.40 底:8.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色		大橋Ⅴ期	

第192図　SE2001出土遺物実測図・観察表（その１）



第193図　SE2001出土遺物実測図（その３）

遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SE2001	11	陶	碗	瀬・美	底:5.40	細	灰白5Y8/1	内外:灰白5Y8/2	呉須:オリーブ灰10Y5/2			
SE2001	12	陶	碗	瀬・美	口:11.00	細	灰5Y6/1	内外:灰白5Y7/2	呉須:オリーブ灰10Y4/2			
SE2001	13	陶	碗	瀬・美	底:5.00	細	灰白2.5Y8/2	内外:灰白5Y7/2	呉須:オリーブ灰10Y5/2			
SE2001	14	陶	碗	京・信	口:8.65 高:5.40 底:3.20	細	灰白5Y8/1	内外:灰白10Y7/1				
SE2001	15	陶	碗	京・信	口:8.80	細	灰白2.5Y8/2	内外:灰白5Y7/2				
SE2001	16	陶	碗	京・信	口:8.70	細	灰白2.5Y8/2	内外:灰黄2.5Y7/2				
SE2001	17	陶	碗	京・信	底:3.40	細	灰白5Y7/1	内外:灰白10Y7/2				
SE2001	18	陶	小坏	瀬・美	口:6.40 高:4.10 底:3.50	細	にぶい橙7.5YR7/3	内外:灰白5Y8/2	呉須:暗青灰10BG3/1			
SE2001	19	陶	灯明皿	備前	口:9.8	細	にぶい赤7.5R4/4	にぶい赤7.5R4/4		内外:ロクロナデ 外底:ケズリ		
SE2001	20	陶	蓋		底:6.90	細	褐灰10YR6/1	外面:暗青褐5YR3/6				
SE2001	21	陶	蓋	京・信	最大径 :12.35 底:10.00	細	灰白5Y7/1	外面:灰オリーブ5Y6/2				
SE2001	22	陶	擂鉢口縁部	備前	口:31.0	微砂粒		外面:暗赤褐2.5YR3/2 内面:暗赤灰10R3/1				
SE2001	23	陶	甕口縁部		口:41.00	細	明赤褐2.5YR5/6	内外:暗赤褐2.5YR3/2				
SE2001	24	陶	皿			細	浅黄2.5Y8/3	内外:明黄褐2.5Y6/8				源内焼
SE2001	25	陶	甕底部	大谷	底:6.80		赤褐10R4/4	外面:暗赤褐5YR3/2				
SE2001	26	陶	蓋	京・信	つまみ部:4.00 高:3.20 底:16.00	細	浅黄2.5Y8/3	内外:淡黄2.5Y8/3				
SE2001	27	土師質	皿		口:14.4	細	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		内外:ロクロナデ 外面:ミガキ		内面に煤付着
SE2001	28	土師質	目皿		口:7.00 高:1.10 底:5.40	細	橙5YR6/6	橙5YR6/6				
SE2001	29	土師質	目皿		最大厚:1.0 現存長:9.7	中	浅黄橙7.5YR8/3	浅黄橙7.5YR8/3				
SE2001	30	土師質	目皿		最大径 :13.00	中	にぶい橙2.5YR6/4	灰白10YR8/1				
SE2001	31	石	硯									

第194図　SE2001出土遺物観察表

SE2001－①出土遺物（第192～194図）

遺物はSE2001－①から，幕末期の所産を中心にコンテナ2箱程度出土している。

1～4・8～10は，肥前系磁器である。5・7は，瀬戸・美濃系磁器端反碗及び小坏である。11～13は，瀬戸・美濃系陶器広東碗である。14～16は，京・信楽系陶器端反碗である。24は源内焼，25は大谷焼と考えられる。28～30は焜炉類の付属品。31は硯である。

SK2001（第195図）

B区東部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は0.86m前後，底面の標高は0.65m前後を測る。検出長は東西方向で約1.1m，南北方向で約1.2mを測る。西面は撹乱により壊されているが，平面はほぼ円形と考えられる。断面は船底形で，埋土に多量の瓦が認められた。所属時期は，出土遺物より18世紀前葉頃と考えられる。

SK2001出土遺物（第198図）

７・８は肥前系陶器碗及び小坏である。９・10は備前灯明皿（９），備前擂鉢（10）である。

SK2002（第195図）

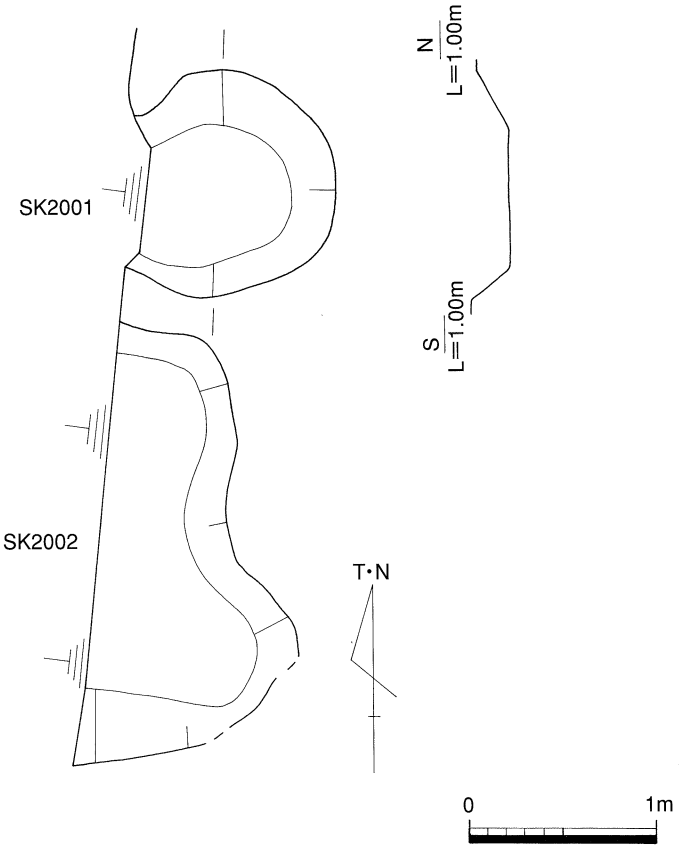
B区東部，第２面で検出した遺構である。検出した標高は0.86m前後，底面の標高は0.57m前後を測る。検出長は東西方向で約１m，南北方向で約2.3mを測る。西面は撹乱により壊されていた。平面は不整形な長方形として検出された。断面は船底形で，埋土に多量の瓦が認められた。所属時期は，同様の様相を示すSK2001と同時期の所産と考えられる。

SK2002出土遺物（第198図）

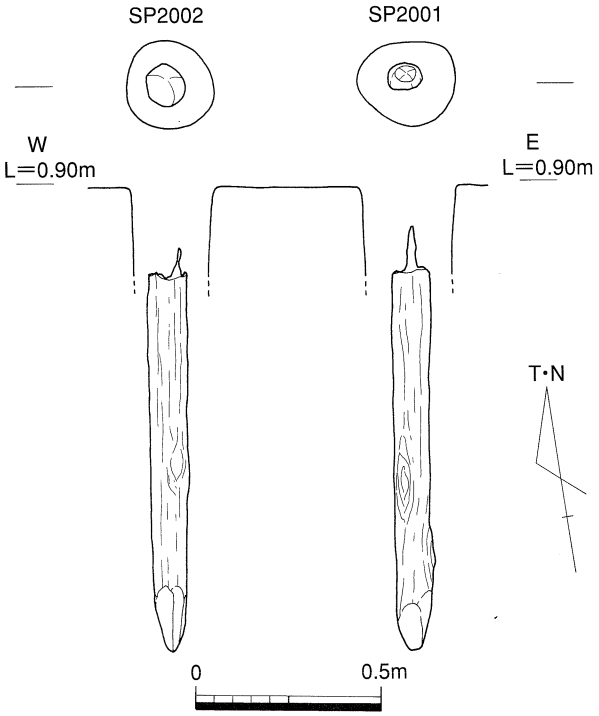
11は瓦質土器火鉢で，脚部を有する。

SP2001・2002（第196図）

B区北東隅，第２面で検出した杭である。検出した標高は0.83～0.89m前後を測る。径約12cmの丸太杭を東西に２箇所打ち込んでいる。北及び東が調査対象外で，東西列となるかどうかは不明である。



第195図　SK2001・2002平面・断面図



第196図　SP2001・2002平面・断面図

杭は丸太材の先端部を尖らしたもので，１m以上の長さで遺存していた。詳細な時期は不明である。

SX2006（第190図）

Ａ区北端部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.08m前後，底面の標高は0.76m前後を測る。検出長は東西方向で約６m，南北方向で最大約1.7mを測る。北面は撹乱により壊されている。平面は不定形で，北部のＢ区へ下る落ち込みとなっている。所属時期は出土遺物及びＢ区の整地状況を考慮し，18世紀代～19世紀前葉と考えられる。

SX2006出土遺物（第198図）

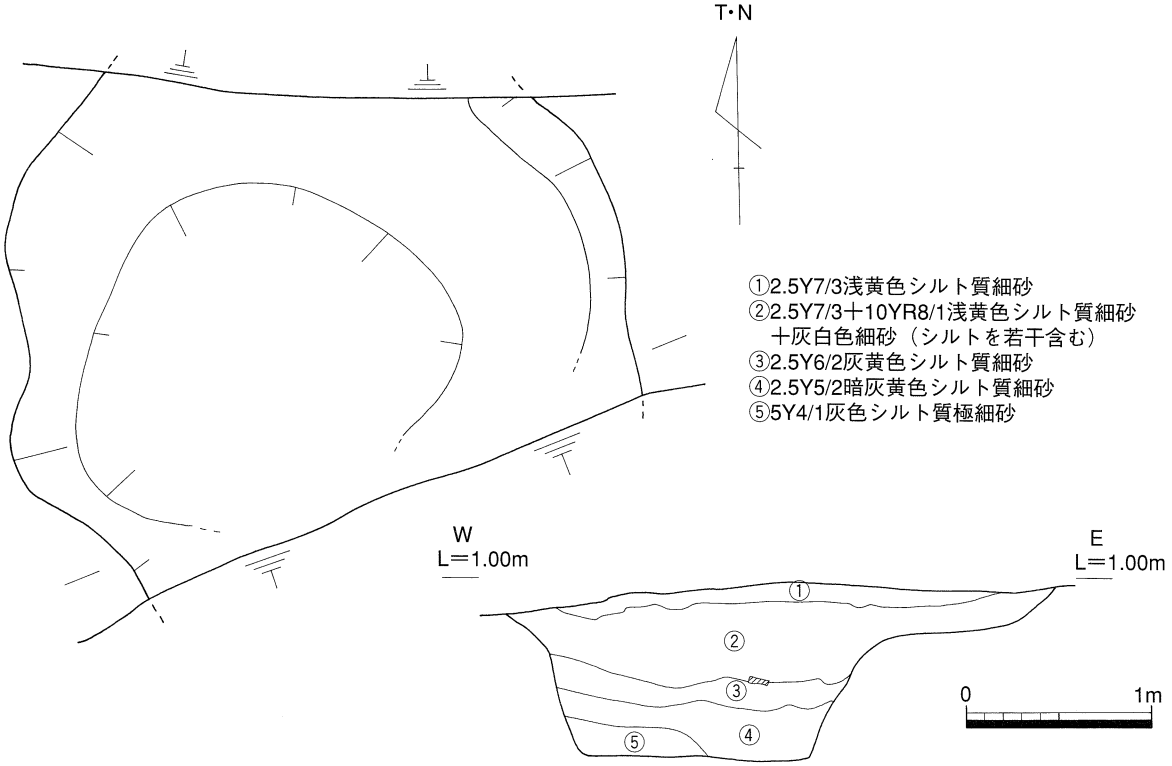
１～６は肥前系磁器である。紅皿（１），碗（２），皿（４～６）がある。

SE2002（第12・197図）

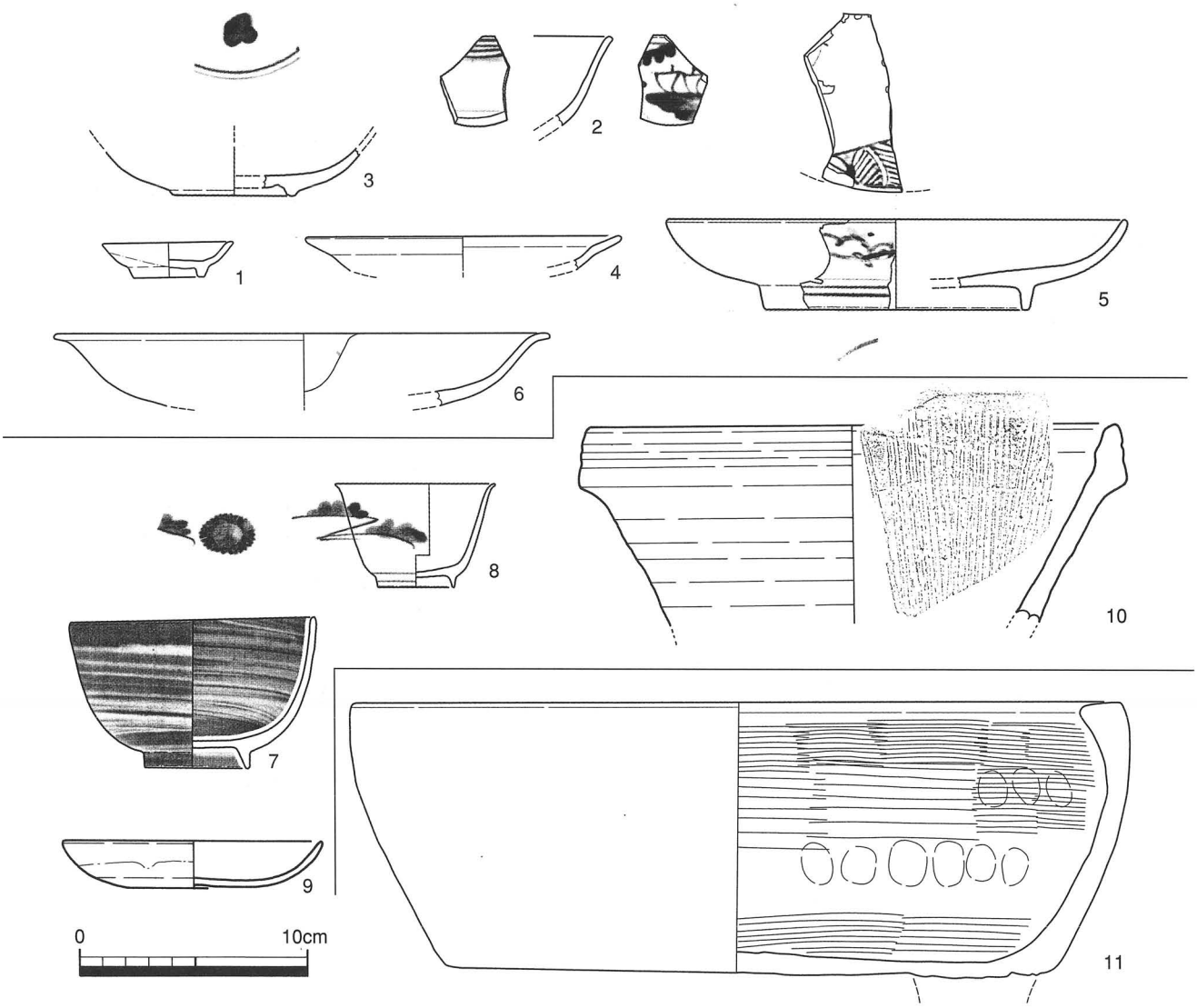
Ｄ区東半部，第２面で確認した井戸状の遺構である。検出した標高は0.96m，底面の標高は－0.02mを測る。検出長は東西方向で約3.3m，南北方向で約2.3mを測るが，北は調査範囲外であり，西及び南側は撹乱により壊されている。平面の形状は，不整形な円形を呈するものと想定される。断面の観察では1.4mの標高で確認され，第１面での検出は可能であったが，調査の工程上，第２面で確認した。断面の形状は西半については不明だが，中位で屈曲し段部が認められる。以下，底まで器壁は急傾斜となり，底面では湧水を確認した。断面土層では詳細に分層されているが，基本的には陶磁器，瓦片等を多量に包含した堆積物により充填される。遺物を多量に含むことから，廃棄土坑の性格を有する。

SE2002出土遺物（第199～201図）

遺物は，コンテナ５箱程出土した。18世紀代～明治時代の所産のものが認められる。

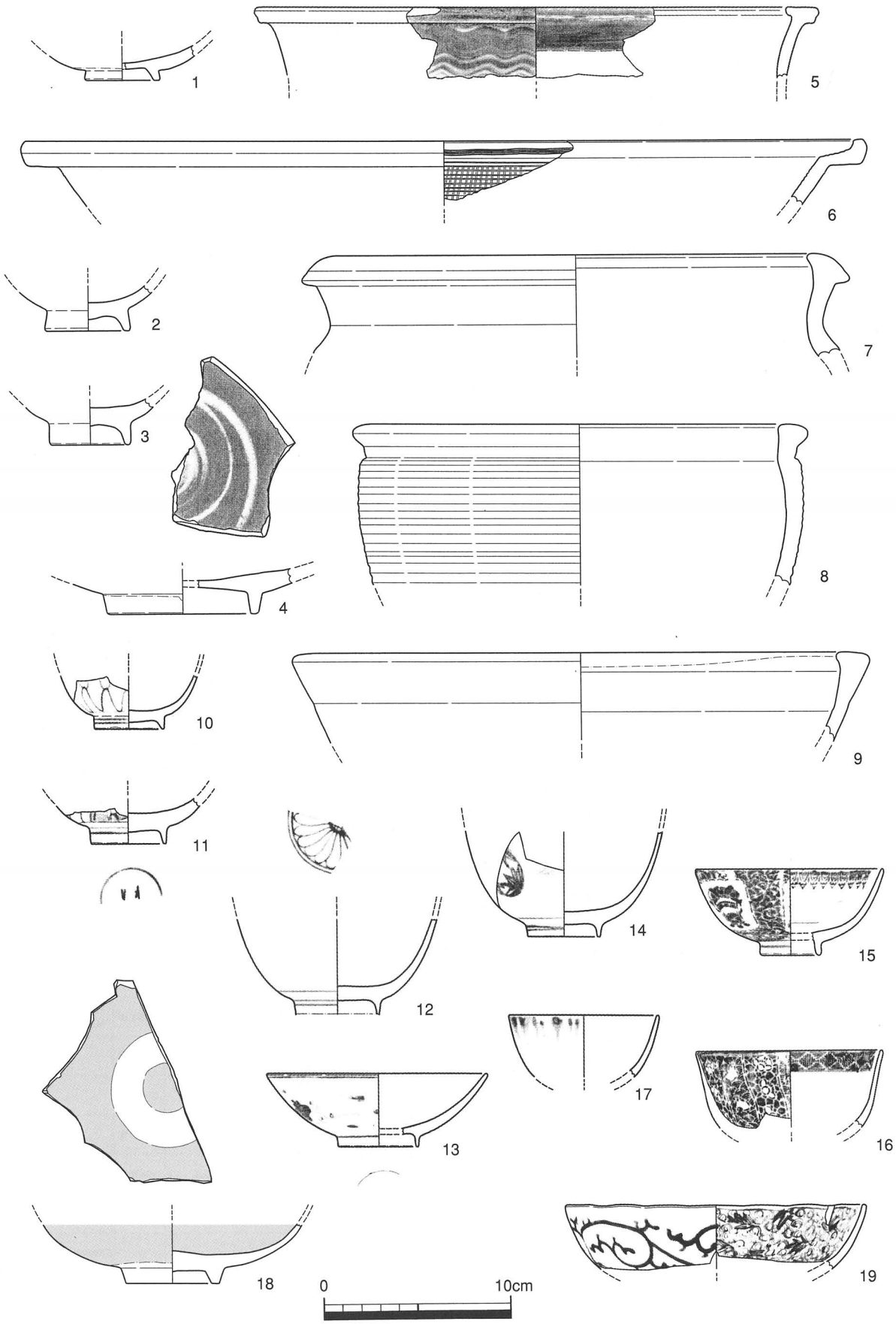


第197図　SE2002平面・土層図

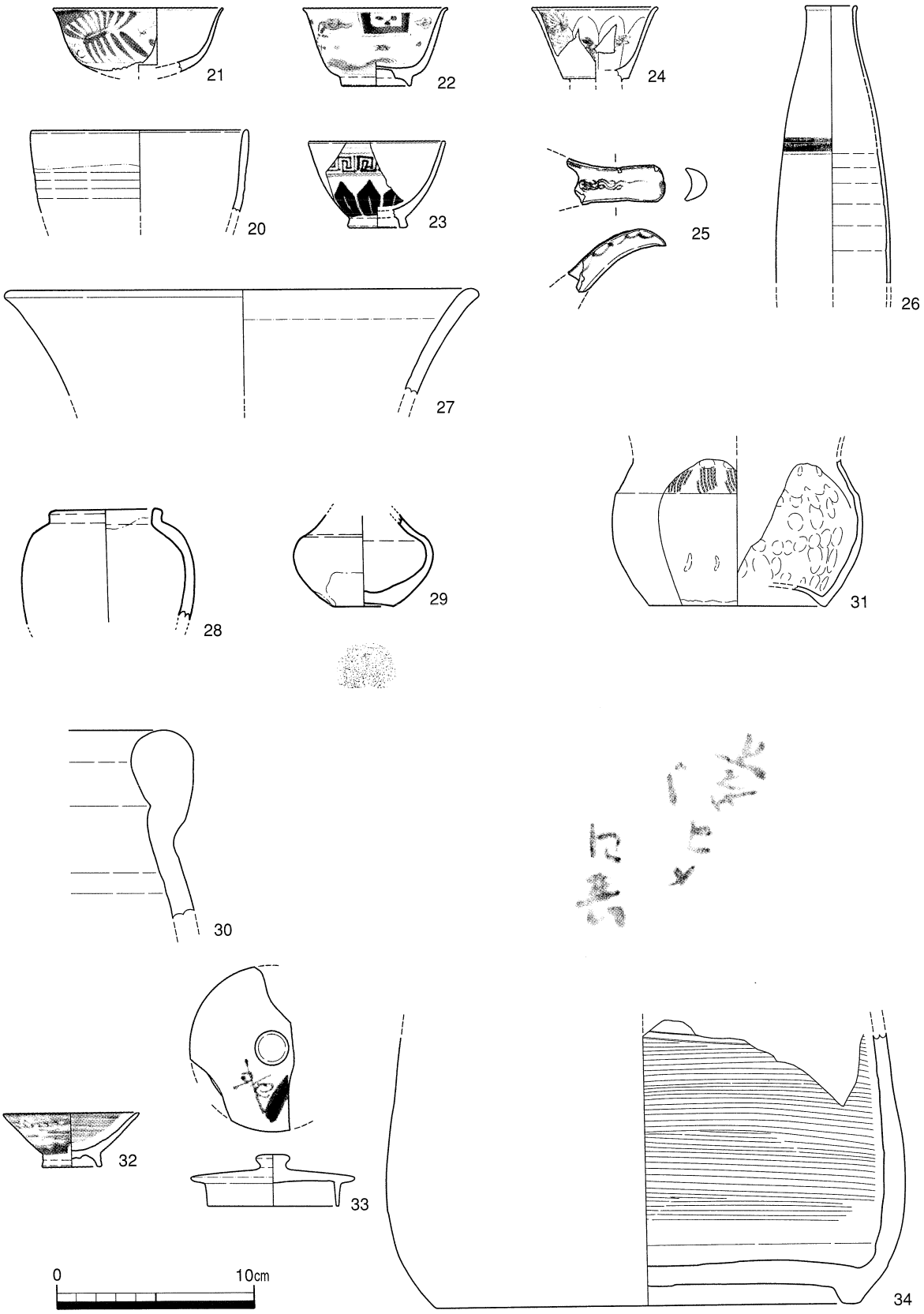


遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SX2006	1	陶	小杯	肥前	口:5.50 高:1.50 底:3.00	細	灰白5Y8/1	内外:灰白5Y8/1			大橋Ⅲ期	
SX2006	2	磁	碗	肥前		微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色			
SX2006	3	磁	皿	肥前	底:5.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:オリーブ黒 7.5Y3/2黒褐2.5Y3/1		大橋Ⅱ期	初期伊万里 高台内に砂粒付着
SX2006	4	磁	皿	肥前	口:13.20	微	灰白色	内外:オリーブ灰2.5GY6/1			大橋Ⅲ期	
SX2006	5	陶胎染付	皿	肥前	口:20.00 高:3.90 底:11.50	細	灰白5Y8/1	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色		大橋Ⅲ期	
SX2006	6	磁	皿	肥前	口:21.50	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色		大橋Ⅲ期	
SX2001	7	陶	碗	肥前	口:10.60 高:6.60 底:4.40	細	にぶい橙2.5YR6/4	にぶい赤褐2.5YR4/4		内外:直線的な刷毛目	大橋Ⅳ期	
SX2001	8	磁	小杯	肥前	口:8.50 高:4.00 底:2.80	細	灰白色	内外:透明釉	呉須:明・暗青色		大橋Ⅳ期	
SX2001	9	陶	灯明皿	備前	口:11.2 高:2.0	細	赤10R5/6	灰褐7.5YR5/2		外面上半:ナデ 外底:ケズリ		口縁内外に煤付着
SX2001	10	陶	擂鉢	備前	口:22.9	細	暗赤10R3/6	暗赤10R3/6		内面口縁部・外面:ロクロナデ		
SX2002	11	瓦質	火鉢		口:33.7 高:12.0 底:26.4	微砂粒	黄灰2.5Y6/1	黒N2/0				三脚の足有

第198図　SX2006・SK2001・2002出土遺物実測図・観察表



第199図　SE2002出土遺物実測図（その1）



第200図　SE 2002出土遺物実測図（その２）

遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
SE2002	1	陶	碗底部	肥前	底:4.00	細	灰白2.5Y7/1	内外:浅黄5Y7/3		内面:ビン痕2ヶ所		
SE2002	2	陶	碗底部	肥前	底:3.40	細	灰白10YR8/1	浅黄2.5Y7/4			大橋Ⅲ期	呉器手碗
SE2002	3	陶	碗底部	肥前	底:4.00	細	灰白2.5Y8/1	内外:淡黄2.5Y8/4			大橋Ⅲ期	呉器手碗
SE2002 掘方	4	陶	鉢底部	肥前	底:8.00	細	灰白2.5Y7/1	灰オリーブ5Y5/2		内面:直線的な刷毛目	大橋Ⅳ期	刷毛目唐津
SE2002 掘方	5	陶	甕口縁部	肥前	口:30.00	細	褐灰10YR6/1	内外:深緑・青		外面:波状の刷毛目		
SE2002 掘方	6	陶	鉢口縁部	肥前	口:45.00	細	明赤褐2.5YR5/6	灰褐5YR6/2			大橋Ⅲ期	三島
SE2002 掘方	7	陶	甕口縁部	肥前	口:25.20	細	赤褐2.5YR4/6	赤褐2.5YR4/6			大橋Ⅲ期	
SE2002 掘方	8	陶	甕口縁部	肥前	口:22.00	細	にぶい赤褐2.5YR4/4	にぶい赤褐2.5YR4/4				
SE2002 掘方	9	陶	甕口縁部	肥前	口:27.70	細	浅黄橙10YR8/3	外面:灰白10Y8/1				
SE2002	10	磁	碗	肥前	底:3.70	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色	外面:一重網目	大橋Ⅳ期	高台内外に虫食い
SE2002	11	磁	碗底部	肥前	底:4.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗・淡青色			底部に銘款有
SE2002	12	磁	碗	肥前		微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色	内面:菊	大橋Ⅴ期	
SE2002	13	磁	碗	瀬・美	口:11.55 高:4.10 底:3.85	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗・淡青色		大橋Ⅴ期	
SE2002	14	磁	碗	瀬・美	底:3.90	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色		大橋Ⅴ期	コンニャク印判
SE2002	15	磁	碗	肥前	口:9.85 高:3.00 底:4.50	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:コバルト		大橋Ⅴ期	型紙摺
SE2002	16	磁	碗		口:10.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:コバルト		大橋Ⅴ期	型紙摺
SE2002	17	磁	碗	肥前	口:8.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色	外面:雨降り文	大橋Ⅳ期	
SE2002 掘方	18	磁	皿	肥前	底:5.00	微	灰白色	内外:明緑灰5G7/1		内面:蛇の目釉剥	大橋Ⅲ期	青磁皿 高台内無釉
SE2002	19	磁	皿	肥前	口:16.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色	外面:唐草	19c前	
SE2002	20	陶	碗口縁部	瀬・美	口:11.00	細	灰白5Y8/1	内外上:灰白5Y8/2 内外下:極暗褐7.5YR2/3				
SE2002	21	磁	小杯	瀬・美	口:8.60	微	灰白色	内外:透明釉	上絵:赤・茶			
SE2002	22	磁	小杯	瀬・美	口:7.30 高:3.40 底:3.90	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗・明青色			腰錆碗
SE2002	23	磁	小杯		口:6.8 高:2.8 底:4.3	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色・コバルト			
SE2002 掘方	24	磁	小杯	瀬・美	口:6.30	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:コバルト			
SE2002	25	磁	れんげ	瀬・美	残存長:5.0 残存幅:2.1	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色			
SE2002	26	磁	燗徳利	瀬・美	口:2.60	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色			
SE2002 掘方	27	陶	鉢口縁部	京・信	口:24.00	細	灰白2.5Y7/1	内外:緑灰色7.5GY6/1				
SE2002	28	陶	壺	備前	口:4.9	細	灰N6/0	灰赤10R4/2 内面:赤10R4/8		内面:ロクロナデ		
SE2002	29	陶	壺	備前	底:3.0	細	赤褐10R4/4	赤褐10R4/3		外底:回転糸切り 内面:ロクロナデ		
SE2002	30	陶	甕	備前		細	赤10R4/6	内外:暗赤褐5YR3/2				
SE2002	31	陶	甕		底:9.00	細	灰褐7.5YR5/2	灰褐7.5YR5/2		外面:列点状痕,指押さえ 内面:指押さえ,指ナデ 外底:布目		
SE2002	32	陶	小杯	肥前	口:6.80 高:2.90 底:2.70	細	にぶい赤褐5YR5/3	内外:オリーブ灰2.5GY6/1		内外:直線的な刷毛目		
SE2002 掘方	33	陶	蓋		最大径:8.35 高:2.60 底:6.60	細	浅黄橙7.5YR8/4	外面:灰白5Y8/1	鉄絵:黒10YR2/1			
SE2002 掘方	34	土師質	甕		器高:13.50 底:21.30	微砂粒	にぶい黄橙10YR6/3	外面:灰白10YR8/1 内面:にぶい黄橙10YR6/3		内面:ハケメ		内底面に墨書

第201図　SE2002出土遺物観察表

第２面Ａ－Ｃ区北部遺構（第202図）

当地点は，北側をＢ区に存在する窪地，西側はＳＸ2008，南側は屋敷境の長屋に考えられるＳＡ2001に囲まれた空間となっている。明瞭な施設として想定できるものは認められないが，中央部に溝状の遺構が認められる他，その周囲で不定形な土坑状の遺構やピットが検出された。所属時期は，第２面下層に相当するＳＤ2006（17世紀末葉）及びＳＸ2008の埋没時期（19世紀前葉）から，18世紀代を中心とした所産が考えられる。但し，第１面で確認したＳＸ1005（近代所産）直下に位置するものは，幕末～明治期の所産となる可能性がある。

ＳＫ2006（第202・203図）

Ａ区北部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.13ｍ前後，底面の標高は0.88ｍを測る。径1.2ｍ程のやや不整形な円形として検出した。断面は船底形である。所属時期は，出土遺物より18世紀前半を中心に考えられる。

ＳＫ2006出土遺物（第204図）

１は肥前系陶器皿である。２は肥前系磁器碗である。３は肥前系磁器小坏である。４・５は備前産で，瓶（４），擂鉢（５）である。６は瓦質土器焙烙である。

ＳＫ2005（第202・203図）

Ａ区北部，第２面で確認された遺構である。検出標高は1.13ｍ前後，底面の標高は0.92ｍを測る。径0.9ｍ程のやや不整形な円形として検出した。断面は船底形である。所属時期は，出土遺物より明治期の所産と考えられる。

ＳＫ2005出土遺物（第204図）

７～10は肥前系磁器猪口及び紅皿。11は肥前系磁器瓶である。12は肥前系陶器鉢。13は土瓶で，外面にイッチン掛けによる装飾が認められる。明治時代の所産。14は施釉陶器鍋である。

ＳＫ2007（第202図）

Ａ区北部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.15ｍ前後，底面の標高は0.71ｍを測る。径1.2ｍ程のやや不整形な円形として検出した。

ＳＫ2007出土遺物（第204図）

15は肥前系陶器碗である。16は肥前系陶器鉢である。

ＳＫ2009（第202・203図）

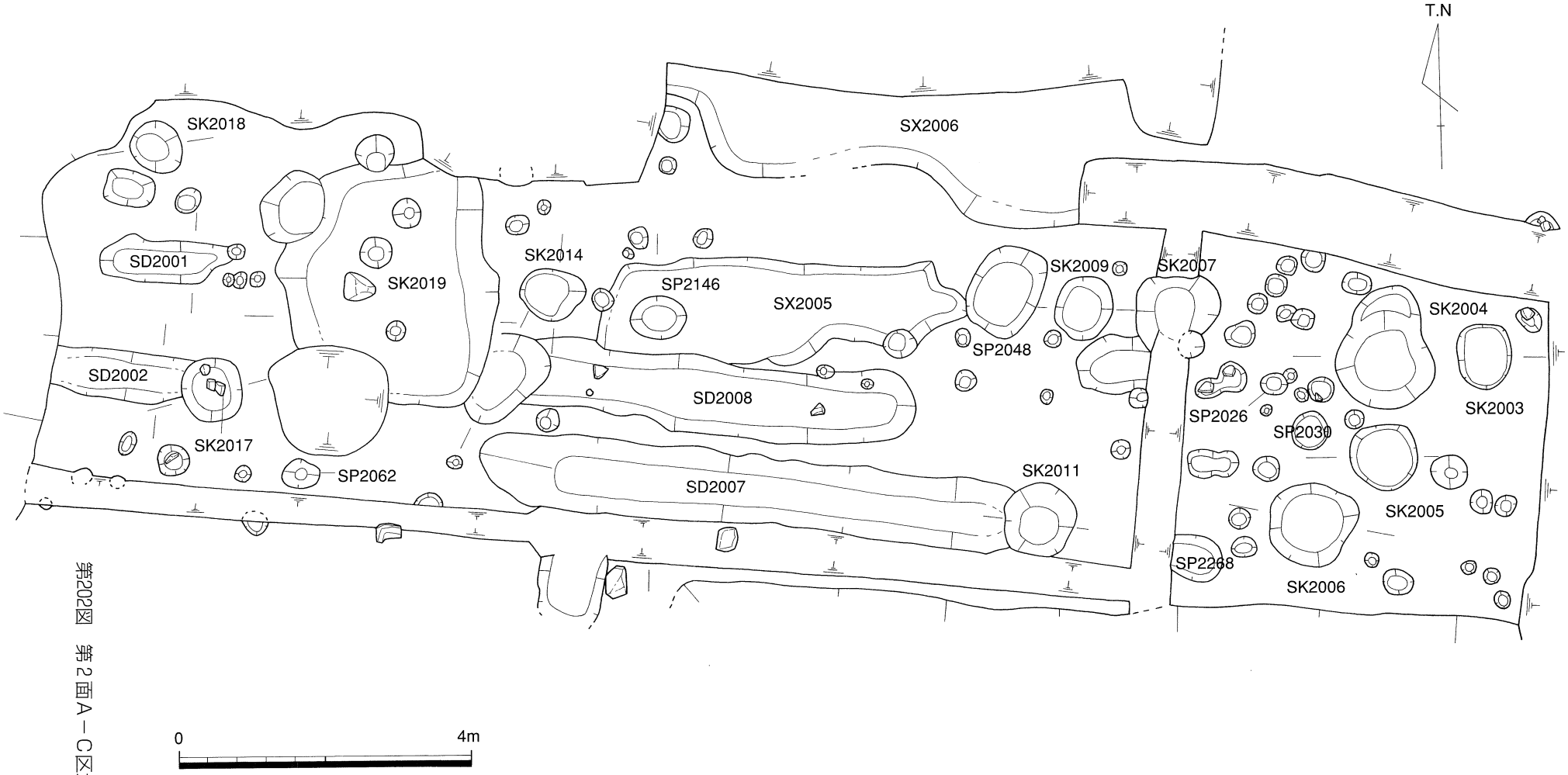
Ａ区北部，第２面で確認された遺構である。検出した標高は1.09ｍ前後，底面の標高は0.88ｍを測る。径0.8～0.9ｍ程のやや不整形な円形として検出した。断面はＵ字形である。

ＳＫ2009出土遺物（第205図）

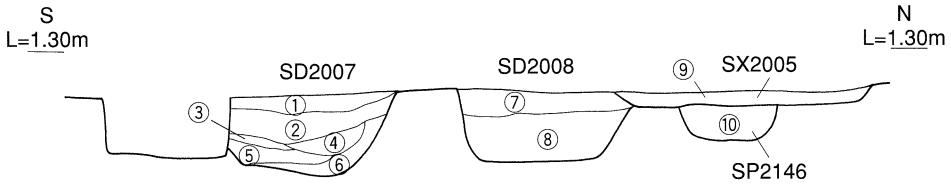
１・２は，軒丸瓦である。

ＳＫ2015（第202・203図）

Ｃ区北部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.13ｍ前後，底面の標高は約0.9ｍを測る。検出長は東西方向で約0.8ｍ，南北方向で約1.35ｍを測る。断面は船底形である。ＳＤ2008に後出し，ＳＫ2019に壊される。時期の判明できる遺物は出土していない。

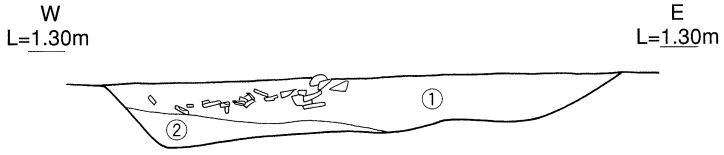


第202図　第２面Ａ－Ｃ区北部遺構平面図



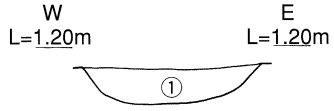
①2.5Y6/2灰黄色シルト質極細砂
②2.5Y7/4＋2.5Y6/1
浅黄色＋黄灰色シルト質細砂
③10YR4/1褐灰色シルト質極細砂
（炭、焼土を含む）
④2.5Y6/1黄灰色シルト質細砂
⑤5Y6/1灰色シルト質細砂
⑥10YR4/1褐灰色シルト質極細砂
（炭、焼土を含む）
⑦10YR5/2灰黄褐色シルト質細砂
⑧2.5Y6/3にぶい黄色シルト質細砂（細砂含む）
⑨2.5Y5/1黄灰色シルト質細砂（砂、細砂を含む）
⑩2.5Y6/1黄灰色シルト質細砂

SD2007、2008、SP2146、SX2005



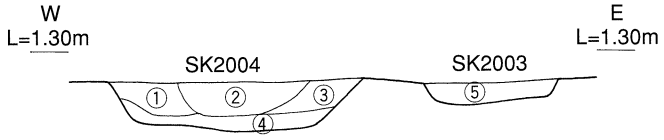
①2.5Y7/2＋10YR7/3灰黄色＋にぶい黄橙色シルト質細砂
②2.5Y7/3浅黄色シルト質細砂

SK2019



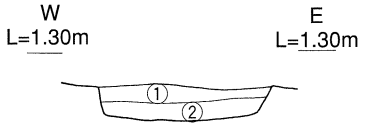
①2.5Y6/2＋6/1灰黄色細砂＋黄灰色シルト質細砂
（炭、焼土を若干含む）

SK2011



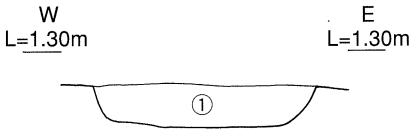
①2.5Y6/2灰黄色シルト質極細～細砂
②10YR6/1褐灰色シルト質極細砂
③5Y6/2灰オリーブ色シルト質極細砂
④2.5Y6/1黄灰色細砂
（灰色粗砂黄色シルトブロックを含む）
⑤5Y6/2灰オリーブ色シルト質極細砂

SK2004、SK2003



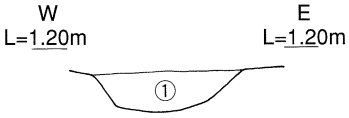
①2.5Y6/2灰黄色シルト質極細（炭、焼土を若干含む）
②2.5Y6/1黄灰色シルト質細砂（灰白色粗砂を含む）

SK2005



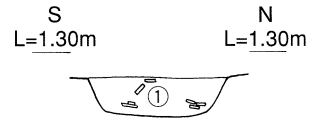
①2.5Y6/2＋10YR6/1灰黄色＋褐灰色シルト質極細砂

SK2006



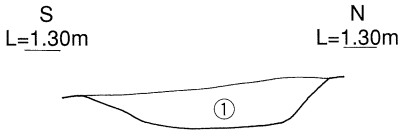
①5Y6/2灰オリーブ色シルト質極細砂

SK2009



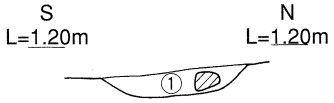
①2.5Y6/1＋6/3黄灰色＋黄色シルト質細砂

SK2014



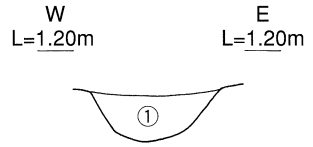
①2.5Y6/1黄灰色シルト質細砂

SK2015



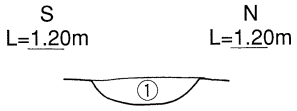
①10YR6/2＋2.5Y7/13
灰黄褐色シルト質細砂＋細砂

SK2017



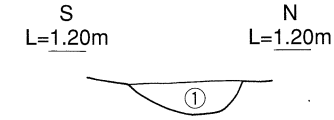
①10YR6/2＋2.5Y7/1
灰黄褐色シルト質細砂＋細砂

SK2018



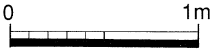
①10YR6/1＋6/2
褐灰色シルト質細砂＋灰黄褐色

SD2001

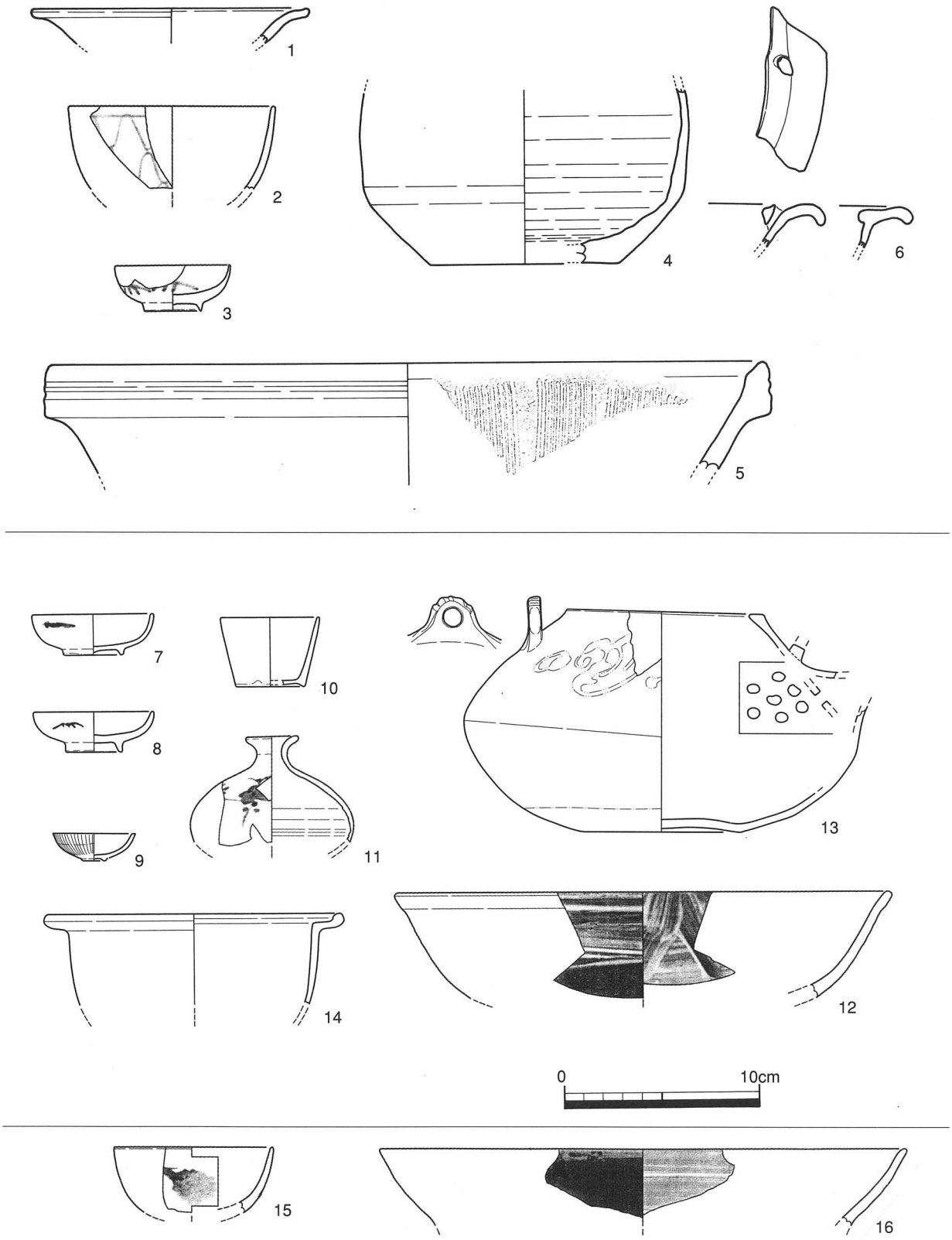


①10YR6/1＋6/2
褐灰色シルト質細砂＋灰黄褐色細砂

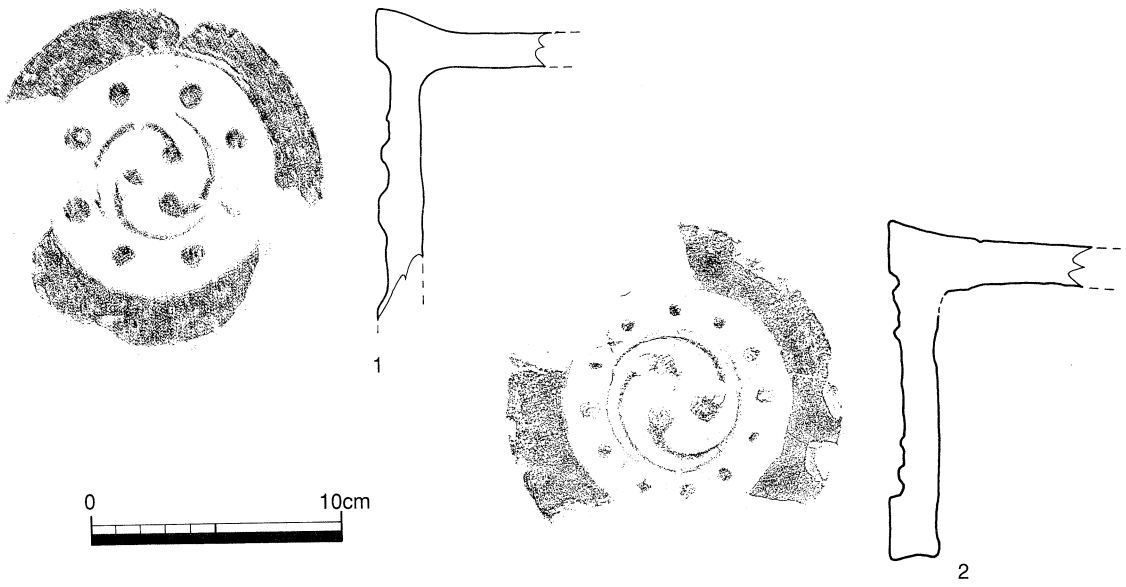
SD2002



第203図　第２面Ａ－Ｃ区北部遺構土層図



第204図　SK2006・2005・2007出土遺物実測図



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SK2006	1	陶	皿	肥前	口:13.9	細	灰N4/0	外面:赤褐10R4/3 内面:青黒5B2/1			大橋Ⅱ期	
SK2006	2	磁	碗口縁部	肥前	口:10.45	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色	外面:一重網目	大橋Ⅲ期	
SK2006	3	磁	紅猪口	肥前	口:5.85 高:2.35 底:2.85	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:オリーブ灰5GY6/1	外面:笹	大橋Ⅳ期	
SK2006	4	陶	瓶底部	備前?	底:9.6	細		外面:極暗褐2.5YR2/4 内面:褐灰10YR4/1		内面:ロクロナデ		
SK2006	5	陶	擂鉢口縁部	備前	底:36.4	微砂粒		内外:赤10R5/8			近世Ⅲ期	
SK2006	6	瓦質	焙烙口縁部			砂粒		外面:灰褐7.5YR4/2 内面:灰白5Y7/1		内面:ナデ 外体:指押さえ		外面に煤付着
SK2005	7	磁	紅猪口	肥前	口:6.00 高:2.10 底:3.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:オリーブ黒7.5Y3/2		大橋Ⅴ期	
SK2005	8	磁	紅猪口	肥前	口:6.00 高:2.10 底:2.80	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色	外面:笹	大橋Ⅴ期	
SK2005	9	磁	皿	肥前	口:4.20 底:1.20	微	灰白色	内外:灰白N8/0			大橋Ⅴ期	
SK2005	10	磁	小杯	肥前	口:4.90 高:3.55 底:3.40	微	灰白色	内外:透明釉			大橋Ⅴ期	
SK2005	11	磁	瓶	肥前	口:2.50	微	灰白色	内外:明釉	呉須:淡・暗青色			
SK2005	12	陶	鉢	肥前	口:25.00	細	灰赤2.5YR4/2	内外:暗褐10YR3/3		外面:直線的な刷毛目	大橋Ⅴ期	刷毛目唐津
SK2005	13	陶	土瓶			細	灰白2.5Y8/1	外面:灰白5Y8/1	イッチン掛け:灰白5Y8/1		明治	
SK2005	14	陶	鍋		口:14.85	細	灰白2.5Y8/2	内外:にぶい黄橙10YR7/2				
SK2007	15	陶胎染付	碗	肥前	口:8.00	微	灰白2.5Y8/1	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅳ期	
SK2007	16	陶	皿	肥前	口:27.00	微	灰黄2.5Y7/2	外面:黒褐5YR2/1 内面:褐灰10YR6/1	内面:直線的な刷毛目		大橋Ⅴ期	刷毛目

遺構名	報文番号	遺物種別	法量(cm)			胎土	色調		調整		焼成	備考
			長さ(現存長)	厚さ	幅(現存幅)		断面	器面	内面	外面		
SK2009	1	軒丸瓦	7.0	1.3	—	砂礫	灰N6/0	灰7.5Y6/1			不良	巴
SK2009	2	軒丸瓦	8.1	1.6	—	砂礫	灰N6/0	灰N5/0			良	巴

第205図　SK2006・2005・2007・2009出土遺物実測図・観察表

SD2007（第202・203図）

A－C区北部，第２面で確認した東西方向の溝状の遺構である。検出した標高は1.00～1.08m，底面の標高は0.61～0.68mを測る。検出長は約7.2m，検出幅は10m前後を測る。東端部がSK2011により壊される。溝状を呈するが東西には伸びない。断面はU字形で，埋土は６層に分割されるが，この内，中層部と最下層部に炭化物及び焼土が認められる。当遺構は，先行するSD3004（上水道）に平面プランが一致し，改修等何らかの関連が推察される。所属時期は，遺構面からすれば18世紀代の所産と考えられる。

SD2007出土遺物（第206図）

遺物の出土量は少なく，数点のみであった。１は肥前系磁器大皿である。初期伊万里と考えられる。２は焼塩壺蓋である。

SP2030（第202図）

A区北部，第２面で確認したピットである。検出した標高は1.12m，底面の標高は1.05mを測る。径0.5m前後の円形として検出した。

SP2030出土遺物（第206図）

３は肥前系磁器紅皿である。４は肥前系磁器小広東碗である。５は焼塩壺で，「泉湊伊織」の刻印が認められる。

SK2011（第202・203図）

A区北部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.06～1.09m，底面の標高は0.87m前後を測る。径１m前後の円形として検出した。西端部でSD2007を壊す。断面はU字形である。埋土は単層で焼土及び炭化物を少量観察している。

SK2011出土遺物（第206図）

６は肥前系陶器鉢底部で，見込に砂目が付着する。

SP2062（第202図）

C区北部，第２面で確認したピットである。検出した標高は1.02m，底面の標高は0.93mを測る。径0.45m前後の円形として検出した。底面に根石が認められる。

SP2062出土遺物（第206図）

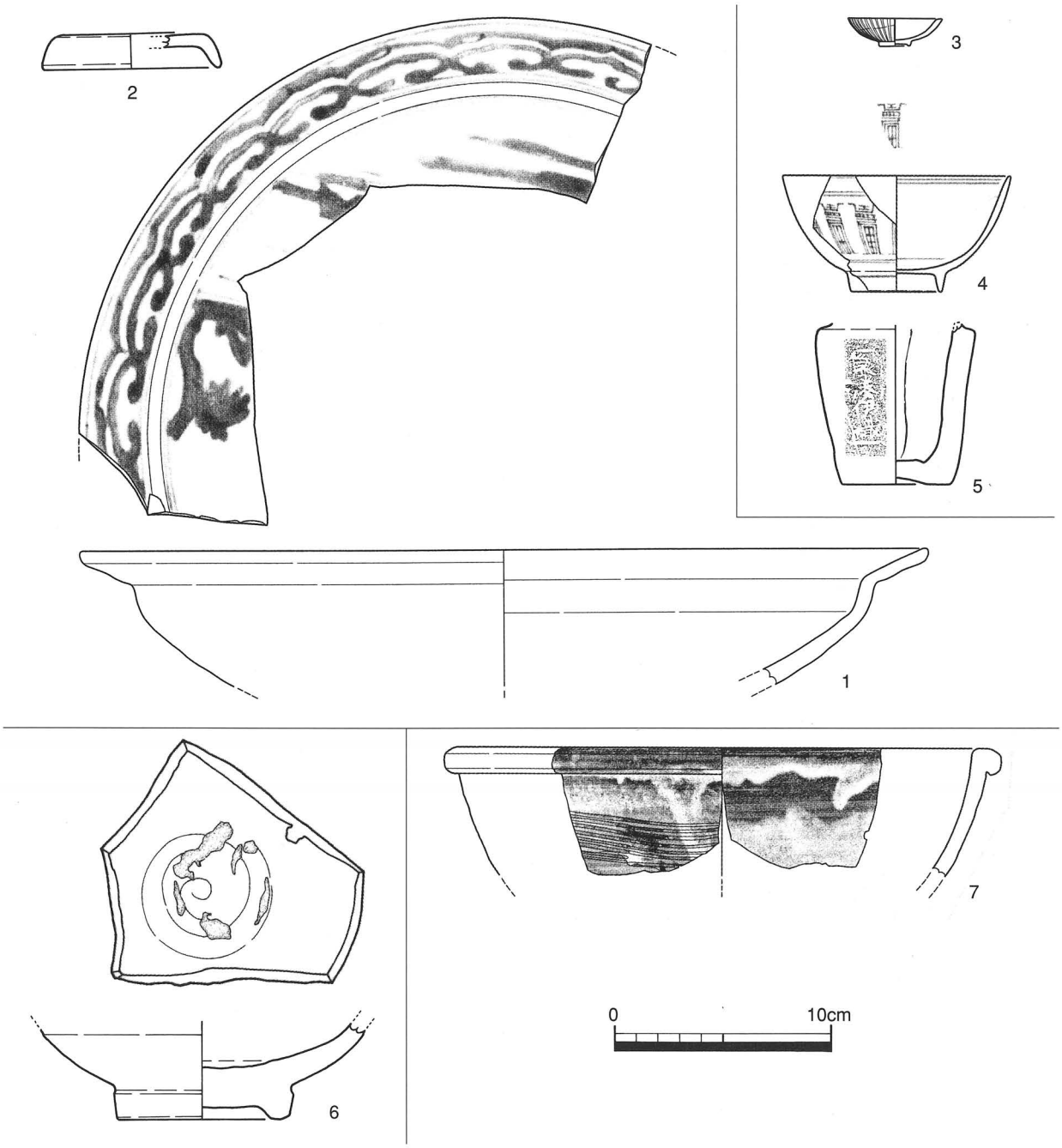
７は肥前系陶器鉢である。

SD2008（第202・203図）

A－C区北部，第２面で確認した東西方向の溝状の遺構である。検出した標高は0.99～1.08m，底面の標高は0.70～0.81mを測る。検出長は約５m，検出幅は1.1m前後を測る。SD2007に並走して検出された。断面はU字形で，埋土は２層に分割される。重複関係でSX2005に先行する。遺物は出土していない。

SK2004（第202・203図）

A区北部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.13～1.16m，底面の標高は0.88～



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SD2007	1	碗	皿	肥前	口:39.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・明青色		大橋Ⅱ期	
SD2007	2	土師質	焼塩壺蓋		口:8.0 高:1.5	微砂粒	橙2.5YR7/8	橙2.5YR7/8		内外:ロクロナデ		
SP2030	3	磁	紅猪口	肥前	口:4.30 高:1.30 底:1.40	微	灰白色	内外:灰白N8/0			大橋Ⅴ期	
SP2030	4	磁	碗	肥前	口:10.30 高:5.30 底:4.05	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・明青色		1770～	小広東碗
SP2030	5	土師質	焼塩壺		底:5.0	微砂粒・金	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		外面:ロクロナデ		「泉湊伊織」刻印(大枠)
SK2011	6	陶	鉢底部	肥前	底:7.9	細	灰白5Y8/1	オリーブ黒5Y2/2			大橋Ⅲ期	砂目
SP2062	7	陶	鉢	肥前	口:23.40	細	赤褐10R4/4	内外:黒褐7.5YR3/2			大橋Ⅲ期	刷毛目唐津

第206図　SD2007・SP2030・SK2011・SP2062・SK2007出土遺物実測図・観察表

1.04mを測る。検出長は東西に約1.3m，南北に約1.7mを測る。平面の形状はやや不整形な円形で，北部に半円形のテラス部が付く。断面は船底形で，堆積状況から中央部に再掘削の痕跡が認められる。

SK2004出土遺物（第207図）

1は肥前系陶器碗である。2～4は肥前系磁器。端反碗（2），小坏（3・4）がある。

SK2019（第202・203図）

C区北部，第2面で確認した瓦溜状の遺構である。検出した標高は1.07～1.11m，底面の標高は0.75～0.91mを測る。検出長は東西方向で約3m，南北方向で約3.2mを測る。平面はやや不整形な方形である。断面は船底形で，底面は凹凸状になっており人頭大の石及びピットが認められる。埋土はほぼ瓦片を含む堆積層で占められる。重複関係でSD2008より後出する。

SK2019出土遺物（第207図）

瓦片が多く出土したが，瓦に特徴的なものは認められなかった。5は肥前系陶器皿である。6は京・信楽系陶器碗である。7・8は肥前系磁器。碗（7）。糸切り細工による皿（8）がある。

SP2048（第202図）

A区北部，第2面で確認したピットである。検出した標高は1.07m前後，底面の標高は0.99mを測る。径0.2m前後の円形として検出した。

SP2048出土遺物（第207図）

9は肥前系陶器碗である。

SP2026（第202図）

A区北部，第2面で確認したピットである。検出した標高は1.13m前後，底面の標高は1.02mを測る。径0.35m前後の円形として検出した。

SP2026出土遺物（第207図）

10は備前擂鉢である。

SP2268（第202図）

A区北部，第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.12m前後，底面の標高は0.97mを測る。径0.7m前後の円形として検出した。

SP2268出土遺物（第207図）

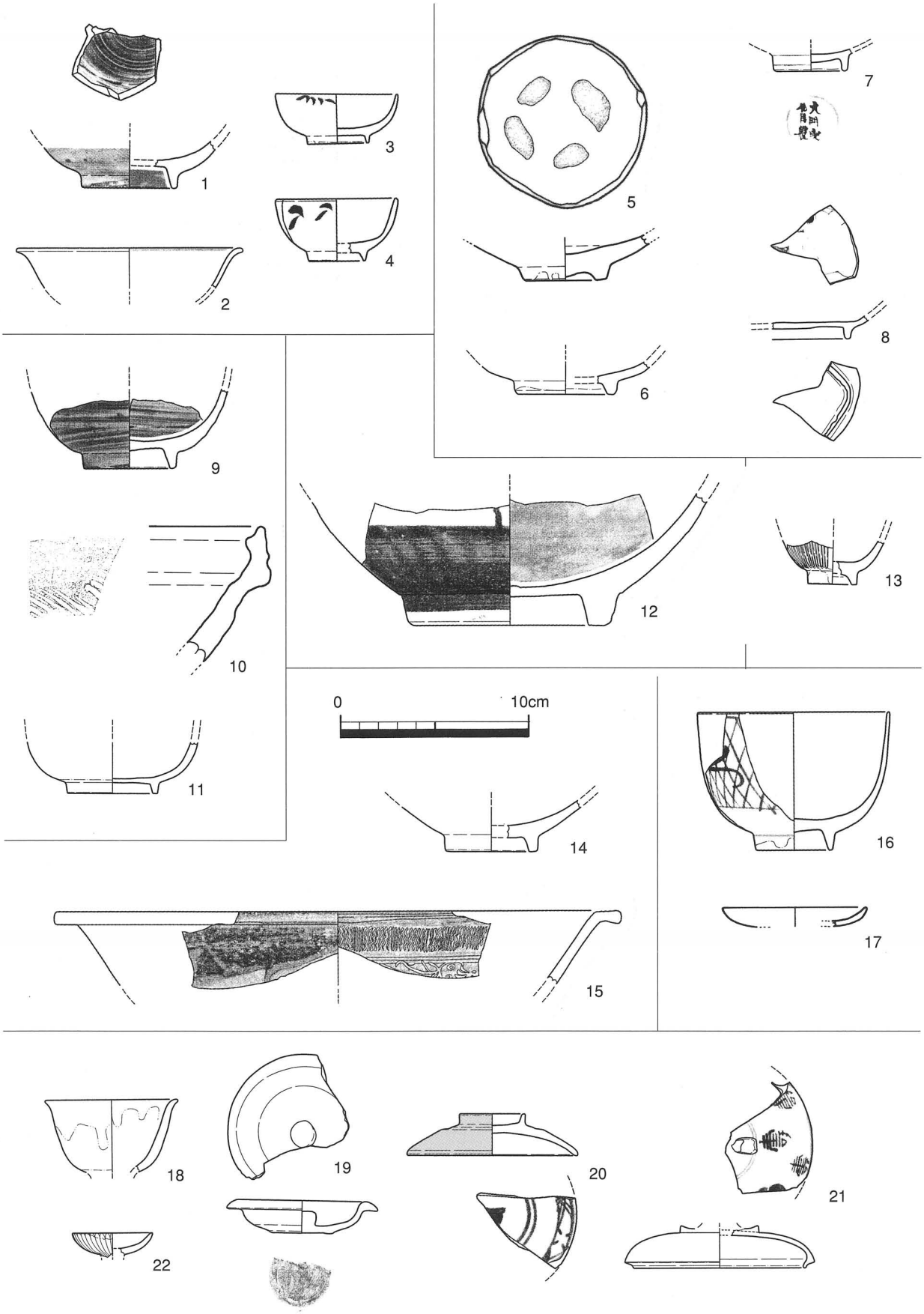
11は肥前系磁器碗である。

SK2017（第202・203図）

C区北部，第2面で確認した遺構である。検出した標高は1.03～1.10m，底面の標高は0.92m前後を測る。径0.8mの円形として検出した。断面はU字形で，底面に小石が認められる。重複関係でSD2002より後出する。

SK2017出土遺物（第207図）

12は肥前系陶器鉢である。



第207図　SK2004・2019・SP2048・2026・2268・SK2017・2018・2014・SD2001・SK2023出土遺物実測図

遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
SK2004	1	陶	碗底部	肥前	底:4.70	細	淡赤橙2.5YR7/4	内外:にぶい赤褐5YR4/3		内面:直線的な刷毛目	大橋Ⅳ期	刷毛目唐津
SK2004	2	磁	碗口縁部	肥前	口:12.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色		大橋Ⅴ期	端反碗
SK2004	3	磁	紅猪口	肥前	口:6.30 高:2.70 底:3.15	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色	外面:笹	大橋Ⅳ期	
SK2004	4	磁	紅猪口	肥前	口:6.50 高:3.30 底:2.90	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:オリーブ黒10Y3/2		大橋Ⅳ期	
SK2019	5	陶	皿底部	肥前	底:4.3	細	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR7/3			大橋Ⅱ期	全面施釉,被熱痕,見込みに砂目
SK2019	6	陶	皿底部	京・信	底:5.00	細	灰白7.5Y7/1	内外:オリーブ黄5Y6/3				
SK2019	7	磁	碗底部	肥前	底:3.50	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色			高台内に「大明成化年製」銘款有
SK2019	8	磁	皿底部	肥前		微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色		大橋Ⅲ期	糸切り細工
SP2048	9	陶	碗底部	肥前	底:4.80	細	にぶい橙7.5YR7/4	内外:極赤褐5YR3/3		内外:直線的な刷毛目	大橋Ⅳ期	刷毛目唐津
SP2026	10	陶	擂鉢口縁部	備前		細(陶片含)	にぶい赤7.5R4/4	にぶい赤7.5R4/4		内外:ロクロナデ	近世Ⅱ期	
SP2268	11	陶	碗底部	肥前	底:4.70	細	灰白2.5Y8/2	内外:にぶい黄橙10YR6/4			大橋Ⅲ期	
SK2017	12	陶	鉢底部	肥前	底:10.10	細	にぶい赤褐2.5YR5/4	外面:黒褐5YR2/2 内面:灰白5Y8/1			大橋Ⅳ期	刷毛目唐津
SK2018	13	磁	小杯	肥前	底:2.10	微	灰白	灰白N8/0			1640～1650年代	高台内無釉
SK2014	14	陶	碗低	肥前	底:4.20	細	灰白2.5Y8/1	内外:明オリーブ灰2.5GY7/1			大橋Ⅲ期	
SK2014	15	陶	鉢口縁部	肥前	口:30.00	細	明褐灰5YR7/2	内外:暗褐10YR3/4			大橋Ⅲ期	三島
SD1003	16	磁	碗	肥前	口:10.00 高:7.25 底:3.90	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色	外面:一重網目・魚	17c中葉	
SD1003	17	土師質	皿		口:7.6	中	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6		内外:ロクロナデ		
SK2023	18	陶	碗	京信	口:7.0	微	灰白色	内外:灰白2.5Y8/2	上掛:緑		19c前半	端反碗
SK2023	19	陶	蓋		最大径:8.00 高:1.75 底:3.00	細	橙5YR6/6	外面:淡黄2.5Y8/4		内底:回転糸切り		外端部に煤付着
SK2023	20	磁	蓋	肥前	つまみ部:3.35 高:2.20 底:8.90	微	灰白色	外面:明オリーブ灰5GY7/1 内面:透明釉	呉須:緑灰5G5/1		大橋Ⅳ期	青磁
SK2023	21	磁	蓋	肥前	最大径:10.00 底:9.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色		大橋Ⅴ期	受部外側にアルミナ砂付着
SK2023	22	磁	紅猪口	肥前	口:4.20	微	灰白色	内外:白			大橋Ⅳ期	型押成形

第208図　SK2004・2019・SP2048・2026・2268・SK2017・2018・SK2014・SD2011・SK2023出土遺物観察表

SK 2018（第202・203図）

C区北部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は0.90～1.02m，底面の標高は約0.7mを測る。径0.8mの円形として検出した。断面はU字形である。

SK 2018出土遺物（第207図）

13は肥前系磁器小坏。外面に鎬が認められ，高台内無釉である。

SK 2014（第202・203図）

C区北部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.07m，底面の標高は0.94mを測る。径0.7m程のやや不整形な円形として検出した。断面はU字形である。

SK 2014出土遺物（第207図）

14は肥前系陶器碗である。15は肥前系陶器鉢で，三島手である。

SD 2001（第202・203図）

C区北部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.03m前後，底面の標高は0.88前後mを測る。検出長は約1.8m，検出幅は1.0m前後を測る。溝状を呈するが東西には伸びない。断面はU字形である。

SD 2001出土遺物（第207図）

16は肥前系磁器碗。外面は，一重網目文に魚が描かれる。17は土師質土器皿である。

SP 2146（第202図）

C区北部，第２面で確認したピットである。検出した標高は1.00m前後，底面の標高は0.79m前後を測る。SX2005の底面で検出され，平面は径0.6～0.7m前後の楕円形である。

SP 2146出土遺物（第209図）

１・２は，肥前系陶器碗。１は呉器手である。３は京・信楽系陶器碗である。４は肥前系磁器口縁部である。５は備前灯明皿である。６は景徳鎮窯系青花の口縁部である。

SX 2005（第202・203図）

A－C区北部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は0.92～1.14m，底面の標高は0.78～0.93mを測る。検出長は約５m，最大幅は約1.5mを測る。平面では，不整形な東西方向の溝状に認められる。断面は皿状で，埋土は炭化物を少量含むシルト質土の単層である。SD2008，SP 2146より後出する。

SX 2005出土遺物（第209図）

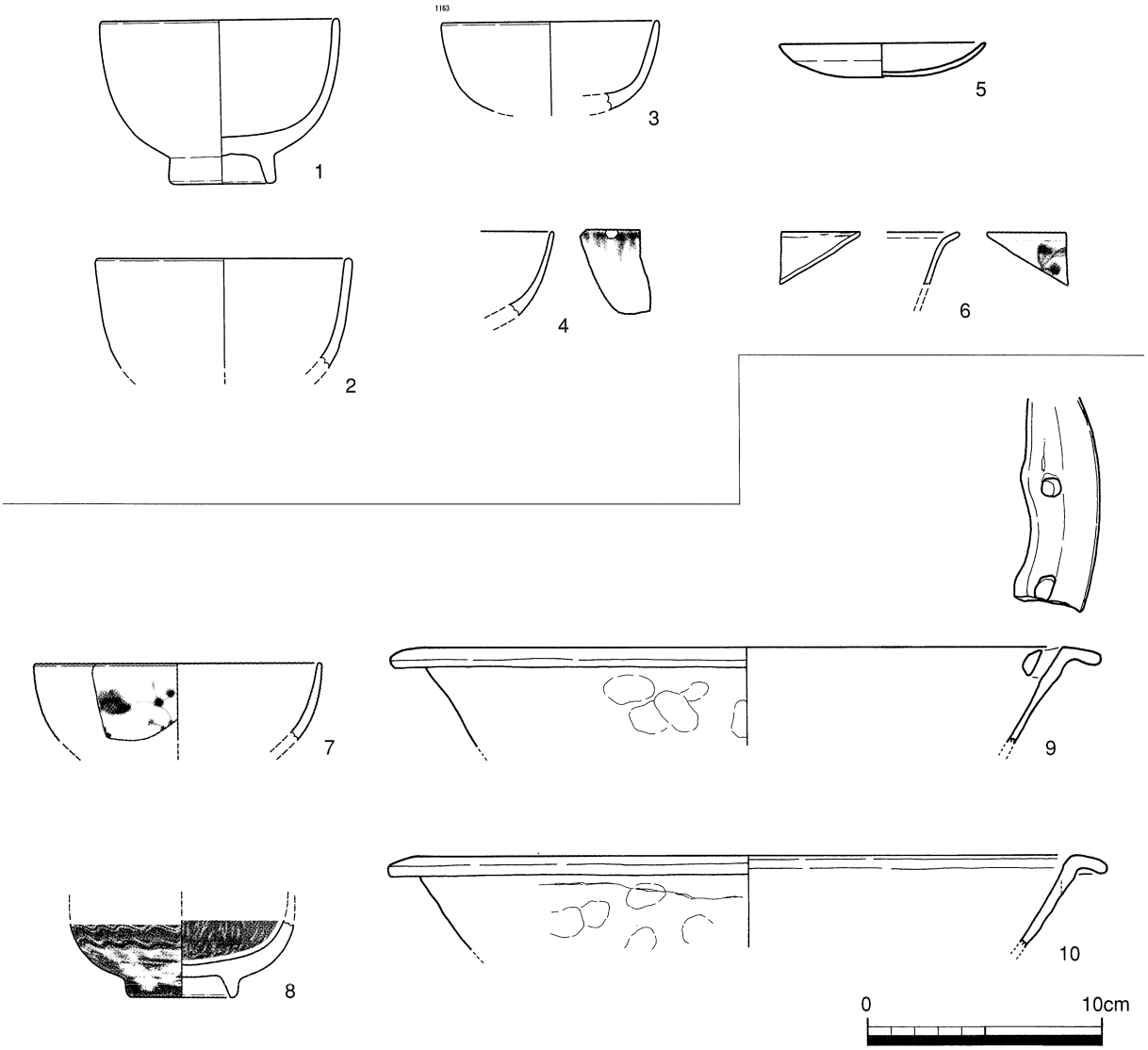
７は肥前系磁器碗である。８は肥前系磁器碗である。９・10は，瓦質土器焙烙である。

SK 2023（第242・244図）

A－C区中央部，第２面で確認された遺構である。検出した標高は1.12m，底面の標高は0.72mを測る。検出長は東西方向で0.9m，南北方向で約1.2mを測る。平面は長方形だが，北面は壊される。断面は箱状である。

SK 2023出土遺物（第207図）

19は京・信楽系陶器端反碗である。19は軟質施釉陶器蓋である。20・21は，肥前系磁器蓋である。22は肥前系磁器紅皿である。



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SP2146	1	陶	碗	肥前	口:9.80 高:6.90 底:4.00	微	灰白2.5Y7/1	内外:灰オリーブ5Y6/2			大橋Ⅲ期	高台内に砂粒付着
SP2146	2	陶	碗口縁部	肥前	口:10.60	細	浅黄2.5Y7/3	内外:にぶい黄橙10YR7/4				
SP2146	3	陶	碗口縁部	京・信	口:9.05	細	灰白5Y7/1	内外:灰黄2.5Y7/2				
SP2146	4	磁	碗口縁部	肥前		微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色	外面:雨降り文	大橋Ⅳ期	
SP2146	5	陶	灯明皿	備前	口:8.7 高:1.4	細	にぶい赤7.5R4/4	にぶい赤7.5R4/4		内外:ロクロナデ 外底:ケズリ		口縁内外に煤付着
SP2146	6	磁	碗口縁部	中国		微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色			
SX2005	7	磁	碗	肥前	口:12.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅳ期	内面に被熱痕
SX2005	8	陶	碗	肥前	底:3.20	細	赤10R4/6	内外:暗赤灰2.5YR3/1		外面:波状の刷毛目 内面:打刷毛	大橋Ⅳ期	刷毛目唐津
SX2005	9	土師質	焙烙		口:26.1	砂粒無		外面:黄灰2.5Y5/1 内面:黄灰2.5Y6/1		内・外口縁部:ロクロナデ 外体:指押さえ		
SX2005	10	土師質	焙烙		口:27.6	微砂粒少	灰5Y5/1	灰5Y5/1		内・外口縁部:ナデ 外体部:指押さえ 口縁端部:ハケ		外面に被熱痕

第209図　SP2146・SX2005出土遺物実測図・観察表

第２面Ｃ区北端部・Ｄ区・Ｅ区検出遺構（第210～212図）

調査地西半部，屋敷内で微高地上の地点で検出された遺構である。調査範囲の制限により狭地で，部分的に認められた焼土を含む整地直下を確認面とした。明瞭な施設は認められず，小規模な土坑，溝状の遺構やピットが検出されている。遺物がまとまって出土するものは少ない。所属時期は，概ね17世紀後半～18世紀代を中心とすると推定されるが，17世紀前葉の所産を示すものも認められる。

SK 2036（第210図）

Ｃ区北西端部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.04ｍ前後，底面の標高は0.86ｍ前後を測る。検出長は東西方向で約1.1ｍ，南北方向で約0.9ｍを測る。平面は方形に検出されたが，南部は撹乱により壊され，北側が調査対象外となる。

SK 2036出土遺物（第215図）

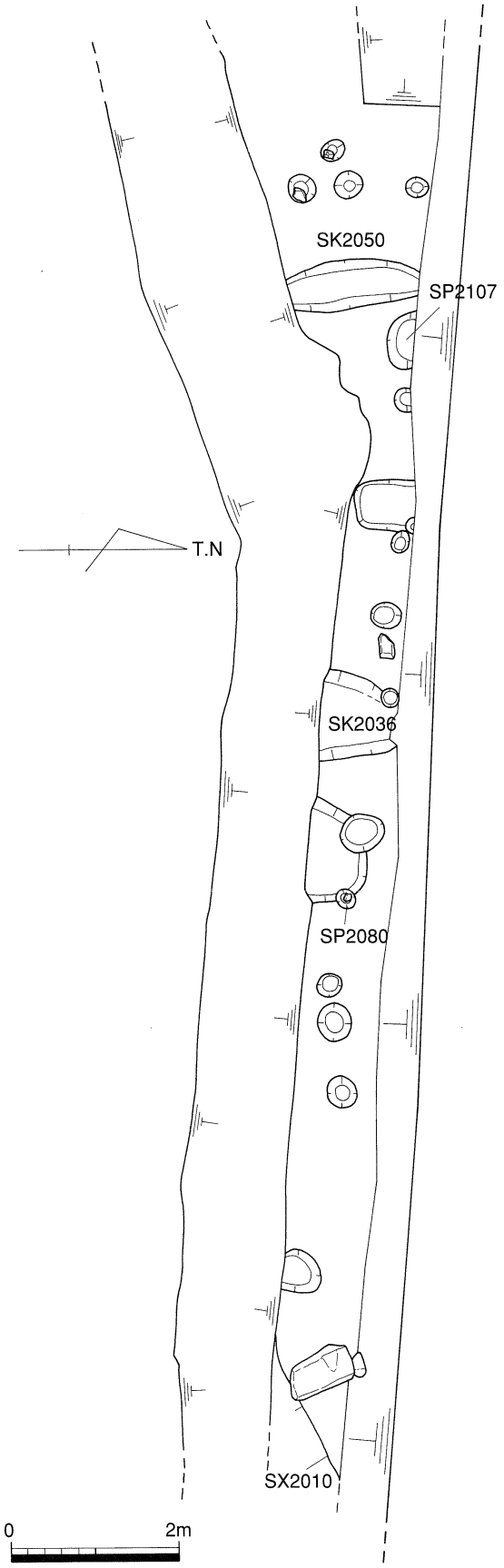
２は肥前系磁器碗。３は瀬戸・美濃系陶器折縁皿である。

SK 2050（第210図）

Ｄ区北東端部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.04ｍ前後，底面の標高は0.9ｍ前後を測る。検出長は東西方向で約0.6ｍ，南北方向で約1.5ｍを測る。平面は溝状に検出された。北が調査対象外となり，また南部は撹乱により壊される。

SK 2050出土遺物（第215図）

４は土師質土器皿。灰白系の胎土で，底部は回転糸切りである。５は信楽鉢である。



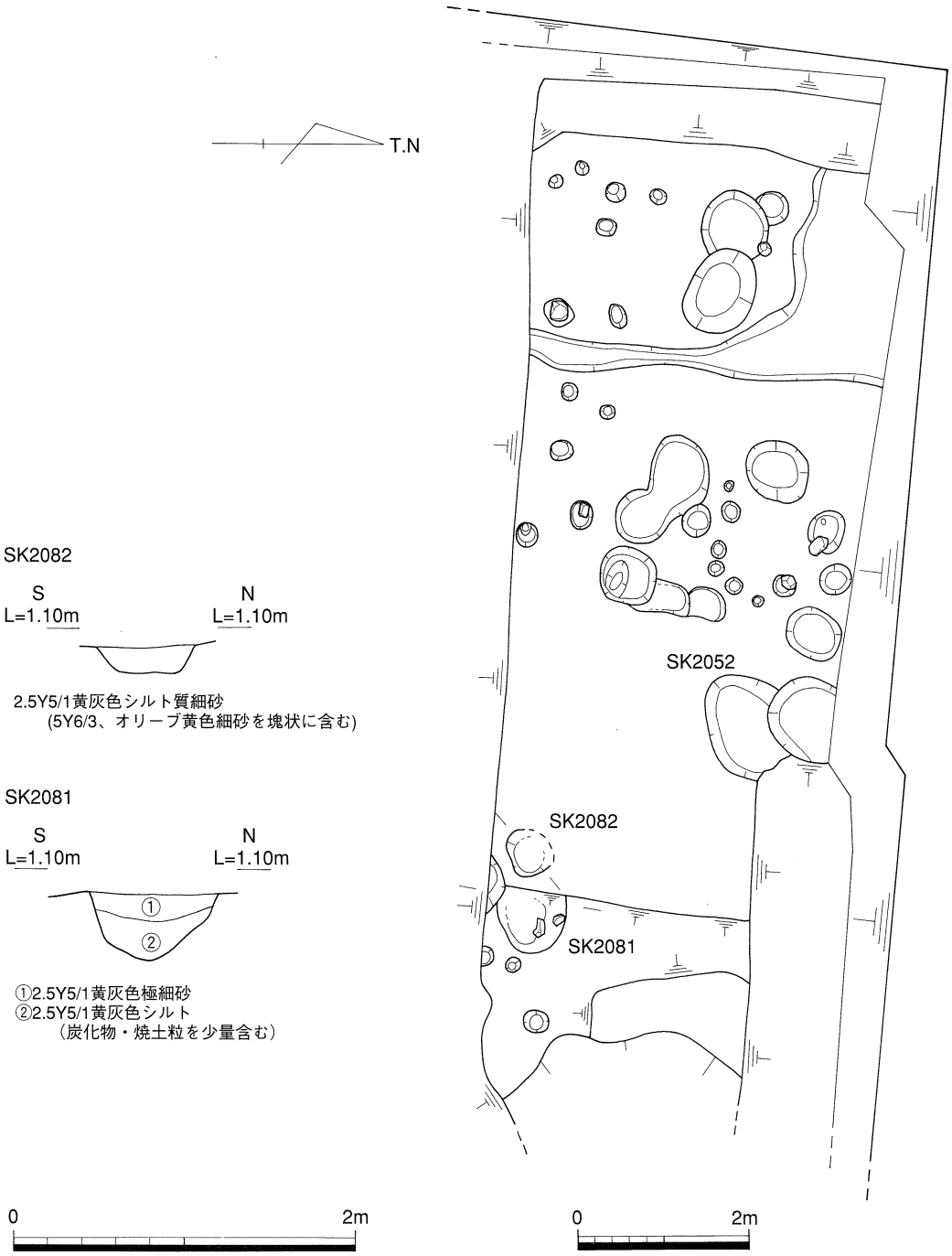
第210図　Ｃ区北端部遺構平面図

SK 2081（第211図）

D区中央部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は0.88m前後，底面の標高は，0.69m前後を測る。検出長は東西方向で約0.8m，南北方向で約0.9mを測る。平面は円形と推定される。

SK 2081出土遺物（第215図）

６は焼塩壺で，輪積成形のものである。



第211図　第２面D区西半遺構平面・土層図

SK 2082（第211図）

D区中央部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は0.98m前後，底面の標高は0.7m前後を測る。検出長は東西方向で約0.7m，南北方向で約0.2mを測る。

SK 2082出土遺物（第215図）

７は肥前系陶器鉢である。

SK 2063（第212図）

E区中央部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.12m前後，底面の標高は0.93m前後を測る。検出長は東西方向で約0.7m，南北方向で約1.0mを測る。平面は方形と推定される。

SK 2063出土遺物（第215図）

８～11は肥前系磁器。皿（８），碗（９・10），青磁皿（11）が見られる。

SK 2073（第213図）

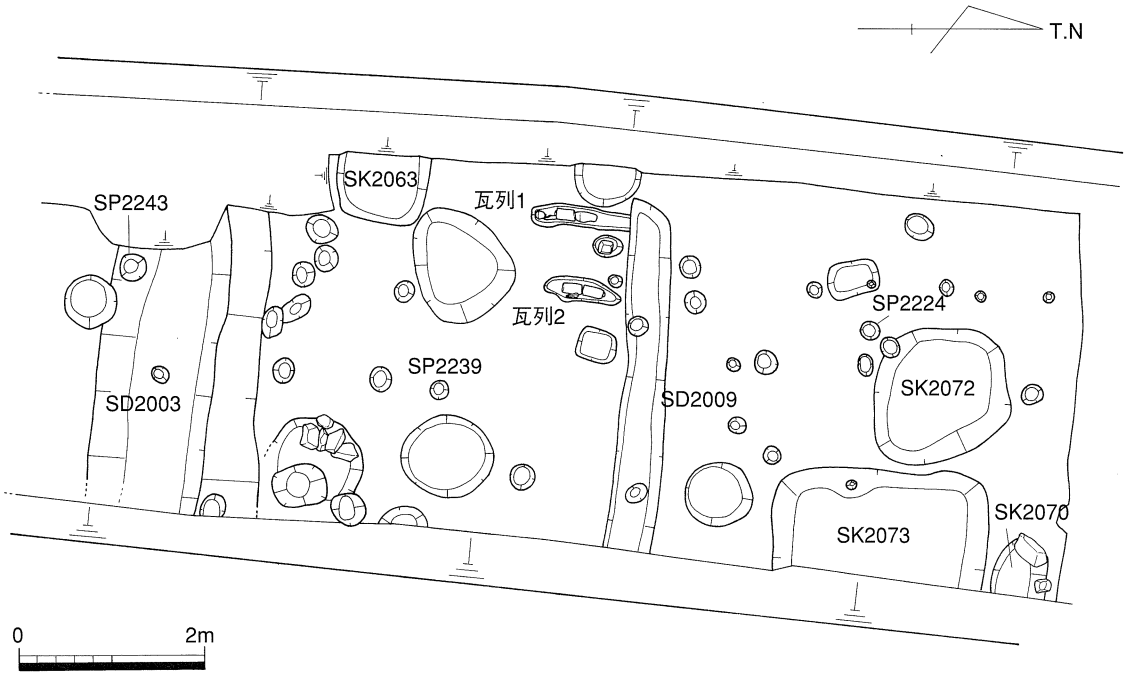
E区北部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.07m前後，底面の標高 0.67m前後を測る。検出長は東西方向で約1.15m，南北方向で約2.45mを測る。方形に推定されるが，東部が調査対象外となる。断面は船底形で，埋土は水平状に堆積する。出土遺物は，17世紀前葉頃の所産と考えられる。

SK 2073出土遺物（第216図）

１～３は肥前系陶器皿で，何れも砂目が認められる。

SK 2072（第213図）

E区北部，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.10m前後，底面の標高は 0.78m前後を測る。検出長は東西方向で約1.4m，南北方向で約1.4mを測る。平面は不整形な方形である。



第212図　E区遺構平面図

断面は船底形で，埋土は礫を多量に含むシルト質土の単層である。所属時期は出土遺物より，17世紀前葉までの所産と考えられる。

SK2072出土遺物（第216図）

4は肥前系陶器碗である。5・6は備前鉢である。7・8は，土師質土器皿である。灰白色系の胎土を有し，底部は回転糸切りである。

SK2052（第211図）

D区北部，第2面で検出した遺構である。検出標高は0.92m前後，底面標高は0.70m前後を測る。検出長は東西に約1.1m，南北に約0.8mを測る。円形状に検出された。

SK2052出土遺物（第216図）

9は，肥前系陶器皿である。10は，肥前系磁器皿である。11は，備前擂鉢である。

SD2009（第212・214図）

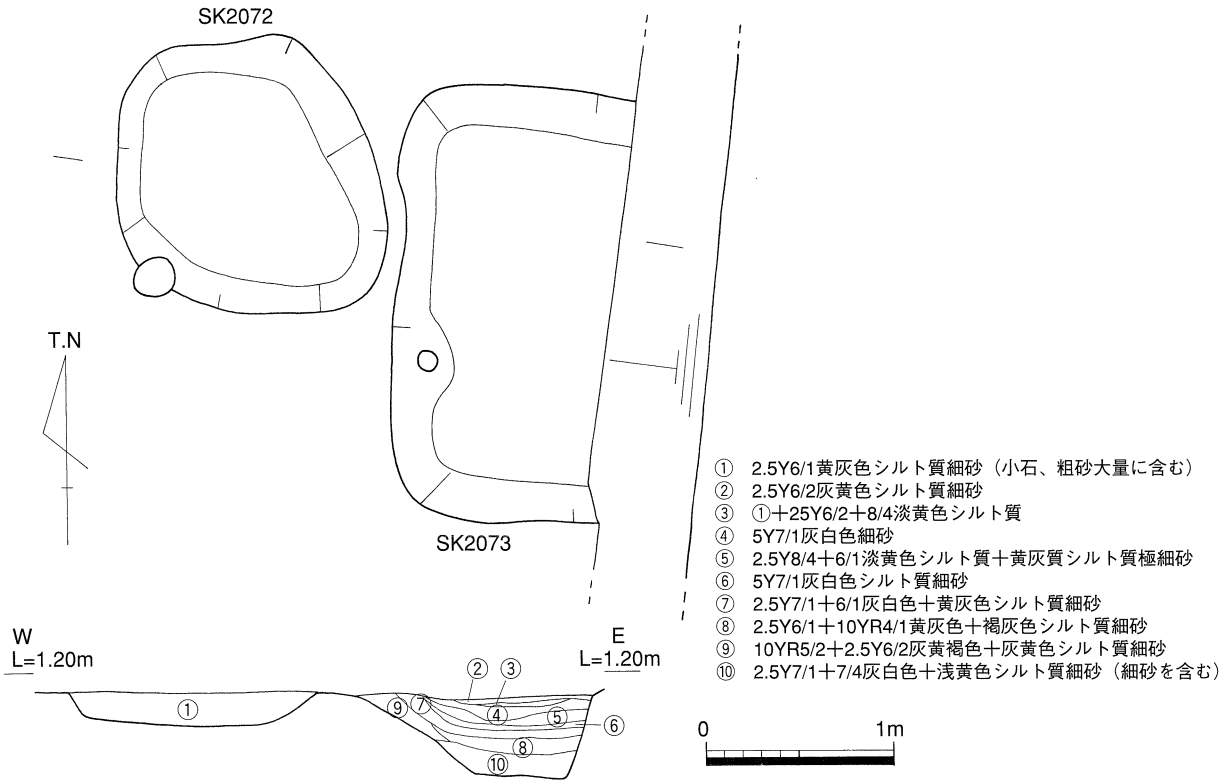
E区中央部，第2面で確認した溝状の遺構である。検出した標高は1.12m前後，底面の標高は，1.06m前後を測る。N－83°－Wの主軸を持ち，断面は浅い皿状を呈す。南岸に瓦を南北方向に2列，並んで検出された。溝と合わせ，小規模な区画を示す可能性も考えられる。所属時期はSD2003に主軸が近似することから，17世紀中葉～18世紀前葉の所産と推定される。

SD2009出土遺物（第215図）

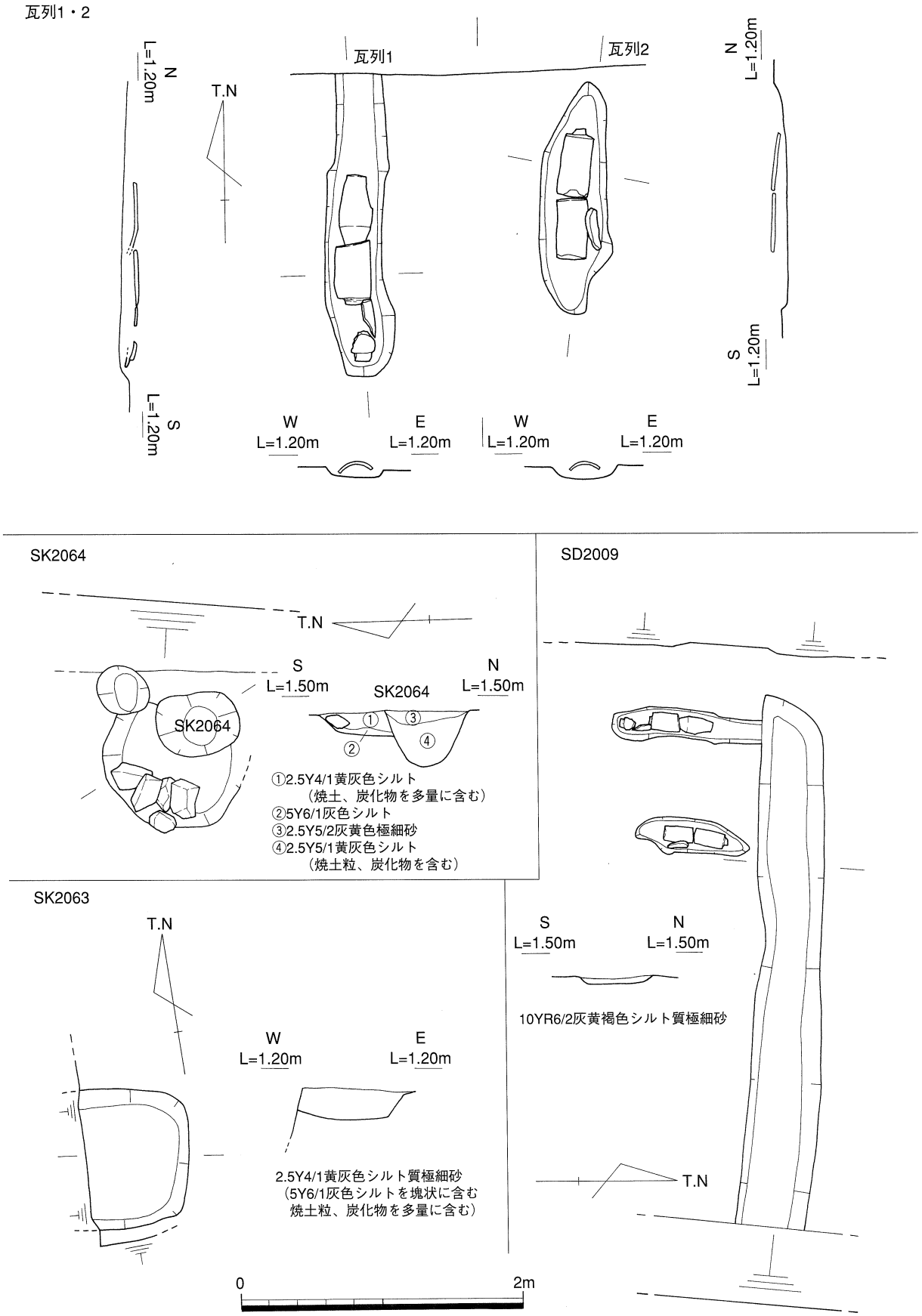
1は土師器質土器皿。灰白色系の胎土を有し，底部は回転糸切りである。

瓦列出土遺物（第217～219図）

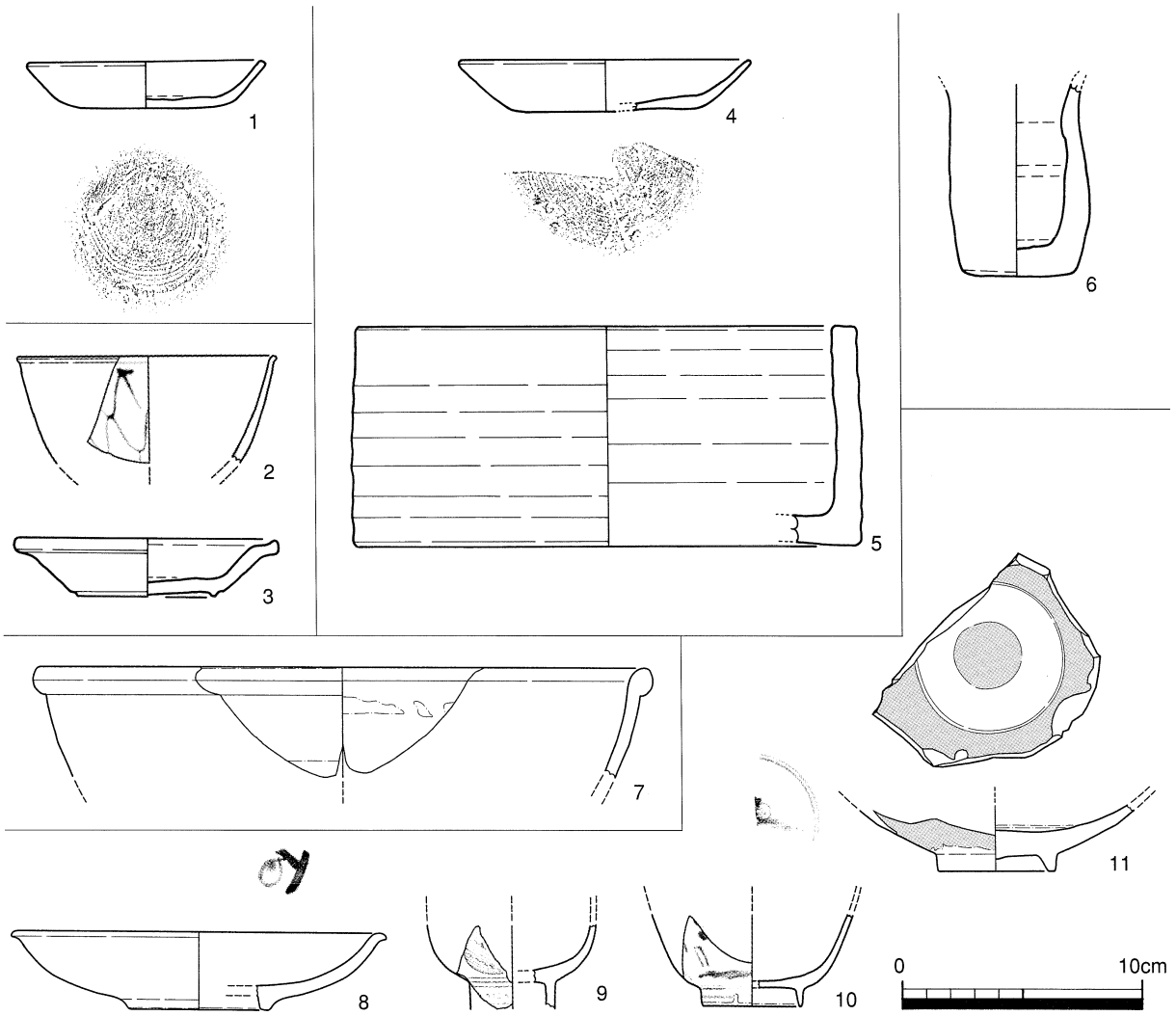
1～6の軒丸瓦が，凸面を上に並べられていた。



第213図　SK2072・2073平面・土層図

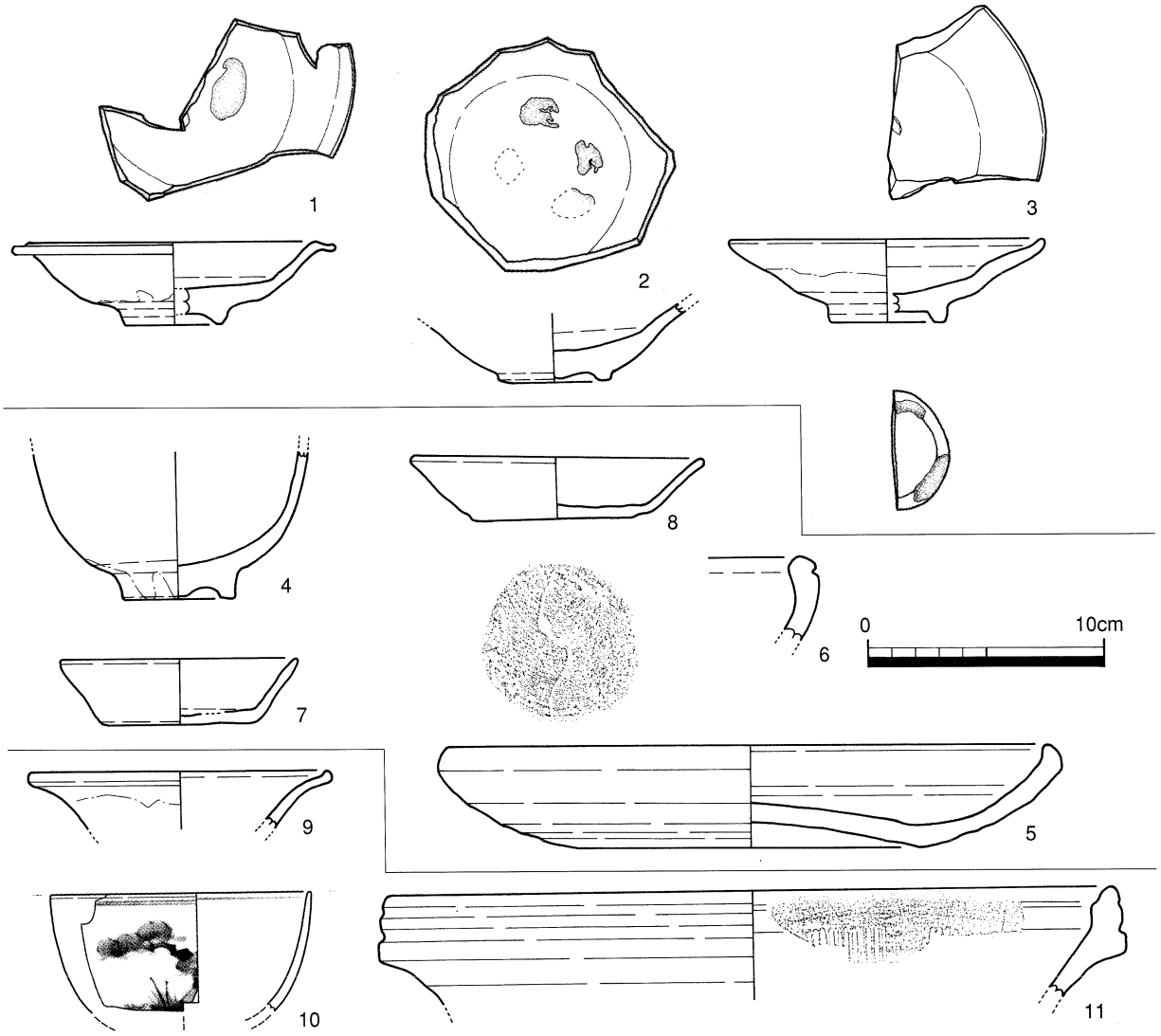


第214図　瓦列・SD2009・2063平面・断面図



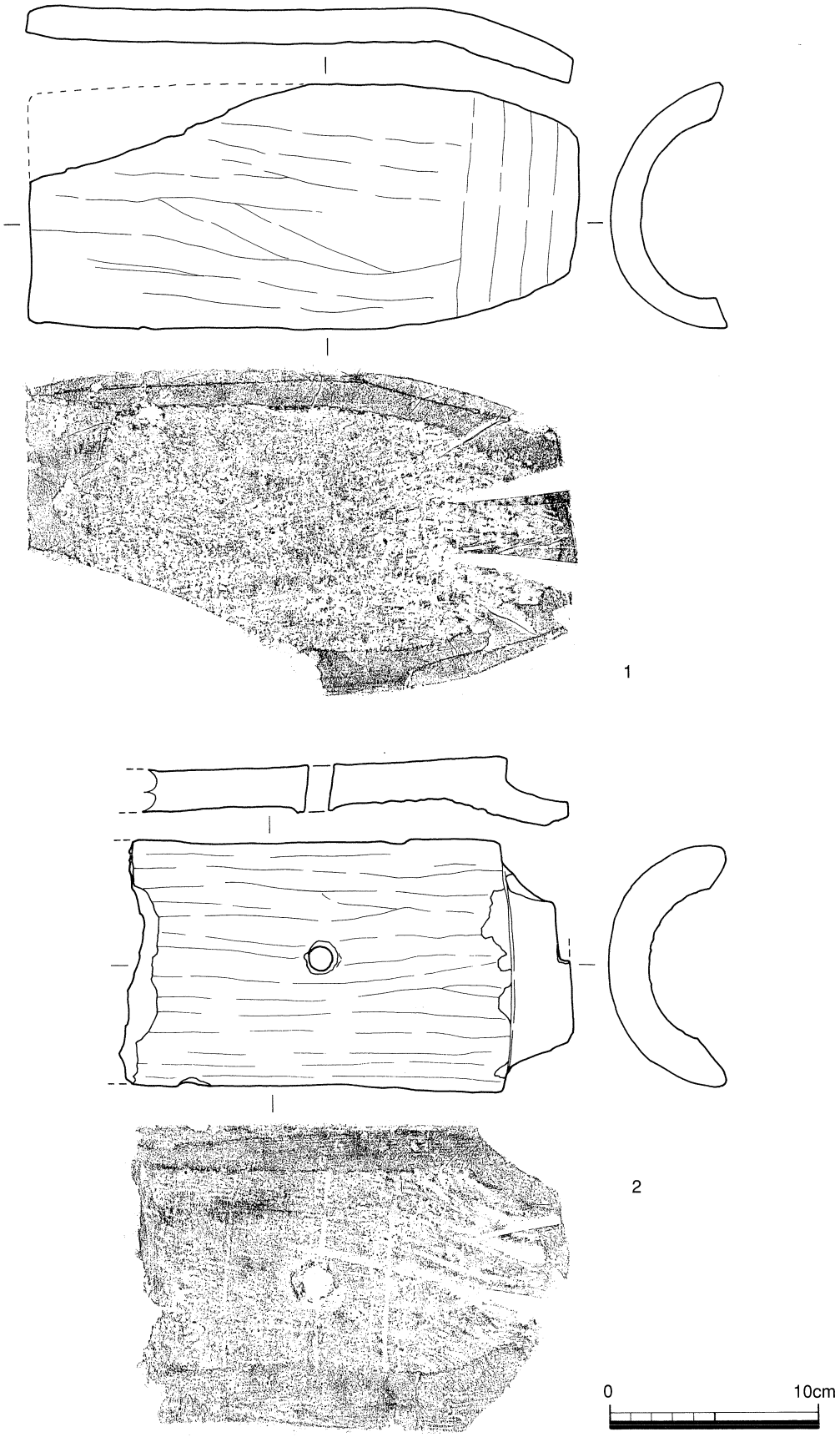
遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SD2009	1	土師質	皿		口:9.7 高:2.0 底:6.3	中	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		口縁内外に煤付着
SK2036	2	磁	碗	肥前	口:10.60	微	灰白色	内外:透明釉	外面:一重網目		大橋Ⅲ期	
SK2036	3	陶	皿	瀬・美	口:10.4 高:2.4 底:5.9	細	灰白2.5Y8/1	灰白7.5Y7/2			大窯Ⅴ段階	輪禿皿
SK2050	4	土師質	皿		口:12.0 高:2.1 底:7.6	中	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り 内底:仕上げナデ		内外に有機物付着
SK2050	5	陶	鉢	信楽	口:20.3 高:9.0 底:20.6	細		外面:明褐7.5YR5/6 内面:灰白7.5Y8/2		内外:ロクロナデ		
SK2081	6	土師質	焼塩壺		底:4.7	微砂粒		外面:にぶい橙5YR6/3 内面:赤10R5/8		内面:ロクロナデ		輪積成形
SK2082	7	陶	碗	肥前	口:25.00	細	にぶい赤褐5YR5/4	黒褐5YR2/1			大橋Ⅲ期	
SK2063	8	陶	皿	肥前	口:15.50 高:3.20 底:5.70	微	灰白色	灰7.5Y6/1	呉須:暗青色		大橋Ⅱ-1期	初期伊万里 全体に被熱痕
SK2063	9	磁	湯飲碗	肥前		微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色			
SK2063	10	磁	碗	瀬・美	底:4.00	細	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色			端反碗
SK2063	11	磁	皿底部	肥前	底:4.80	微	灰白色	内外:明緑灰10GY8/1		内面:蛇の目釉剥		青磁

第215図　SD2009・SK2036・2050・2081・2082・2063出土遺物実測図・観察表

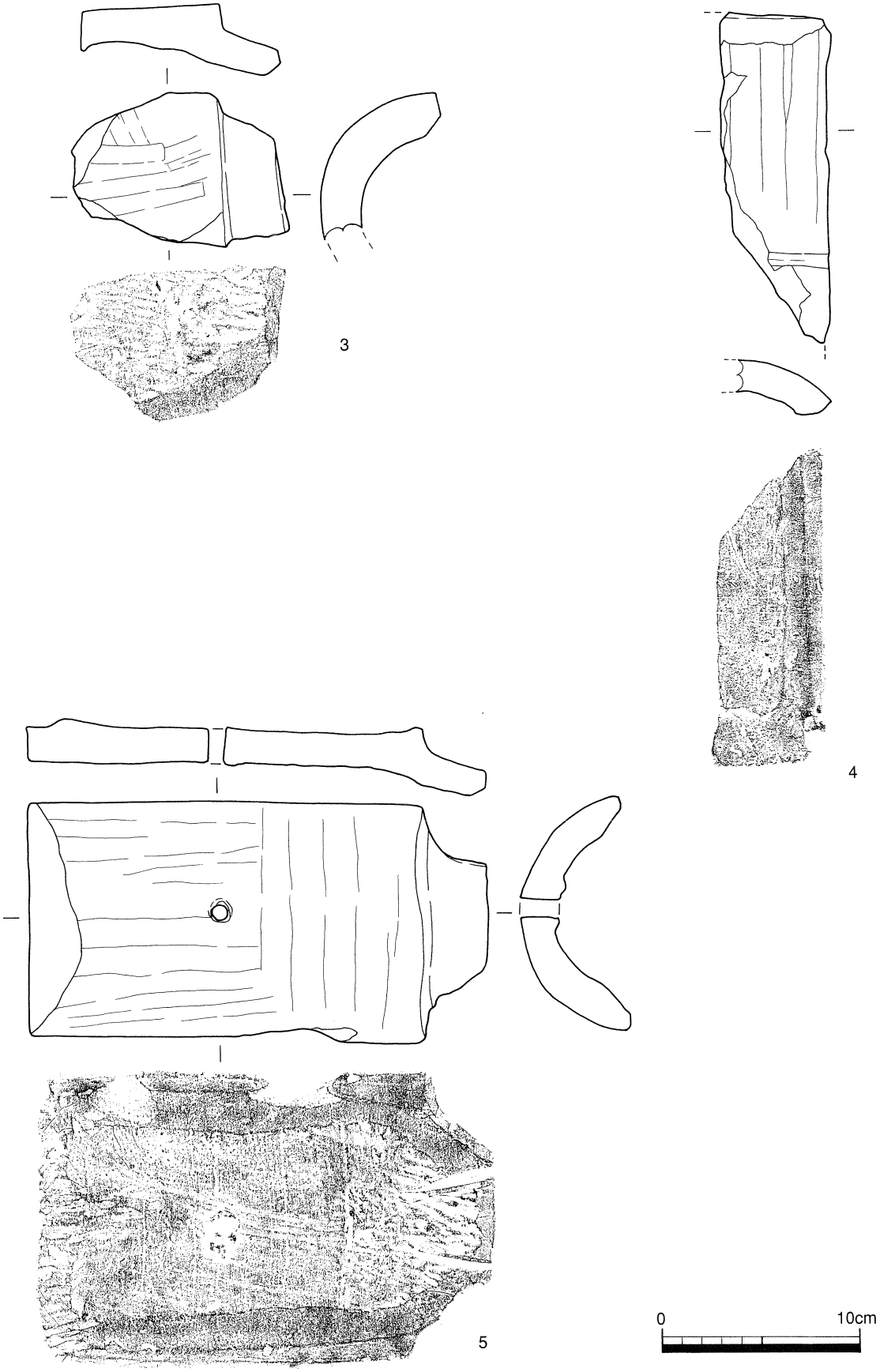


遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SK2073	1	陶	皿	肥前	口:13.3 高:3.4 底:4.0	細	浅黄橙10R8/3	にぶい黄橙10R7/3			大橋Ⅱ期	見込みに砂目2ヶ所
SK2073	2	陶	皿	肥前	底:4.7	細	橙5YR6/6	褐灰10YR6/1			大橋Ⅱ期	見込みに砂目3ヶ所
SK2073	3	陶	皿	肥前	口:13.2 高:3.5 底:4.9	細	灰白N7/0	明オリーブ灰5GY7/1			大橋Ⅰ-2期	高台部に砂目2ヶ所
SK2072	4	陶	碗	肥前	底:4.6	細	灰白10Y7/1	明オリーブ灰5GY7/1			大橋Ⅱ期	
SK2072	5	陶	鉢	備前	口:23.7 高:4.25 底:14.4	細		外面:灰赤7.5R4/3 内面:極暗赤褐7.5R2/3		内外:ロクロナデ 外底:ヘラケズリ		大平鉢,内外面に溶着痕
SK2072	6	陶	口縁部	備前		細		外面:極暗赤褐2.5YR2/4 内面:褐灰10YR4/1				
SK2072	7	土師質	皿		口:9.9 高:2.7 底:5.9	精良	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		底部内外に3.0×3.2cmの円形黒斑
SK2072	8	土師質	皿		口:12.1 高:2.8 底:6.9	精良	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り 内底:仕上げナデ		
SK2052	9	陶	皿	肥前	口:12.4	細	灰7.5Y6/1	灰白N8/0			大橋Ⅱ期	
SK2052	10	磁	碗	肥前	口:11.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色		大橋Ⅲ期	
SK2052	11	陶	擂鉢	備前	口:30.1	細	赤灰7.5R5/1	赤灰7.5R5/1		内外:ロクロナデ	近世Ⅱ期	

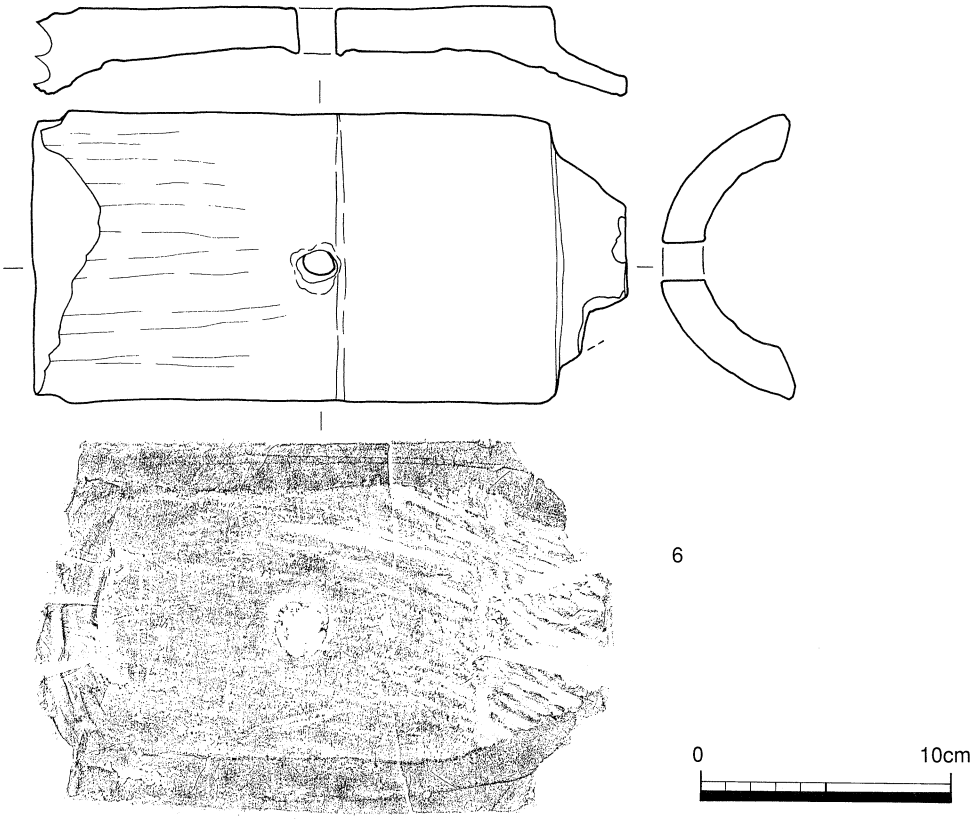
第216図　SK2073・2072・2052出土遺物実測図・観察表



第217図　瓦列出土遺物実測図（その１）



第218図　瓦列出土遺物実測図（その２）



遺構名	報文番号	遺物種別	法量(cm)			胎土	色調		調整		焼成	備考
			長さ(現存長)	厚さ	幅(現存幅)		断面	器面	内面	外面		
瓦列1	1	丸瓦	26.3	1.4	11.6	砂礫・石少	灰N6/0	暗灰N3/0	ゴザ状圧痕		良	
瓦列1No.2	2	丸瓦	21.6	2.1	12.0	砂礫・石少	灰白7.5Y7/1	灰N4/0	コビキB ゴザ状圧痕	板ナデ	良	被熱
瓦列1No.3	3	丸瓦	10.6	2.1	7.7	砂粒少	灰白2.5Y7/1	暗青灰5B4/1	布目 ゴザ状圧痕	板ナデ	良	被熱
瓦列1No.3	4	丸瓦	11.0	1.5	5.1	砂粒少	灰白2.5Y7/1	暗灰N3/0	コビキB ゴザ状圧痕	板ナデ	良	
瓦列2No.2	5	丸瓦	23.3	1.7	12.2	砂礫・石少	にぶい黄橙 10YR7/2	灰N4/0	コビキB,布目 ゴザ状圧痕	板ナデ	良	被熱
瓦列2No.1	6	丸瓦	23.6	1.6	11.5	砂礫少	灰白2.5Y8/2	灰白N4/0	コビキB,布目 ゴザ状圧痕		良	被熱 しっくい付着

第219図　瓦列出土遺物実測図・観察表（その３）

SP2080（第210図）

C区北端部，第２面で確認したピットである。検出した標高は1.09m前後，底面の標高は1.02m前後を測る。径約0.2mの円形として検出した。底面に根石が認められる。

SP2080出土遺物（第220図）

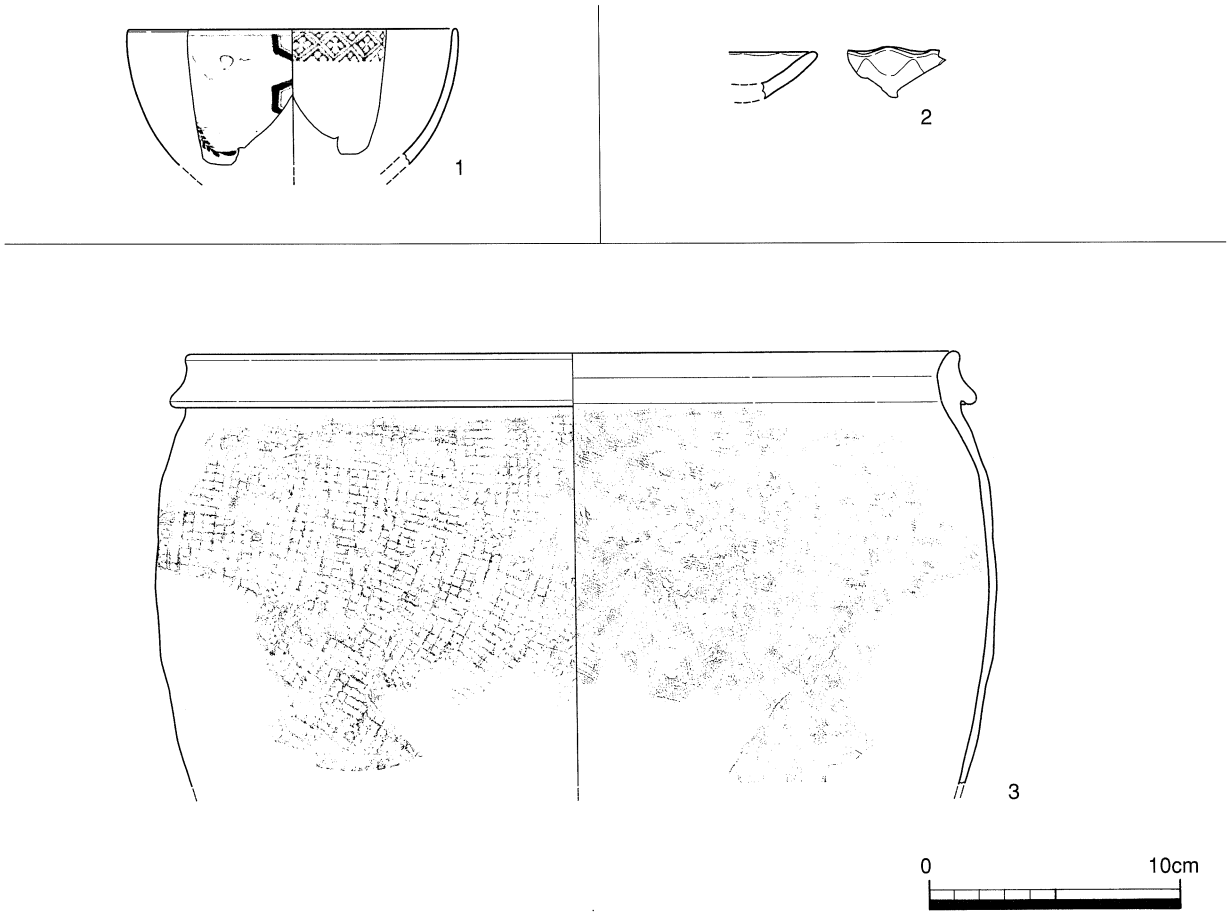
２は瀬戸・美濃系陶器皿口縁部である。

SK2084（第221図）

C区西部，第２面で確認した遺構だが，第１面で除去しきれなかった撹乱を除いた際に，検出した。埋甕と考えられる土器は，既に破壊された状態で出土している。検出した標高は1.18m前後，底面の標高は0.90m前後を測る。検出長は東西方向で約0.64m，南北方向で約0.34mを測る。南部を撹乱により壊され，平面は半円形に認められた。

SK2084出土遺物（第220図）

３は瓦質土器の大甕である。外面に格子状の叩き痕，内面に刷毛調整が認められる。亀山系のものである。



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調１(胎土)	色調２(釉薬、内外色調)	色調３(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SK2085	1	磁	碗	肥前	口:13.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色	外面:亀甲,藤 内面:四方襷	大橋Ⅳ期	
SP2080	2	陶	皿口縁部	瀬・美		細	灰白10YR7/1	内外:暗褐7.5YR3/4				
SK2084	3	瓦質	甕		口:61.00	砂粒	黄灰2.5Y6/1	黒褐2.5Y3/1				

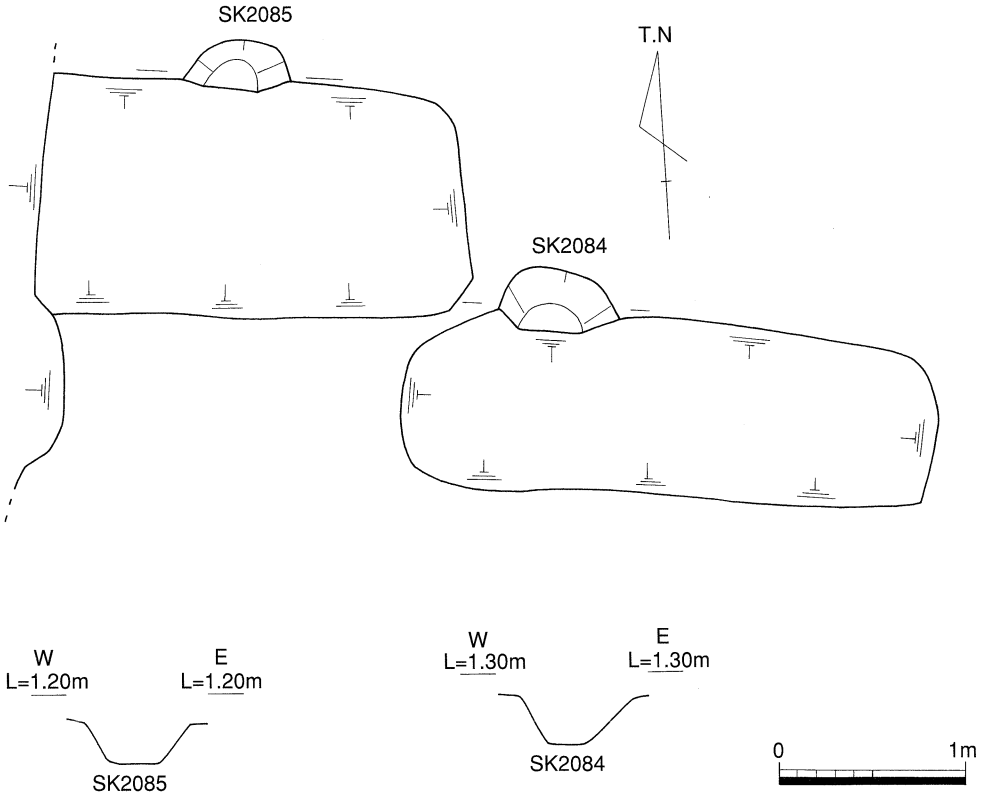
第220図　SK2085・SP2080・SK2084出土遺物実測図・観察表

SK 2085（第221図）

Ｃ区西部，第２面で確認した遺構だが，第１面で除去しきれなかった撹乱を除いた際に，検出した。検出した標高は1.05ｍ前後，底面の標高は0.83ｍ前後を測る。検出長は東西方向で約0.6ｍ，南北方向で約0.3ｍを測る。南部を撹乱により壊され，平面は半円形に認められた。

SK 2085出土遺物（第220図）

１は肥前系磁器碗である。SX2008の出土品と接合関係が認められた。



第221図　SK2084・2085平面・断面図

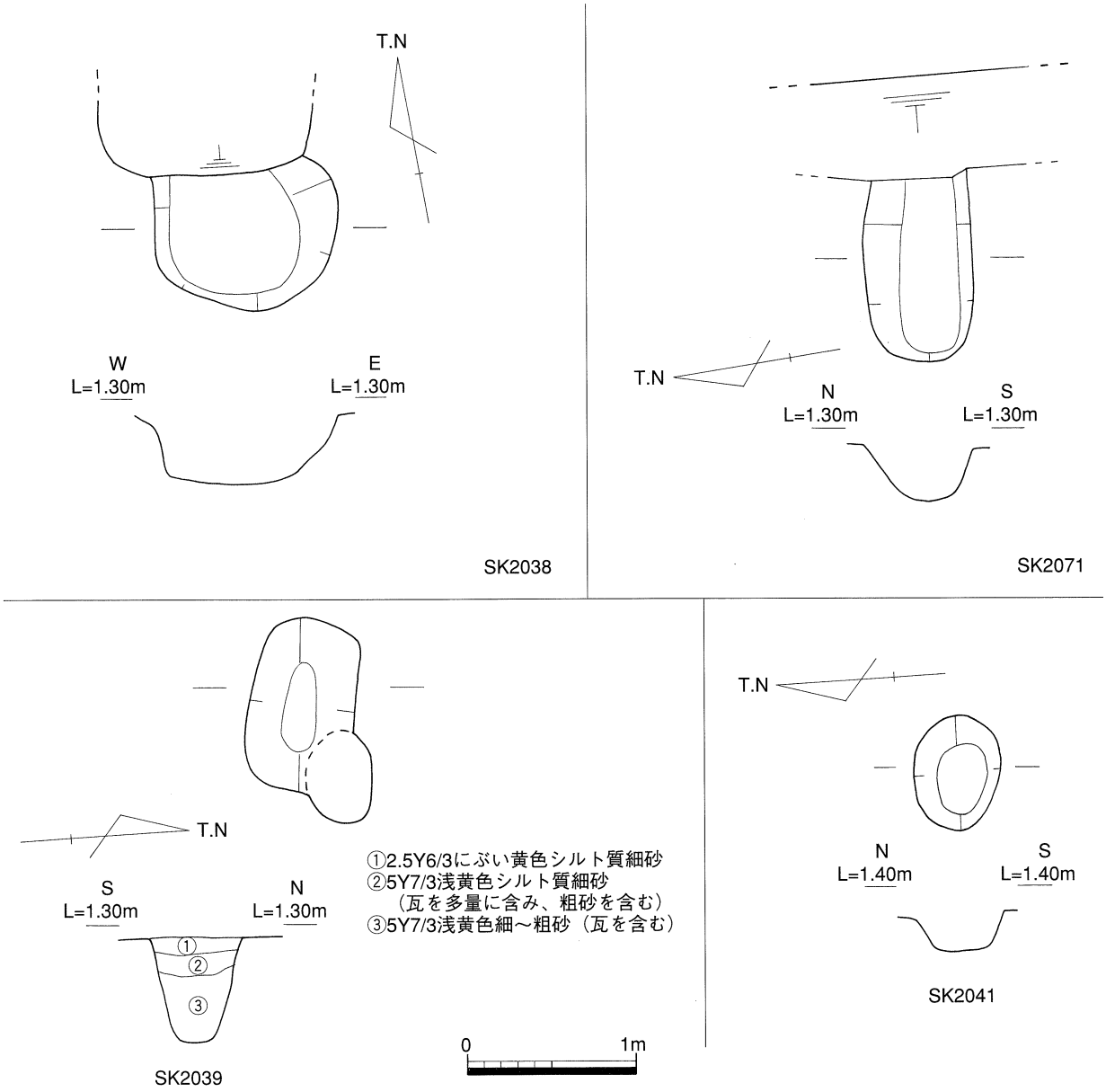
以下SK2038～SK2074は，道路部分で検出された遺構である。19世紀代の廃棄土坑と考えられるものが多い。

SK 2038（第222図）

C区南西隅，道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は1.07～1.20m，底面の標高は0.8m前後を測る。検出長は東西方向で約1.1m，南北方向で約0.8mを測る。平面は円形であるが，北部を撹乱により壊される。断面は箱形である。所属時期は出土遺物より明治時代の所産と考えられる。

SK 2038出土遺物（第223図）

1は瀬戸・美濃系磁器皿である。2は肥前系磁器瓶である。3・5は備前灯明皿である。6は備前鉢である。4・7は京・信楽系陶器。皿（4），蓋（7）がある。7はSK1017の出土品と接合関係を有する。



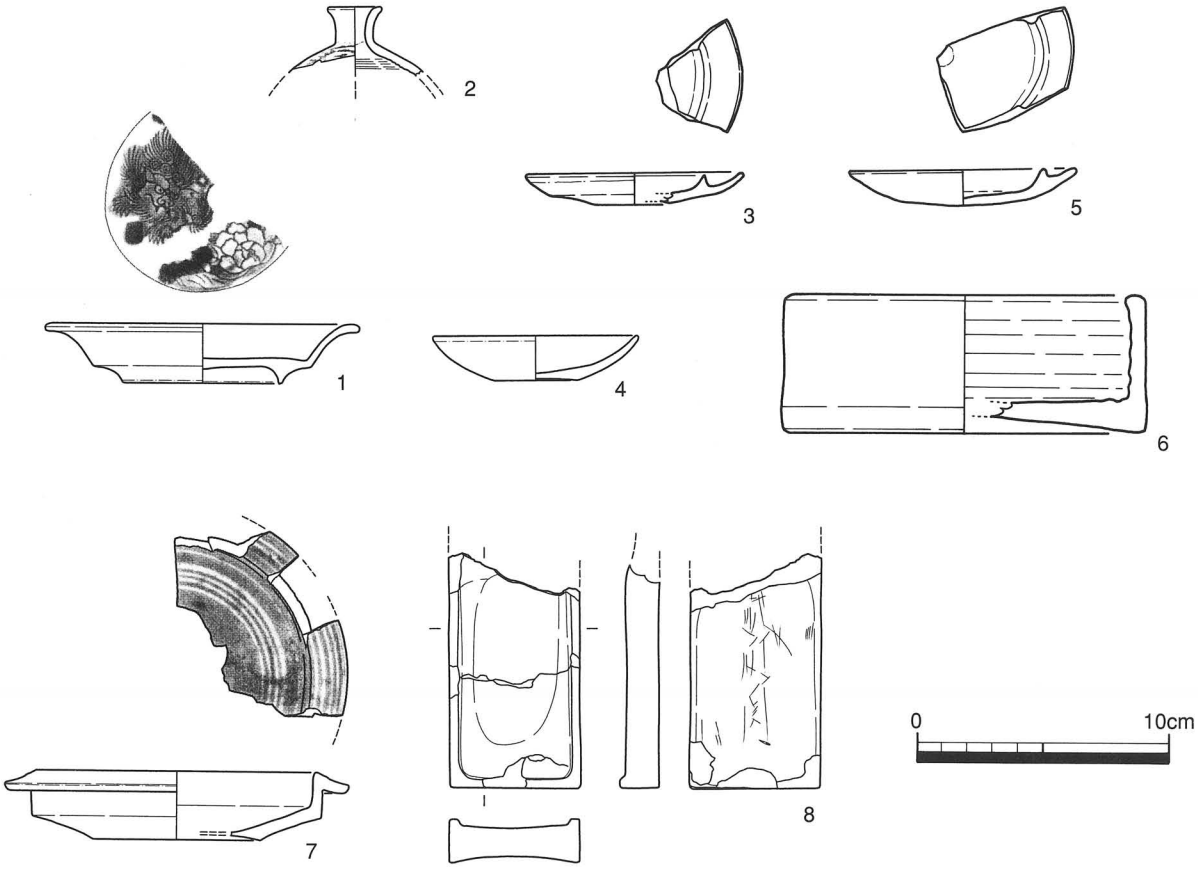
第222図　SK2038・2039・2041・2071遺構平面・土層図

SK 2039（第222図）

C区南部，道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は約1.20m，底面の標高は0.61m前後を測る。検出長は東西方向で約1.1m，南北方向で約0.6mを測る。平面は隅丸方形である。断面は箱形で，中層に瓦が多量に廃棄されていた。所属時期は，出土遺物より19世紀代の所産と考えられる。

SK 2039出土遺物（第225図）

7は肥前系磁器碗で，ガラス質の熔着剤による焼継が認められる。8は肥前系磁器瓶である。



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1（胎土）	色調2（釉薬、内外色調）	色調3（呉須，上絵）	調整	製作年代	備考
SK2038	1	磁	皿	瀬・美	口:11.85 高:2.35 底:6.15	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:コバルト	内面:獅子		
SK2038	2	磁	瓶	肥前	口:2.05	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色	外面:蛸唐草	大橋編年 Ⅳ～Ⅴ期	
SK2038	3	陶	灯明皿	京・信	口:8.2 高:1.2 底:2.9	細	灰黄2.5Y7/2	灰白7.5Y8/2		外面上半:ナデ 外面下半:ケズリ		
SK2038	4	陶	皿	京・信	口:8.00 高:1.78 底:3.30	細	灰白2.5Y8/2	内面:淡黄2.5Y8/3		内面:見込みにビン痕2ヶ所		外口縁部に煤付着
SK2038	5	陶	灯明皿	備前	口:8.9 高:1.4	細	赤10R5/6	赤10R5/6		内外:ロクロナデ		
SK2038	6	陶	鉢	備前	口:13.4 高:5.4 底:14.2	微砂粒	暗赤褐10R3/3～赤10R4/8	暗赤褐10R3/3～赤10R4/8		内面:ロクロナデ		
SK2038	7	陶	蓋	京・信	最大径 :13.60 高:6.80 底:11.00	細	灰白2.5Y7/1	外面:オリーブ黄5Y6/4	上絵:白・青	外面:直線的な刷毛目		被熱痕 1244と同一個体
SK2038	8	石	硯				灰赤10R4/2					

第223図　SK 2038出土遺物実測図・観察表

SK 2041（第222図）

C区南部，道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は1.25m前後，底面の標高は1.02m前後を測る。検出長は東西方向で約0.7m，南北方向で約0.5mを測る。平面は楕円形で，段面はU字形である。所属時期は，出土遺物より19世紀代の所産と考えられる。

SK 2041出土遺物（第225図）

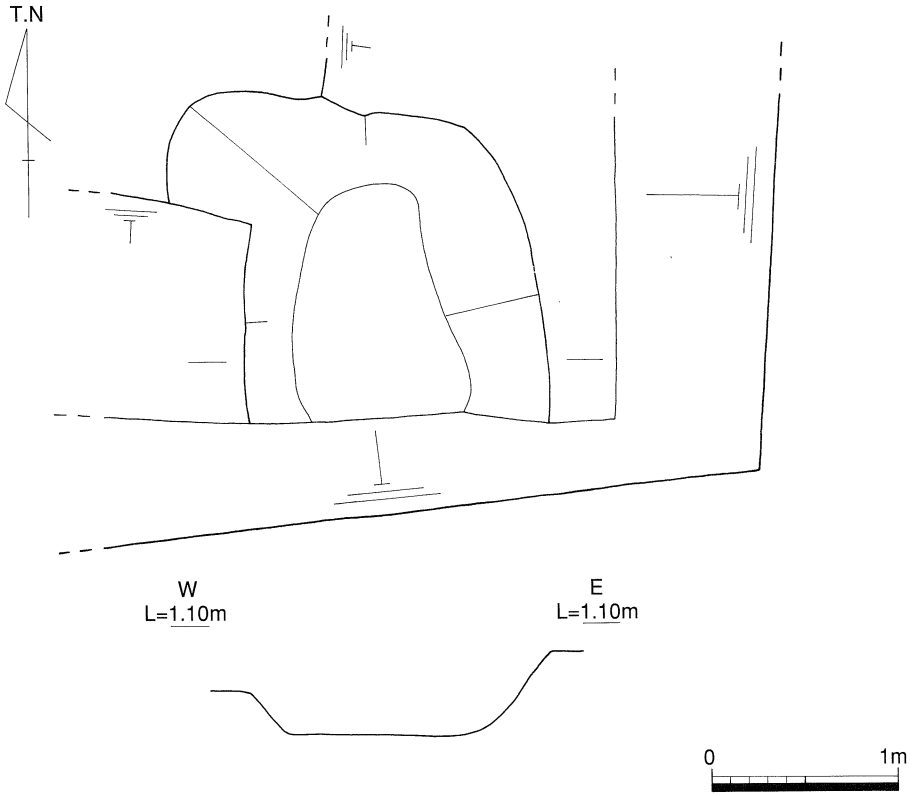
1は関西系磁器碗である。2は陶器鍋である。

SK 2071（第222図）

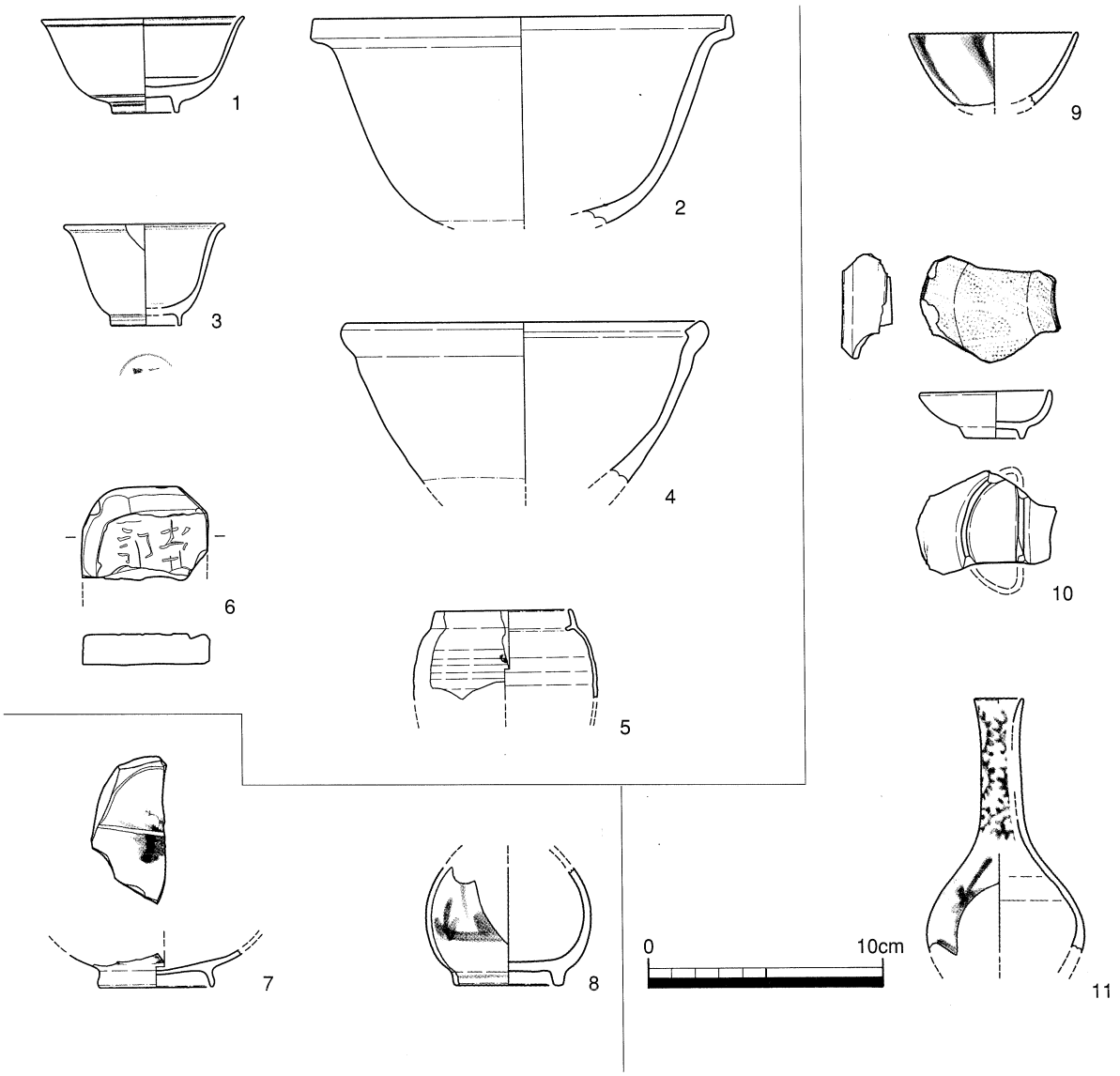
F区南部，道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は約1.20m，底面の標高は0.88m前後を測る。検出長は東西方向で約1.1m，南北方向で約0.6mを測る。平面は楕円形と推定されるが，東部が調査対象外であるため全容は不明である。断面はU字形である。所属時期は，出土遺物より19世紀代の所産に考えられる。

SK 2071出土遺物（第225図）

3は景徳鎮窯系青花小坏である。4は瀬戸・美濃系陶器鉢である。5は京・信楽系陶器の蓋物である。6は土製品で，線刻が認められる。



第224図　SK 2094平面・断面図



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SK2041	1	磁	碗	関西系	口:8.50 高:4.00 底:2.80	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:コバルト			
SK2041	2	陶	土鍋		口:17.60	細	極赤10R3/4	極暗赤褐2.5YR2/4				
SK2071	3	磁	小杯	中国	口:6.60 高:4.30 底:2.80	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色・緑			景徳鎮
SK2071	4	陶	鉢	瀬美	口:15.00	細	灰白N7/0	内外:明オリーブ灰2.5GY7/1			19c前	
SK2071	5	陶	蓋物	京・信	口:5.25	細	灰白10YR8/2	内外:灰白7.5Y7/1	呉須:暗青色			
SK2071	6	土師質			全長:5.40		にぶい橙7.5YR7/3	にぶい橙7.5YR7/3				
SK2039	7	磁	碗底部	肥前	底:5.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色		1770～	小広東碗、ガラスによる焼継痕
SK2039	8	磁	瓶底部	肥前	底:4.60	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色		大橋Ⅴ期	高台内にアルミナ砂付着
SK2094	9	磁	碗		口:7.10	微	灰白色	内外:淡・暗青色		外面:ねじ花	1770～	小広東碗
SK2094	10	磁	変形皿		高:2.10	微	灰白色	内面:透明釉	呉須:淡青色 口紅:暗赤褐5YR3/4	内面:型紙摺り	大橋Ⅲ期	糸切り細工
SK2094	11	磁	瓶		口:1.80	微	灰白色	内面:透明釉	呉須:淡・暗青色	外面:蛸唐草	大橋Ⅴ期	

第225図　SK2041・2071・2039・2094出土遺物実測図・観察表

SK 2094（第224図）

A区南東隅，道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は0.74～1.25m，底面の標高は0.57m前後を測る。検出長は東西方向で約1.6m，南北に約1.6mを測る。平面はやや不整形な隅丸方形と推定されるが，南が調査対象外となるため全容は不明である。断面は箱状である。所属時期はSD3011を壊していることから，19世紀前葉以降の所産と考えられる。

SK 2094出土遺物（第225図）

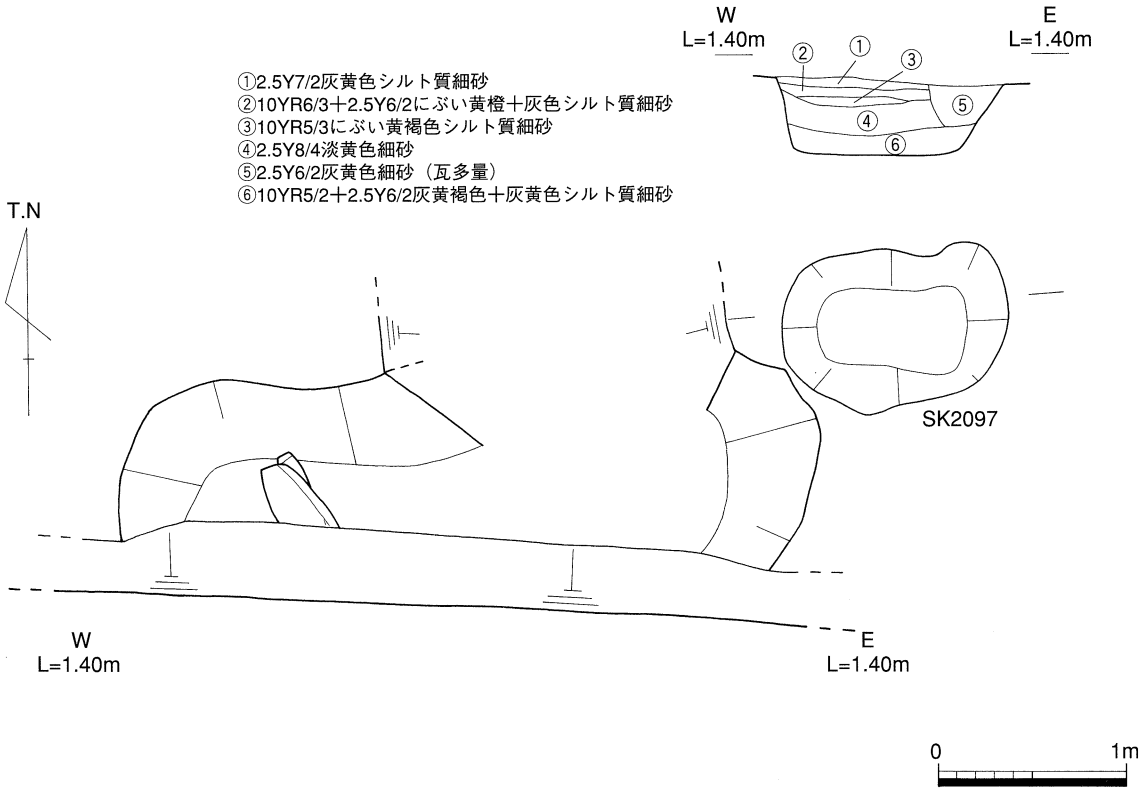
9～11は肥前系磁器。9は広東碗である。10の小皿は，糸切り細工で型紙刷りによる装飾が認められる。11は瓶類である。

SK 2097（第226図）

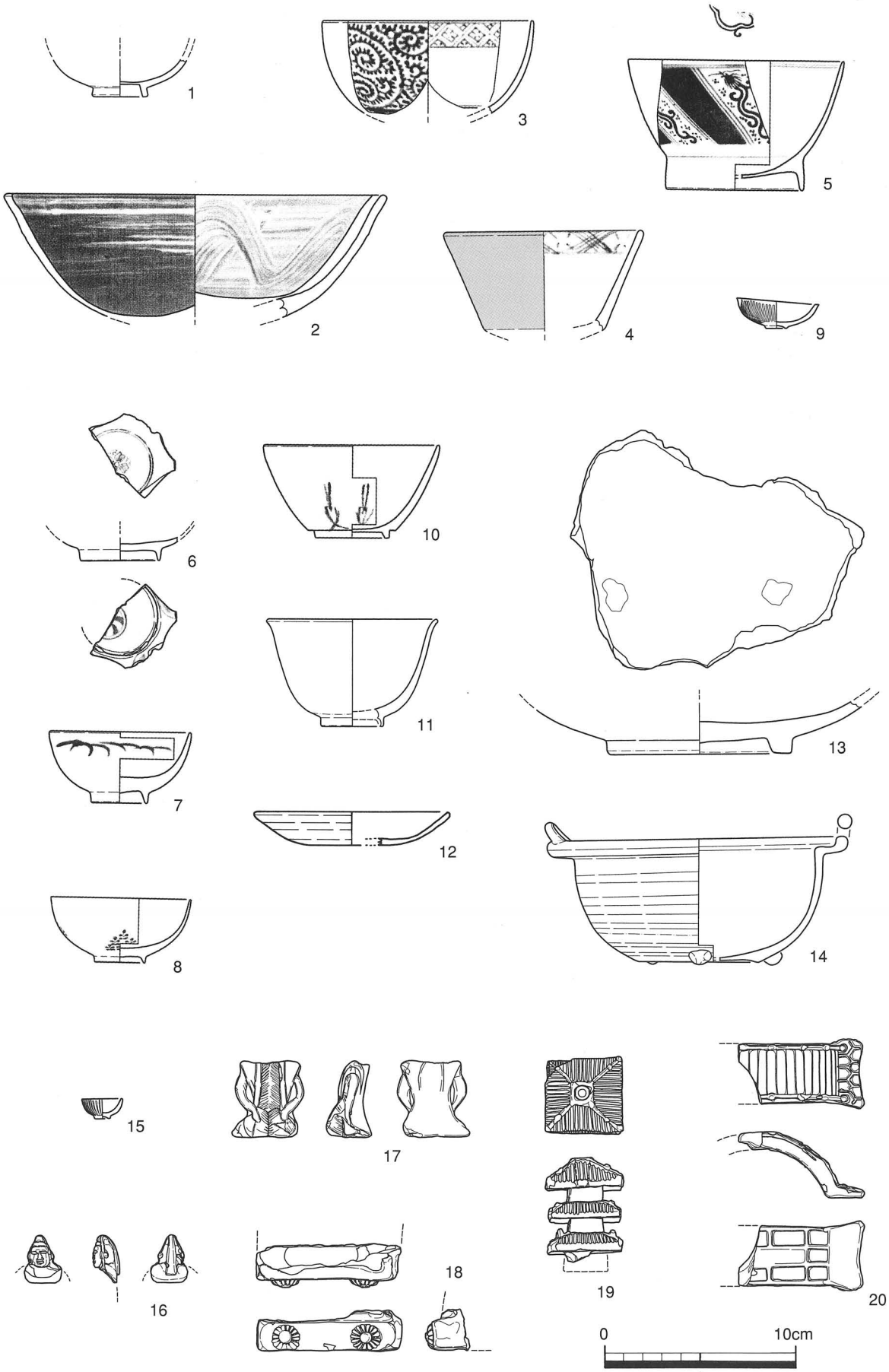
A区，道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は1.24～1.28m，底面の標高は0.88m前後を測る。検出長は1.2mで，検出幅は0.9m前後を測る。平面はやや不整形な隅丸方形で，断面は箱状である。上位の埋土は道路整地と同様な細い堆積及び瓦を詰めた堆積が認められ，下位では細砂，シルト質土が堆積する。出土遺物より概ね19世紀前葉の埋没時期が考えられる。

SK 2097出土遺物（第227図）

1・10・11は，京・信楽系陶器。丸碗（1），小杉碗（10），端反碗（11）がある。3～7・9・15は，肥前系磁器。碗（3），青磁染付（4），広東碗（5），小広東碗（6），小坏（7），紅皿（9・15）がある。12は備前灯明皿である。13は瀬戸・美濃系陶器鉢底部である。14は施釉陶器把手付鍋である。16～20は，人形及び箱庭セットである



第226図　2097平面・断面・土層図



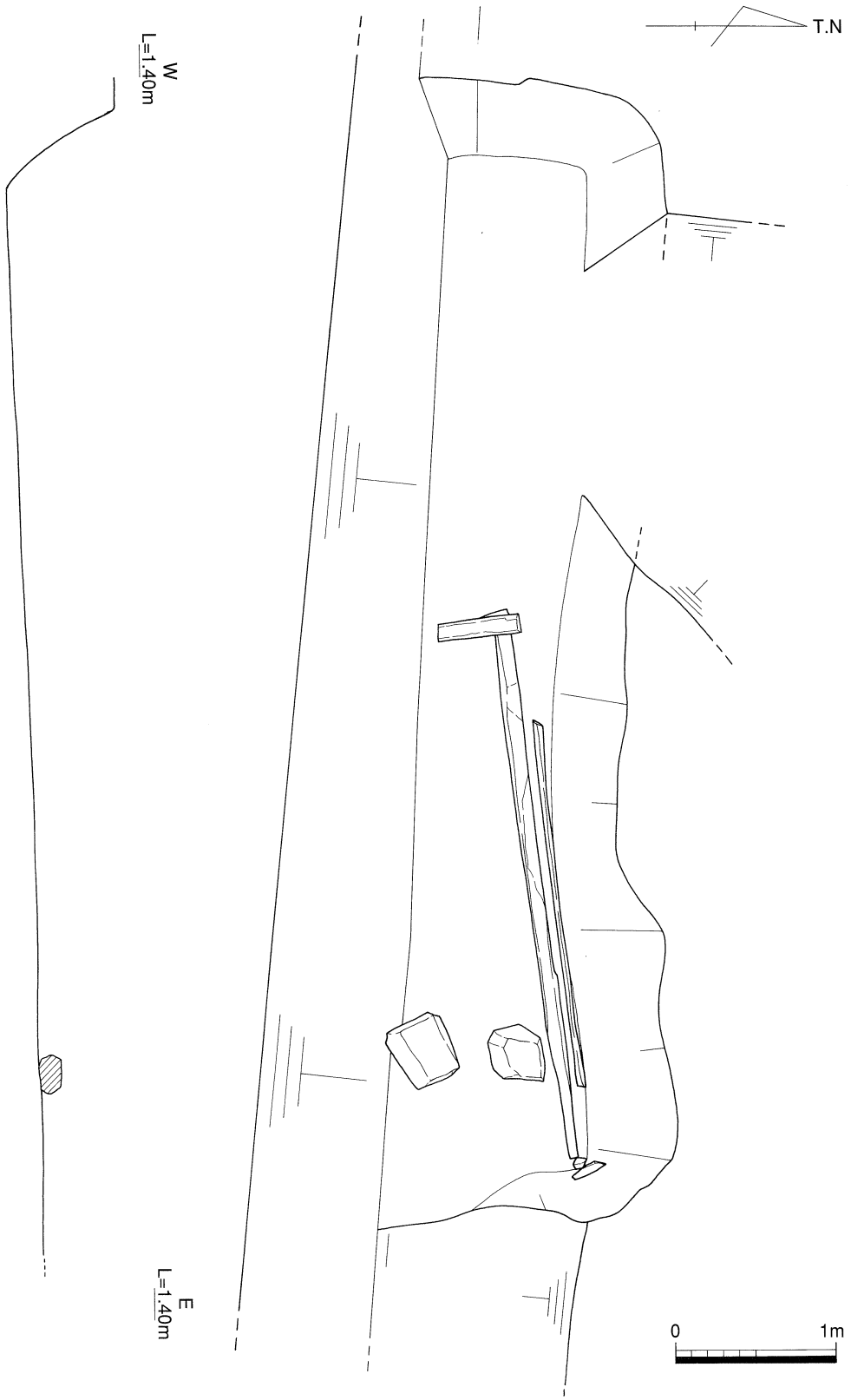
第227図　SK2097出土遺物実測図

遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SK2097	1	陶	碗底部	京・信	底:2.55	微	灰白2.5Y8/2	灰白7.5Y7/1				
SK2097	2	陶	鉢	肥前	口:19.3	細	黒褐7.5YR3/2	外面:浅黄2.5Y7/3 内面:にぶい黄2.5Y6/4		外面:直線的な刷毛目 内面:直線的な刷毛目後、波状刷毛目	大橋Ⅴ期	刷毛目
SK2097	3	磁	碗	肥前	口:10.85	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色	外面:蛸唐草 内面:四方襷	大橋Ⅳ期	
SK2097	4	磁	碗	肥前	口:10.1	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色	外面:青磁 内面:四方襷	大橋Ⅳ期	青磁
SK2097	5	磁	碗	肥前	口:11.2 高:6.7 底:7.0	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色		1780年代～	広東碗
SK2097	6	磁	碗底部	肥前	底:4.0	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色		1770年代～	小広東碗
SK2097	7	磁	碗	肥前	口:7.25 高:3.7 底:2.8	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅳ期	
SK2097	8	磁	碗	肥前	口:7.25 高:3.3 底:2.55	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:青黒10BG1.7/1			
SK2097	9	磁	紅皿	肥前	口:4.2 高:1.6 底:1.0	微	灰白色	内外:灰白N8/1		外面:錆		型押整形
SK2097	10	陶	碗	京・信	口:9.0 高:4.8 底:3.75	細	灰白7.5Y8/1	内外:灰白5Y7/2	鉄絵:黒褐2.5Y3/2	外面:小杉文(若竹文)		小杉茶碗
SK2097	11	陶	碗	京・信	口:8.7 高:5.6 底:3.2	細	灰白2.5Y8/2	内外:灰白7.5Y7/2				端反碗
SK2097	12	陶	灯明皿	備前	口:10.0 高:1.7 底:4.6	細		外面:赤10R5/6 内面:赤褐10R5/4		内外:ロクロナデ 外底・外面下半:ケズリ		口縁部内外面に煤付着、内面釉
SK2097	13	陶	底部	瀬・美	底:9.3	細	灰白2.5Y8/2	灰白5Y7/2		内面に胎土目の2ヶ所		
SK2097	14	陶	土鍋		口:15.1 高:7.9 底:6.15	細	灰オリーブ5Y6/2	内外:暗褐色7.5YR3/4				産地不明
SK2097	15	磁	紅皿	肥前	口:2.0 高:1.05 底:0.7	微	灰白色	内外:灰白N8/1				型押整形
SK2097	16	土師質	土製人形			やや密	にぶい橙7.5YR7/4					
SK2097	17	土師質	土製人形			やや密	にぶい橙7.5YR7/4					器表面にキラコ塗布、前後型合わせ
SK2097	18	土師質	箱庭セット			やや密	にぶい橙7.5YR7/4					器表面にキラコ塗布、前後型合わせ
SK2097	19	土師質	箱庭セット			やや密	にぶい黄橙10YR7/3					器表面にキラコの塗布を認める
SK2097	20	土師質	箱庭セット			やや密	にぶい黄橙10YR7/3					器表面にキラコの塗布を認める

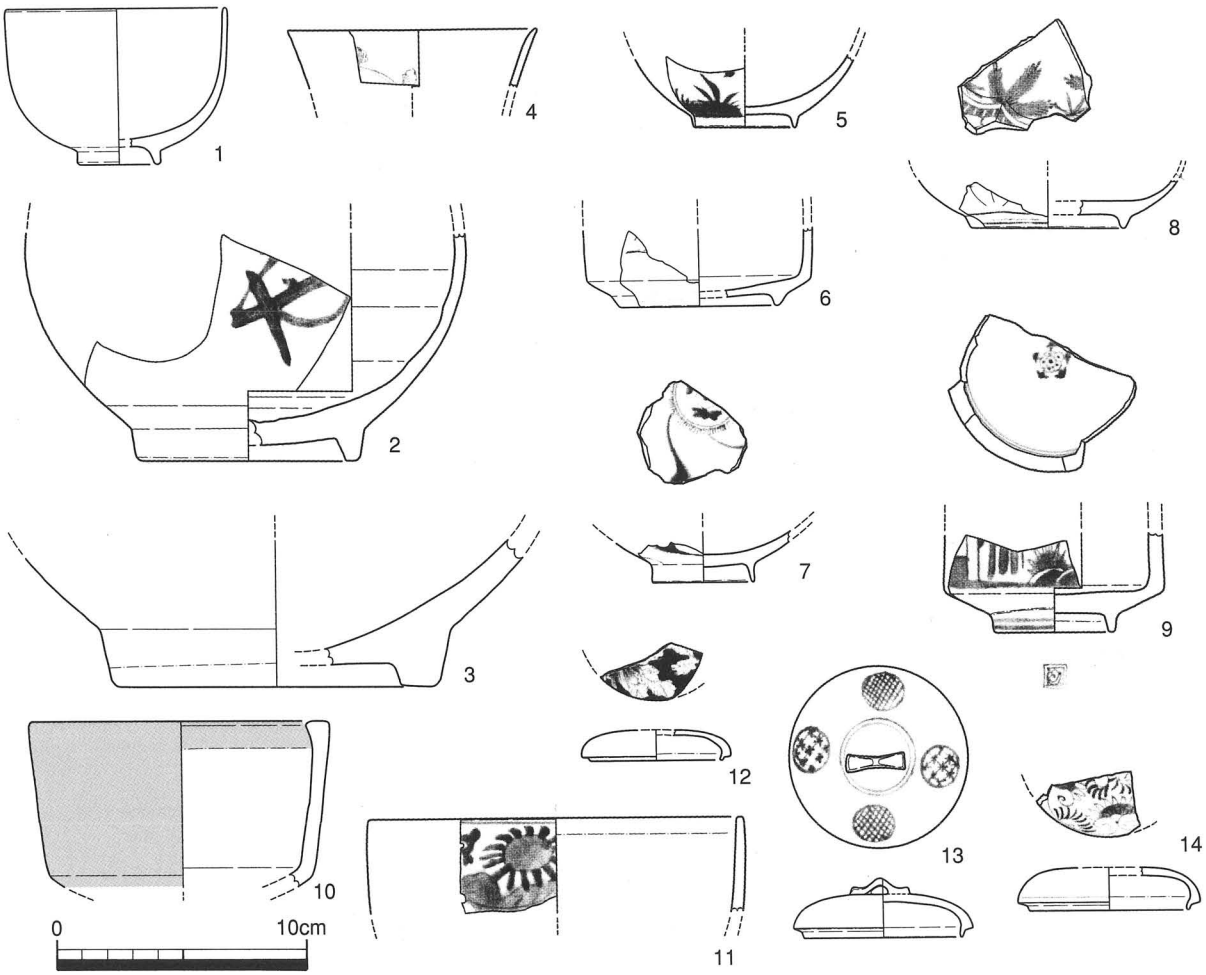
第228図　SK2097出土遺物観察表

SK2095（第229図）

A区，道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は0.75～1.30m前後，底面の標高は0.50～0.58m前後を測る。検出長は約7m，検出幅は1.8m前後を測る。平面は長方形であるが，南側は調査区外で，また近現代の撹乱により遺構の南及び東部の大半は消失している。断面は箱状と推定される。埋土は，瓦等，遺物を多量に包含した砂質土が大半を占めていた。底面に，10cm程の角材をL字ないしコ字に組まれた木材が認められたが，性格については不明である。他の遺構との関連では，第1面で確認された建物（門）の対面となる道路中央部に位置し，東西にほぼ同一の規模を有している。また屋敷内へと上水を引き込む箱枡を壊し，開削されていることからも当屋敷の出入口と何らかの関連が推察される。所属時期は，出土遺物から19世紀前葉の埋没時期が考えられる。

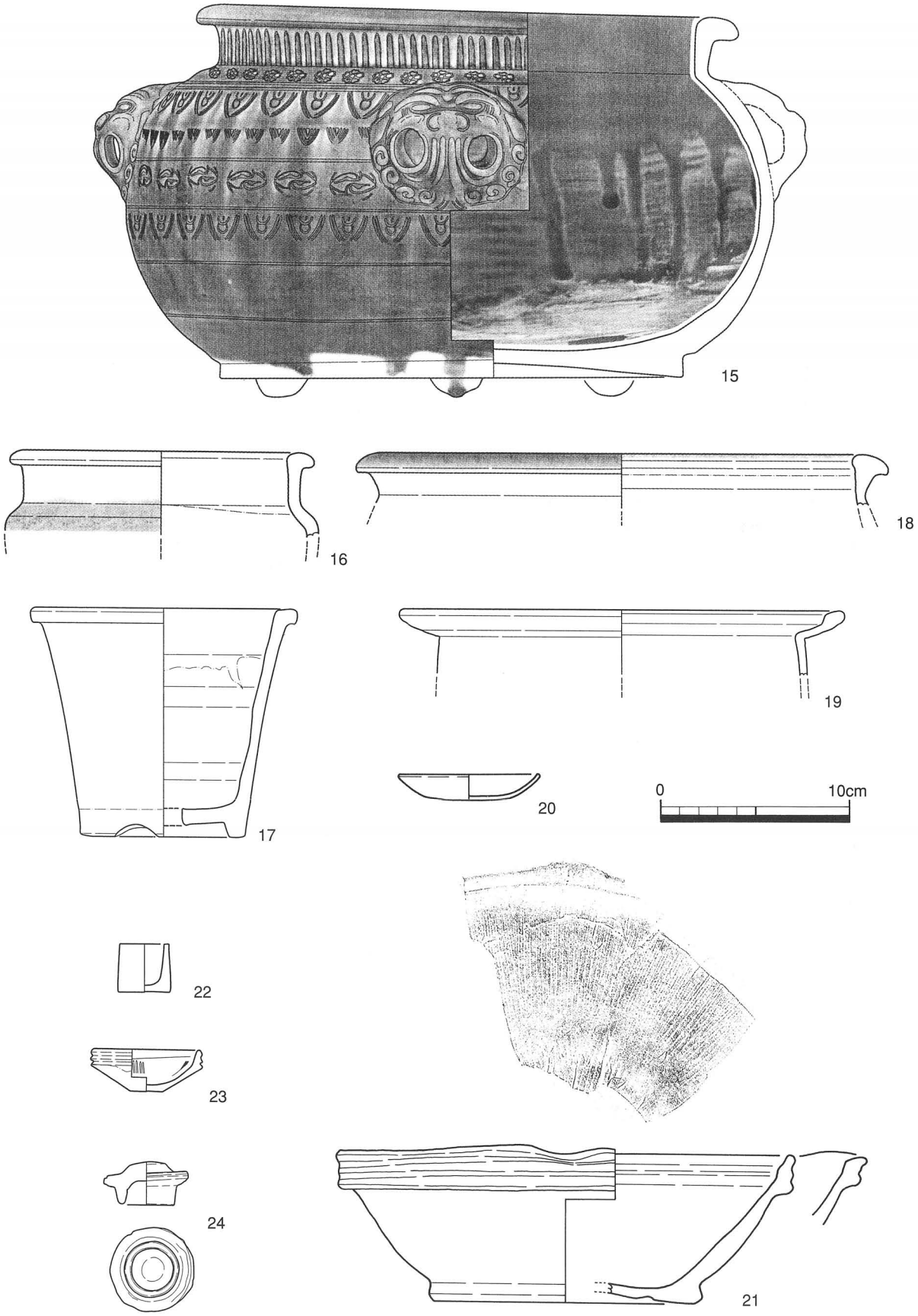


第229図　SK2095平面・断面図



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SK2095	1	陶	碗		口:8.6 高:6.15 底:3.05	細	灰白5Y8/1	内外:灰白7.5Y8/1				
SK2095	2	陶	瓶底部		底:8.6	細	灰白2.5Y7/1	浅黄2.5Y7/2	呉須:暗青色			2次焼成の痕跡
SK2095	3	陶	鉢底部	肥前	底:12.30	細	赤10R5/6	外面:極暗赤褐10R2/2			大橋Ⅳ期	刷毛目唐津
SK2095	4	磁	碗	肥前	口:10.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色			陶胎染付
SK2095	5	磁	碗底部		底:3.95	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色			
SK2095	6	磁	碗底部		底:6.2	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色 上絵:黒褐5YR3/1		大橋Ⅴ期	筒形碗
SK2095	7	磁	碗底部		底:3.95	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色	外面:ねじ花 内面:ねじ花、昆虫	1770～	小広東碗、高台部に2次焼成の痕跡
SK2095	8	磁	皿底部		底:5.95	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅴ期	型打成形
SK2095	9	磁	碗	肥前	底:4.50	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色	内面:五弁花	大橋Ⅴ期	高台内に銘款有り 内外に被熱痕
SK2095	10	磁	火入	肥前	口:6.00	微	灰白色	内外:明オリーブ灰5GY7/1				
SK2095	11	磁	鉢口縁部		口:14.75	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色			
SK2095	12	磁	蓋	肥前	最大径:6.00 底:5.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅴ期	墨弾き
SK2095	13	磁	盃		最大径:7.2 高:2.35 底:6.3	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅴ期	2次焼成の痕跡
SK2095	14	磁	盃		最大径:7.25 底:6.3	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅴ期	

第230図　SK2095出土遺物実測図・観察表（その1）



第231図　SK2095出土遺物実測図（その２）

遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
SK2095	15	陶	瓶掛	瀬・美								
SK2095	16	陶	甕口縁部		口:14.5	細	灰白5Y7/1	外面:明緑灰10G7/1 内面:外口縁部:灰白5Y8/1				富田焼・内面に2次焼成の痕跡
SK2095	17	陶	植木鉢	瀬・美	口:14.6 高:11.9 底:7.8	細	灰白2.5Y8/2	内外:灰白5Y7/1				
SK2095	18	陶	甕口縁部	京・信	口:25.3	細	灰白5Y7/2	口縁上部:明緑灰5G7/1 外面:白,内面:灰白5Y8/2				富田焼
SK2095	19	軟質釉陶器	鍋		口:22.85	細	褐灰7.5YR6/1	内外:暗赤褐5YR3/2				
SK2095	20	陶	灯明皿	備前	口:7.3 高:1.3 底:2.5	細		外面:橙2.5YR6/6 内面:にぶい赤褐2.5YR5/4		内外:ロクロナデ 外底・外面下半:ケズリ		口縁部内外面に煤付着
SK2095	21	陶	擂鉢	備前	口:23.6 高:7.8 底:13.7	細		外面:暗赤10R3/6 内面:赤橙10R6/6		内外:ロクロナデ		外面:施釉
SK2095	22	陶	墨入		口:2.5 高:2.5 底:2.6	細	灰白2.5Y8/2	浅黄2.5Y7/3				内面に墨付着
SK2095	23	陶	ミニチア製品		口:5.6 高:2.2 底:1.6	細	灰白10YR8/2	内外:明黄褐2.5Y6/8		外面:ケズリ 内面:擂目		
SK2095	24	土師質	土製品		高:2.25 底:2.75	細・金雲母	橙5YR7/6	外面:型作り 内面:指押さえ				

第232図　SK2095出土遺物観察表

SK2095出土遺物（第230～232図）

瓦，陶磁器がコンテナに3箱程度出土した。1は京・信楽系陶器丸碗である。2・4は，陶胎染付である。3は肥前系陶器鉢である。5～14は，肥前系磁器。半球碗（5），筒形碗（6・9），小広東碗（7），型打成形の皿（8），青磁火入（10），蓋及び蓋物（11～14）がある。15・17は，瀬戸・美濃系陶器。瓶掛（15），植木鉢（17）がある。18・22は，京・信楽系陶器である。緻密な胎土に白化粧，口縁部は淡緑色を下地とし，透明色の釉を掛ける。富田焼の可能性がある。22は墨入れ。20・21は備前。灯明皿（20），小形の擂鉢（21）である。23は軟質施釉陶器のミニチュア擂鉢。24はミニチュア釜の土製品である。

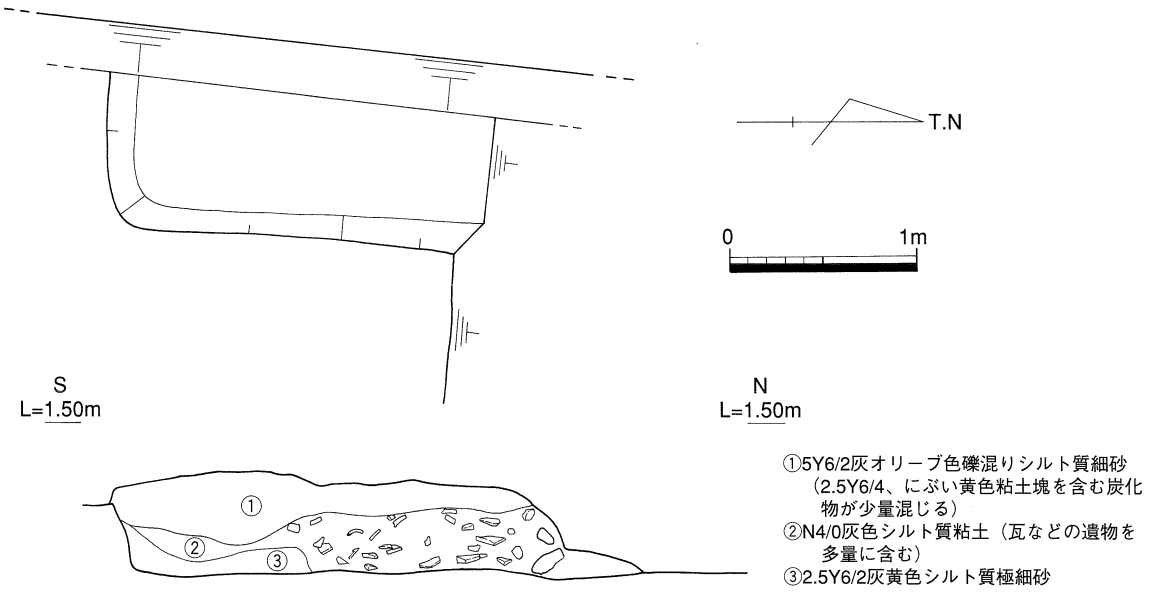
SK 2076（第233図）

Ｆ区，道路整地の上面で確認した遺構である。検出した標高は1.06m前後，底面の標高は0.70m前後を測る。検出長は2.1m，検出幅は0.8m前後を測る。平面は長方形と推定されるが，西側が調査区外となり，また北側は現代撹乱により消失している。断面は，ほぼ遺構面より直角に掘られ，底面は水平状にみられる。埋土は３分割され，中層に瓦をはじめ遺物の集中部があり，その上面は埋め戻し土と考えられる。19世紀前葉頃の廃棄土坑と推察されるが，下位からの混入が想定しにくい箇所で検出されたにもかかわらず，出土遺物に一部17世紀末～18世紀前葉の所産のものが認められ長い期間存続した可能性もある。

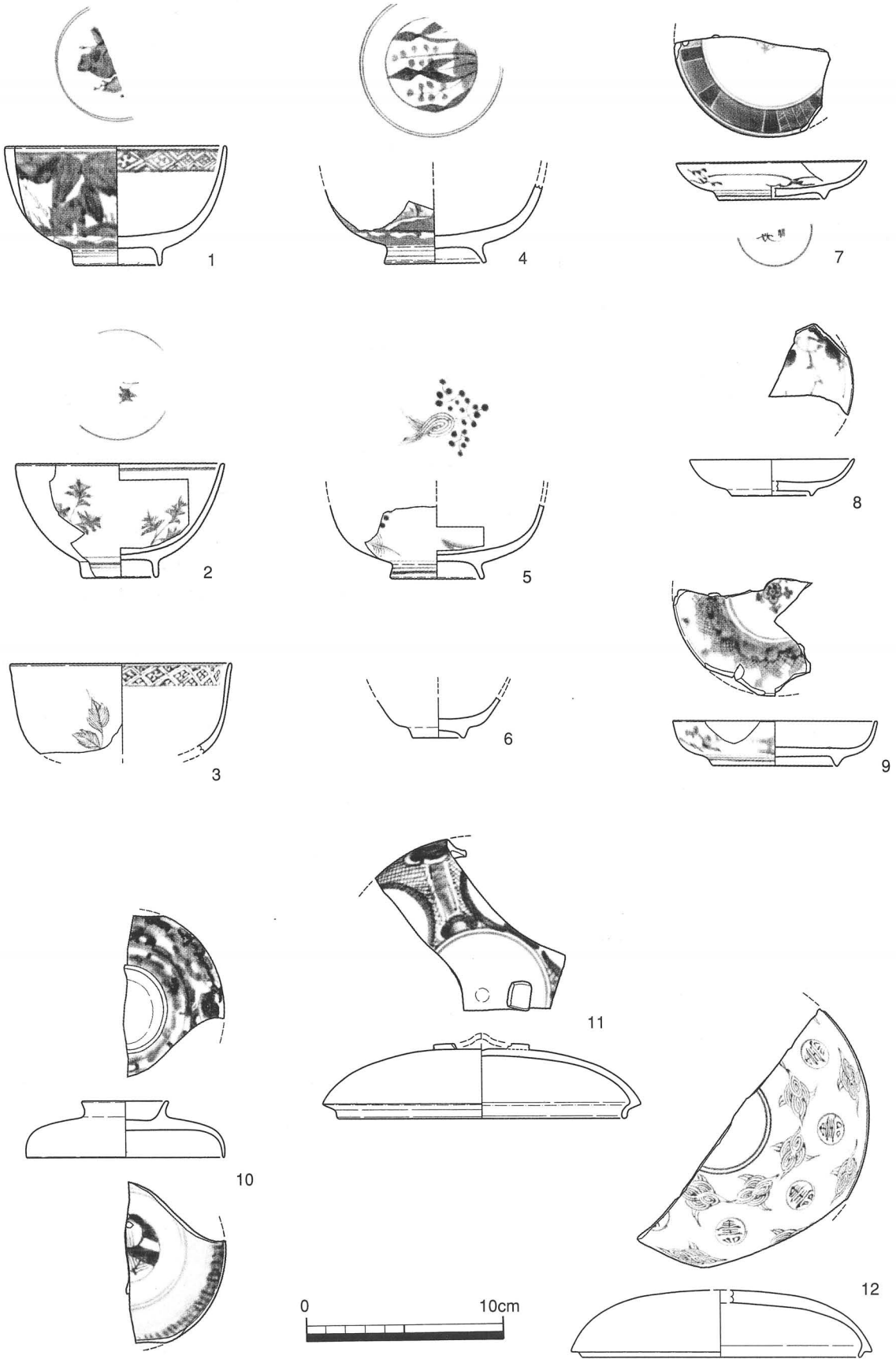
SK 2076出土遺物（第234～237図）

規模に比べ多量の瓦，陶磁器（コンテナ３箱）が出土した。

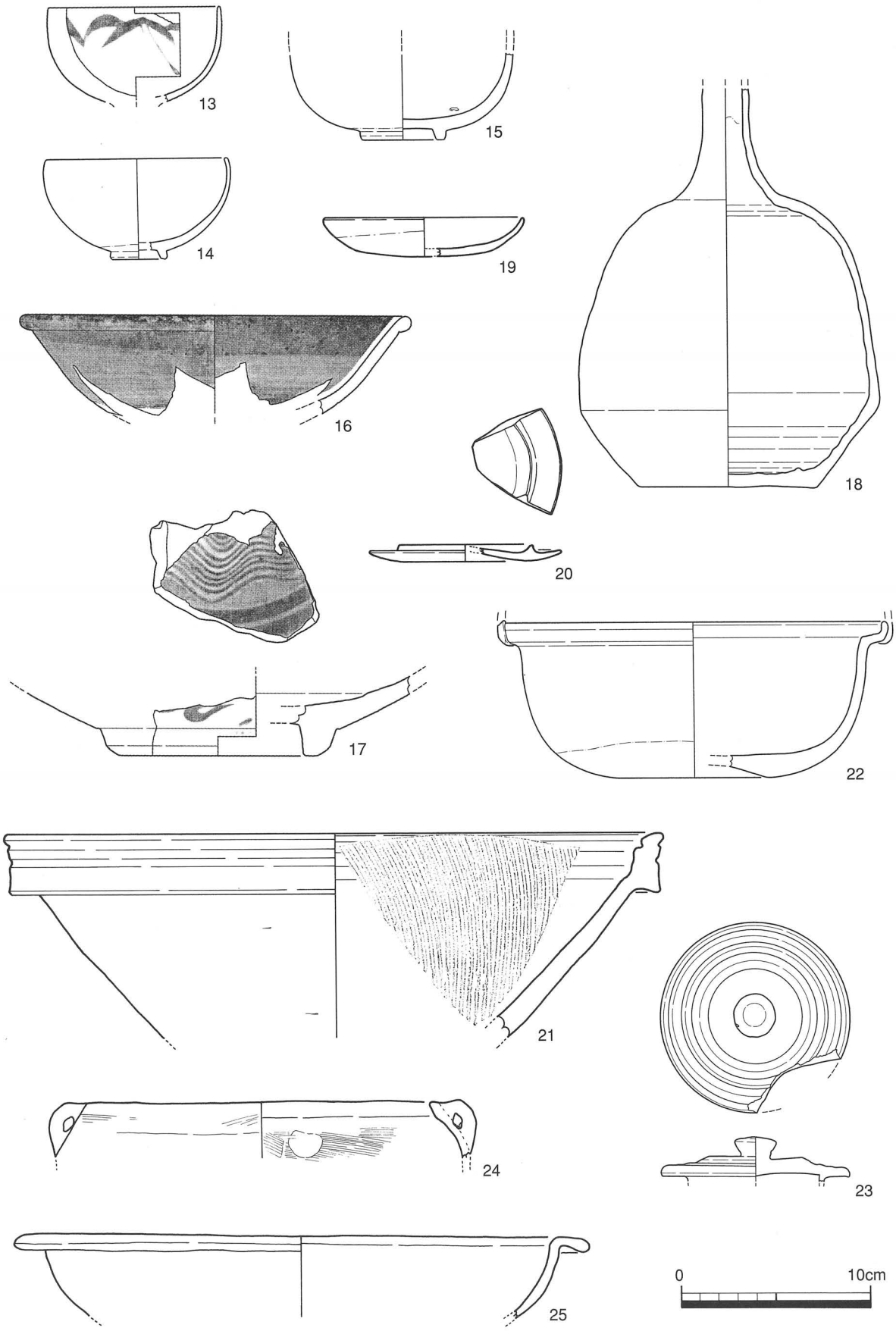
７は肥前系磁器皿である。器高の低いＵ字高台のもので，見込みには五弁花，内面の文様に墨弾きによる白抜き技法が認められる。（17世紀末～18世紀前葉）。８は，備前献上手徳利（17世紀後半～18世紀前葉）。他は肥前系磁器小広東碗（２），撥高台の碗（４・５），蓋物（11・12），京・信楽系陶器丸碗（13・14）等が認められ，ＳＸ2008と併行した所産と考えられる。



第233図　SK 2076平面・土層図



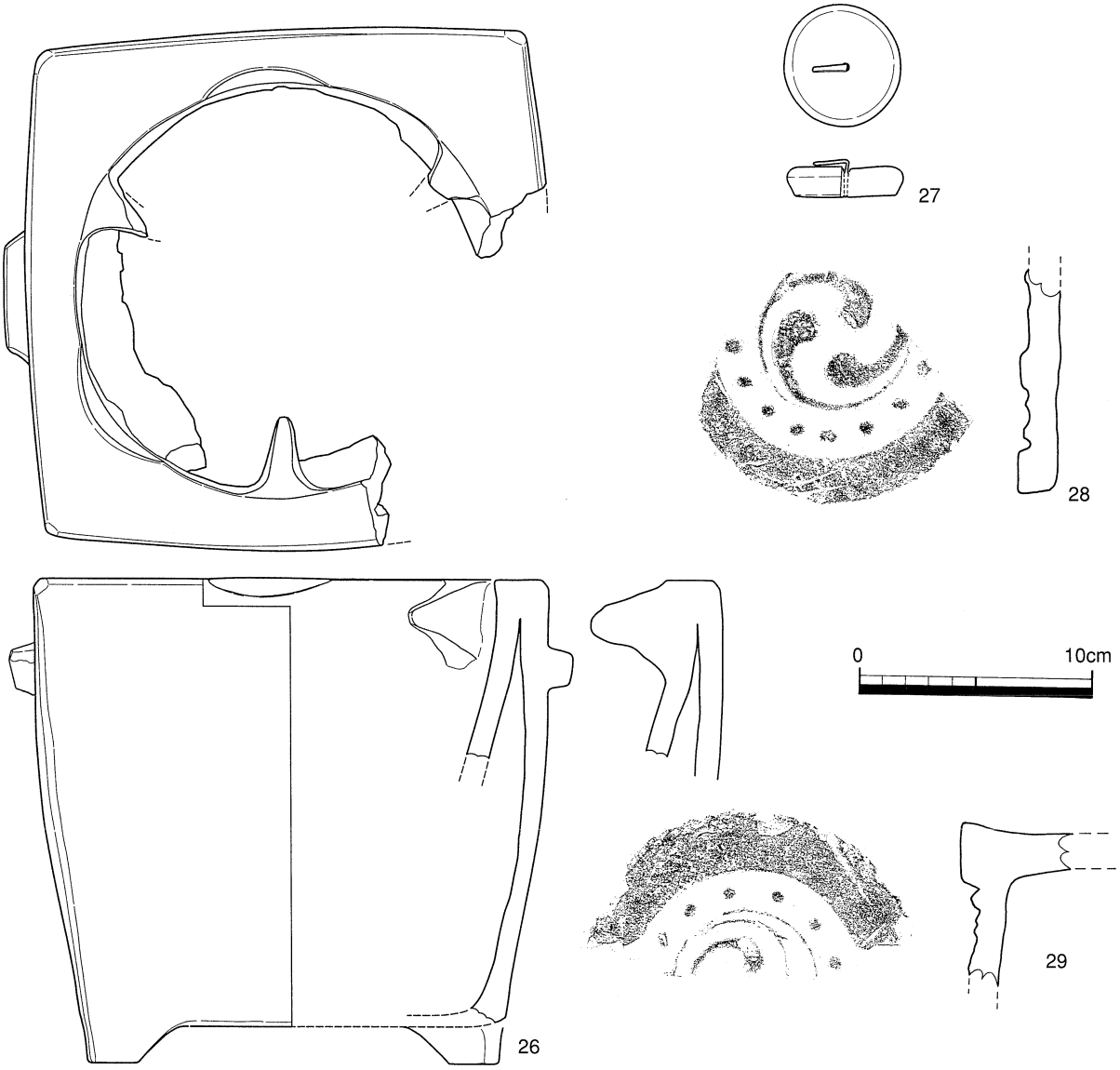
第234図　SK2076出土遺物実測図（その1）



第235図　SK2076出土遺物実測図（その２）

遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SK2076	1	磁	染付碗	肥前	口:11.0 高:5.95 底:4.25	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色	四方襷	18c後半	
SK2076	2	磁	染付碗	肥前	口:10.4 高:5.75 底:3.65	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色		大橋Ⅳ期	
SK2076	3	磁	染付碗	肥前	口:11.1	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色	外面:草木 内面:四方襷	様相7	腰張
SK2076	4	磁	染付碗	肥前	底:5.0	細	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色			陶胎染付 バチ高台
SK2076	5	磁	染付碗	肥前	底:4.5	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色		大橋Ⅳ期	ハノ字高台 腰張・バチ高台
SK2076	6	磁	小杯底部	肥前	底:2.55	微	灰白色	内外:透明釉				高台内に砂粒付着
SK2076	7	磁	染付小皿	肥前	口:9.5 高:1.9 底:5.3	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色	外面:唐草文 内面:五弁花	大橋Ⅳ期	墨弾き
SK2076	8	磁	染付小皿	肥前	口:8.25 高:1.85 底:4.0	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅳ期	
SK2076	9	磁	染付小皿	肥前	口:10.2 高:2.2 底:6.25	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色	外面:唐草 内面:五弁花	大橋Ⅳ期	
SK2076	10	磁	染付蓋	肥前	つまみ部:4.25 高:2.85 底:9.95	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色		大橋Ⅳ期	腰張・バチ高台
SK2076	11	磁	染付蓋	肥前	最大径 :16.1 底:14.5	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅴ期	
SK2076	12	磁	染付蓋	肥前	最大径 :15.2 底:14.1	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅴ期	
SK2076	13	陶	碗	京・信	口:9.0	細	灰白2.5Y8/1	内外:淡黄5Y8/3	上絵:緑	外面:笹		
SK2076	14	陶	碗	京・信	口:9.45 高:5.25 底:2.8	細	灰白N7/0	内外:明オリーブ灰2.5GY7/1				
SK2076	15	陶	碗	京・信	底:4.1	細	灰白N7/0	内外:灰7.5Y6/1				内面見込にピン痕
SK2076	16	陶	鉢	肥前	口:20.0	細	赤橙10R6/8	内外上半:暗赤褐2.5YR3/3 内外下半:にぶい黄橙 10YR7/2		内外:直線的な刷毛目	大橋Ⅳ期	刷毛目
SK2076	17	陶	鉢	肥前	最大径 :10.3	細	赤橙10R6/6	内面:灰赤7.5R4/2 灰白5YR8/1			大橋Ⅳ期	三島
SK2076	18	陶	壺	備前	高:20.70 底:9.30	細	灰白N7/0	外面:極暗赤褐10R2/3				
SK2076	19	陶	灯明皿	備前	口:10.4 高:2.0	細		外面:にぶい赤褐2.5YR5/4 内面:暗赤褐2.5YR3/3		内外:ロクロナデ 外面下半・外底:ケズリ		
SK2076	20	陶	灯明皿	備前	口:10.1 高:0.8	細	明暗褐10R3/3	明暗褐10R3/3				
SK2076	21	陶	擂鉢	堺・ 明石	口:34.0	微砂粒	極暗赤褐10R2/2	極暗赤褐10R2/2		内外:ロクロナデ 外面:ケズリ		
SK2076	22	陶	鉢		口:20.0 底:7.8	細	灰5Y5/1	内外:極暗赤褐5YR2/4				
SK2076	23	陶	蓋		最大径:9.9	細	黄灰2.5Y6/1	内外:暗赤褐5YR3/3				
SK2076	24	瓦質	取手付鍋		口:17.8	細	黒褐10YR3/1	黒褐10YR3/1		外面:ナデ 内面:指押さえ,ハケメ		
SK2076	25	瓦質	焙烙		口:30.2	石英・ 長石	にぶい褐7.5YR5/4	黒N2/0		外面:ナデ	様相7	

第236図　SK2076出土遺物観察表



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SK2076	26	土師質	七輪			微砂粒	橙7.5YR6/6	内外:橙7.5YR6/6				
SK2076	27	土師質	土製品			細	淡橙5YR8/4					

遺構名	報文番号	遺物種別	法量(cm)			胎土	色調		調整		焼成	備考
			長さ(現存長)	厚さ	幅(現存幅)		断面	器面	内面	外面		
SK2076	28	軒丸瓦	—	—	—	砂粒	灰N6/0	灰黄2.5Y7/2			良	巴
SK2076	29	軒丸瓦	4.8	1.5	—	砂粒	灰N6/0	灰N6/0			良	巴

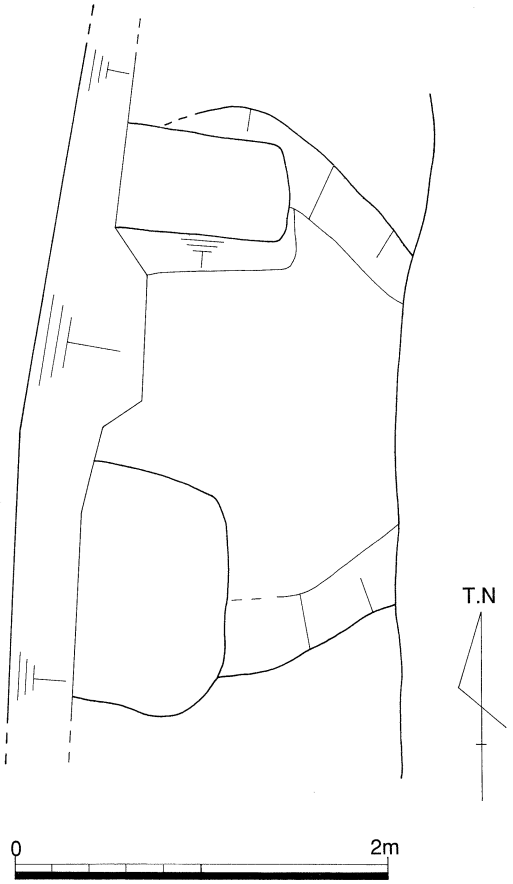
第237図　SK2076出土遺物実測図・観察表（その3）

SK 2074（第15，238図）

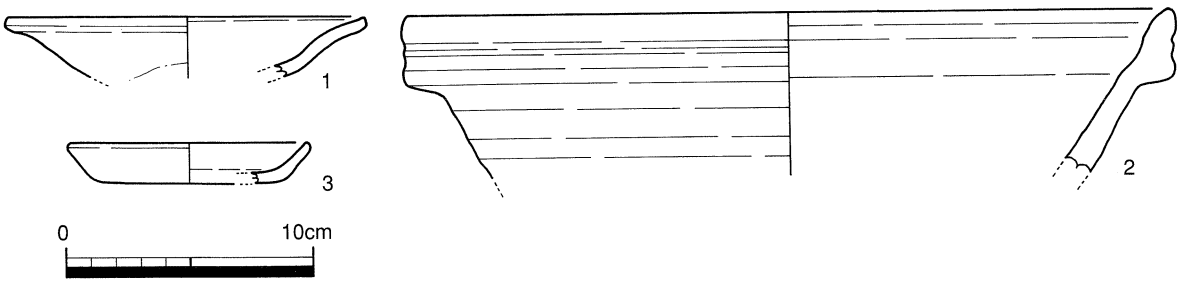
Ｆ区の北端部で確認した遺構である。検出した標高は1.02～1.08ｍ前後，底面の標高は0.70ｍ前後を測る。検出長は約３ｍ，検出幅は約1.6ｍを測る。平面は隅丸方形と推定されるが，東西面が撹乱により壊され明確ではない。断面形状は緩やかな側壁で底面はほぼ平坦面である。上位の埋土は道路の整地と酷似し，下位に黒褐色土，砂礫が認められた。出土遺物に若干の陶磁器のほか，貝殻等の残滓が見られた。

SK 2074出土遺物（第239図）

１は肥前系陶器皿である。２は備前陶器擂鉢である。３は土師質土器皿。内外面に被熱痕が認められる。



第238図　SK 2074平面図



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調１(胎土)	色調２(釉薬、内外色調)	色調３(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SK2074	1	陶	皿	肥前	口:14.2	細	灰N6/0	灰白N5/0～白			大橋Ⅱ期	
SK2074	2	陶	擂鉢	備前	口:30.3	砂粒	橙5YR7/8	橙5YR7/8		内外:ロクロナデ	近世Ⅱ期	
SK2074	3	土師質	皿		口:9.5 高:1.6 底:7.6	精良	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2		内外:ロクロナデ 外底・回転糸切り		内外に被熱痕

第239図　SK 2074出土遺物実測図・観察表

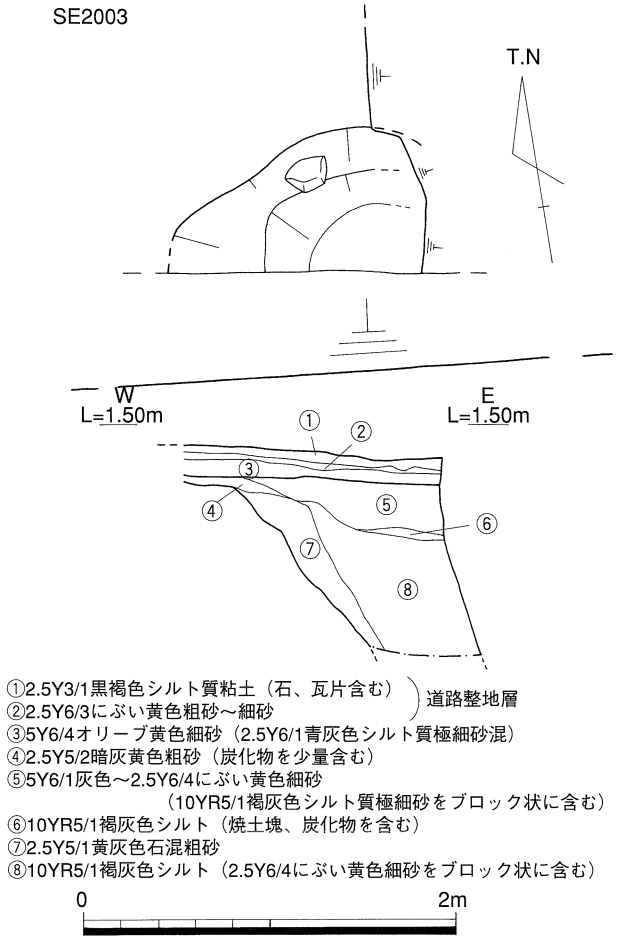
以下，SE2003～SD2011はＦ区南部で検出された遺構である。確認状況及び絵図との対応関係から，SD2010以南は南北方向の道路に面した屋敷地と推定され，その屋敷内の遺構と考えられる。

SE2003（第240図）

Ｆ区南端部で検出された井戸状の遺構である。検出した標高は1.2m前後である。底面は0.3m付近まで確認しているが，南面が調査範囲外となり底面までは確認できなかった。検出長は東西方向で約1.4m，南北方向で約0.75mを測るが，平面の形状は明確ではない。器壁は直線的に傾斜し，僅かに上端部でテラス状となるのが認められる。埋土は，小石，礫を固めた７層と，その内側は埋め戻し土と考えられる堆積物で充填される。７層の上端部では，人頭大の石材が１箇所のみ認められる。埋土の直上は道路状の整地が認められ，当遺構の直上には一部瓦が敷かれていた。また６層では少量ながら焼土粒が観察できる。

SE2003出土遺物（第241図）

出土遺物は，数点のみであった。７は肥前系陶器大皿である。胎土目が認められる。８・９は，備前陶器の頸部及び底部である。



第240図　SE2003平面・土層図

SD2010（第132図）

Ｆ区南部で確認した東西方向の溝跡である。

検出距離は短いが護岸状の石列を認められ，溝跡と考えられる。検出長は約1.6m，検出幅は約1.6mを測る。主軸はN－85°－Wを示す。検出した標高は1.15～1.26m，底面の標高は0.94mを測る。断面はU字形である。南壁に沿い人頭大の石材を並べ護岸としている。北壁には礫混じりの土で固め，溝内側の埋土は，上層部に石材や若干の瓦片を含んだ土で充填する。下層部では，シルト質の土が堆積している。

当遺構面ではこの溝を境に北部と南部では整地の状況が明確に異なり，これより北には道路として整地したと考えられる築地状の細い堆積層が水平に認められ，南部ではこの水平状の堆積層が認められない。また，南部においても当遺構面より上位には，築地状の細い堆積層が認められる。以上からは，ある時期まで当溝は屋敷と道路の境界として機能し，廃絶後に南へ伸びる道路に取り込まれたと考えられる。

17世紀中葉頃に描かれたとされる『高松城下図屏風』には，当調査区（Ｆ区）に比定される部分は南北方向の道が描かれており，それによれば中堀に面した大きな屋敷に沿い南へ下がると東西方向の道に突当たるが，その南には屋敷があるため西側へ一旦折れて南に抜ける鍵形の道として描かれている。これ以降（享保年間以降）に描かれた絵図は，全て南北方向の直線道路として描かれており現在まで踏襲されていることから，この時期以降に地割が改変されたものと考えられる。

所属時期は，遺物が少量なため明確とはならないが，上述した資料を考慮すると17世紀中葉～18世紀前葉に考えられる。

SD2010出土遺物（第241図）

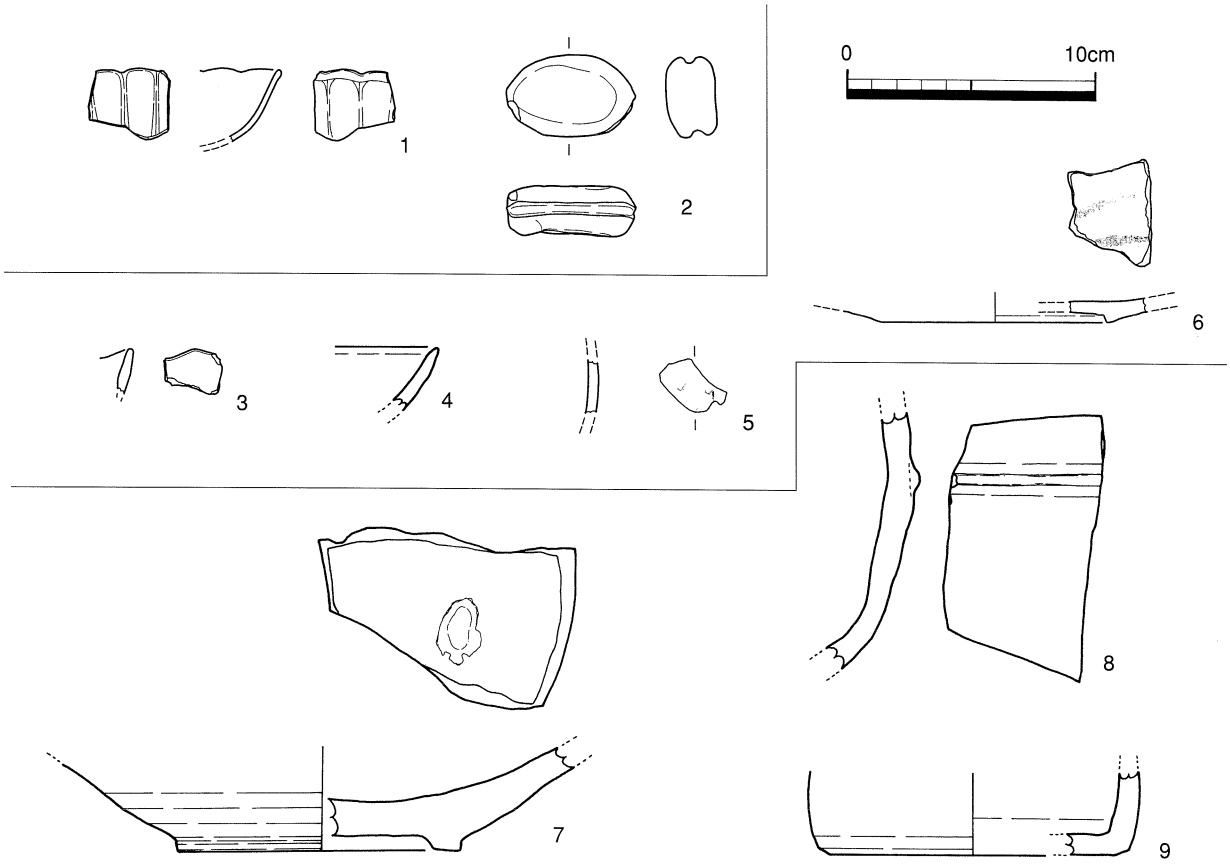
遺物はほぼ皆無であり，数点の小片のみであった。１は肥前系磁器皿の口縁部。薄手のもので，白磁の菊花形皿に考えられる。被熱痕が認められる。２は，有溝の土錘である。

SD2011（第132図）

Ｆ区南部で確認した東西方向の溝状の遺構である。検出段階でSD2010に平行するため溝と判断したが，検出距離が短く明確ではない。検出長は約1.7ｍ，検出幅は約2.2ｍを測る。検出標高は1.17ｍ前後，底面の標高は0.71ｍを測る。断面は船底形である。SE3007が下位に存在する。所属時期は遺物が少量で明確ではないが，SD2010と同様の17世紀中葉～18世紀前葉が考えられる。

SD2011出土遺物（第241図）

遺物は少量で，陶磁器小片のみであった。３は漳州窯系白磁の口縁部である。４・５は，肥前系磁器である。５の外面に一重の網目文が認められる。６は志野向付底部。内面に鉄絵が描かれる。



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SD2010	1	磁	皿口縁	肥前	口:7.50	微	灰白色	内外:灰白N8/0				外面に被熱痕
SD2010	2	土師質	土錘		長径:5.2 短径:3.2 最大径:1.9	微砂粒	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6				

遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SD2011	3	陶	口縁部	中国		微	灰白2.5Y8/2	内外:灰白2.5Y8/2				漳州窯 白磁
SD2011	4	陶	口縁部	肥前		細	浅黄橙10YR8/3	明黄褐2.5Y7/6			17c初	
SD2011	5	磁	体部片	肥前		微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色	外面:一重網目	1640～ 17c末	
SD2011	6	陶	向付底部	瀬美	底:9.00	細	浅黄2.5Y7/3	内外:灰白2.5Y7/1	鉄絵:褐灰10YR4/1		大窯Ⅳ期	志野向付

遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SE2003	7	陶	大皿	肥前	底:11.2	細	浅黄橙7.5YR8/4	にぶい橙7.5YR7/3		外面・外底:ケズリ	大橋Ⅰ-2期	胎土目
SE2003	8	陶	鉢胴部	備前		微砂粒		外面:極暗赤褐10R2/3 内面:暗赤10R3/6～灰N4/0		内外:ロクロナデ		
SE2003	9	陶	鉢胴部	備前	底:11.6	微砂粒	赤褐10R4/4	赤褐10R4/4		内外:ロクロナデ 外底・ナデ		

第241図　SD2010・2011・SE2003出土遺物実測図・観察表

第２面Ａ－Ｃ区屋敷境遺構（第242・243図）

第２面，屋敷地の南面に相当する地点で確認した遺構群で，東西方向の区画溝（SD1003，2003）及びこれに伴う建物（SA2001）と考えられる屋敷境の施設が中心である。第２面は部分的に観察されたものだが，Ｃ区で認められた焼土を前後し区画溝がSD1003からSD2003に改修されることが想定される等，焼土を前後に上層部と下層部に設定される。上層部（第242図）では，区画溝（SD1003，2003）及び屋敷境の建物（SA1001，SA2001），門に推定される建物（SB1002，SB2001）とも第１面とほぼ同様の位置に認められ，基本的には第１面へと踏襲される内容となっている。この他，SA2001に面し石列状の遺構（SD2004，2005）及びこれに先行する溝状遺構SD2006があり，SA2001に先行する不定形の落込みSX2002～2004が認められた。道路部分で認められる遺構については，当面より確認面としたため，第１面との判別がより不明瞭だが既述の19世紀代の土坑の他，SD1003に平行するSA2002が検出されている。

下層部（第243図）では，SB2002が焼土以下で認められ，焼土以前の段階となるSD2003に関連した建物と推定される。東部では，第３面で確認された17世紀中葉の整地上でSD2003が開削されており，当期の屋敷境の上限を示すものとなっている。窪地に位置するSB2002を除き，東部での散漫な柱穴等の検出状況から上層部に至る段階での削平を受けたことが想定され，建物，塀等の屋敷境の施設は明確にできない。

区画溝改修の契機となった焼土については，希薄な遺物の出土状況のため直接，時期を推定できない。高松大火（1718年）により当屋敷が被災したことが文献資料からは窺われ，当期に該当する可能性が考えられる。このため上層部は，第１面への画期（SX2008の埋没，上水施設の廃絶）を考慮して18世紀前葉～19世紀前葉の所産と想定する。下層部は，第３面で確認した整地に後出するものとして，17世紀中葉～18世紀前葉の所属が考えられる。

SA2001，SB2001（第242・244・245図）

Ａ－Ｃ区南部，第２面で確認された礎石建物である。検出した標高は，1.15～1.26ｍを測る。何れも礎石は遺存していないが，柱穴の規模や柱穴内に玉砂利を詰め固めた埋土から，礎石が取り除かれた下部の状況を示す礎石痕として考えられる。SA2001は柱間約1.95ｍを基本とするが，SB2001の西面となる２間分が1.25ｍと狭くなっている。SA1001と同様に，南面に対応する礎石痕は明確でなく屋敷境の溝北岸を基礎とした長屋が想定される。検出した礎石痕はSA1001よりも礎石痕の半分程度，南に設置されている。礎石の痕跡は西部では確認されていないが，主軸方位を考慮すれば（SA1001：Ｎ－86.5°－Ｗ，SA2001：Ｎ－84.5°－Ｗ），西方でSA1001と重複した位置関係となり検出されなかった可能性もあり，更に西へ広がることも考えられる。

SB2001はSA2001を両脇に取り付けた格好となり，礎石の位置や屋敷境に位置することから長屋門と考えられる。門の中心（Ｐ－４直下）を通る南北のラインでは，下面で当該期にも使用されたと考えられる上水道が設置されており，出入り口の性格を有している。門の西壁に相当し考えられる礎石痕（Ｐ－５，Ｐ－９～11）の一間分西側にも，南北方向に同規模の礎石の痕跡（Ｐ－６～８）が認められる。所属時期は，上水施設の廃絶（SD3004，3006）等から下限は19世紀前葉と想定される。上限はSB2002との関係より焼土より後出する18世紀前葉以降に想定されるが，主軸がSD2006（17世紀末葉），SD2003（17世紀中葉～18世紀前葉）に近似し，更に遡って存在した可能性も考えられる。

SB2002（第246図）

Ｃ区南西部，第２面下層で確認した礎石建物である。検出した標高は，1.15～1.40ｍを測り，当地点で確認された焼土層を除去し確認された。梁行は３間（約2.9ｍ）である。桁行については礎石の遺存状況が悪いが，南西隅に遺存するものから5.8ｍで，６間と推定される。また必ずしも焼土との前後関係が明瞭なものではないが，北西隅及び第２面上層部で認められた礎石及び柱穴を含める（Ａ－Ａ´）と，桁行が更に広がる可能性がある。

礎石上面の高さを見ると，最も遺存状況の良いＨ－Ｈ´のラインで北方向に大きく下って認められ，焼土層（第11図）が北方向に下る状況と一致している。現状で建物が建つと考えられないが，下位には溝（SD3007），大形廃棄土坑（SX3002）等が重複して存在しており，軟弱な地盤の結果として土地が低下したことも推察される。大きく地盤が低下しているＡ－Ａ´では，地盤低下により焼土及び礎石が遺存したと考えられる。第２面上層部では，当建物の東側で石材が散乱した状態で確認されてる等，地表面が高かった東側で削平，撹乱を受けた状況が想定される。

当建物の礎石は明確な掘り方を有しないものが多く，後出する礎石の様に地固めを行った様子は認められない。また当地点の周囲では，後世にSX1001，1002等と地固めを行う整地痕にも推定される遺構が確認されている等，上部構造の重量と地盤との関連が窺われる。

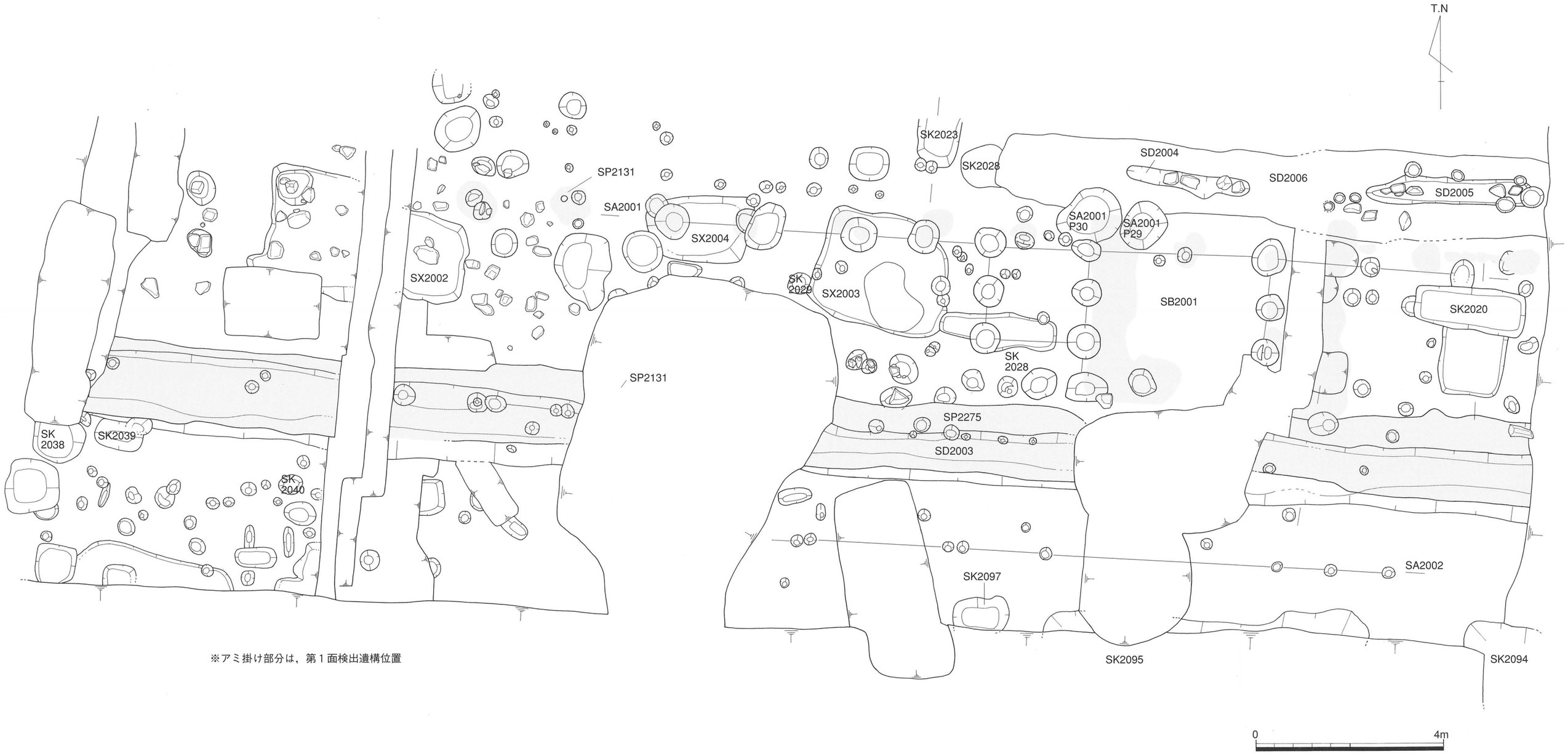
所属時期は，焼土以下となる第２面下層部に相当し，SD2003と同様の17世紀中葉～18世紀前葉の所産と考えられる。

SA2002（第242・244図）

Ａ－Ｃ区南部道路上で確認した柵列状の遺構である。検出した標高は，1.25～1.30ｍを測る。屋敷境の溝より約1.4ｍ南に並び認められる。深度は10㎝程で，柱間距離は一定ではない。更に西に伸びる可能性もあるが，撹乱及び遺構が重複しており明確にならない。SD1003と同方位（Ｎ－86°－Ｗ）を示し，区画溝と関連した柵列と想定される。所属時期は，出土遺物もなく明確ではないが，主軸が合致するSD1003と同時期の所産と考えられる。

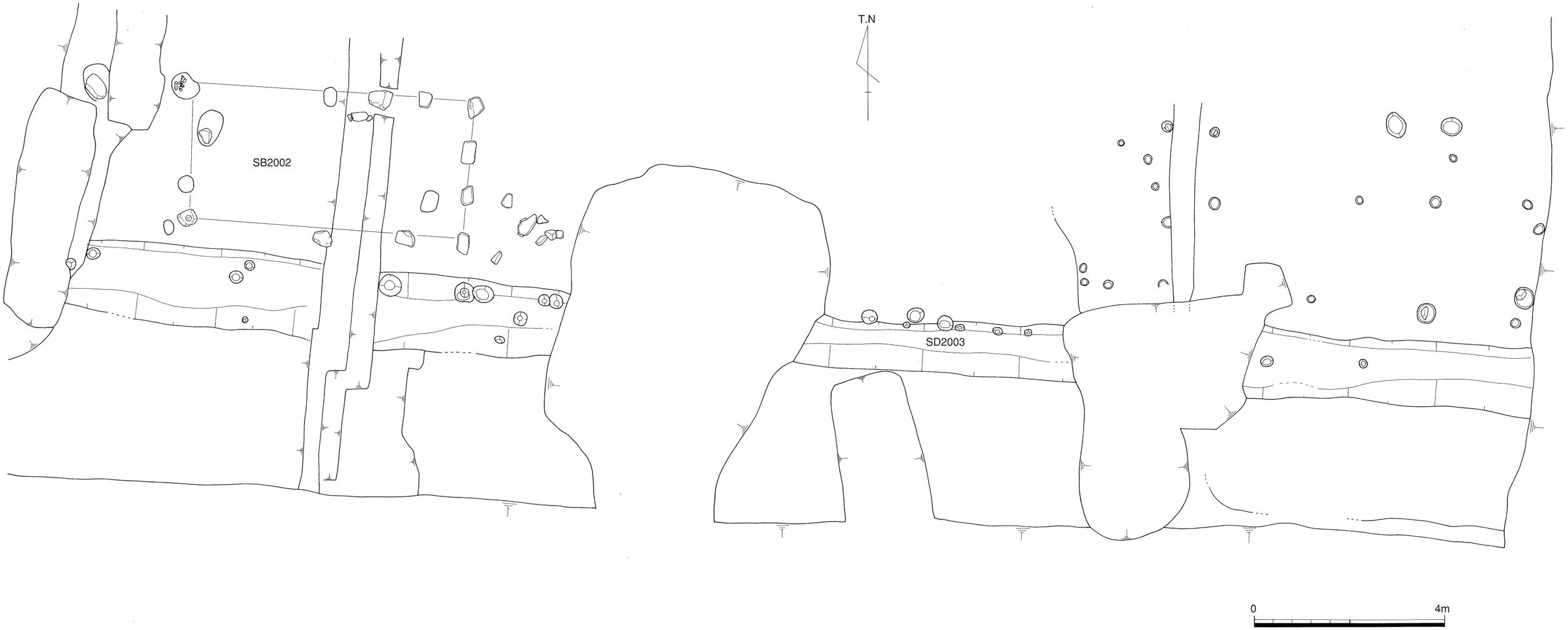
SD2003（第242・244図）

第２面Ａ・Ｃ・Ｅ区で確認した東西方向の溝跡である。SD1003と重複し，これに先行する屋敷境の区画溝に相当する。北岸はSD1003の北壁において，南岸はSD1003より約0.2ｍ下位となる標高1.15～1.30ｍの道路整地面で検出した。検出長はSD1003と同距離で，検出幅は遺存の良い箇所で約1.7ｍを測る。Ｎ－84°－Ｗの主軸を示し，Ａ・Ｃ区では南岸がSD1003より僅かに南よりに検出されるが，若干北西部に傾く方位のため，西のＥ区ではほぼ重なって認められる。断面はＵ字形で，素掘りの溝として確認された。底面の標高はＡ区で0.85ｍ前後，Ｃ区で0.92ｍ前後，Ｅ区で0.97ｍ前後を測り，緩やかに東方向に傾斜することから，排水の方向を示す可能性も考えられる。またＣ区の西部において，SD1003の北壁面で焼土層が認められ，これに先行することから火災によって廃絶しSD1003に改修された可能性がある。当遺構は，検出面で先行するＡ区第３面の整地（17世紀中葉に比定）を基盤とし，当期が上限として考えられる。下限は，出土遺物から凡そ18世紀前葉頃と考えられる。

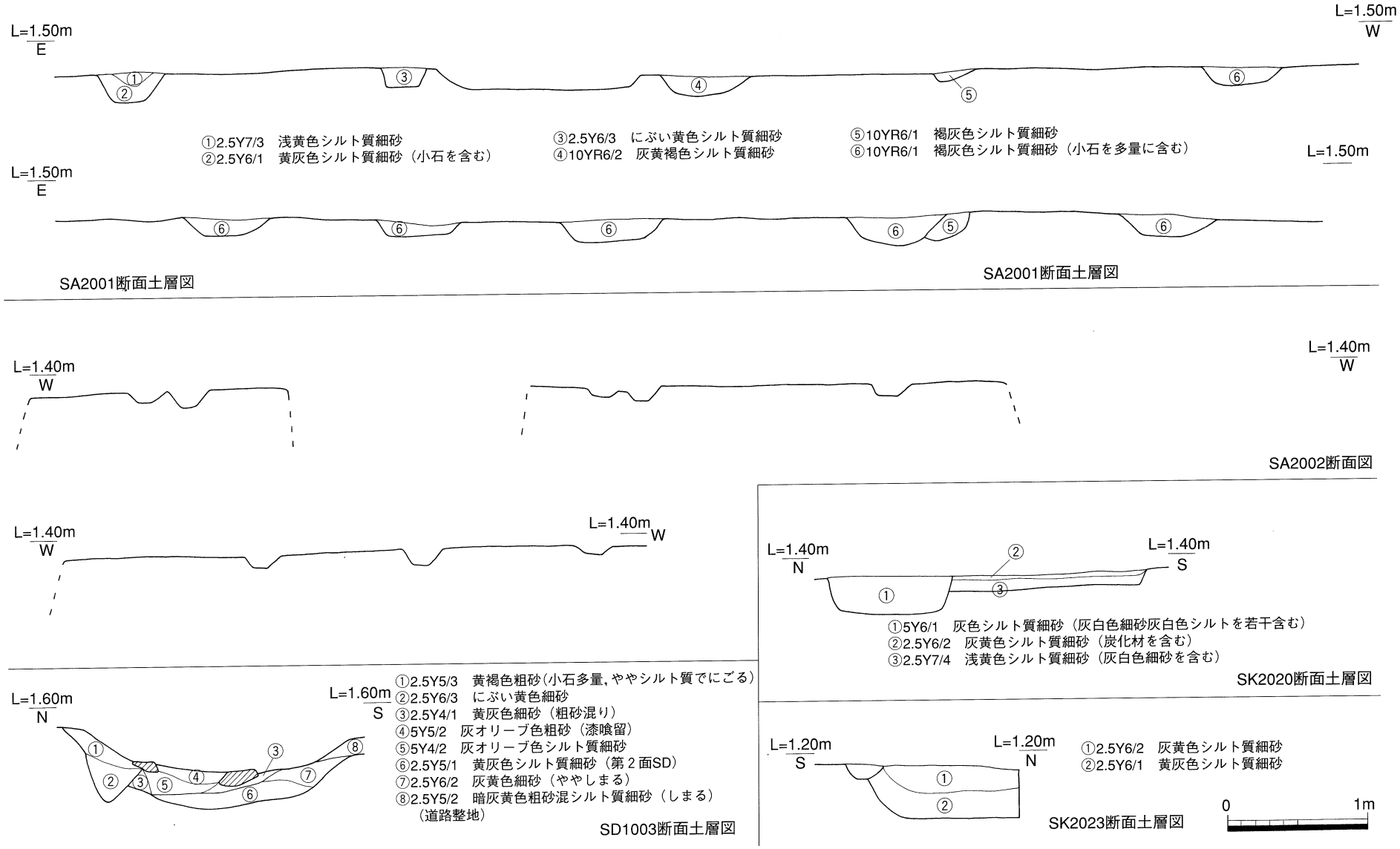


※アミ掛け部分は，第１面検出遺構位置

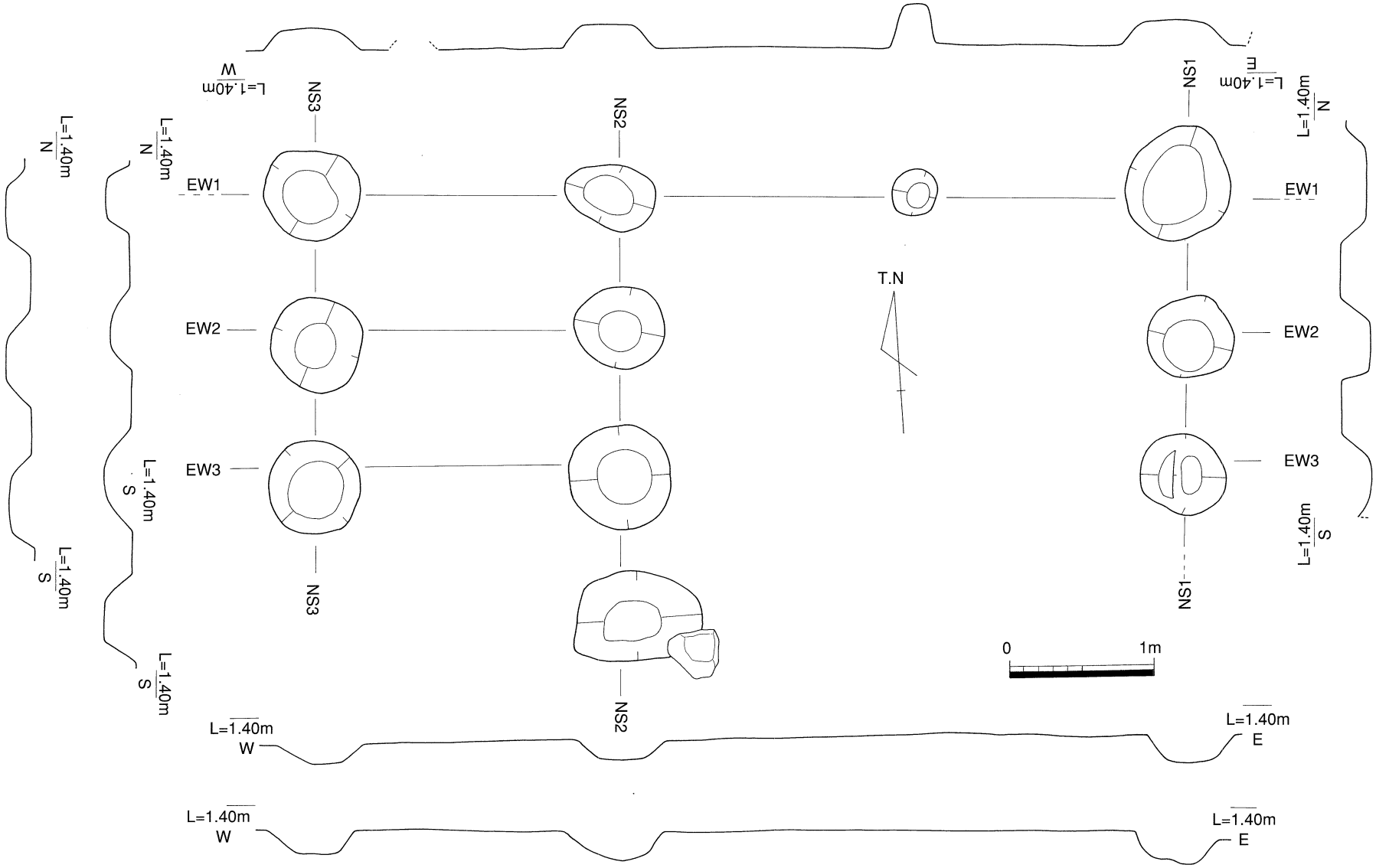
第242図　第２面上層屋敷境平面図



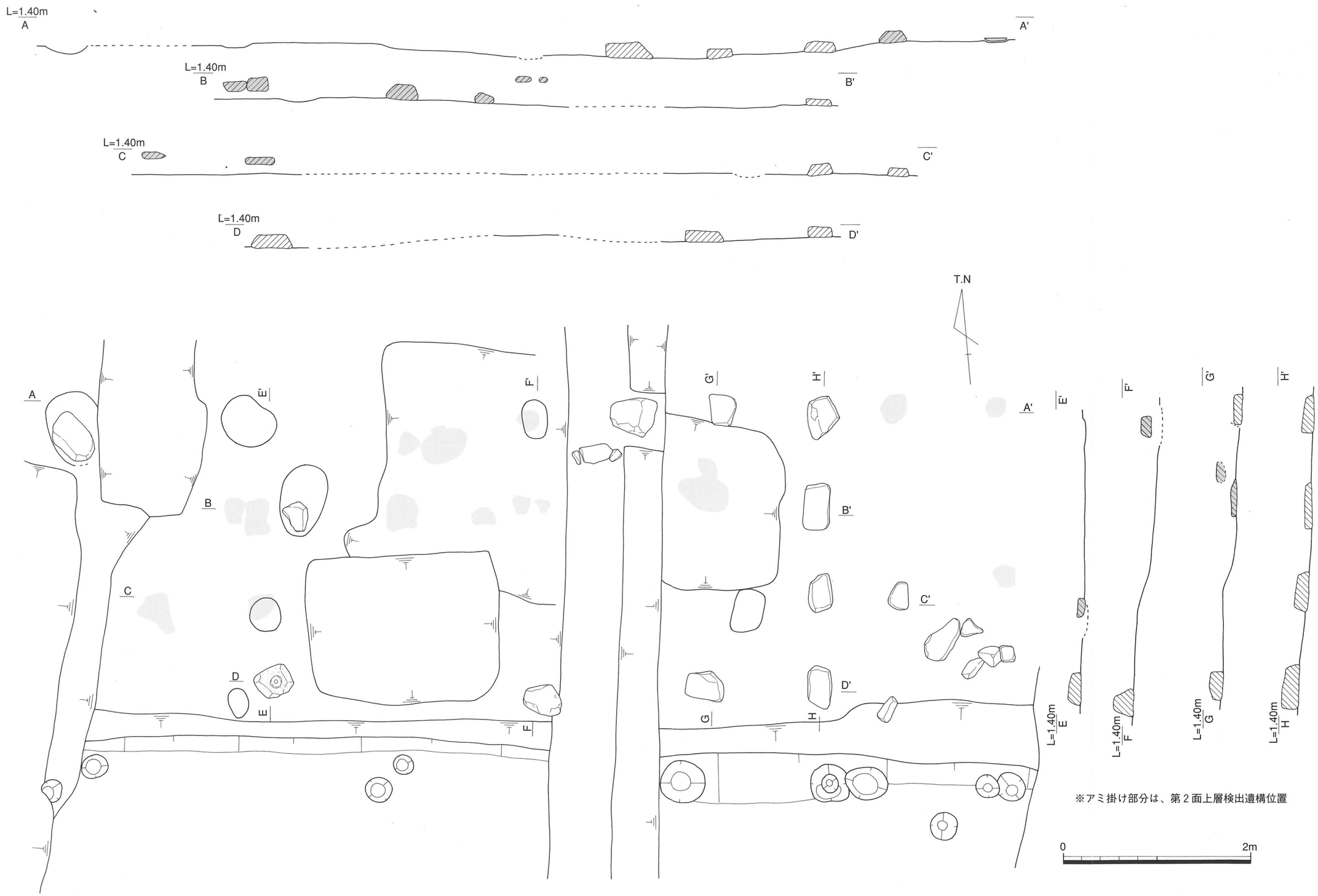
第243図　第２面下層屋敷境平面図



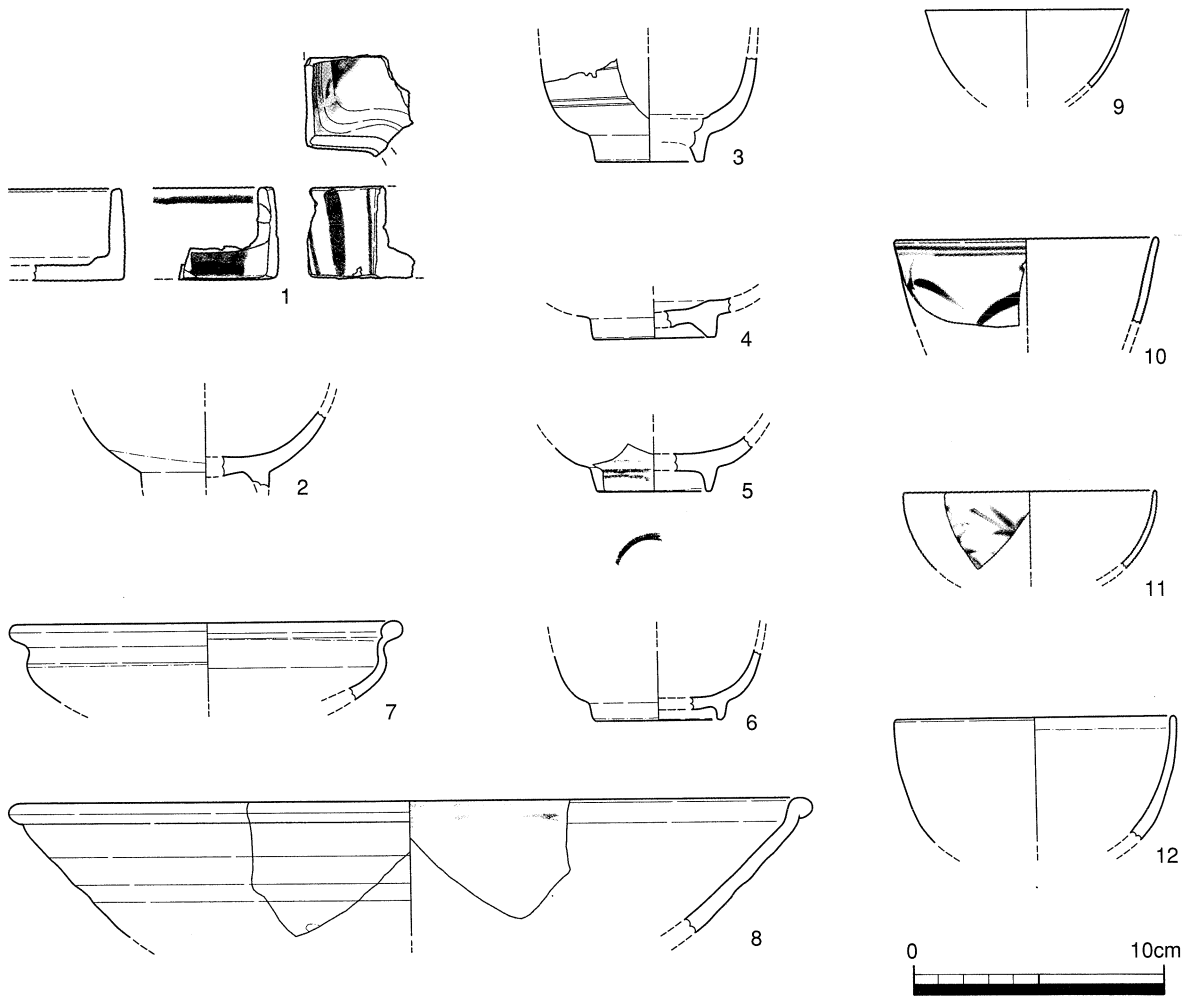
第244図　SA2001・2002・SD1003・SK2023・2020断面・土層図



第245図　SB2001平面・断面図

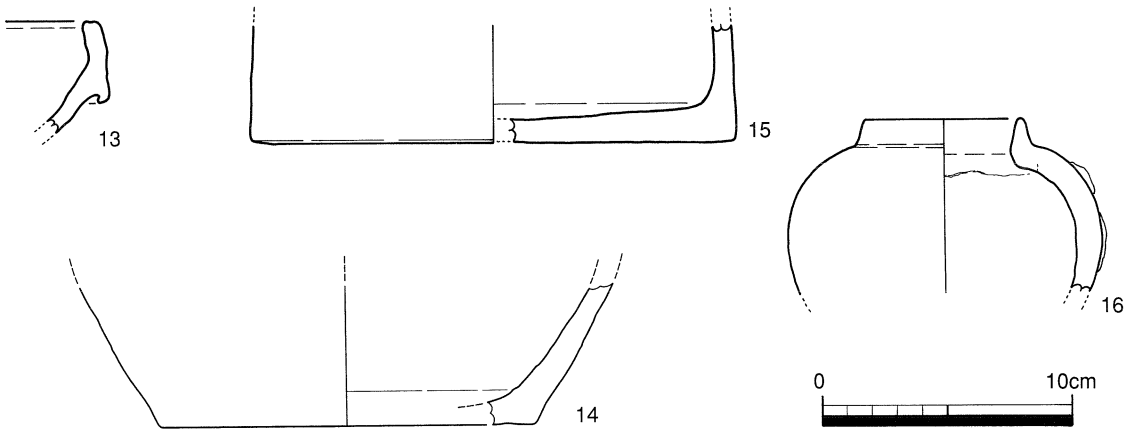


第246図　SB2002平面図・断面図



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
SD2003	1	陶	向付	瀬・美	器高:3.60	細	浅黄2.5Y8/3	内外:透明釉	鉄絵:極暗赤褐 2.5YR2/2　上掛:緑		1605年代	青磁部 断面に被熱痕
SD2003	2	陶	碗底部	肥前		細	灰白2.5Y7/1	内外:赤黒10R2/1				1605年代
SD2001	3	磁	碗底部	肥前	底:4.40	微	灰白色	内外:明オリーブ灰5GY7/1		外面:沈線		
SD2003	4	磁	碗	肥前	底:4.80	中	灰白2.5Y7/1	内外:灰白10Y7/2				
SD2003	5	磁	碗底部	肥前	底:4.40	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色			
SD2003	6	磁	碗	肥前	口:5.00	微	灰白色	外面:灰5Y5/1 内面:透明釉			大橋Ⅲ期	
SD2003	7	陶	香炉	肥前	口:15.00	細	灰N4/1	内外:暗赤褐5YR3/2				
SD2003	8	陶	皿	肥前	口:32.2	細	にぶい橙:7.5YR7/3	外面:黄灰白2.5Y5/1 内面:灰白5Y8/2			17ｃ中葉	刷毛目唐津 断面に被熱痕
SD2001	9	磁	碗口縁部	肥前	口:8.00	微	灰白色	内外:灰白N8/1				色絵？
SD1003	10	磁	碗	肥前	口:10.40	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明・暗青色			
SD2003	11	磁	碗口縁部	肥前	口:10.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須・明青色			
SD2003	12	陶	碗	肥前	口:11.0	細	灰白5Y7/1	内口縁・外:黒褐5YR2/1 内下半:灰黄2.5Y7/2				

第247図　SD2003出土遺物実測図・観察表



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SD2003	13	陶	擂鉢口縁部	備前		細	暗赤褐10R3/2	暗赤褐10R3/2		内外:ロクロナデ		
SD2003	14	陶	甕底部	備前	底:15.0	細	暗赤褐10R3/3	内外:黒褐7.5YR2/2				格子目甕 底部に溶着痕
SD2003	15	磁	水指	信楽	底:9.3	石英・長石		外面:暗褐10YR3/4 内面:灰黄褐10YR6/2		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り、煤付着	17c初	底部と外面底部付近に煤付着
SD2003	16	土師質	壺		口:6.1	微砂粒		外面:灰黄2.5Y7/2 内面:黒2.5Y2/1		内・外口縁部:ロクロナデ		

第248図　SD2003出土遺物実測図・観察表

SD2003出土遺物（第247・248図）

出土遺物は少量でコンテナ1/4程度であった。

1は瀬戸・美濃系陶器向付（青織部）である。2は肥前系陶器碗底部。内外鉄釉を施し，高台部は露胎。天目碗であろう。3は肥前系磁器碗。外面に沈線を巡らし青磁釉を全面に施す。4は肥前系陶器碗で，灰釉を施す。5は肥前系磁器碗。U字高台に二重圏線が認められる。6は産地不明磁器碗である。7は肥前系陶器香炉で，鉄釉を施す。8は肥前系陶器皿。灰釉で，内面には白化粧土による刷毛目装飾が施される。9は肥前系磁器碗。色絵素地で，外面には僅に赤色が認められる。10は肥前系磁器碗。やや大振りで口縁部外面に二重圏線が見られる。11は肥前系磁器碗。器壁の薄い半球形碗に考えられる。12は肥前系陶器碗で，外面に鉄釉を施す。13・14は備前で，擂鉢口縁部と甕底部である。15は信楽鉢底部である。16は壺形の土師質土器である。

SD2006（第242・249図）

A区，第２面で確認した溝状の遺構である。石列状遺構（SD2004・2005）の下位で検出した。検出した標高は1.06～1.24mで，底面の標高は0.41～0.67mを測る。検出長は11.7m，検出幅は0.6～0.9mを測る。東西方向の溝状遺構だが，西方向には伸びない。東方向は調査範囲外となり不明だが，底面は僅かに東へ上昇していくのが認められる。遺構の断面はU字形で，下層において遺物が集中して出土した。

屋敷の区画溝SD2003及び，SA2001に平行する方位（N－84°－W前後）を示し，前後関係では当遺構に後出するが，門と考えられるSB2001と西限がほぼ一致して認められ，屋敷境の建物に関連した施設の可能性も考えられる。

所属時期は，出土遺物が17世紀末葉の所産にまとまっており，彦坂織部の家が絶え（1688年），藩主の家系より分家した頼芳（初代藩主頼重の子）の屋敷となる（1689年）時期を中心に考えられる。また埋土には少量ながら焼土が観察されており，最終埋没が火災（高松大火，1718年）に関連する可能性も考えられる。

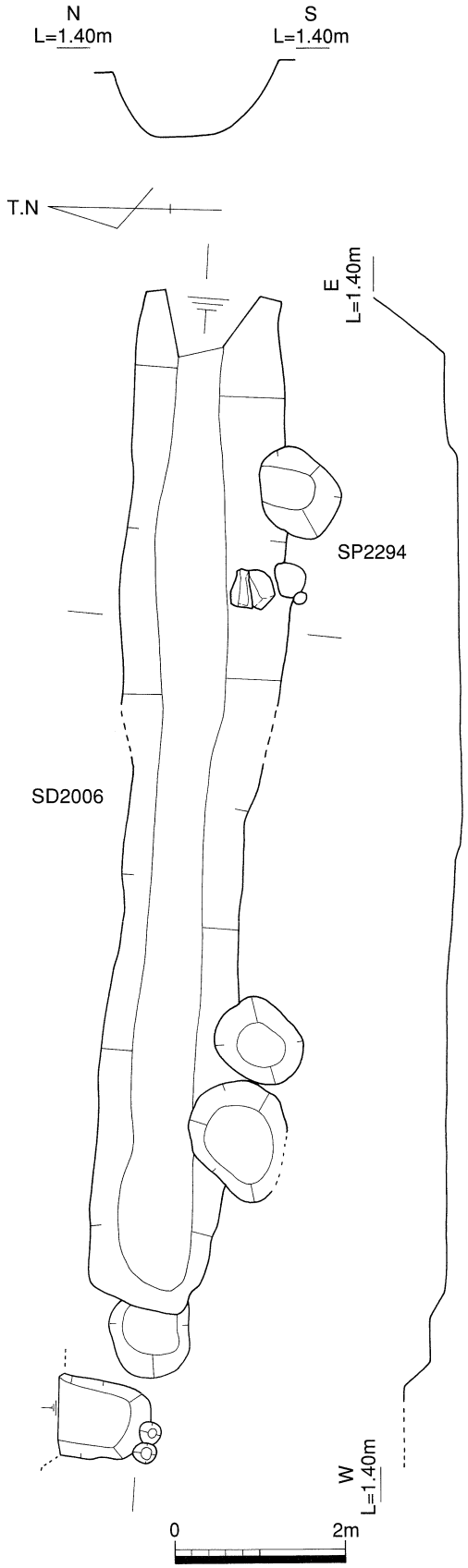
SD2006出土遺物（第251～262図）

遺物は下層部よりコンテナ４箱程度出土した。但し，瓦については一部のみ取り上げた。１は陶器碗の口縁部である。黄橙色を呈する胎土に，口縁部より長石釉が厚く掛けられる。唐津と考えられる。２～８は，肥前系陶器碗である。２は器壁が薄く，口縁部へ直線的に開くもので，高い高台を有する。口紅が施される。３は京焼風の器形だが，明赤褐色の釉で高台内にも施釉が認められる。４～６は京焼風陶器碗で，高台内に「清水」の刻印が認められる。８は呉器手碗である。９は鉄釉を施す小坏。10の京焼風陶器碗は，鉄絵により菖蒲を描く。

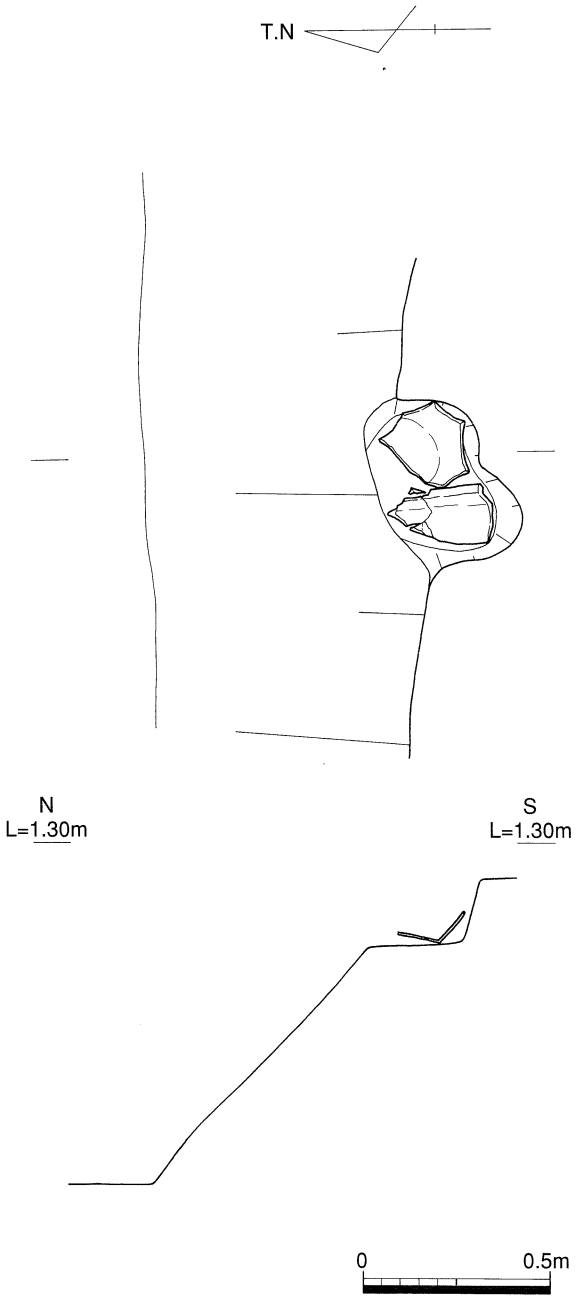
11～18は肥前系陶器皿である。11～14は見込に蛇ノ目釉剥ぎをしたもので，砂粒の付着が認められる。釉は灰色または緑色を呈する。12には鉄絵が描かれる。17は内面に銅緑釉を施し，見込に蛇ノ目釉剥ぎが施される。18は京焼風の皿である。19は大形品の頸部と考えられる破片で，管耳が付く。外面は柿色の釉，内面は柿色及び銅緑釉を掛け流し，花瓶と考えられる。20は備前瓶（徳利）である。21は肥前系陶器火入。外面上半に鉄釉をし，刷毛目装飾を施す。SD1003との接合資料で，本遺構の埋没と区画溝（の改修）との関連が推察される。29は京焼風陶器碗。外面に楼閣山水文が描かれる。

22～29・30・31は肥前系磁器碗である。22・23は断面U字形の高台を有し，口縁部外面及び高台脇に二重圏線が認められる。24の高台は断面U字形で，高台部の幅は狭く低い。27は大振りの碗。高台脇に二重圏線が認められる，高台高は高い。25は白磁碗である。桔梗（？）の陽刻が施される。28も白磁碗である。口紅が施される。30・31は，同一個体の可能性がある色絵の碗。剥落する部分が多いが，赤，黄（金）色に見られる。

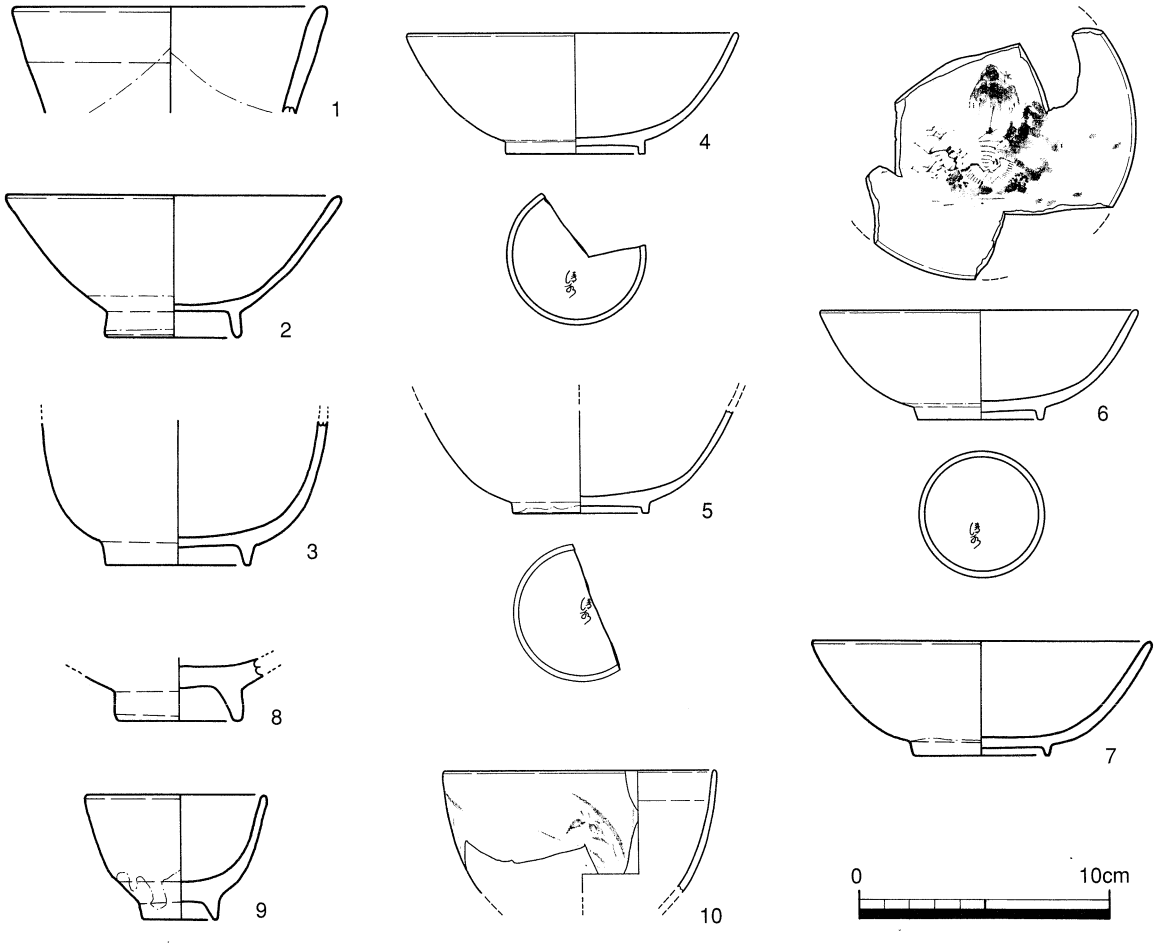
32～44は肥前系磁器皿である。32～34は波佐見産青磁皿である。やや粗製で，見込に蛇ノ目釉剥ぎを施す。33・34は釉剥ぎ部分に砂粒が付着し，畳付にも砂粒が付着する。35は白磁だが，絵付けの剥落痕と考えられる箇所がある。薄手で上質のものである。36は折縁の小皿である。38は高台内にハリ支えの痕跡が認められる。内面には鹿と紅葉を描く。37・39は断面U字形の高台で，高台脇に二重圏線が認められる。37の高台内には，ハリ支えの痕跡が認められる。40は図面上で復元した。鍔状に折れ曲がる口縁部で，内面に櫛歯文が認められる。初期伊万里の形態である。41は芙蓉手大皿に考えられる。42は三股窯青磁である。青磁染付で，見込に紅葉を描く。三足と



第249図　SD2006平面・断面図

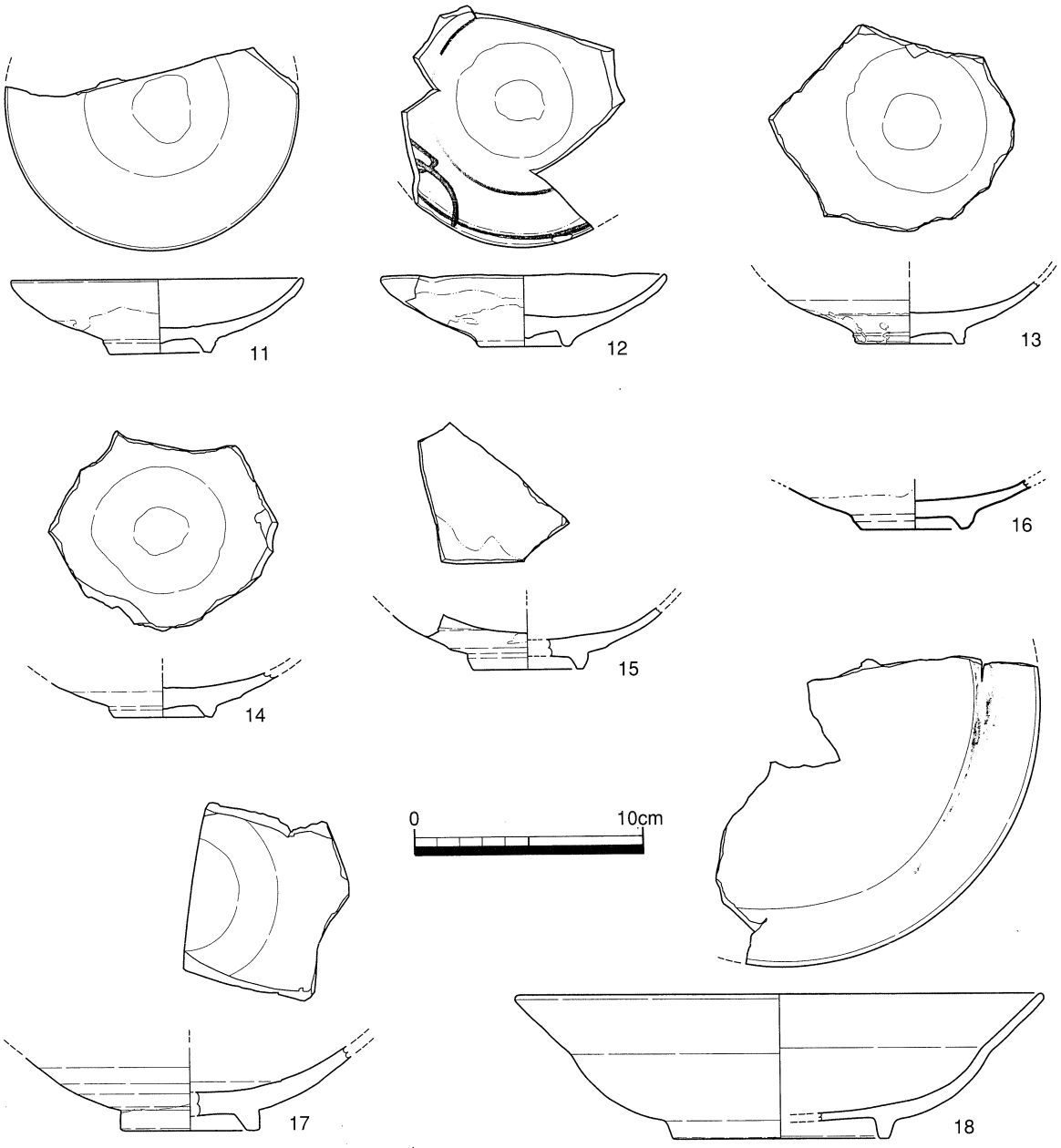


第250図　SP2294平面・断面図



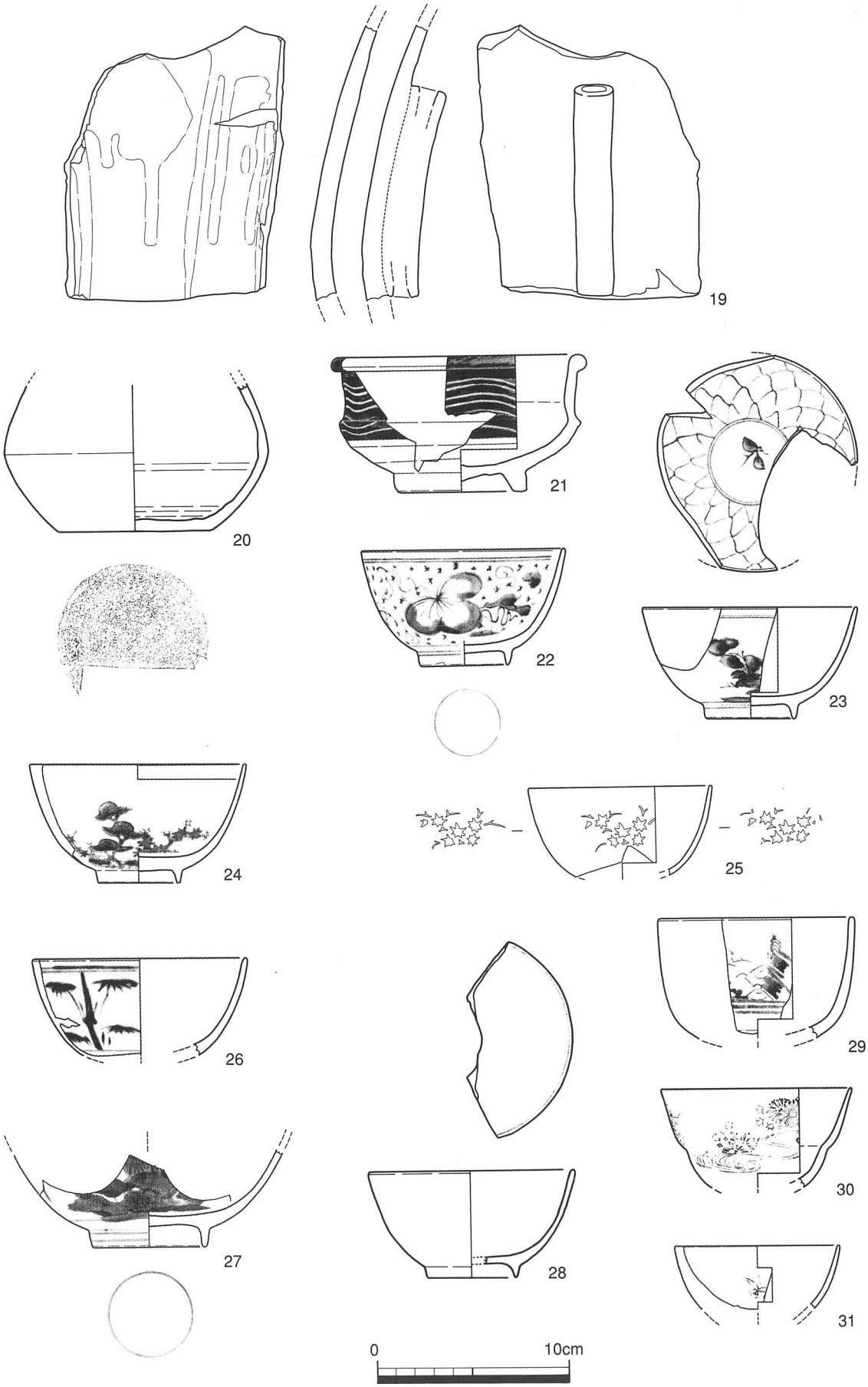
遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
SD2006	1	陶	碗	肥前	口:12.2	細	浅黄橙7.5YR8/4	白				
SD2006	2	陶	碗	肥前	口:13.1 高:5.7 底:5.2	細	灰白10YR8/2	明褐7.5YR5/8		高台脇:鉄釉		
SD2006	3	陶	碗	肥前	底:5.8	細	浅黄橙7.5YR8/4	明赤褐2.5YR5/6		外底:ケズリ		
SD2006	4	陶	碗	肥前	口:13.05 高:4.8 底:5.45	細	灰白2.5Y8/1	内外:透明釉			大橋Ⅲ期	京焼風
SD2006	5	陶	碗	肥前	底:5.4	細	灰白2.5Y8/1	内外:透明釉			大橋Ⅲ期	京焼風
SD2006	6	陶	碗	肥前	口:12.5 高:4.35 底:4.9	細	灰白N8/0	内外:透明釉	呉須:緑灰10G5/1	内面:楼閣山水	大橋Ⅲ期	京焼風
SD2006	7	陶	碗	肥前	口:13.3 高:4.6 底:5.4	細	淡黄2.5Y8/3	にぶい黄橙10YR5/4			大橋Ⅲ期	
SD2006	8	陶	碗	肥前	底:4.8	細	灰白2.5Y8/2	淡黄2.5Y8/4			大橋Ⅲ期	呉器手
SD2006	9	陶	小杯	肥前	口:7.1 高:4.9 底:3.0	細	灰白N7/0	黒 N2/0		外底:ケズリ		
SD2006	10	陶	碗	肥前	口:10.75	細	灰白5Y7/2	内外:透明釉	鉄絵:オリーブ黒5Y3/1	外面:あやめ?		京焼風

第251図　SD2006出土遺物実測図・観察表（その1）



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
SD2006	11	陶	皿	肥前	口:12.6 高:3.25 底:4.35	細	灰N6/0	灰オリーブ7.5Y5/2		外面:ケズリ 内面:蛇の目釉剥(砂粒付着)	大橋Ⅲ期	
SD2006	12	陶	皿	肥前	口:12.35 高:3.1 底:3.8	細	灰N5/0	内外:灰オリーブ7.5Y5/2	鉄絵:暗赤褐5YR3/4	内面:蛇の目釉剥(砂粒付着) 外面:ケズリ	大橋Ⅲ期	高台内と畳付に砂粒付着
SD2006	13	陶	皿底部	肥前	底:4.4	細	暗赤褐2.5YR5/6	内外:オリーブ灰2.5GY5/1		内面:蛇の目釉剥 外面:ケズリ	大橋Ⅲ期	
SD2006	14	陶	皿底部	肥前	底:4.25	細	灰N6/0	内外:灰白5Y8/2		外面:ケズリ 内面:蛇の目釉剥(砂粒付着)	大橋Ⅲ期	
SD2006	15	陶	皿底部	肥前	底:4.7	細	灰N6/0	灰白5Y8/1	暗オリーブ7.5Y4/3	外面:ケズリ		
SD2006	16	陶	皿底部	肥前	底:4.7	細	橙2.5YR6/6	灰オリーブ7.5Y5/3		外底:ケズリ		
SD2006	17	陶	鉢	肥前	底:5.75	細	灰白2.5Y8/2	外面:灰白5Y8/1 内面:緑灰7.5GY6/1(銅緑釉)		内面:蛇の目釉剥	大橋Ⅲ期	
SD2006	18	陶	鉢	肥前	口:22.95 高:6.3 底:9.9	細	灰白10YR8/2	内外:オリーブ灰5Y6/4	鉄絵:暗オリーブ5Y4/3		大橋Ⅲ期	京焼風, 畳付に砂粒付着

第252図　SD2006出土遺物実測図・観察表（その2）



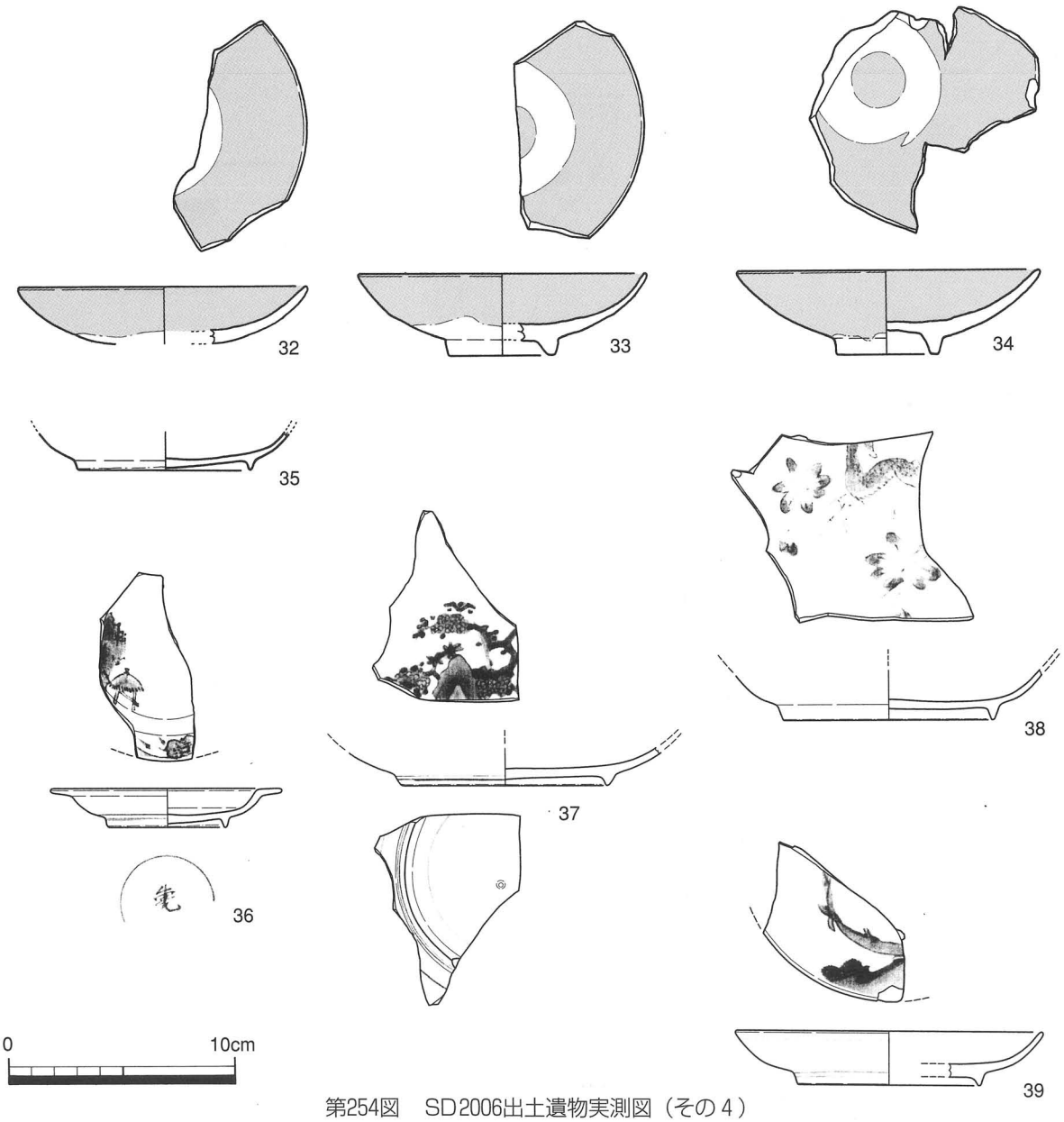
第253図　SD2006出土遺物実測図

考えられる獣面の脚を有し，蛇ノ目凹形高台の釉剥ぎ部に鉄錆を塗布する。43の鉢は，口縁部外面に型成形の痕跡が認められる。上質のもので外面に唐草文，内面に桐が描かれる。

44は型打成形の紅皿である。45～47は小坏である。48・49は瓶類。50は火入である。51・52は青磁花生である。51は耳接着箇所に陽刻が施され，瑠璃色に色付けされる。52は一輪差と考えられる。53は京焼系陶器（理兵衛焼か）香炉蓋である。赤，金の絵付けが施される。

54は信楽鉢である。55～57は備前擂鉢である。55・56は小型のもので，体部下半に左方向の削りが認められる。56は暗褐色を呈する。口縁の顎部の張出しは弱く，見込の擂目は＊形に施される。57には片口が認められる。口縁部に黄ゴマ，下端に熔着痕が認められる。外面は火襷が顕著で，ナデ仕上げである。

58～75は土師質土器皿である。底面調整が分かるものは，すべて回転糸切りである。胎土が橙色系ものは58・59・62・63・70・73で，以外は灰白色系である。前段階となるSX3004・3005の



第254図　SD2006出土遺物実測図（その４）

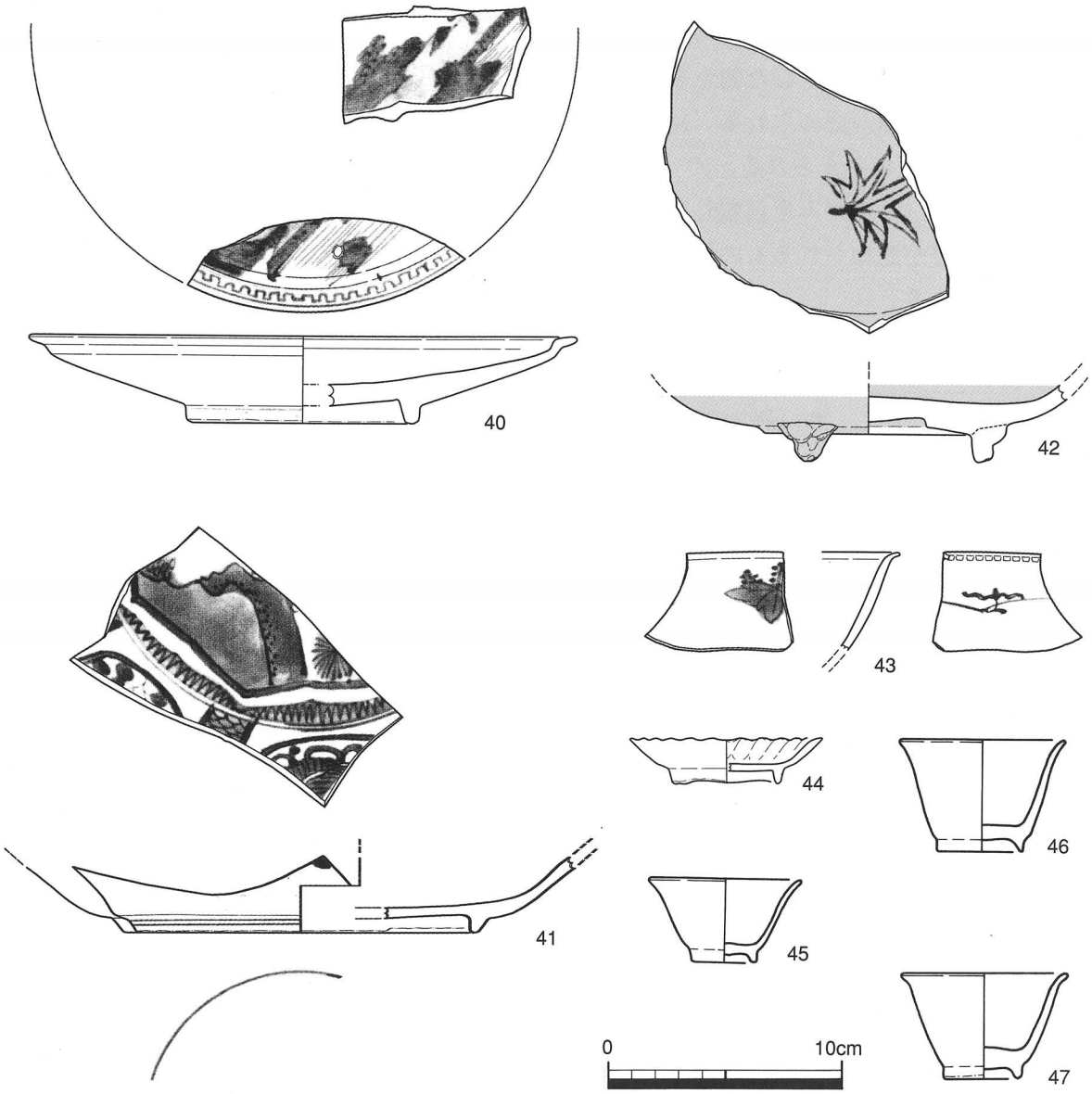
資料に比べ，橙色系の器高が低くなり，灰白色系では口径が一回り小形化している。佐藤編年では様相４～５に該当すると考えられる。

79は，瓦質土器羽釜或いは茶釜の体部である。76～78は焼塩壺蓋である。80～90は焼塩壺である。すべて明るい橙色を呈した胎土を用い，輪積により成形される。80の外面には，「御壺塩師／堺湊伊織」の刻印が認められる（1682年以降で17世紀末葉まで）。同様の形態となる他も，1680～90年頃の所産に考えられる。

瓦については，一部のみを掲載した。91～93は軒丸瓦である。94・95は軒平瓦。96・97は丸瓦。いずれも被熱痕が認められるものが多い。古相のものも含まれ，佐藤編年では様相１～４に該当すると考えられる。

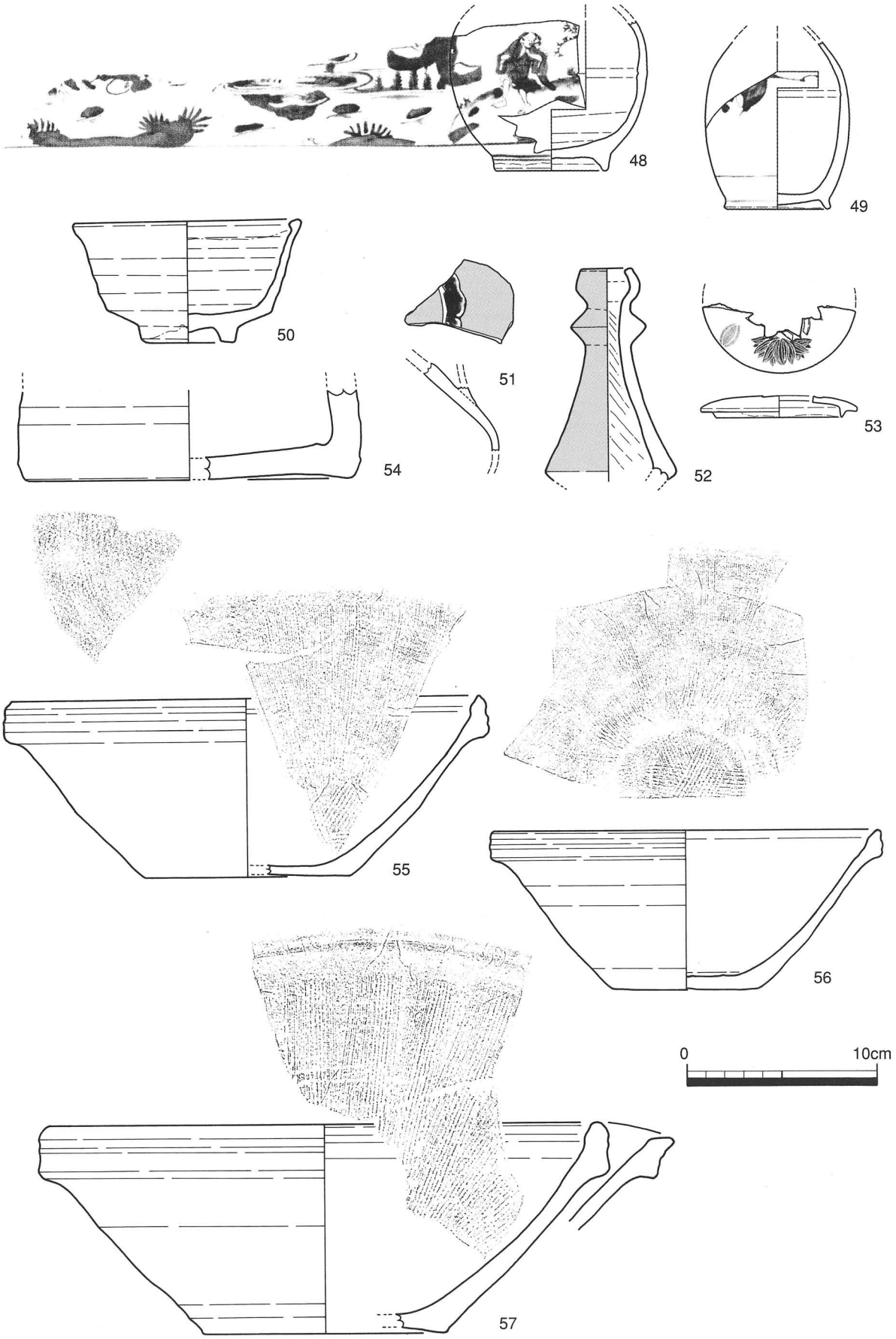
遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調１(胎土)	色調２(釉薬、内外色調)	色調３(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SD2006	19	陶	破片			細	灰白10YR7/1	外面:暗赤褐5YR3/4 内面:暗赤褐5YR3/4,明オリーブ灰5GY7/1				
SD2006	20	陶	瓶	備前	底:8.0	細		外面:暗赤褐2.5YR3/6 内面:赤灰2.5YR4/1		内外:ロクロナデ		
SD2006	21	陶	碗	肥前	口:12.4 高:6.95 底:6.3	細	赤褐色2.5YR4/6	外面:暗赤褐2.5YR3/2		外面:ケズリ 内面:刷毛	大橋Ⅲ期	刷毛 SD1003と接合
SD2006	22	磁	碗	肥前	口:10.45 高:6.0 底:4.4	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色		大橋Ⅲ期	U字高台
SD2006	23	磁	碗	肥前	口:11.1 高:5.7 底:4.65	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色	外面:草木文 内面:一重網目	大橋Ⅲ期	U字高台
SD2006	24	磁	碗	肥前	口:11.15 高:6.1 底:4.1	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色		大橋Ⅲ期	口縁端部に口紅
SD2006	25	磁	碗	肥前	口:9.4	微	灰白色	内外:透明釉				陽刻文有
SD2006	26	磁	碗	肥前	口:11.0	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅲ期	
SD2006	27	磁	碗	肥前	底:5.8	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅲ期	U字高台
SD2006	28	磁	碗	肥前	口:10.4 高:5.5 底:4.5	細	灰白M8/0	白		口紅	大橋Ⅲ期	白磁碗 色絵素地？
SD2006	29	陶	碗	肥前	口:10.0	細	灰黄2.5Y7/2	内外:透明釉	鉄絵:灰N4/6		大橋Ⅲ期	京焼風 楼閣山水
SD2006	30	磁	碗	肥前	口:9.9	微	灰白色	内外:透明釉	色絵:赤			色絵
SD2006	31	磁	碗	肥前	口:8.5	微	灰白色	内外:透明釉	色絵:赤・金・オリーブ黒5Y3/1	外面:蝶	大橋Ⅲ期	色絵:柿右衛門？
SD2006	32	磁	皿	肥前	口:12.7	細	灰白N8/0	明緑灰5G7/1			大橋Ⅲ期	青磁。蛇の目釉剥ぎ
SD2006	33	磁	皿	肥前	口:12.6 高:3.6 底:4.6	細	灰白N8/0	明緑灰5G7/1		内面:蛇の目釉剥	大橋Ⅲ期	蛇の目釉剥部分と高台に砂目
SD2006	34	磁	皿	肥前	口:13.2 高:3.7 底:4.5	細	灰白N8/0	明緑灰5G7/1			大橋Ⅲ期	蛇の目釉剥、高台と釉剥部分に砂目
SD2006	35	磁	皿	肥前	底:7.6	細	灰白N8/0	白				白磁皿
SD2006	36	磁	皿	肥前	口:9.95 高:1.7 底:5.15	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅲ期	
SD2006	37	磁	皿	肥前	底:9.05	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色		大橋Ⅲ期	高台内にハリ支え
SD2006	38	磁	皿	肥前	底:9.2	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色		大橋Ⅲ期	三角高台 高台内にハリ支え
SD2006	39	磁	皿	肥前	口:13.5 高:2.45 底:8.0	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明・暗青色			

第255図　SD2006出土遺物観察表

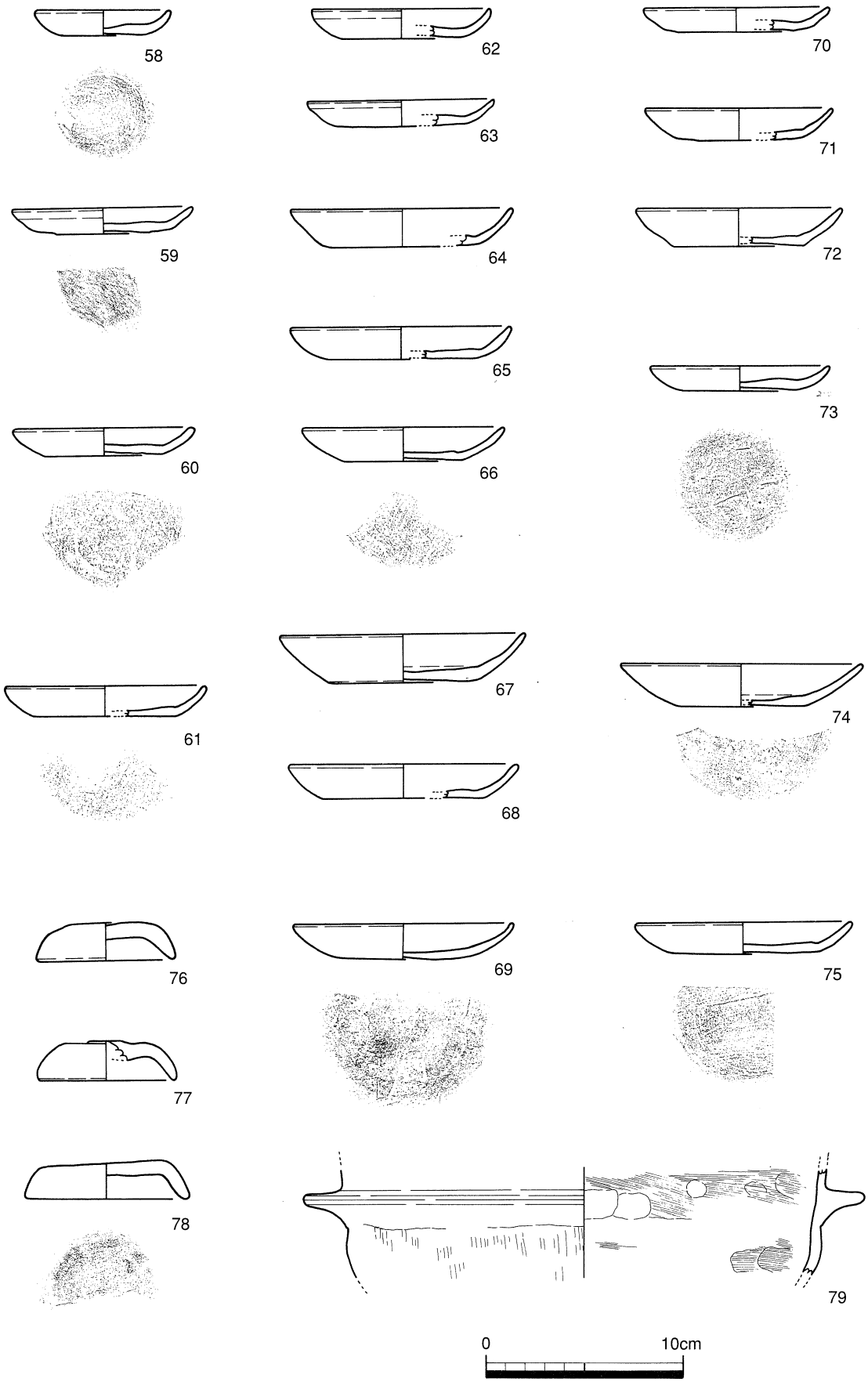


遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SD2006	40	磁	大皿		口:23.0 高:3.7 底:9.4	微	灰白色	内外;透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅱ-2期	
SD2006	41	磁	大皿		底:14.8	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色		大橋Ⅲ期	U字高台
SD2006	42	磁	皿低部		底:8.8	微	灰白色	内外:明オリーブ灰5GY7/1	呉須:明オリーブ灰5GY7/1	内面:紅葉	大橋Ⅲ期	青磁、三股青磁、高台は鉄銹、三足
SD2006	43	磁	鉢			微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色	内面:桐		型打製形
SD2006	44	磁	皿		口:8.1 高:1.95 底:4.35	微	灰白色	内外:透明釉			大橋Ⅲ期	型打成形、外面底部に2次焼成痕
SD2006	45	磁	小杯		口:6.4 高:2.6 底:2.8	細	灰白N8/0	白			大橋Ⅲ期	白磁、底部畳付は無釉・砂目
SD2006	46	磁	小杯		口:7.0 高:4.8 底:3.6	細	灰白N8/0	白			大橋Ⅲ期	白磁、底部畳付に砂付着
SD2006	47	磁	小杯		口:7.1 高:4.5 底:3.1	細	灰白N8/0	白			大橋Ⅲ期	底部畳付に砂目3ヶ所

第256図　SD2006出土遺物実測図・観察表（その5）



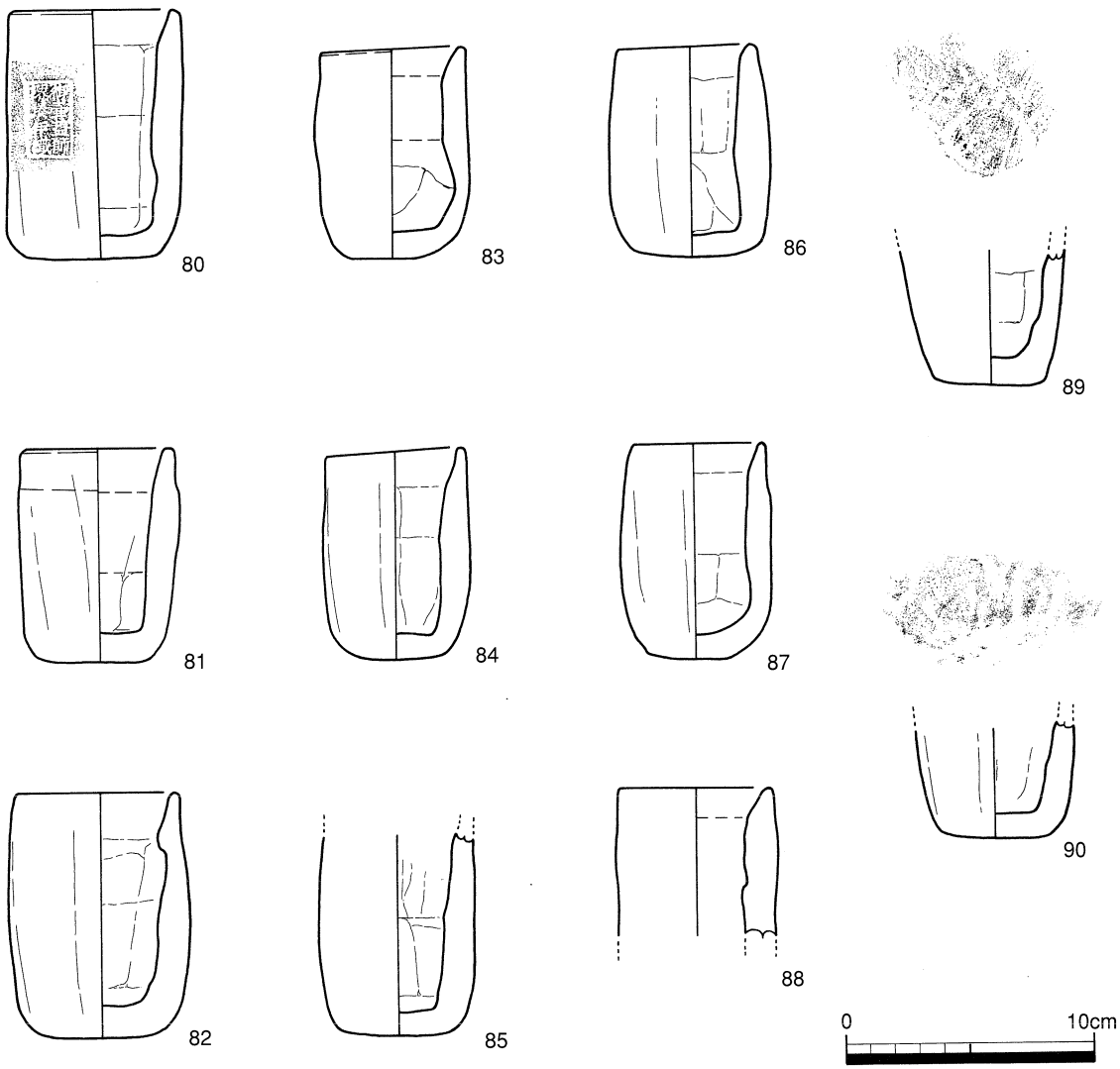
第257図　SD2006出土遺物実測図（その６）



第258図　SD2006出土遺物実測図（その７）

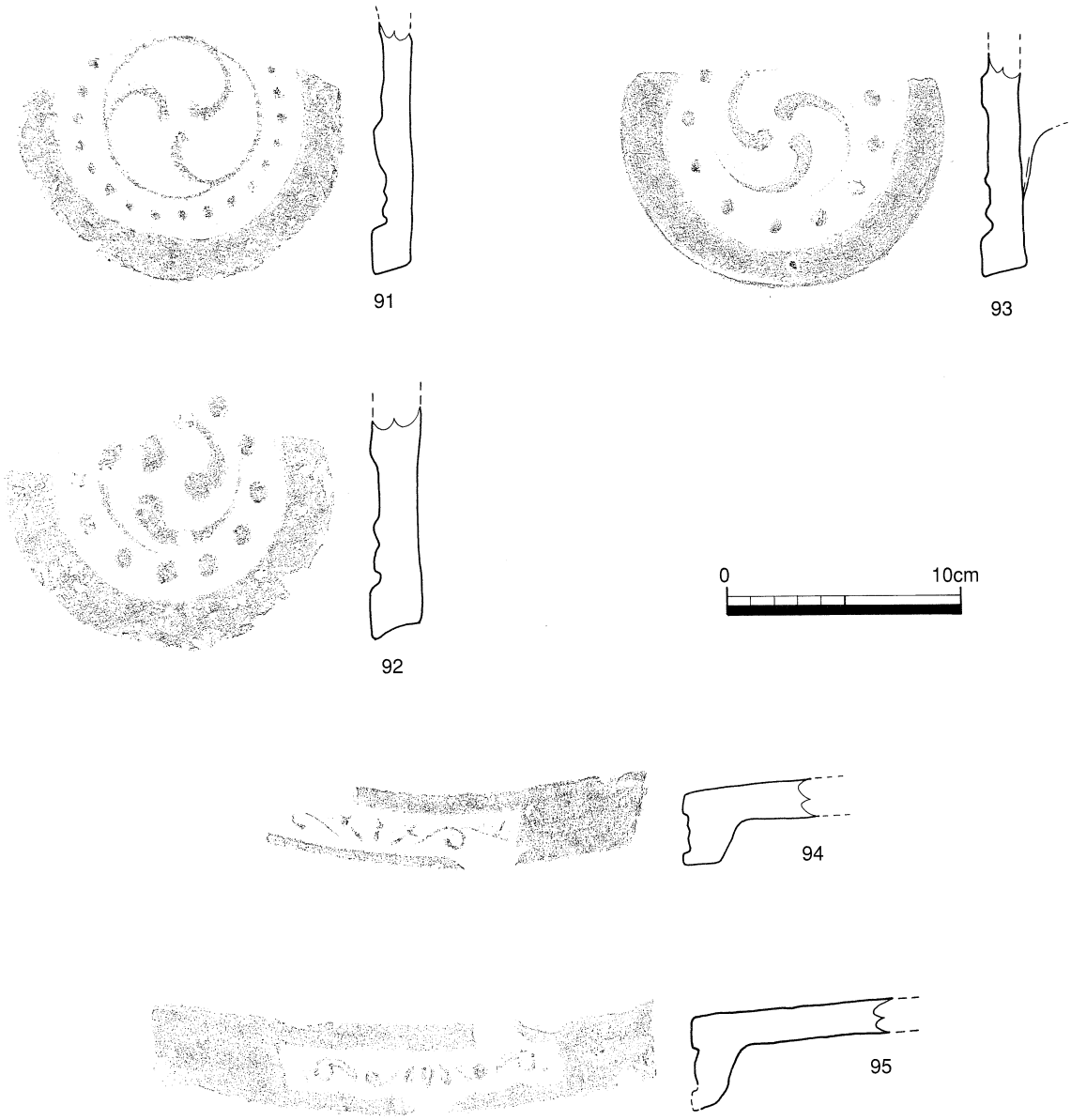
遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SD2006	48	磁	瓶	肥前	底:5.7	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色			高台内に砂粒付着
SD2006	49	磁	瓶	肥前	底:5.3	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色			高台内に砂粒付着
SD2006	50	磁	火入	肥前	口:12.0 高:7.4 底:5.0	細	灰白N8/0	明緑灰5G7/1				高台内無釉
SD2006	51	磁		肥前		微	灰白色	外面:緑灰7.5GY6/1 瑠璃釉?				青磁
SD2006	52	磁	花生	肥前	口:2.6	細	灰白N8/0	明緑灰7.5GY7/1				青磁
SD2006	53	陶	蓋	京・信	口:8.2	細	灰白5Y8/2	内外:透明釉	色絵:赤・金			
SD2006	54	陶	鉢	信楽	底:17.3	石・長多		外面:明赤褐2.5YR5/6 内面:灰白2.5Y7/1				2次焼成の痕跡
SD2006	55	陶	擂鉢	備前	口:24.15 高:9.4 底:10.6	細	赤褐2.5YR4/6	赤褐2.5YR4/6		内外口縁部・体部上半:ナデ 体部下半:ケズリ	近世Ⅲ期	
SD2006	56	陶	擂鉢	備前	口:20.0 高:8.4 底:7.6	細	オリーブ黒5Y3/2	オリーブ黒5Y3/2		内外:ナデ 外底:ケズリ	近世Ⅲ期	
SD2006	57	陶	擂鉢	備前	口:28.8 高:11.1 底:12.8	細	暗赤10R3/5	暗赤10R3/5		内外:ナデ	近世Ⅲ期	片口
SD2006	58	土師質	小皿		口:6.5 高:1.3 底:3.9	細	橙2.5YR7/8	橙2.5YR7/8		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		
SD2006	59	土師質	皿		口:9.0 高:1.3 底:4.8	赤色粒	橙5YR6/8	橙5YR6/8		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		
SD2006	60	土師質	皿		口:6.8 高:1.4 底:5.9	細	灰白5Y8/1	灰白5Y8/1		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り 内底:仕上げナデ		口縁端部に2次焼成の痕跡
SD2006	61	土師質	皿		口:10.0 高:1.5 底:7.2	微砂粒	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1		内外:摩滅		口縁端部に2次焼成の痕跡
SD2006	62	土師質	皿		口:8.7 高:1.5 底:6.0	微砂粒	橙5YR7/6	橙5YR7/6		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		
SD2006	63	土師質	皿		口:9.3 高:1.3 底:6.5	細	橙5YR7/8	橙5YR7/8		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		
SD2006	64	土師質	皿		口:11.0 高:1.9 底:8.1	微砂粒	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1		外面:摩滅 内面:ロクロナデ		口縁端部に2次焼成の痕跡
SD2006	65	土師質	皿		口:11.0 高:1.6 底:7.3	細	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り 内底:仕上げナデ		口縁端部に2次焼成の痕跡
SD2006	66	土師質	皿		口:10.0 高:1.7 底:6.3	細	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3		外面:ロクロナデ 外底:回転糸切り,板状痕有		
SD2006	67	土師質	皿		口:12.3 高:2.4 底:7.6	微砂粒	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1		内外:ロクロナデ 外底:摩滅		
SD2006	68	土師質	皿		口:11.3 高:1.7 底:8.2	微砂粒	灰白10YR8/1	灰白10YR8/1		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り 内底:仕上げナデ		
SD2006	69	土師質	皿		口:11.0 高:1.9 底:6.4	微砂粒	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		
SD2006	70	土師質	皿		口:9.2 高:1.2 底:5.8	細	橙5YR7/8	橙5YR7/8		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		
SD2006	71	土師質	皿		口:9.4 高:1.6 底:6.4	細	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		内外面に有機物付着
SD2006	72	土師質	皿		口:10.2 高:1.9 底:6.6	細	灰白7.5Y8/1	灰白7.5Y8/1		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		内外面に有機物付着, 2次焼成の痕跡
SD2006	73	土師質	皿		口:8.8 高:1.2 底:5.6	微砂粒	橙5YR7/6	橙5YR7/6		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		
SD2006	74	土師質	皿		口:12.0 高:2.1 底:6.5	細	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		
SD2006	75	土師質	皿		口:10.7 高:1.5 底:7.5	微砂粒	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y8/1		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		口縁端部に2次焼成の痕跡
SD2006	76	土師質	焼塩壷蓋		口:6.7 高:1.9	砂粒		外面:橙2.5YR7/8 内面:橙2.5YR6/8		内面:摩滅(ナデ)		堺産
SD2006	77	土師質	焼塩壷蓋		口:6.8 高:2.0	細	橙2.5YR6/8	橙2.5YR6/8		内面:布目,ヨコナデ		
SD2006	78	土師質	焼塩壷蓋		口:8.0 高:1.9	微砂粒	橙2.5YR6/8	橙2.5YR6/8		内外口縁:ナデ 内外底:布状痕		堺産
SD2006	79	瓦質	羽釜			微砂粒		外面:暗灰N3/0 内面:灰N5/0		鍔部:ナデ,以下ハケメ 内面:ナデ・ハケメ・指押さえ		

第259図　SD2006出土遺物観察表



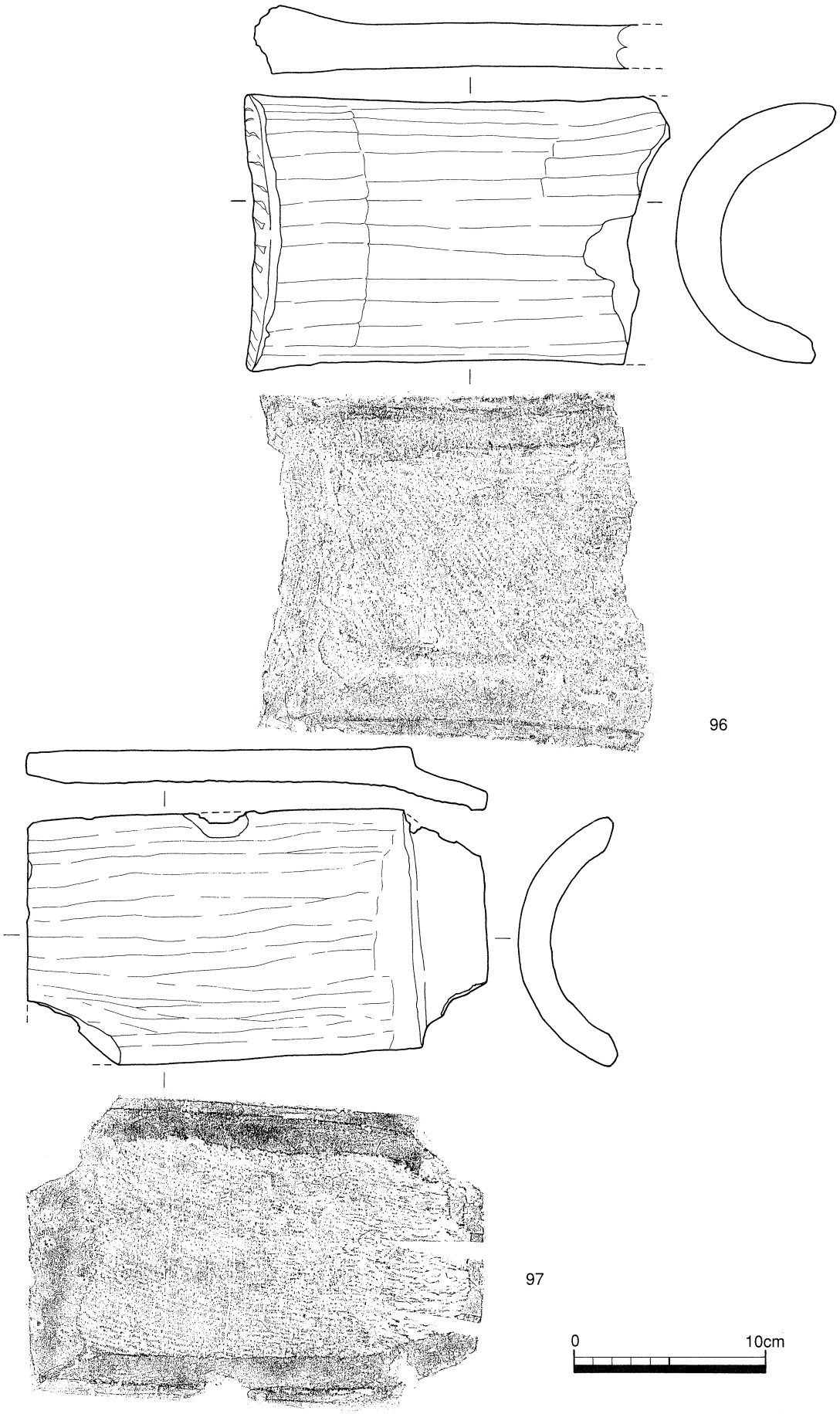
遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SD2006	80	土師質	焼塩壷	堺	口:6.2 高:10.0 底:5.2	微砂粒	橙2.5YR6/8	橙2.5YR6/8		内外:ナデ		輪積成形「御壷塩師堺湊伊織」
SD2006	81	土師質	焼塩壷	堺	口:5.3 高:8.6 底:3.7	微砂粒	橙2.5YR6/8	橙2.5YR6/8		内外:ナデ		輪積み成形
SD2006	82	土師質	焼塩壷	堺	口:6.0 高:4.5 底:9.8	微砂粒	橙2.5YR6/8	橙2.5YR6/8		外面:剥離 内面:ナデ		輪積成形
SD2006	83	土師質	焼塩壷	堺	口:5.6 高:8.4 底:3.0	微砂粒	橙2.5YR7/8	橙2.5YR7/8		外面:剥離 内面:ナデ・板ナデ・布目		輪積成形
SD2006	84	土師質	焼塩壷	堺	口:5.1 高:8.5 底:4.0	微砂粒	橙2.5YR7/8	橙2.5YR7/8		外面:剥離 内面:ナデ		輪積成形
SD2006	85	土師質	焼塩壷	堺	底:4.5	微砂粒	橙2.5YR6/8	橙2.5YR6/8		外面:ナデ		一部に布目、輪積成形
SD2006	86	土師質	焼塩壷	堺	口:5.3 高:8.4 底:5.1	砂粒		外面:橙5YR7/8 内面:橙2.5YR6/8		内面:ナデ		輪積成形
SD2006	87	土師質	焼塩壷	堺	口:5.2 高:8.6 底:3.2	砂粒		外面:橙2.5YR7/6 内面:橙2.5YR6/8		外面:剥離 内面:ナデ		輪積成形
SD2006	88	土師質	焼塩壷	堺	口:6.0	微砂粒	橙2.5YR6/6	橙2.5YR6/6		内外:ナデ		輪積成形
SD2006	89	土師質	焼塩壷	堺	底:4.5	砂粒含む	橙2.5YR7/6	橙2.5YR7/6		内面:板ナデ、布目痕		輪積成形
SD2006	90	土師質	焼塩壷	堺	底:4.2	砂粒		外面:橙5YR7/6 内面:2.5YR6/8		内面:布目痕		輪積成形

第260図　SD2006出土遺物実測図・観察表（その8）



遺構名	報文番号	遺物種別	法量(cm)			胎土	色調		調整		焼成	備考
			長さ(現存長)	厚さ	幅(現存幅)		断面	器面	内面	外面		
SD2006	91	軒丸瓦	—	—	—	砂礫	灰白2.5GY8/0	暗青灰5PB4/1			良	巴 被熱
SD2006	92	軒丸瓦	—	2.1	—	砂粒	灰白7.5Y7/1	灰N4/0			良	巴 被熱
SD2006	93	軒丸瓦	2.5	—	—	砂礫	灰白2.5GY8/0	暗灰N3/0			良	巴
SD2006	94	軒平瓦	5.3	1.6	16.7	砂粒	灰N5/0	灰M5/0	—	—	良	—
SD2006	95	軒平瓦	8.6	1.4	21.8	砂礫	灰N4/0	灰N4/0	—	—	良	被熱
SD2006	96	丸瓦	22.0	2.2	14.1	砂礫・石	灰白10YR7/1	(表)灰N6/0 (裏)灰N5/0	布目 コビキA		良	
SD2006	97	丸瓦	23.6	2.0	12.8	砂礫少	灰白5Y7/1	灰N4/0	コビキB ゴザ状圧痕	板ナデ	良	被熱

第261図　SD2006出土遺物実測図・観察表（その9）



第262図　SD2006出土遺物実測図・観察表（その10）

SD2004・SD2005（第263図）

A区，第２面で確認した東西方向の溝状の遺構である。検出した標高は共に1.25m前後，底面の標高は共に1.05m前後を測る。検出長はSD2004が約2.7m，SD2005が3.5mで，検出幅は共に1.0m前後を測る。

扁平な石材が一部底面に認められ，周辺にも同規模の石材が散在しており，本来石列状の遺構であったと考えられる。

共にSA2001の東半部北面に位置し，約1.6mの間隔で平行する配置から，SA2001との関連が推察される。直下に，同様の配置でSD2006が存在しこれより後出することから，18世紀代の所産と考えられる。

SD2004・SD2005出土遺物（第264図）

遺物の出土量は，コンテナ1/2程であった。

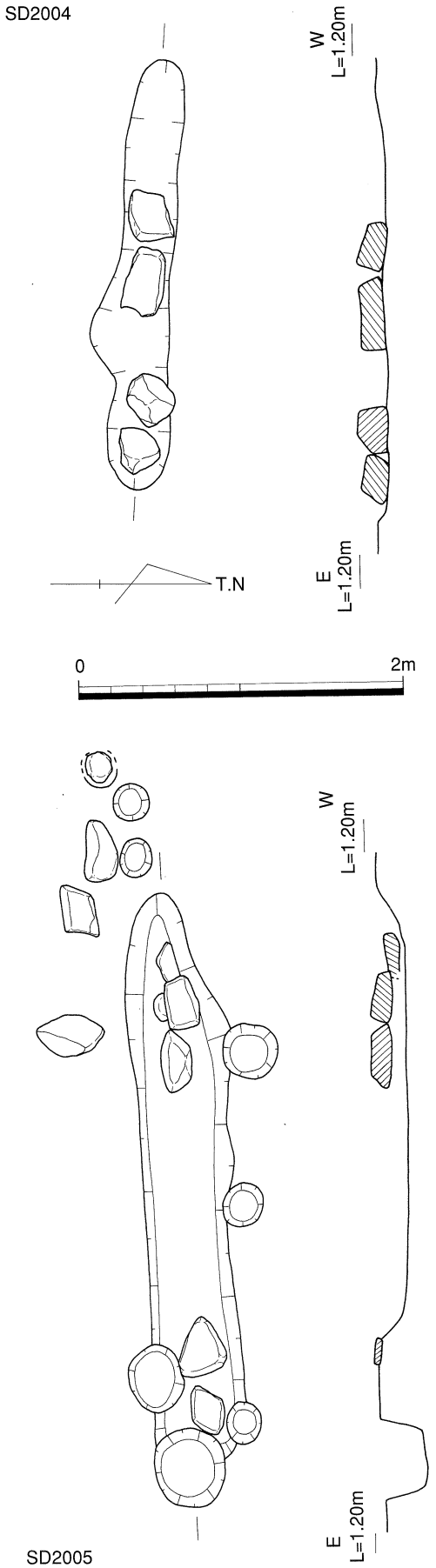
１は肥前系磁器皿である。菊花形の皿で，同形のものがSD2010（第241図１）に認められる。２・３は，備前擂鉢である。体部外面に削り調整は認められない。４～６は，土師質土器皿である。７は輪積成形の焼塩壺である。８はミニチュアである。

SP2294（第250図）

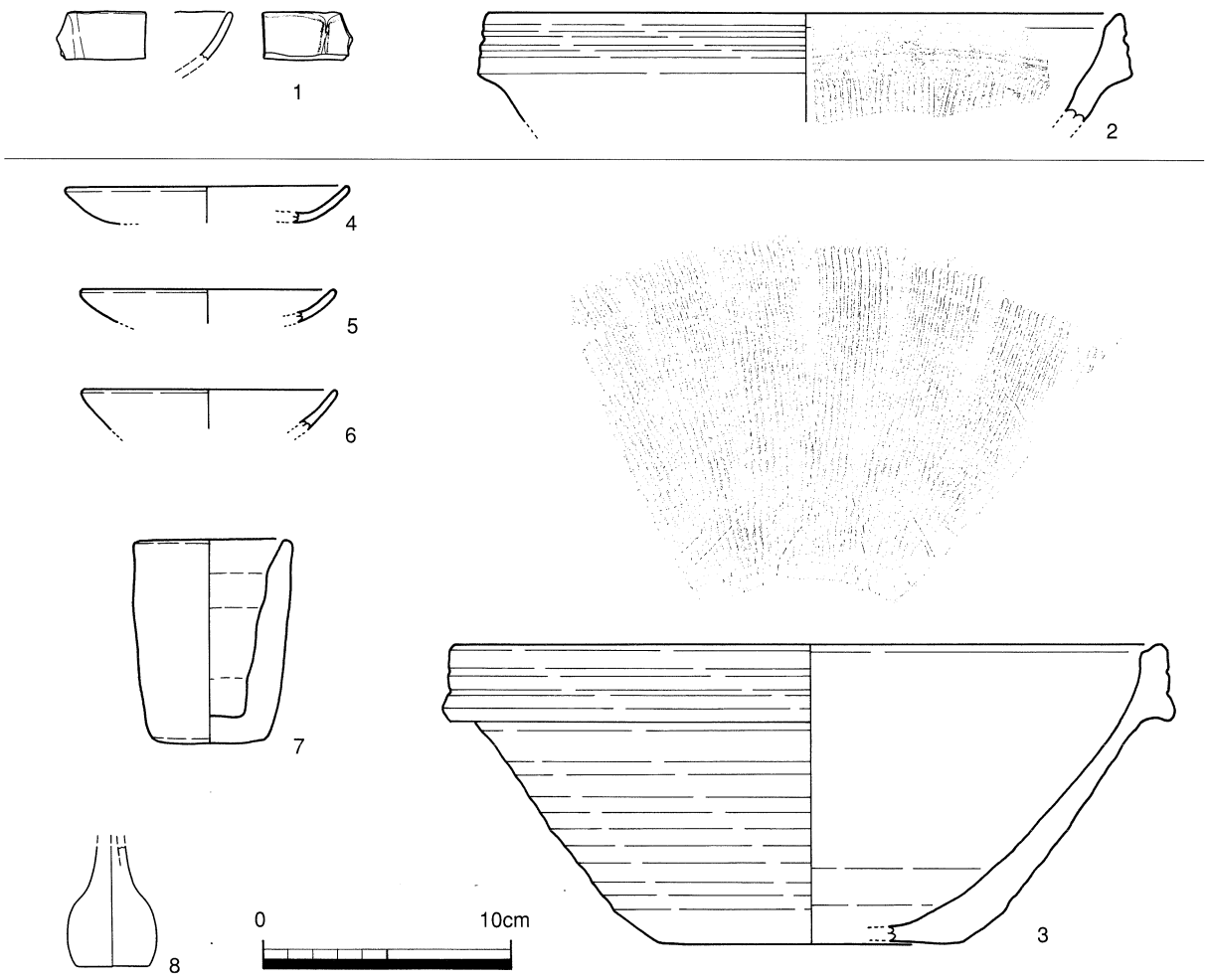
A区中央部，第２面で検出した遺構である。検出した標高は1.27m前後，底面の標高は1.15m前後を測る。径約0.4mの円形と想定されるが，北半をSD2006に壊される。底面からは，埋甕として埋設されていたと考えられる唐津鉢が半裁された状態で出土している。

SP2294出土遺物（第265図）

５は京・信楽系陶器碗である。６は肥前系陶器鉢。二彩手のもので，口縁部頸部に獣面が付けられる。見込には砂目が認められる。



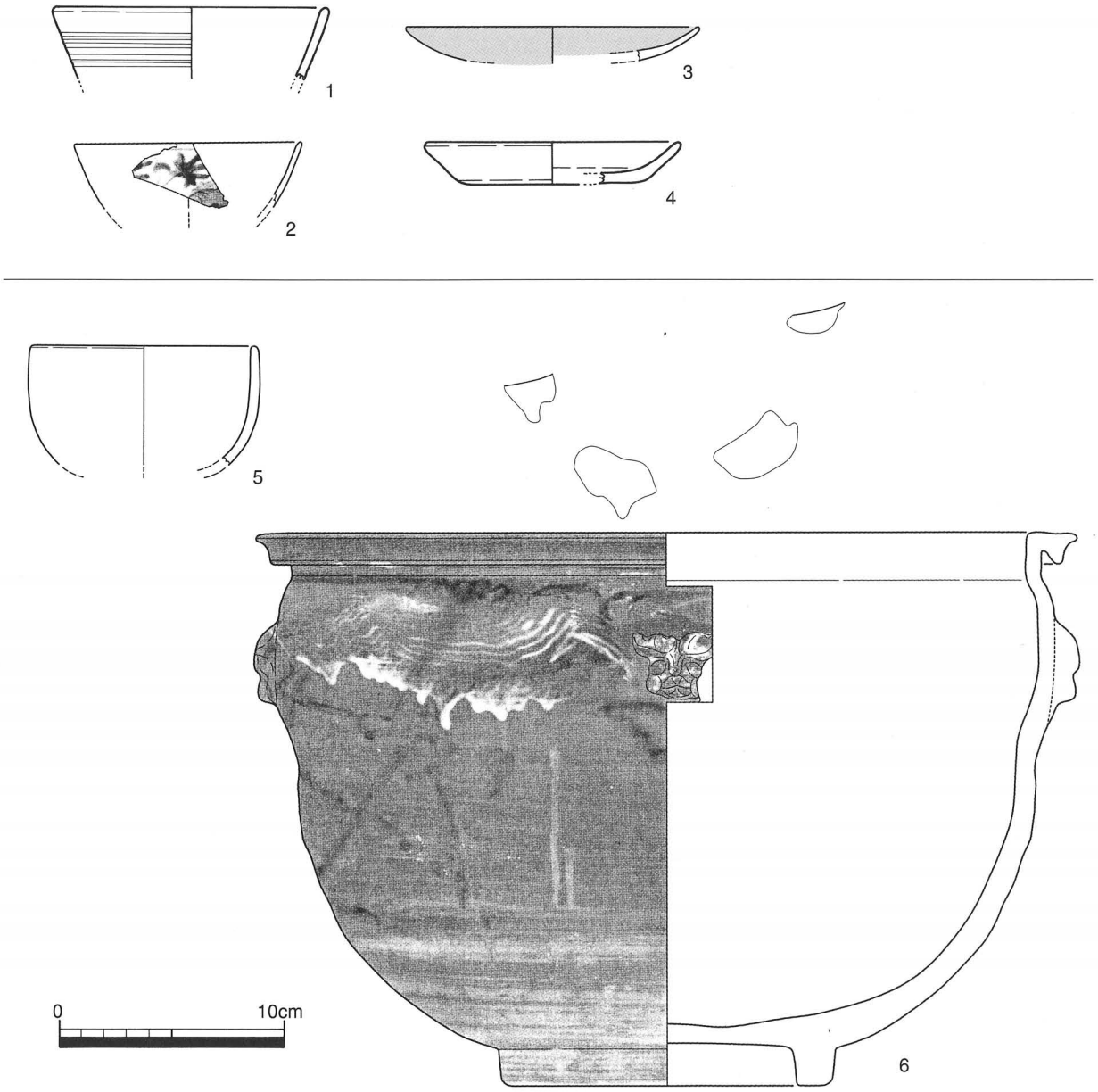
第263図　SD2004・2005平面・断面図



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SD2004	1	磁	皿	肥前		微	灰白色	内外;透明釉	呉須:淡青色			
SD2004	2	陶	擂鉢	備前	口:25.2	微砂粒		外面:赤7.5R4/6 内面:暗赤褐7.5R3/3		内外:ロクロナデ	近世Ⅲ期	

遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SD2005	3	擂鉢	擂鉢	備前	口:28.2 高:11.9 底:12.2	微砂粒	赤10R5/6	赤10R5/6		内外:ロクロナデ	近世Ⅲ期	
SD2005	4	土師質	皿		口:11.1	中		外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:浅黄橙10YR8/3		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		
SD2005	5	土師質	皿		口:10.1	中	灰白10YR8/1	灰白10YR8/1		内外:ナデ		
SD2005	6	土師質	皿		口:10.1	砂粒少	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2		内外:ロクロナデ		
SD2005	7	土師質	焼塩蓋		口:5.9 高:8.1 底:4.5	微砂粒	橙2.5YR7/8	橙2.5YR7/8				輪積成形
SD2005	8	土師質	ままごとセット		底:2.90	中	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2				

第264図　SD2004・2005出土遺物実測図・観察表



遺構No.	法文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
SK2028	1	陶	碗		口:12.0	細	灰白5Y7/1	褐10YR4/6				
SK2028	2	磁	碗底部	肥前	口:10.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色			
SK2028	3	磁	皿	肥前	口:12.90	微	灰白色	内外:明褐灰5G7/1			大橋Ⅲ期	青磁
SK2028	4	土師質	皿		口:11.0 高:1.9 底:8.4	精良	浅黄橙10YR8/3	浅黄橙10YR8/3		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り 内底:仕上げナデ		口縁の一部に煤付着
SP2294	5	陶	碗	京・信	口:9.80	細	浅黄2.5Y8/3	内外:浅黄2.5Y7/3			大橋Ⅲ期	
SP2294	6	陶	鉢	肥前	口:36.3 高:24.5 底:13.9	細	灰N6/0	黒褐7.5YR3/2	上掛:緑・灰白10YR8/1 (白泥)黄褐10YR5/6		17c後半	二彩

第265図　SK2028・SP2294出土遺物実測図・観察表

SK2028（第249図）

A－C区，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.08m，底面の標高は0.82m前後を測る。検出長は東西方向で約0.8m，南北方向で約0.9mを測る。平面は円形と推定されるが，東部がSD2006に壊されている。所属時期は，SD2006に先行することから17世紀後半を中心に考えられる。

SK2028出土遺物（第265図）

１は肥前系陶器碗である。２・３は肥前系磁器。碗（２），青磁皿（３）がある。４は土師質土器皿である。

SX2002（第11・242図）

C区，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.05～1.24m，底面の標高は1.04m前後を測る。検出長は約4.2m，検出幅は最大2.5mを測る。平面は，やや不整形な長方形である。断面の形状は，底面がほぼ平坦で，器壁の下半は急傾斜であるが上位では緩やかとなる。C区西部で観察された焼土を切り込んで開削されており，底面には石材が散乱して認められた。所属時期は，焼土に後出することから18世紀前葉以降の所産と推定される。

SX2002出土遺物（第267図）

出土遺物は少量でコンテナ1/4以下である。１は景徳鎮窯系青花皿である。高台内にカンナ痕が放射状に認められる。２は漳州窯系青花碗である。３は肥前青磁碗。明緑色の釉調である。４は肥前青磁皿。濃い青緑色の釉で，内面に陰刻文様を施す。５は土師質土器皿である。胎土は灰白色を呈する。６は碁石である。

SX2003（第266図）

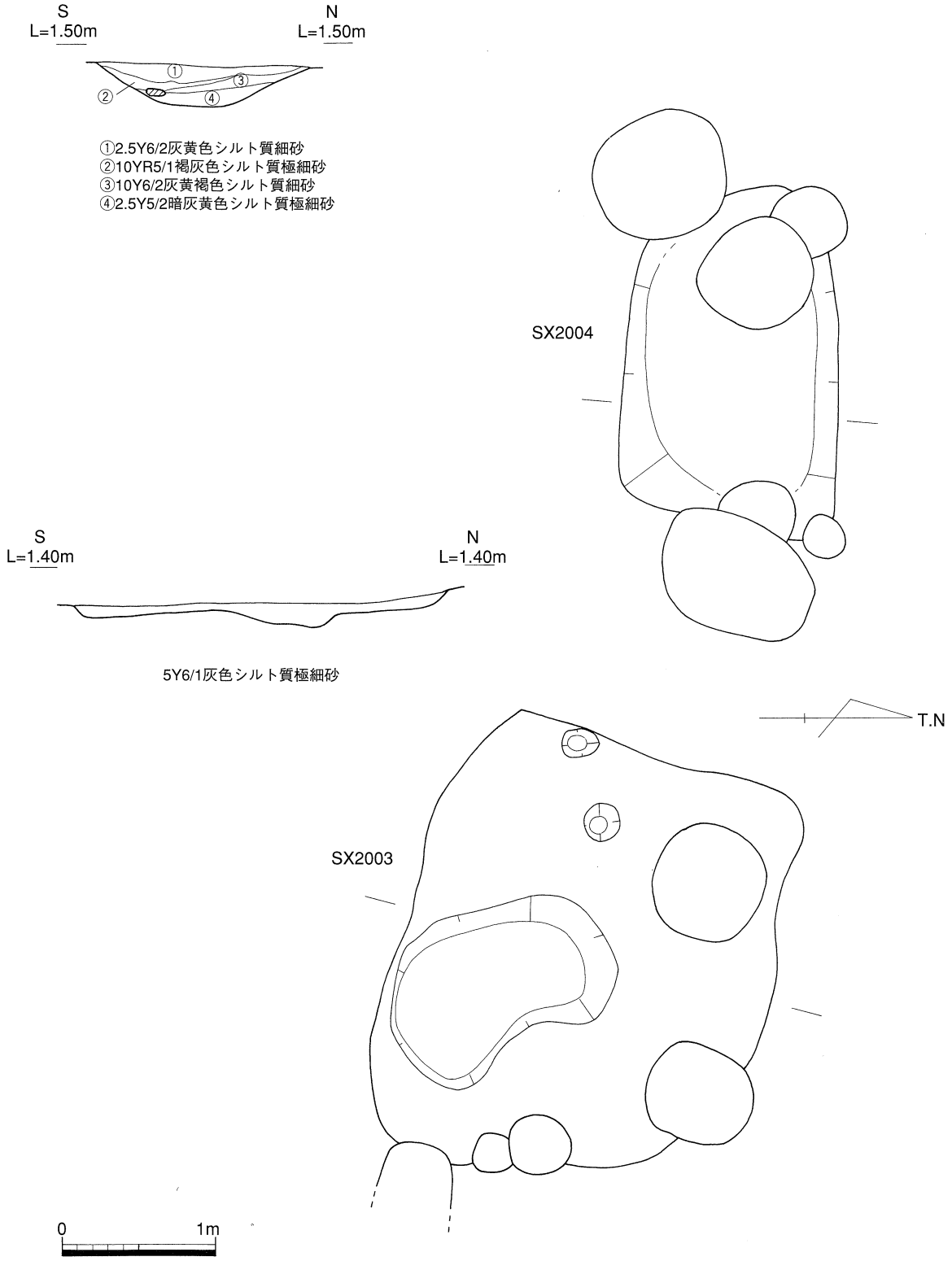
C区，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.15～1.24m，底面の標高は1.03～1.12mを測る。検出長は東西方向に約2.7m，南北方向に約2.4mを測る。平面は，やや不整形な方形である。断面の形状は船底形で，底面の中央部がやや窪む。重複関係でSA2001のP－７，P－８に先行する。出土遺物はないが，SA2001との関連及び同様の様相となるSX2004から，17世紀後葉～18世紀前葉に推定される。

SX2004（第266図）

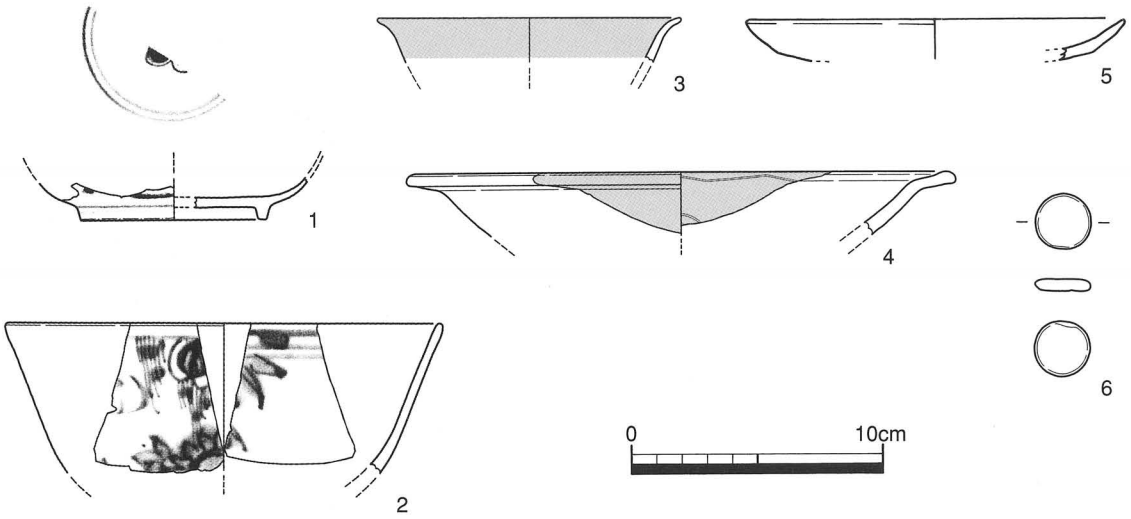
C区，第２面で確認した遺構である。検出した標高は1.13～1.18m，底面の標高は0.90m前後を測る。検出長は約2.1m，検出幅は約1.4mを測る。平面は，やや不整形な方形である。断面の形状は船底形で，埋土は４層に分層され，灰黄色或は褐灰色のシルト質土がほぼ水平状に堆積する。重複関係でSA2001のP－９，P－10に先行する。所属時期は，後出のSA2001との関連及び出土遺物から，17世紀後葉～18世紀前葉を中心とした所産と考えられる。

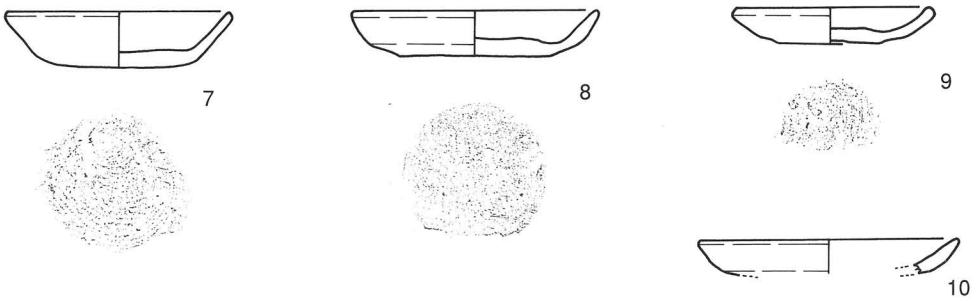
SX2004出土遺物（第267図）

出土遺物は少量で，土師質土器皿のみ図化できた。７～10は，土師質土器皿である。器形から，佐藤編年の様相３～５の所産と考えられる。



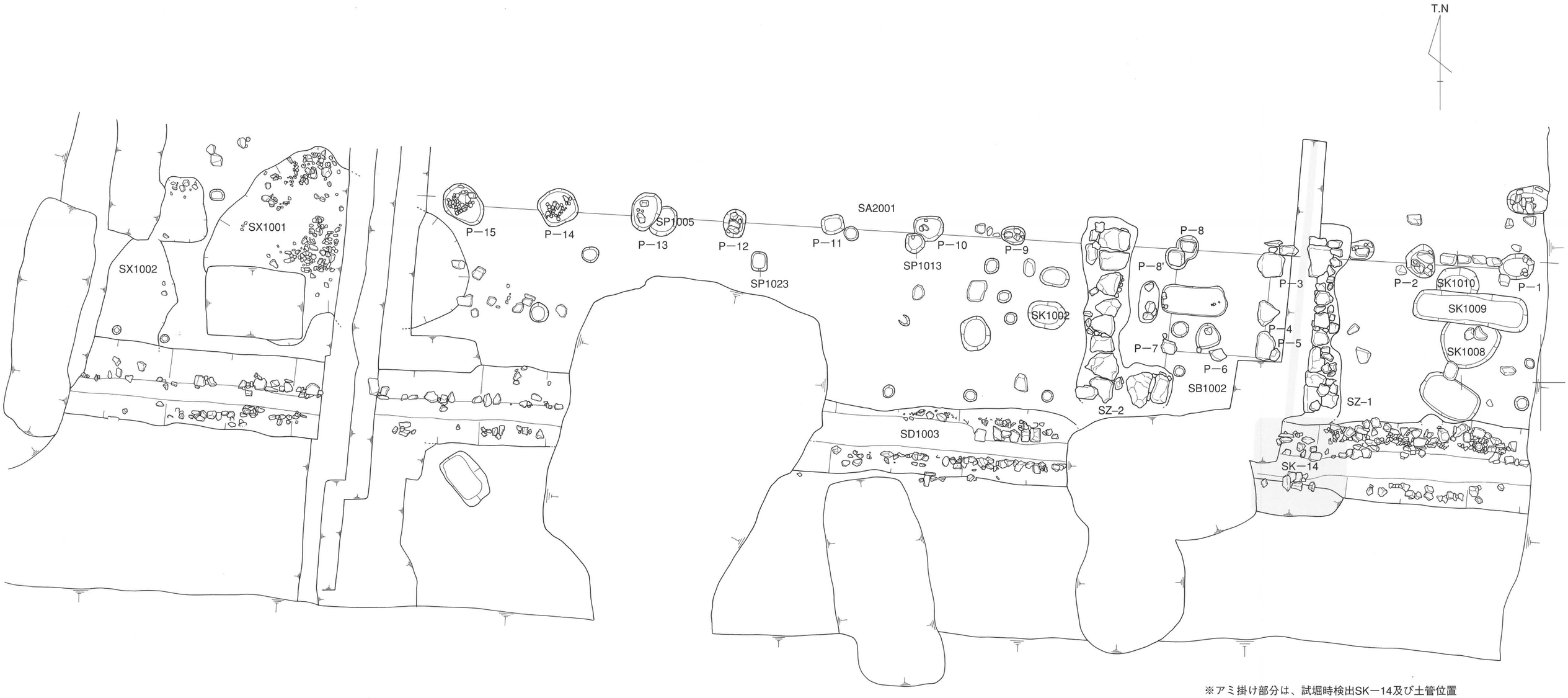
第266図　SX2003・2004平面・土層図





遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
SX2002	1	磁	皿底部	中国	底:7.25	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・明青色			高台内にカンナ痕 畳付に砂粒付着
SX2002	2	磁	碗	中国	口:17.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色			漳州窯
SX2002	3	磁	碗		口:12.00	微	灰白色	内外:明緑灰7.5GY7/1				青磁碗
SX2002	4	磁	鉢	中国	口:201.70	微	灰白色	内外オリーブ灰10Y4/2				青磁
SX2002	5	土師質	皿			中	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2		内外:ロクロナデ		
SX2002	6	石	碁石		全長:2.20 厚:0.45		黒					
SX2004	7	土師質	皿		口:8.7 高:2.2 底:5.2	赤色粒	浅黄橙7.5YR8/4	浅黄橙7.5YR8/4		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		
SX2004	8	土師質	皿		口:9.6 高:1.8 底:6.0	中	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR8/3		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り 内底:仕上げナデ		
SX2004	9	土師質	皿		口:7.5 高:1.5 底:4.1	微砂粒	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		口縁内外に被熱痕
SX2004	10	土師質	皿		口:10.2	中	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6		内外:ロクロナデ		

第267図　SX2002・2004出土遺物実測図・観察表



※アミ掛け部分は、試堀時検出SK−14及び土管位置

第268図　第１面屋敷境平面図

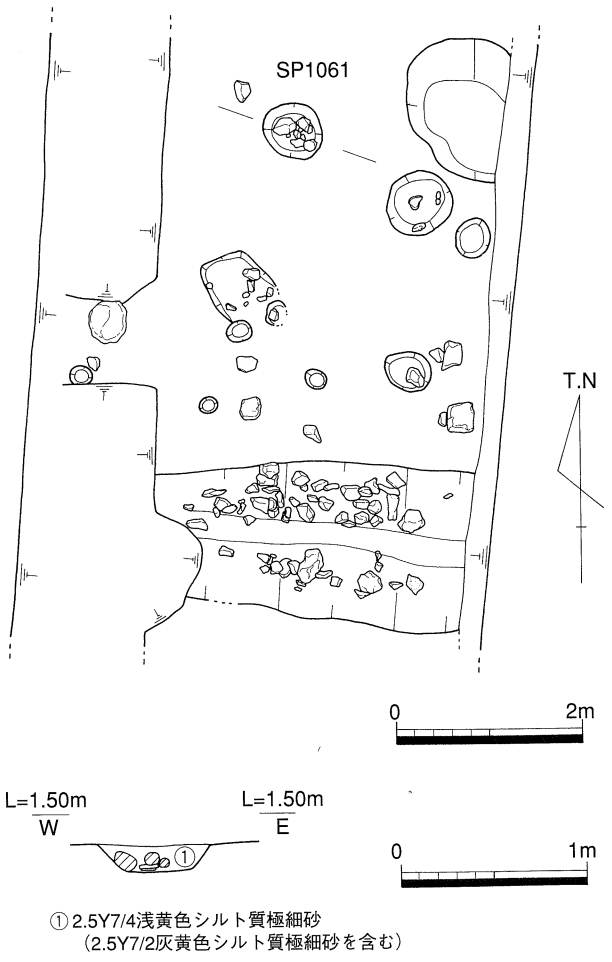
第１面Ａ－Ｃ区屋敷境遺構（第268図）

試掘調査で確認された礎石（SB1002Ｐ－３～５）をはじめ，調査地の南東部に建物の基礎部分（SB1002）を検出した。この建物（SB1002）の北面側の両脇には，礎石痕が東西方向に並び（SA1001），途中，撹乱及び調査対象地外を挟むが調査地の西部，Ｅ区まで認められる（SP1061）。南面では，SA1001に平行する溝（SD1003）が東西方向に検出された。溝（SD1003）の南部は，当面での遺構の確認は行っていないが，固く締まる砂及びシルト質土の互層が築地状に認められ，溝（SD1003）以北の整地状況と明瞭に異なって観察された。以上の状況から，東西方向の道路及び区画溝及びそれを南面とした屋敷地が考えられ，絵図に該当する屋敷割りから松平大膳家上屋敷跡地を具体的に想定できることとなった。

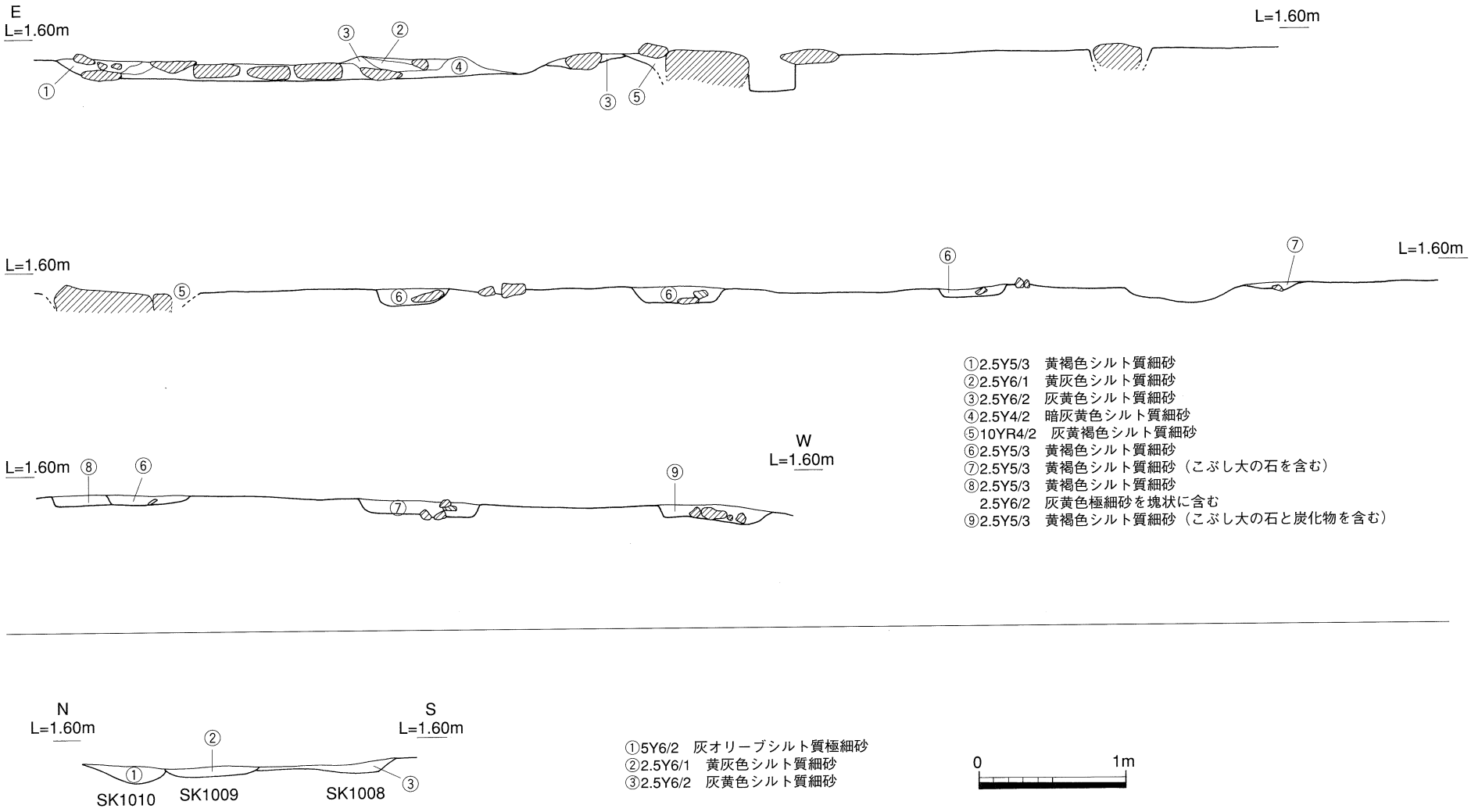
SA1001・SB1002（第268～271図）

Ａ－Ｃ区南部，第１面で確認した礎石建物である。検出した標高は1.44～1.56ｍを測る。SA1001は何れも礎石は遺存していないが，玉砂利を詰め固めた埋土で，一定の規模を有することから礎石の痕跡として考えられる。Ｃ区の西部で礎石列は終わるが，後出するSX1001に壊された状況が観察でき，またＥ区で屋敷境の溝（SD1003）から同距離に位置するSP1061も同様の礎石痕と考えられ，西方へ伸びる可能性が考えられる。またSA1001と北面あるいは南面で対応する礎石痕は認められないが，SD1003が屋敷境の石組み溝であることを考慮すれば，同溝の北岸を建物の基礎とした可能性が高いと考えられる。

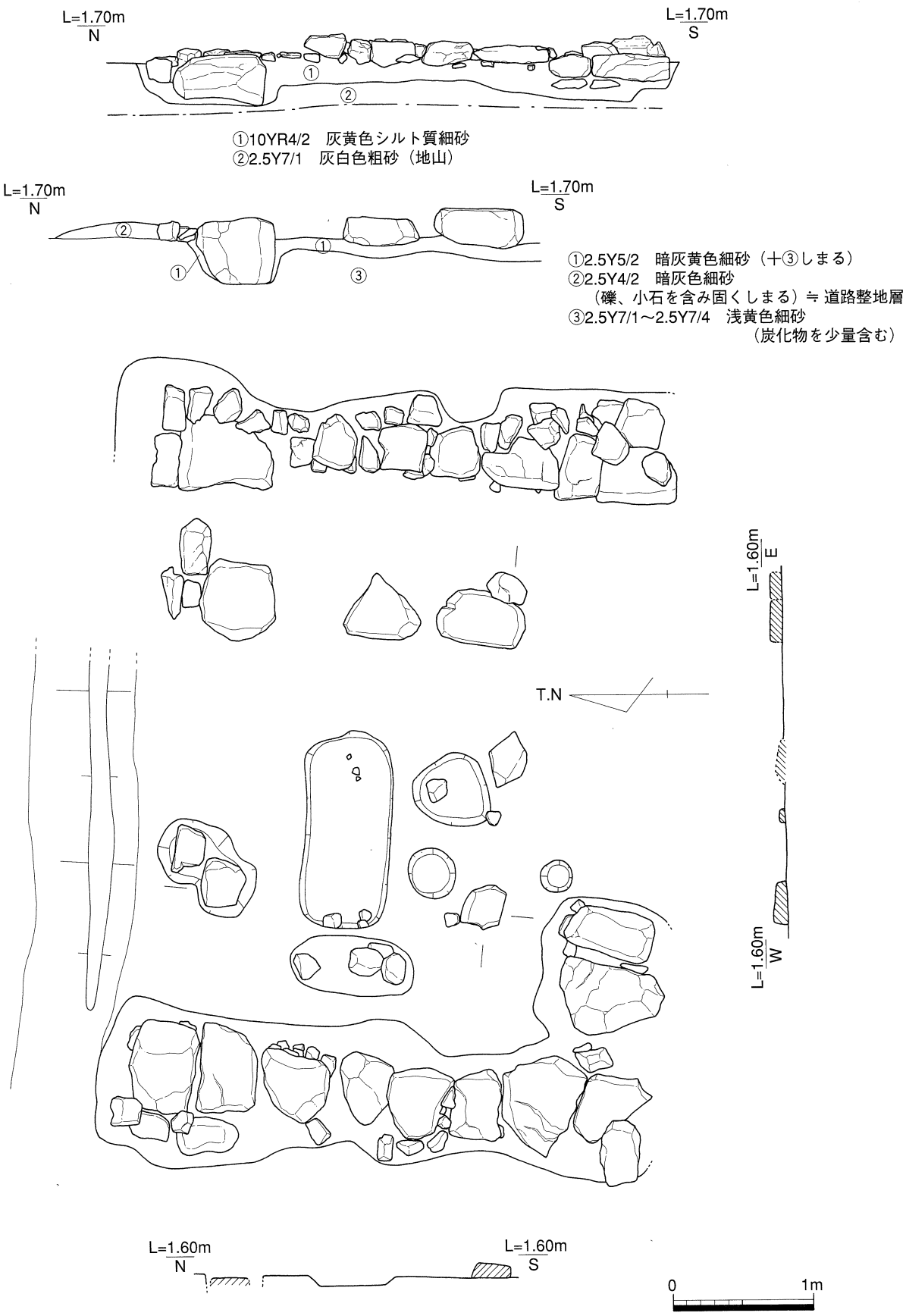
SB1002は，西及び東面側に布掘りをし大振りの石材を並べるもので，重量のある建造物の土台基礎部であることが考えられる。構造や屋敷内での配置関係からは土蔵にも考えられるが，石材は向かい合うように並べられており，また北面及び南面には石列が認められないことから，門と想定される。また両脇に配置されるSA1001の存在から，長屋門であったものと考えられる。SB1002は，北面に敷居上に土を固めた部分が認められる他，周辺よりやや高い位置に構築されている。西側の石列（SZ－２）がＬ字となっており，また東側の石列（SZ－１）の内側に礎石（Ｐ－３～５）が南北に並ぶもので，これらの内側，２間分が出入り口に相当すると考えられる。礎石列（Ｐ－３～５）は，第２面の礎石痕と配置が一致するため，既存のものを利用した可



第269図　第１面Ｅ区遺構平面・断面図



第270図　SA1001，SK1009土層図



第271図　SB 1002平面・断面土層図

能性も考えられる。また調査時，礎石列より後出した掘り込みと判断し記録を行っていないが，礎石列（P－3～5）とSZ－1の間に土管（土師質で外面に粗い刷毛調整）が設置されていた。土管は，試掘時に確認された漆喰溜り（SK－14，幕末所産）に接続されており，SD1003内に枡が存在した可能性がある。このことからSZ－1と礎石列（P－3～5）の間は出入り可能な空間であった可能性も考えられ，潜戸が推定される。またSB1002の東面は，SD1003の北岸に基礎部分と考えられる割石が密集し認められ，また北面となるSA1001の下面にも石列が設置されており，SB1002の西面とは異なる構造の建物が推定され，潜戸との関係からは番小屋の存在も考えられる。

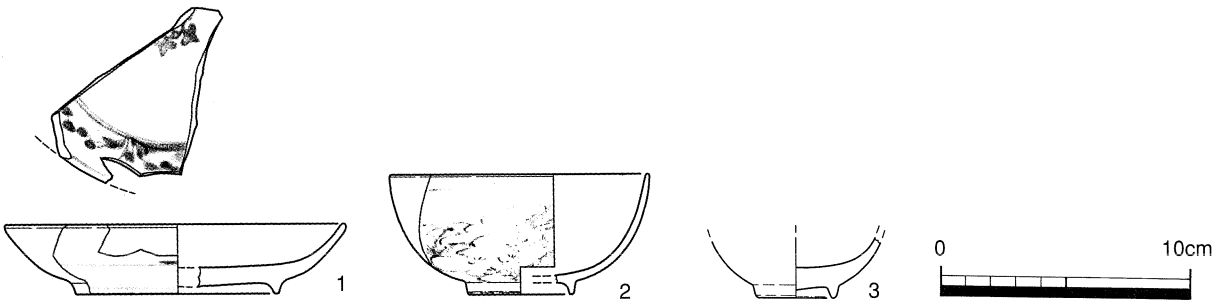
所属時期は，19世紀前葉に屋敷内での画期（SX2008埋没，上水施設SE3003・SD3011の廃絶等）が認められ，当期から屋敷境となるSD1003の廃絶（明治27年）までが想定される。

SZ－1・SA1001出土遺物（第272図）

1は肥前系磁器皿である。SZ－1より出土した。2・3は肥前系磁器碗で，SA1001を構成する柱穴より出土した。2の外面には，色絵が認められる。

SB1002検出時出土遺物（第273図）

1・2は肥前系陶器。碗（1），鉢（2）がある。3～7は，肥前系磁器である。碗（3・4），小坏（5・6）蓋（7）がある。8～10は備前。擂鉢（8・10），灯明皿（9）。11は産地不明陶器甕。12は軟質施釉陶器。黄釉を施し，珉平焼の可能性が考えられる。

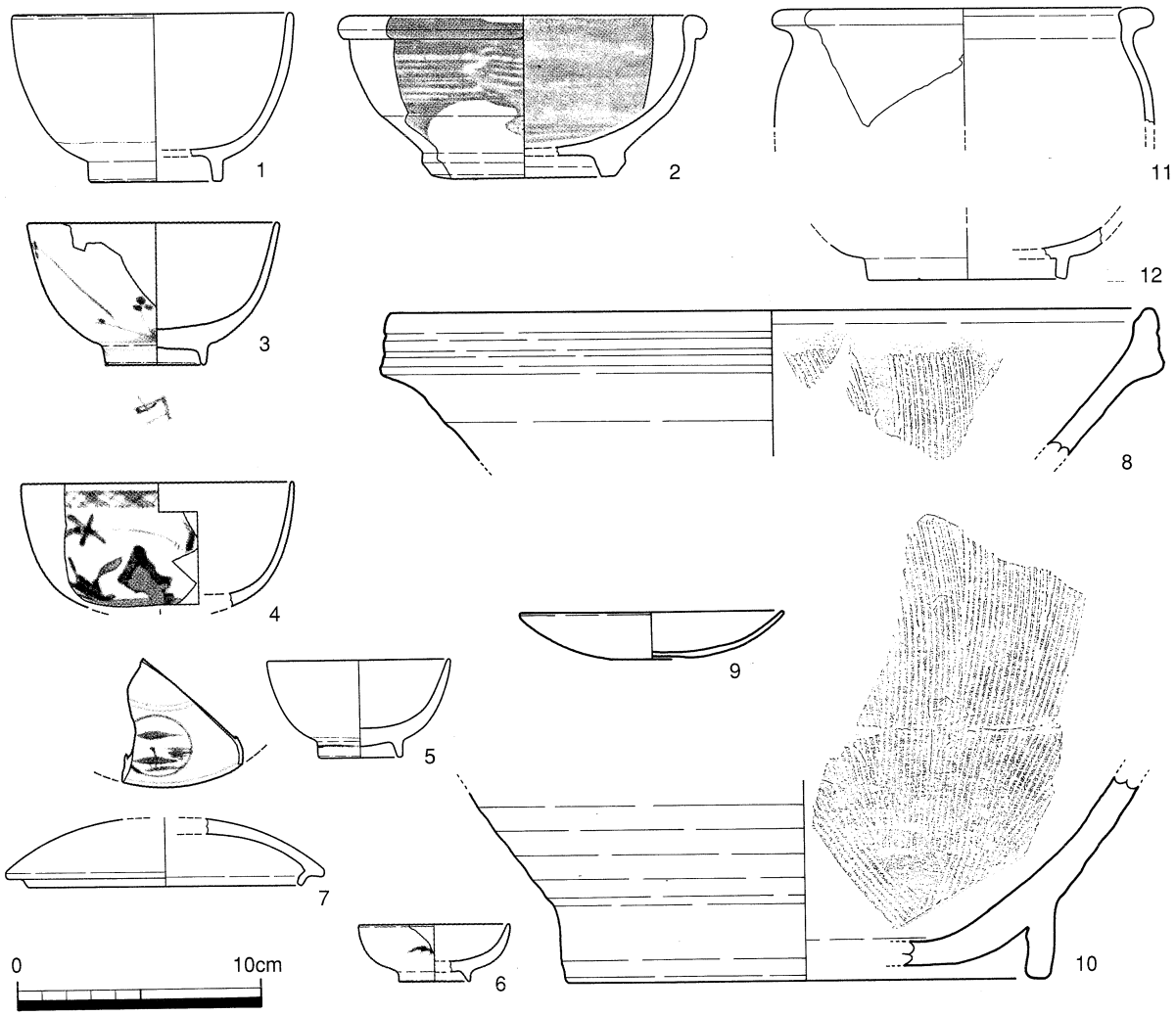


遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1（胎土）	色調2（釉薬、内外色調）	色調3（呉須、上絵）	調整	製作年代	備考
石列下	1	磁	皿	肥前	口:13.60 高:2.75 底:8.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須・淡・暗青色	内面:五弁花	大橋Ⅳ期	
A1001P	2	磁	碗	肥前	口:10.20 高:4.00	微	灰白色	内外:透明釉	上絵:赤・黒		18c前半	柿右衛門
A1001P	3	石	碗底部	肥前	底:3.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色			

第272図　SA1001・SZ－1出土遺物実測図・観察表

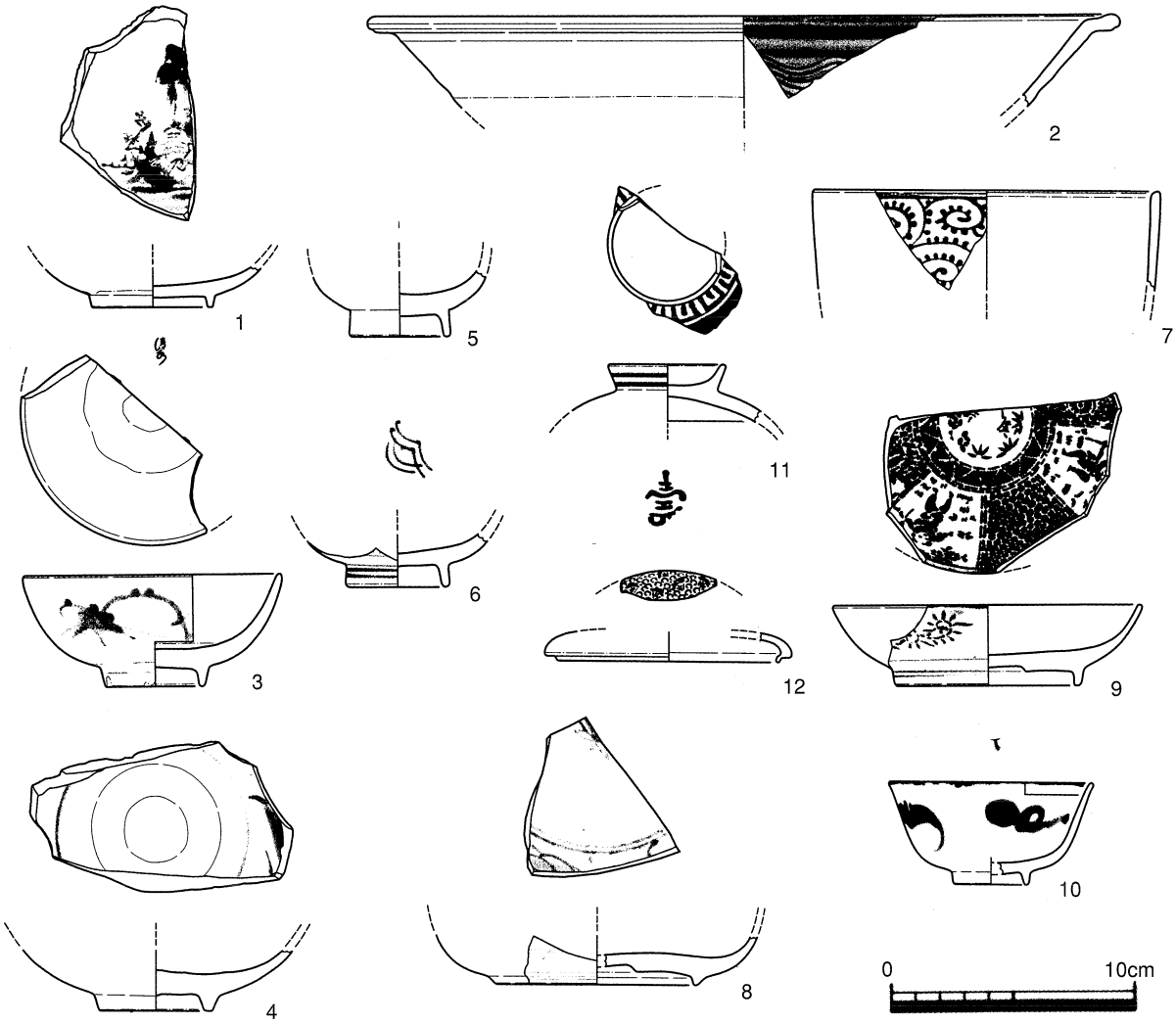
SD1003（第268・269図）

第1面A・C・E区で確認した東西方向の溝跡である。屋敷境に相当し，道路の側溝と考えられる。検出長はA－C区間で約31m，E区で約3.5mを測り，調査対象外範囲を含めると総延長で約52mとなる。検出幅は1.2m～1.9mである。主軸はN－86°－Wを示す。検出した標高は1.33～1.56mである。底面の標高はA区で0.96m前後，C区で0.98m前後，E区で1.00m前後を測るが，排水の方向は明確ではない。断面はU字形だが側壁の下端がL形となり，中央部はやや窪む。底面では扁平な石材が両壁に沿って断続的に遺存して認められた。屋敷側の壁面には裏込めに用いたと考えられる割石や礫が一部で観察された。埋土は多量の瓦片及び石材を含み，溝跡はかなり壊され廃絶したと考えられる。瓦片が多く認められていることから，同時に屋敷境の施設も壊したと推定される。この屋敷境は少なくとも明治27年の県庁庁舎建設時には失われており，当期が遺構廃絶時期の下限となる。



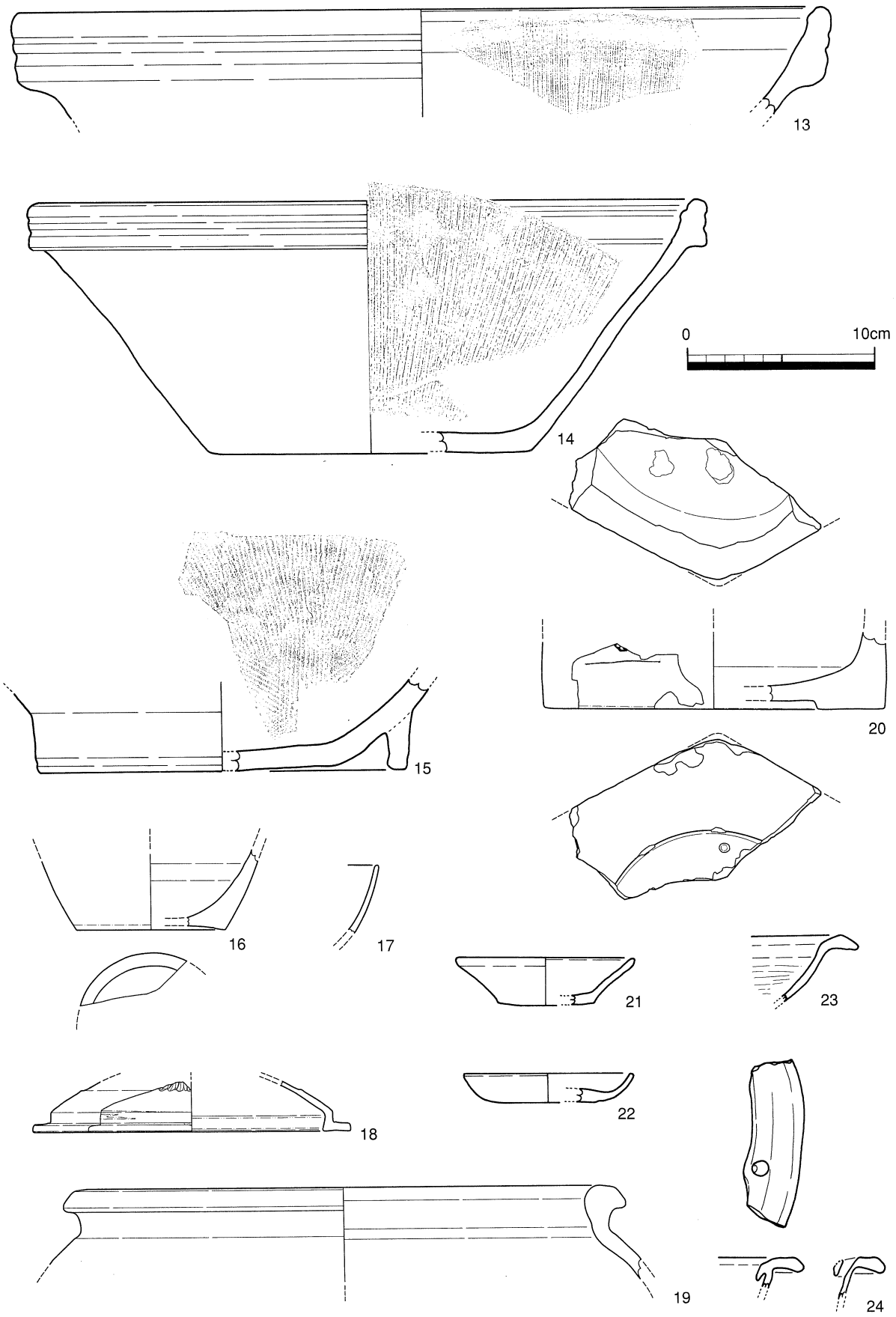
遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
A区石列検出中	1	陶	碗	肥前	口:5.60 高:6.80 底:5.10	細	灰白2.5Y8/2	内外:明黄褐2.5Y7/6	高台内・外下・口紅:極暗褐7.5YR2/3			
A区石列検出中	2	陶	鉢	肥前	口:15.00 高:6.60 底:7.20	細	赤橙10R6/8	内外:明赤灰10R7/1		内外:直線的な刷毛目	大橋Ⅳ期	刷毛目唐津
A区石列検出中	3	磁	碗	肥前	口:10.15 高:5.70 底:3.95	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色	外面:草花	大橋Ⅳ期	くらわんか 高台内に銘款有
A区石列検出中	4	磁	碗	肥前	口:11.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色	外面:四方襷	大橋Ⅳ期	
A区石列検出中	5	磁	小杯	肥前	口:7.40 高:3.95 底:1.50	微	灰白色	内外:透明釉				
A区石列検出中	6	磁	碗	肥前	口:6.00 高:2.30 底:2.80	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色	外面:笹		紅猪口
A区石列検出中	7	磁	蓋	肥前	最大径 :13.00 底:11.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色			受部外面にアルミナ砂付着
A区石列検出中	8	陶	擂鉢口縁部	備前	口:30.8	微砂粒	赤10R4/6	赤10R4/6		内外:ロクロナデ	近世Ⅲ期	
A区石列検出中	9	陶	灯明皿	備前	口:10.7 高:1.9	細	暗赤10R3/6	暗赤10R3/6		内外:ロクロナデ 外底:ケズリ		口縁内外に煤付着
A区石列検出中	10	陶	擂鉢底部	備前	底:18.1	微砂粒	赤10R5/6	赤10R5/6		外面:ケズリ 外底:ケズリ	近世Ⅲ期	
A区石列検出中	11	陶	甕口縁部		口:15.50	細	浅黄橙10YR8/3	内外:黒10YR2/1				断面に被熱痕
A区石列検出中	12	陶	底部	琨平	底:8.00	細	灰白2.5Y8/1	内外:明黄褐10YR6/8				

第273図　SB1002検出中出土遺物実測図・観察表



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SD1003	1	陶	皿		底:4.80	中	灰白2.5Y8/1	内外:灰白2.5Y8/1	呉須:暗緑灰10G3/1	内面:楼閣山水	大橋Ⅲ期	
SD1003	2	陶	鉢口縁部		口:30.00	中	褐灰10YR5/1	内外:暗褐10YR3/3		内面:直線と液状の刷毛目	大橋Ⅳ期	
SD1003	3	磁	碗		口:10.30 高:4.50 底:3.80	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色	内面:蛇の目釉剥	18c後半	くらわんか、畳付にアルミナ砂付着
SD1003	4	磁	皿		底:4.45	中	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色		大橋Ⅳ期	くらわんか、畳付にアルミナ砂付着
SD1003	5	磁	碗底部		底:4.00	微	灰白色	内外:灰白10Y7/1				
SD1003	6	磁	碗底部		底:4.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色			畳付にアルミナ砂付着
SD1003	7	磁	蓋付碗		口:14.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色	外面:蛸唐草		
SD1003	8	磁	皿		底:8.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色		大橋Ⅳ期	蛇の目凹形高台
SD1003	9	磁	皿		口:12.35 高:3.25 底:27.30	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色	内面:環状松竹梅	大橋Ⅳ期	型紙摺り 蛇の目凹型高台
SD1003	10	磁	碗		口:8.15 高:4.10 底:2.85	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色 口紅:赤褐5YR4/6			
SD1003	11	磁	蓋		つまみ部 :4.80	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅳ期	バチ高台
SD1003	12	磁	蓋		最大径 :10.10 底:9.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色		大橋Ⅳ期	型紙摺り

第274図　SD1003出土遺物実測図・観察表（その1）



第275図　SD1003出土遺物実測図（その２）

遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
SD1003	13	陶	擂鉢口縁部	備前	底:42.9	細		外面:暗赤褐10R3/3 内面:にぶい赤7.5R4/4				
SD1003	14	陶	擂鉢	境・明石	口:35.0 高:13.2 底:17.3	微砂粒		内外:橙2.5YR7/8			19c前	
SD1003	15	陶	擂鉢	備前	底:19.4	微砂粒		外面:暗赤10R3/6 内面:赤10R5/6		外面:ロクロナデ	近世Ⅲ期	
SD1003	16	陶	甕底部		底:8.00	中	にぶい赤褐2.5YR4/3	外面:極暗赤褐2.5YR2/2 内面:にぶい赤褐2.5YR4/3				
SD1003	17	陶	皿	珉平		中	淡黄2.5Y8/3	内外:明黄橙2.5Y6/8				
SD1003	18	陶	鉢		口:17.00	中	黄灰2.5Y6/1	外面:暗赤褐2.5YR3/3 内面:暗赤褐2.5YR3/3, 灰オリーブ5Y5/3		外面:トビカンナ?		
SD1003	19	陶	甕		口:27.0	中	灰黄2.5Y7/2	内外:暗赤褐5YR3/4				
SD1003	20	陶	香炉底部			中	淡黄2.5Y8/3	外面:灰白2.5Y8/3 内面・高台内 :暗赤褐2.5YR3/6	鉄絵:黒褐5YR2/1			八角香炉 丸山の陶石を使った製品?
SD1003	21	土師質	皿		口:9.4 高:2.5 底:5.2	微砂粒無	橙2.5YR7/6	橙2.5YR7/6		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		
SD1003	22	土師質	皿		口:8.9 高:1.5 底:5.7	微砂粒無	浅黄橙7.5YR8/4	浅黄橙7.5YR8/4		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		
SD1003	23	瓦質	焙烙			微砂粒無	灰N5/0	灰N5/0		内・外口縁部:ロクロナデ 外面:指押さえ、 内面:ハケメ		
SD1003	24	瓦質	焙烙			微砂粒無	黒5Y2/1	黒5Y2/1				

第276図　SD1003出土遺物観察表

SD1003出土遺物（第274～276図）

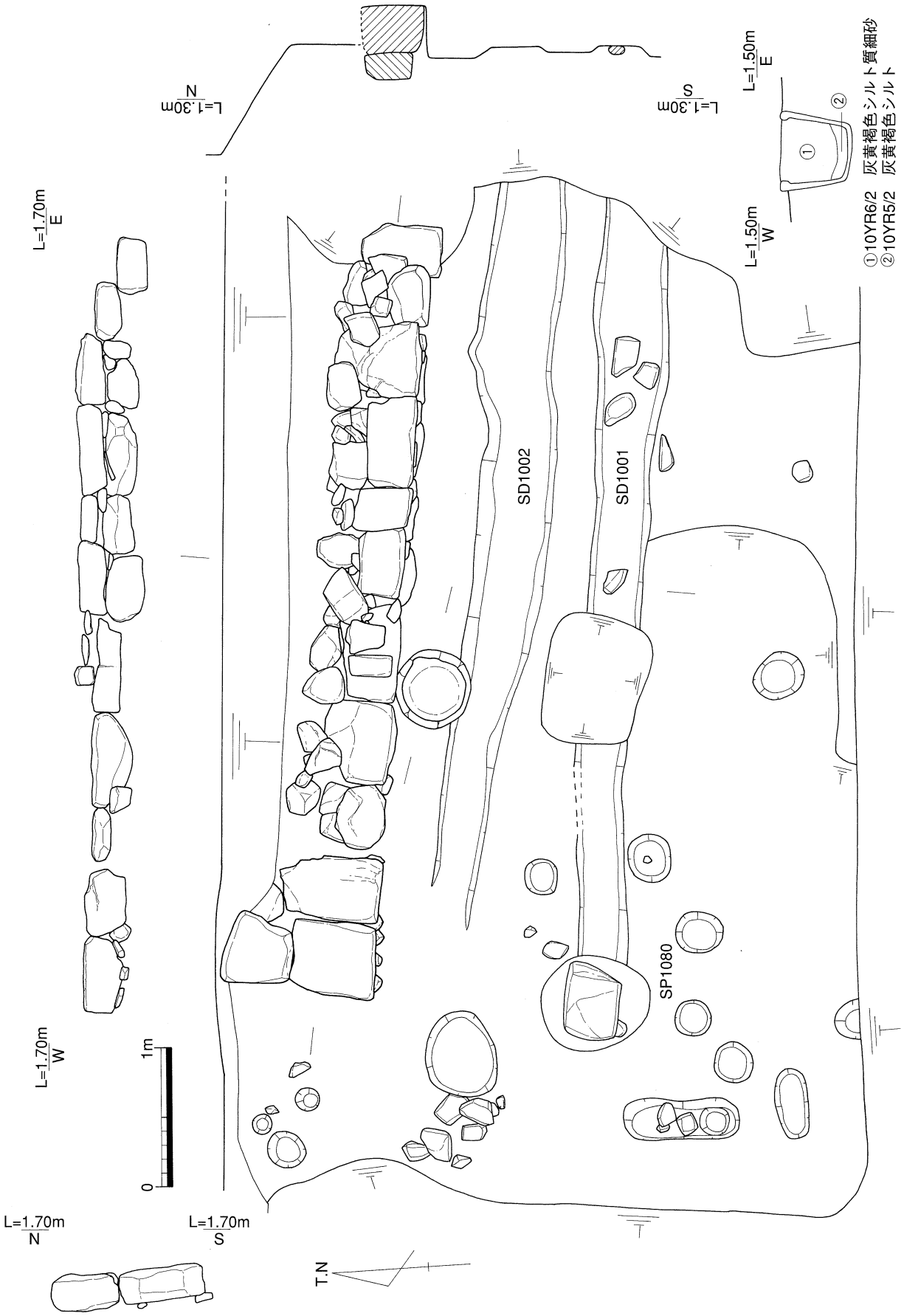
取り上げた瓦については，特徴的なものが認められず，図化は行わなかった。陶磁器は瓦に比べ少量であったがコンテナで2箱程度出土し，18世紀代～明治期初期までの所産のものが認められる。1・2は肥前系陶器である。3～9は，肥前系磁器。9の皿は，型紙刷りにより絵付けされた製品で，SZ1001の覆土に同形のものが認められる。10は関西系磁器碗である。13・15は，備前擂鉢。14の擂鉢は，堺・明石産である。16は大谷焼。17は軟質施釉陶器。特徴的な黄色の釉を用いた製品，珉平焼と考えられる。20は香炉の底部。胎土は，理兵衛焼との関連が指摘される富田丸山の陶土に酷似する。21・22は土師質土器皿である。23・24は，瓦質土器焙烙である。

SB1001（第277図）

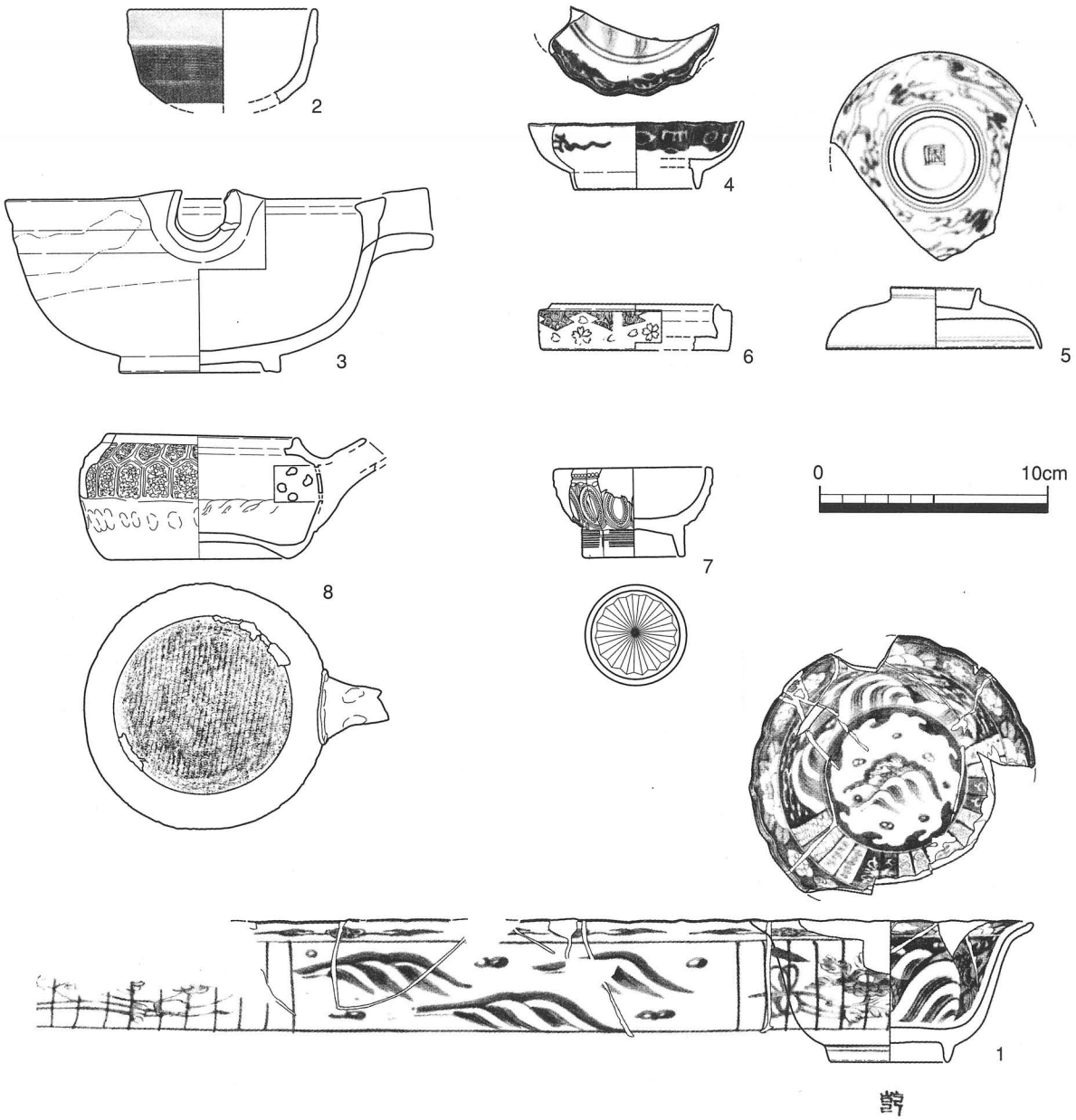
D区北西隅，第1面で確認した建物である。検出した標高は1.45m前後を測り，主軸はN－82°－Wを示す。調査時にはSD1001・1002を南岸とする石組み溝の可能性も考えたが，L字に屈曲する対岸部を欠き，また瓦が多量に散在していたため建物の土台と判断した。北側が調査対象範囲外で，東側が撹乱により壊されているため規模は不明である。40～60cm大の扁平な石材を西面では一段，南面の東部では東に傾斜する地形のためか二段ないし三段に積み，上面を揃えようとしている。内側には割石を詰め裏留めに用いる。南面に便槽と考えられる土師質の埋甕が設置されている。埋甕の周囲は，SD1002の北壁に沿って瓦が立てられていた。SD1001及び南西角の礎石（SP1080）は，約1.8mの間隔を置き平行し，庇等の関連施設にも考えられる。検出時に出土した遺物より，明治時代の廃絶が考えられる。

SB1001出土遺物（第278・279図）

1は肥前系磁器鉢。輪花鉢で，内外面に色絵が施される。ガラス質の熔着剤により焼継を行い，接合部に金を塗り隠す。高台内には「上丞」「乃」と読めるものの他，数箇所で文字を記した焼継印が認められる。2・3は瀬戸・美濃系陶器。腰錆碗（2），片口鉢（3）。4・5は肥前系磁器。皿（4），蓋（5）。6は磁器の蓋物で，型紙刷りによる装飾。内面には，朱肉とみられる赤色顔料が付着している。7は型合わせによるガラス製品である。8は陶器土瓶。9は備前灯明皿。10は土師質の蓋。11・12は軒丸瓦。13は軒桟瓦である。

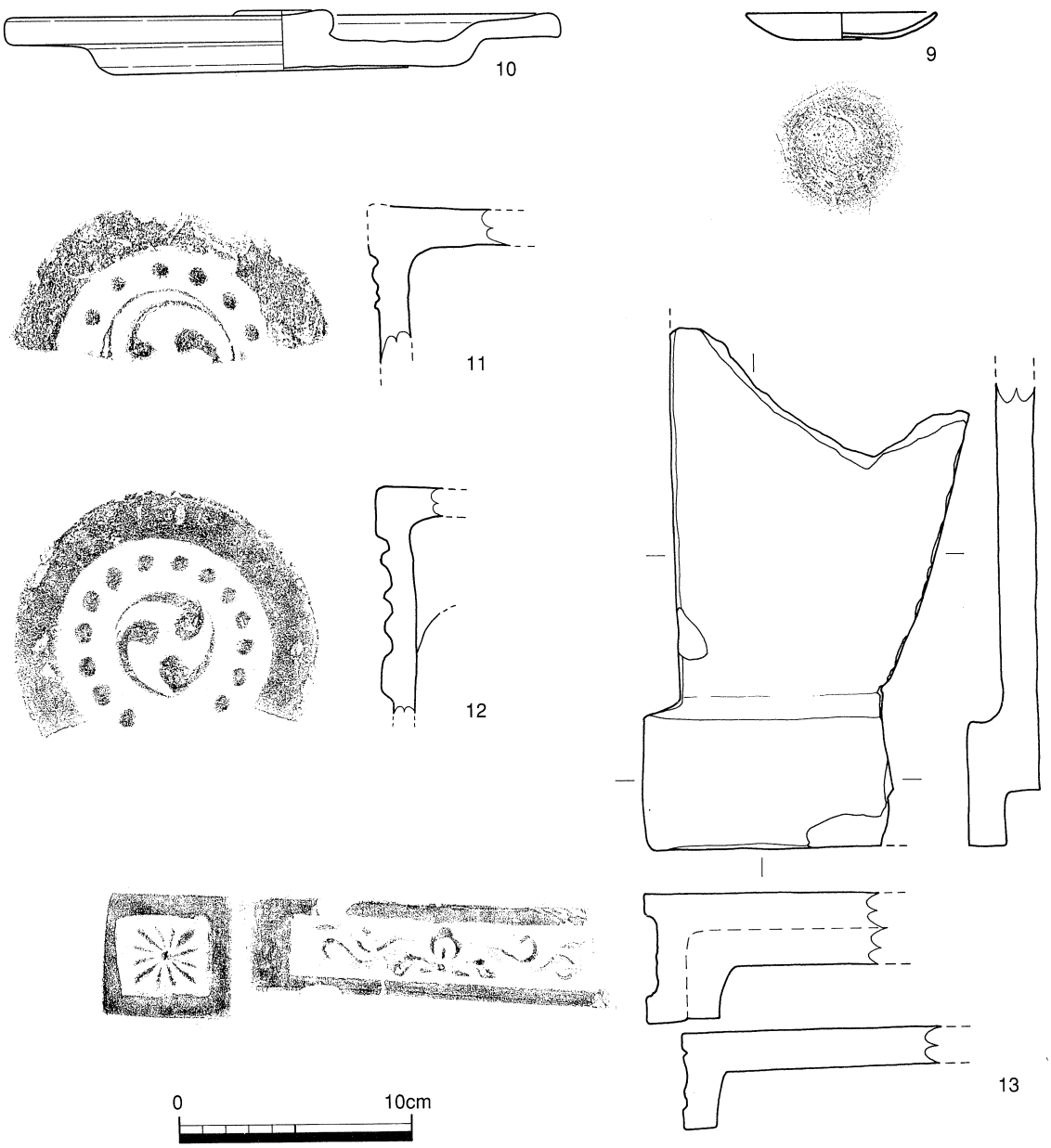


第277図　SB1001平面・断面図



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SB1001 検出中	1	磁	碗	肥前	口:12.2 高:6.15 底:5.2	微	灰白5Y8/1	内外:透明釉	呉須:暗青色 上絵:赤・緑・金で縁取り		1790～ 1810年代	「乾」銘款、ガラス焼継 「上丞」「乃」大？の焼継印
SB1001 掘方	2	陶	碗	瀬・美	口:8.00	細	灰白2.5Y8/1	内外上:灰白5Y7/2 外下:極暗褐7.5YR2/3				腰錆碗
SB1001 検出中	3	陶	片口鉢	瀬・美	口:16.20 高:7.60 底:7.00	細	灰白2.5Y8/2	内外:オリーブ黄5Y6/3				見込みにピン痕2ヶ所, 内外に被熱痕
SB1001 検出中	4	磁	皿	肥前	口:9.30 高:2.90 底:5.40	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・明青色			型打成形
SB1001 検出中	5	磁	蓋	肥前	つまみ部:3.80 高:2.10 底:9.10	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色 口紅:黄褐10YR5/8			銘款有
SB1001 検出中	6	磁	蓋物		口:7.20 高:2.00 底:8.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:コバルト	外面:型紙摺り		口縁端部内外に朱付着
SB1001 検出中	7	ガラス	小杯？				緑			前後型合わせ		
SB1001 検出中	8	陶	土瓶		口:8.30 高:5.25 底:7.25	細	褐灰10YR6/1	にぶい黄褐10YR5/3		内面:ナデ 外面下半:指押さえ 外底:布目		

第278図　SB1001出土遺物実測図・観察表（その1）



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SB1001 掘方	1	陶	灯明皿	備前	口:8.1 高:1.1 底:3.9	細	にぶい赤7.5R4/4	にぶい赤7.5R4/4		内・外口縁部:ロクロナデ 外底:回転糸切り 外面:ケズリ		口縁内外に煤付着
SB1001 検出中	2	土師質	蓋		最大径:23.85 つまみ部:4.35 高:2.6	細	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4				内面に被熱痕

遺構名	報文番号	遺物種別	法量(cm)			胎土	色調		調整		焼成	備考
			長さ(現存長)	厚さ	幅(現存幅)		断面	器面	内面	外面		
SB1001	11	軒丸瓦	6.0	1.5	—	砂礫少	灰N6/0	灰N6/0			良	巴 被熱
SB1001	12	軒丸瓦	3.0	1.2	—	砂粒	灰N6/0	灰白10Y8/1			良	巴
SB1001	13	軒桟瓦	14.3	1.6	22.1	砂礫少	灰白7.5Y7/1	灰5Y5/1			良	被熱 キラコ

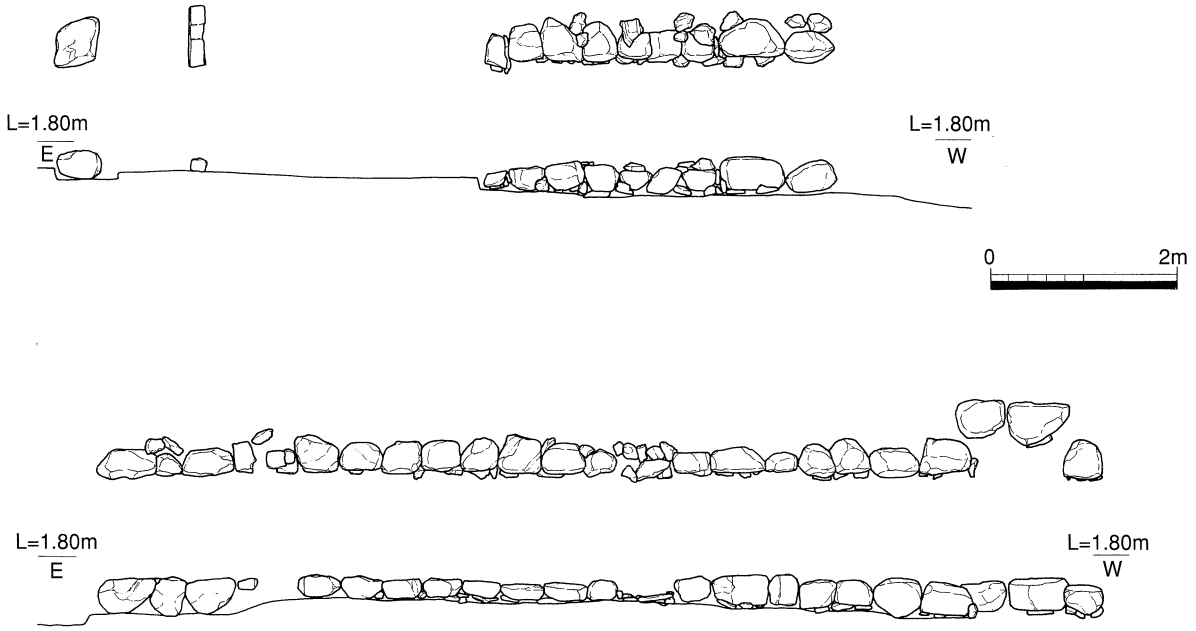
第279図　SB1001出土遺物実測図・観察表（その2）

SZ1001（第280図）

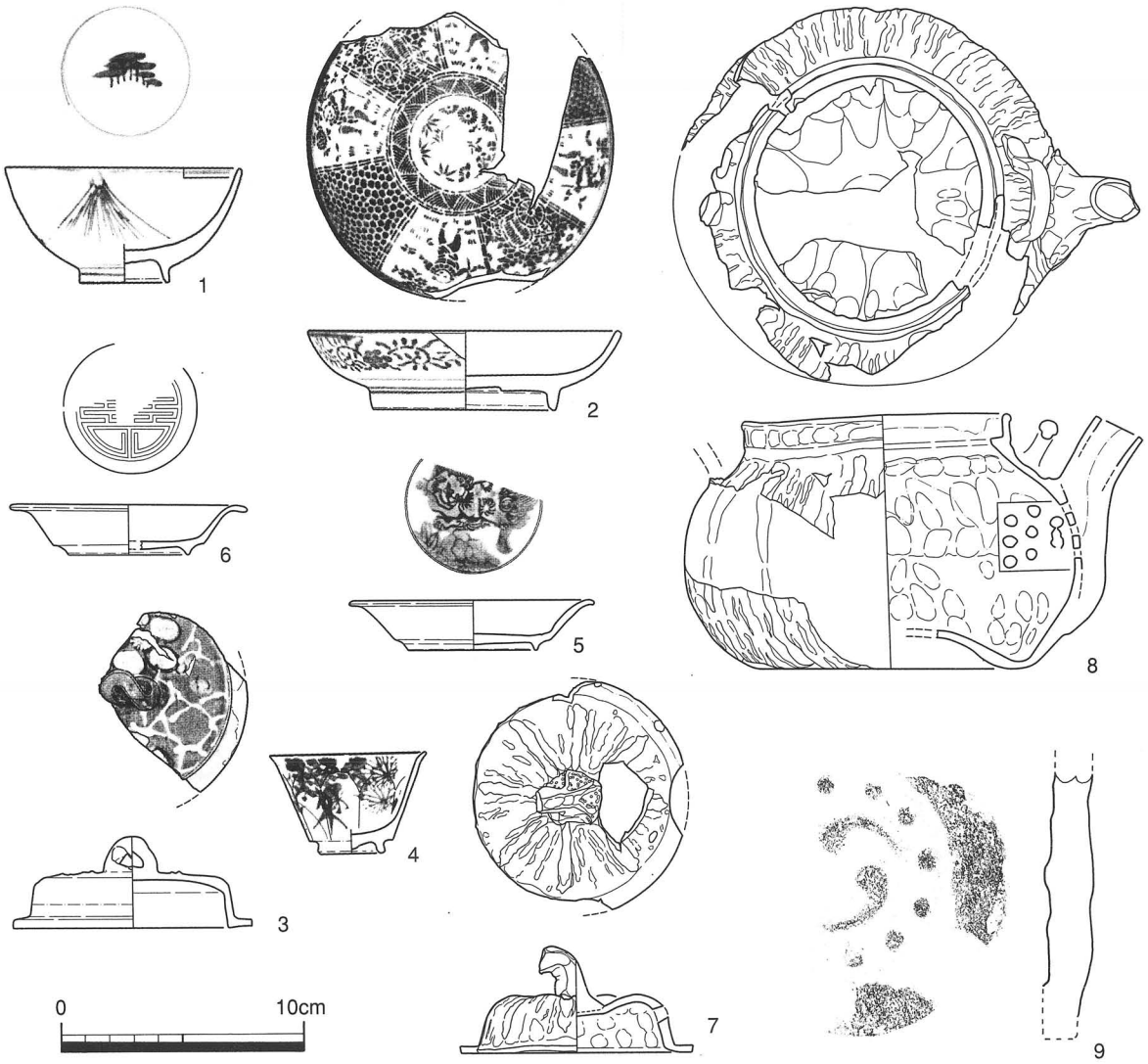
C－D区北端部，第１面で確認した石列状の遺構である。検出した標高は1.55m前後を測り，主軸はN－86°－Wを示す。北面を揃え東西方向に並べられる。南側に対応する石列が認められないことから，調査対象外に対面した石列が想定され，石組み溝である可能性が考えられる。所属時期は検出時の遺物及びSX2010に後出し，また明確ではないが配置関係からはSX2008埋没後の所産と推定され，19世紀前葉～明治時代の所属時期が考えられる。

SZ1001出土遺物（第281図）

１は産地不明磁器碗である。２は肥前系磁器皿。型紙刷りによる装飾が認められる。SD1003に同形のものが出土している。３の蓋は，イッチン掛けによる装飾が認められる。４～６は，瀬戸・美濃系磁器である。小坏（４），皿（５・６）がある。７・８は，産地不明陶器で，南瓜形の土瓶である。９は軒丸瓦片である。



第280図　SZ1001上面・立面図



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SZ1001	1	磁	碗		口:9.55 高:4.55 底:3.55	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:コバルト			
SZ1001	2	磁	皿	肥前系	口:12.50 高:3.20 底:7.20	細	灰白色	内外:透明釉	呉須:コバルト	外面:蛇の目凹形高台		銅版転写
SZ1001	3	陶	蓋		口:3.70 高:7.90	細	明褐灰7.5YR7/1	外面:緑	イッチン掛け:白	外面:梅花		イッチン掛け
SZ1001	4	磁	小杯	瀬・美	口:6.30 高:4.00 底:2.50	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:コバルト	外面:草花 外底内:静止ヘラケズリ		型押成形
SZ1001	5	磁	皿	瀬・美	口:9.95 高:2.00 底:5.15	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:コバルト	内面:獅子,陽刻		
SZ1001	6	磁	皿	瀬・美	口:8.80 高:2.05 底:4.85	微	灰白色	内外:透明釉				そり皿 木型打込
SZ1001	7	陶	土瓶の蓋		口:4.30 高:9.60	細	灰褐7.5YR5/2	灰褐7.5YR7/2		内面:指押さえ		
SZ1001	8	陶	土瓶		口:10.6 高:10.3 底:10.3	細	黄灰2.5Y5/1	外面・内上:にぶい褐7.5YR 5/3,内下:灰オリーブ5Y5/3				

遺構名	報文番号	遺物種別	法量(cm)			胎土	色調		調整		焼成	備考
			長さ(現存長)	厚さ	幅(現存幅)		断面	器面	内面	外面		
SZ1001	9	軒丸瓦	—	—	—	砂粒	灰N6/0	灰白N7/0			良	巴

第281図　SZ1001出土遺物実測図・観察表

SX1003・1004（第283・284図）

C区中央部，第１面で確認した遺構である。検出した標高は，SX1003が1.44～1.50m，SX1004が1.33～1.47mを測る。検出長は，SX1003が東西約2.5m，南北約0.9m，SX1004が東西約2.7m。南北約0.9mを測る。撹乱により遺存状態は悪いが，平瓦を立ち並べ，平面を長方形に囲っている。堆積状況から，まず長方形に土坑を掘り，外壁に平瓦の凸面を外に向けて縦に並べ，内側に土を入れ固定させている。両遺構は約４mの間隔を空け，SA1001に平行する主軸方位で約１m北側に設置されている。また第２面の検出遺構であるがSX2008の南端部に位置しており，配置からこれらの遺構との関連がうかがわれる。明確ではないが，垣もしくは目隠し等といった屋敷内での小規模な区画施設と推定される。所属時期は，検出時に出土した遺物より幕末～明治時代の埋没が考えられる。

SX1003・1004出土遺物（第285・286図）

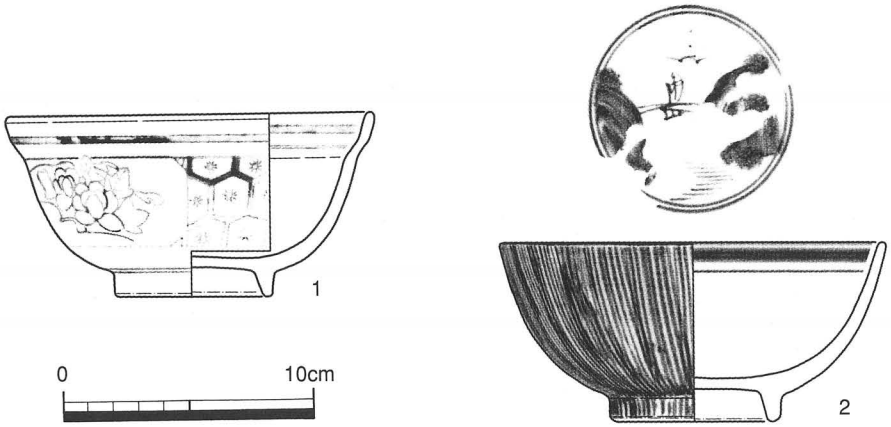
検出時に遺物が一定量認められた。１～３・６は，肥前系陶器である。砂目の皿（１），京焼風陶器（２），刷毛目碗（３），甕（６）がある。４・５は，肥前系磁器である。青磁香炉（４），広東碗（５）がある。７・８は，瀬戸・美濃系陶器である。水甕（７），植木鉢（８）がある。９・10・13は，京・信楽系陶器である。11は産地不明陶器蓋である。12は軟質施釉陶器蓋である。14～16は土師質土器。皿（14～15），甕（17）である。

SX1005（第８図）

A－B区，第１面で確認した集石溝である。検出した標高は，1.03～1.35m前後を測る。平面でコの字形に検出された。出土遺物より19世紀末以降の所産が考えられ，県庁庁舎等の基礎と想定される。

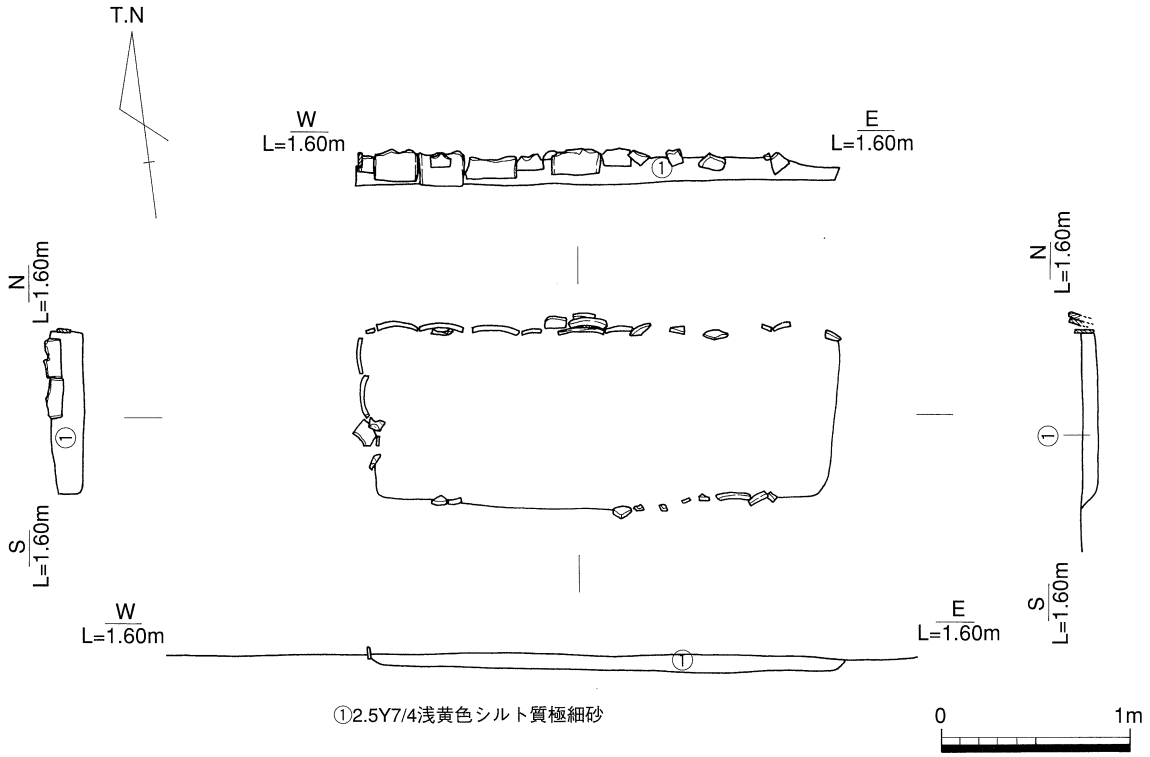
SX1005出土遺物（第282図）

１・２は磁器碗である。丼碗の器形で，明治・大正時代の所産と推定される。

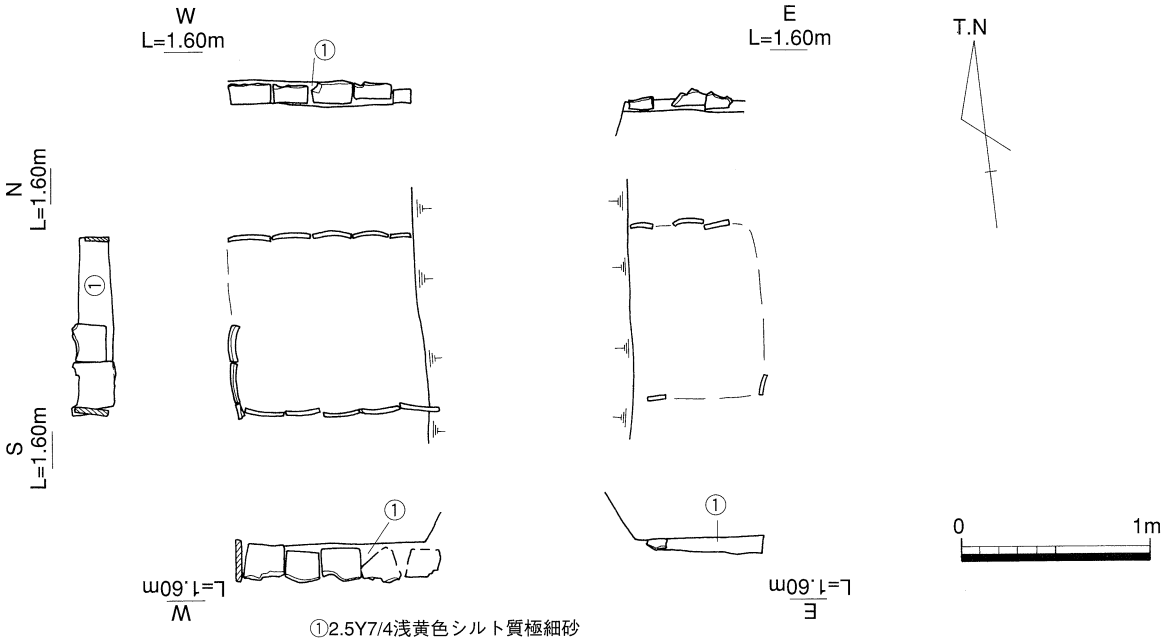


遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調１(胎土)	色調２(釉薬、内外色調)	色調３(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SX1005	1	磁	碗	瀬・美	口:14.50 高:7.30 底:6.00	微	灰白色	内外:透明釉	上絵:金・赤			
SX1005	2	磁	碗	瀬・美	口:15.20 高:7.05 底:6.20	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色、暗青灰5BG 3/1,口紅:赤褐5YR4/8			

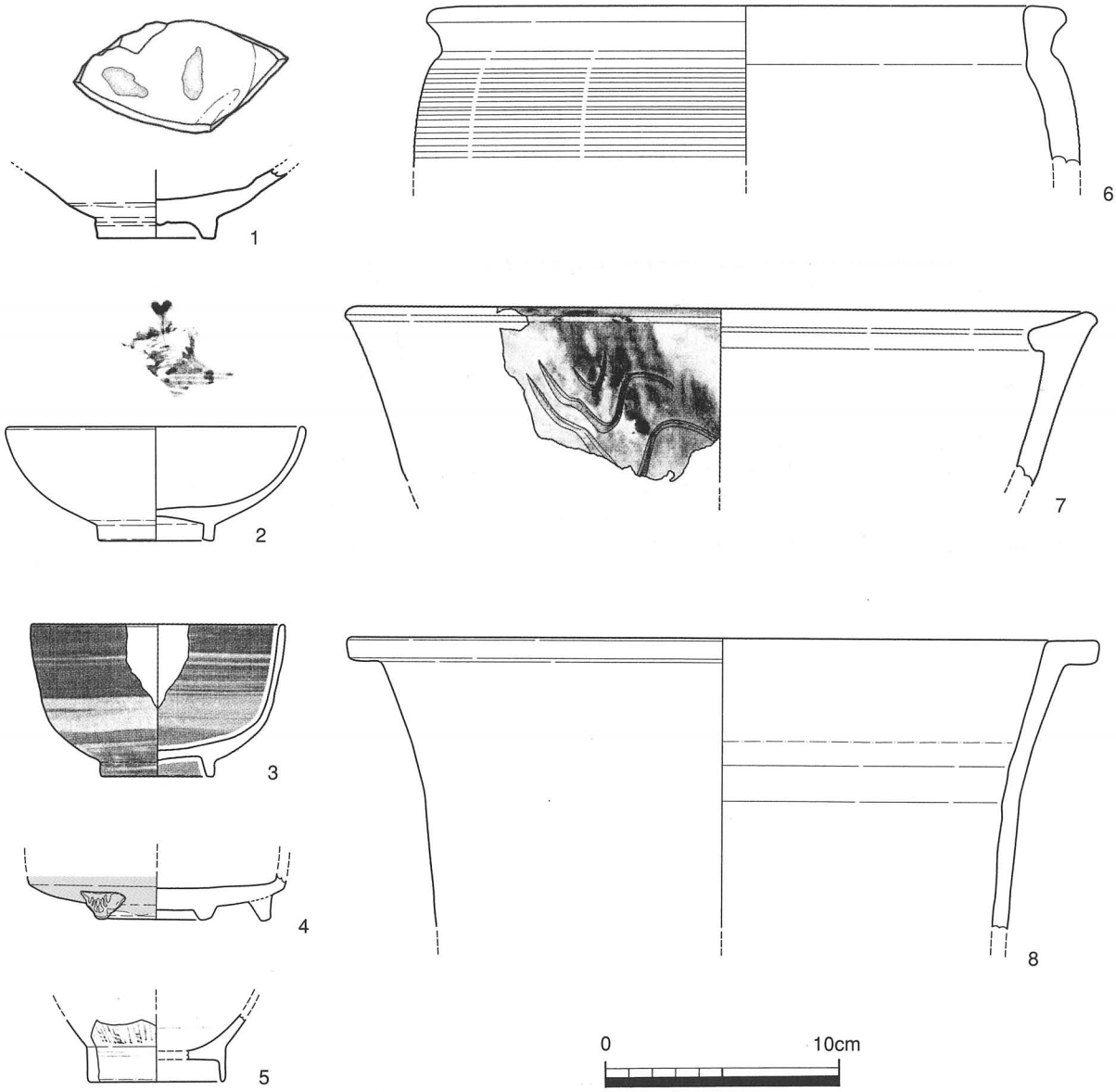
第282図　SX1005出土遺物実測図



第283図　SX1003平面・土層図

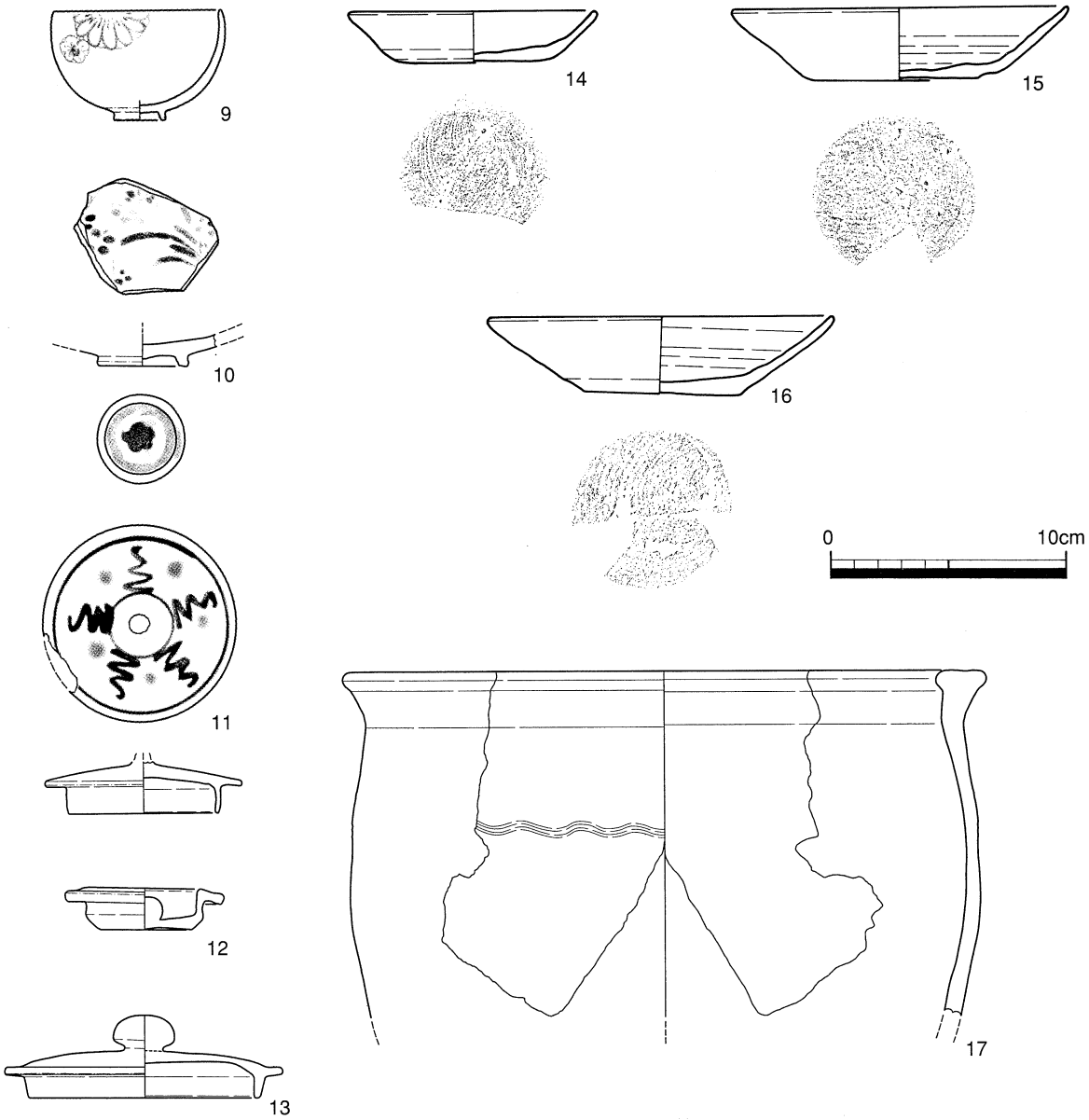


第284図　SX1004平面・土層図



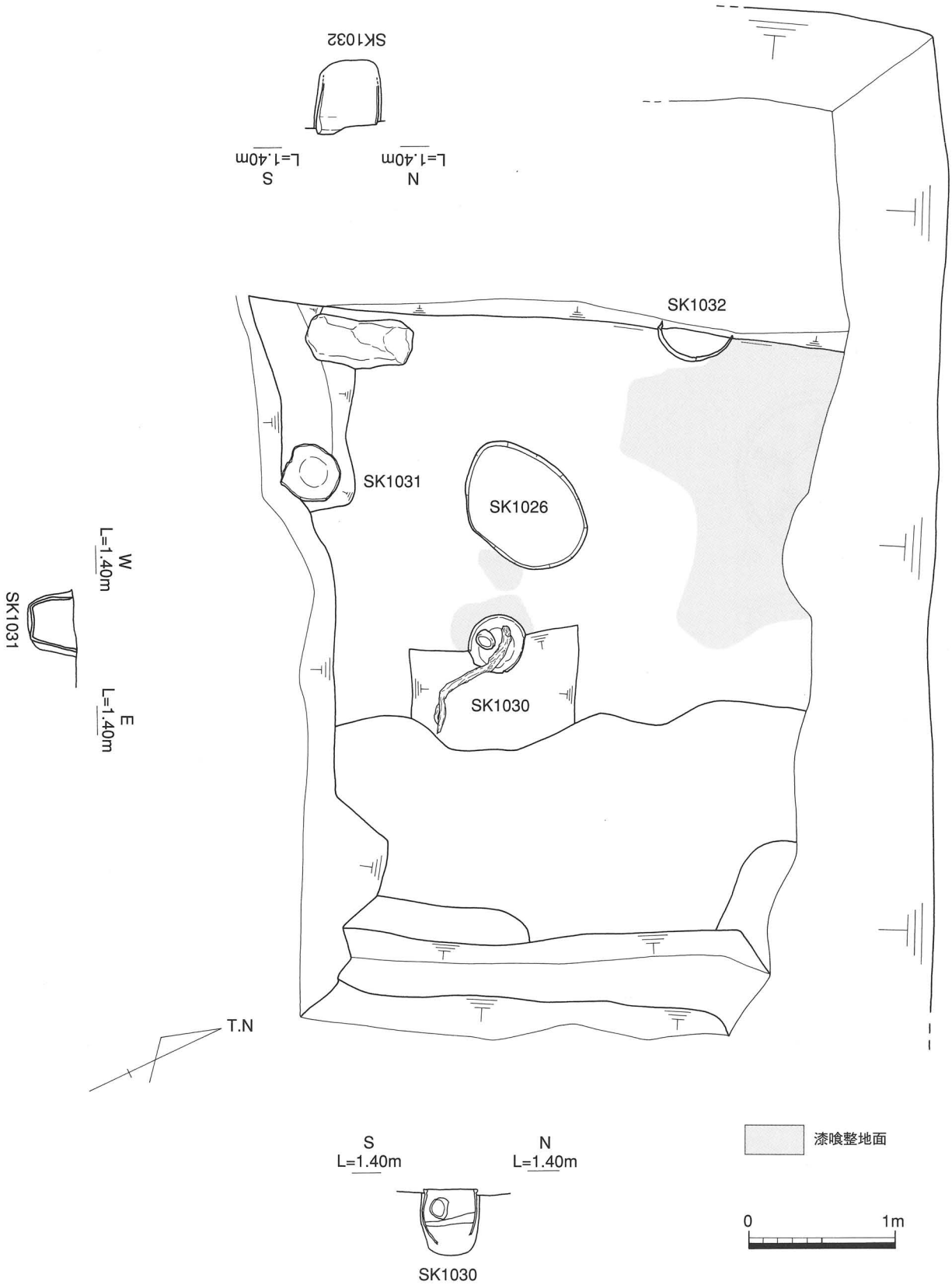
遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
B区西半甕2	1	陶	皿底部	肥前	底:5.0	微	にぶい黄橙10YR7/2	灰白10Y7/1			大橋Ⅱ期	見込みと高台内側に砂目2ヶ所
瓦区画検出中	2	陶	碗	肥前	口:12.50 高:4.60	細	淡黄2.5Y8/3	内外:浅黄2.5Y7/3	鉄絵:暗オリーブ釉		大橋Ⅲ期	京焼風
瓦区画検出中	3	陶	碗	肥前	口:10.60 高:6.50 底:4.50	細	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい褐7.5YR5/3		内外:直線的な刷毛目	大橋Ⅳ期	刷毛目碗
瓦区画検出中	4	磁	香炉底部	肥前	底:4.10	微	灰白色	明褐灰10G7/1				青磁 高台内無釉
瓦区画検出中	5	磁	碗底部	肥前	底:5.60	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色		1780～	広東碗
瓦区画検出中	6	陶	甕口縁部	肥前	口:24.30	微	明赤褐2.5YR5/6	外面・明赤褐2.5YR5/6 内面:暗緑灰10G4/1				
瓦区画検出中	7	陶	水甕口縁部	瀬美	口:32.00	細	淡黄2.5Y8/3	内外:浅黄2.5Y7/3	釉掛:暗褐10YR3/3			
瓦区画検出中	8	陶	植木鉢	瀬美	口:31.60	細	灰白2.5Y8/2	内外:オリーブ黄5Y6/3				

第285図　SX1003・1004出土遺物実測図・観察表（その1）



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
瓦区画検出中	9	陶	碗	肥前	口:70.0 高:41.5 底:21.0	細	灰白5Y7/2	内外:灰白5Y7/2	呉須:淡青色,灰オリーブ5Y4/2	外面:菊	大橋Ⅳ期	
瓦区画検出中	10	陶	碗底部	京・信	底:3.70	細	淡黄2.5Y8/3	内外:淡黄2.5Y8/3	上絵:青・金・緑			高台内に墨書,色絵
瓦区画検出中	11	陶	蓋		最大径:8.30 底:6.20	細	灰黄2.5Y6/2	外面:灰白5Y8/2	上絵:黒2.5Y2/1,深緑			
瓦区画検出中	12	陶	蓋		最大径:6.7 つまみ部:4.7 底:3.9	細	橙5YR6/6	外面:明赤褐5YR5/8				
瓦区画検出中	13	陶	蓋	京・信	最大径:11.75 高:3.50 底:94.00	細	灰白2.5Y8/2	外面:灰白5Y7/2				
瓦区画検出中	14	土師質	皿		口:10.4 高:2.2 底:6.8	精良		外面・灰白2.5Y8/1～淡赤橙2.5YR7/4,内面:灰白2.5Y8/1		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り 内底:仕上げナデ		口縁内外に煤付着
瓦区画検出中	15	土師質	坏		口:13.9 高:3.1 底:6.9	赤色粒		外面・明褐灰7.5YR7/2 内面:黒褐7.5YR3/1		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		
瓦区画検出中	16	土師質	皿		口:14.4 高:3.6 底:6.7	赤色粒		外面:明褐灰7.5YR7/2 内面:黒褐7.5YR3/1		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		内面に被熱痕,煤付着
瓦区画検出中	17	土師質	甕		口:24.60	細	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3				

第286図　SX1003・1004出土遺物実測図・観察表（その2）



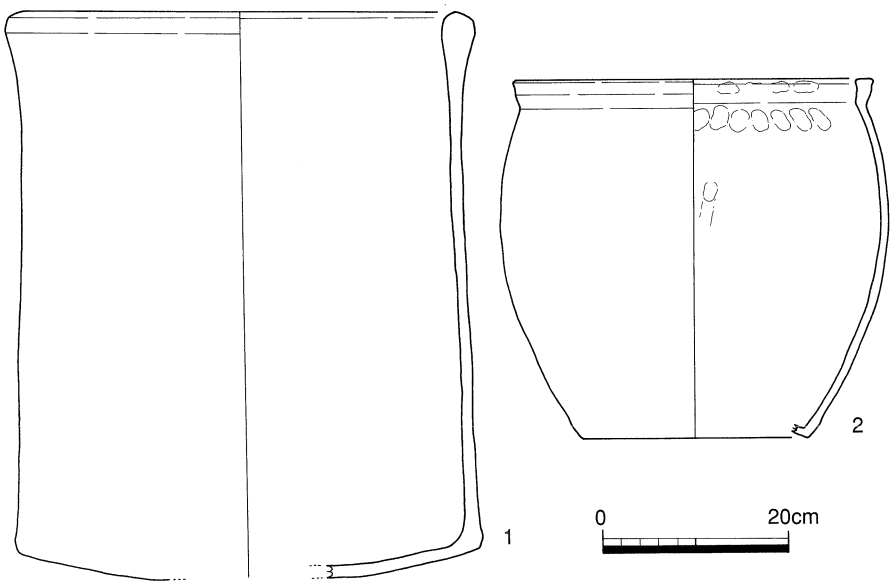
第287図　SK1030・1031・1032平面・断面図

SK1030・1031・1032（第287図）

B区西半，第1面で確認した埋甕である。SK1030～1032の3基が確認された。検出した標高は，1.19～1.34m前後を測る。SX1005により壊され，SX2008の埋土と同様の土壁が混じる整地上に埋設されていた。周辺部は検出時に木根や植物根が多く認められた。所属時期は，整地の状況やSX1005に先行することから，19世紀前葉～明治時代の所産と考えられる。

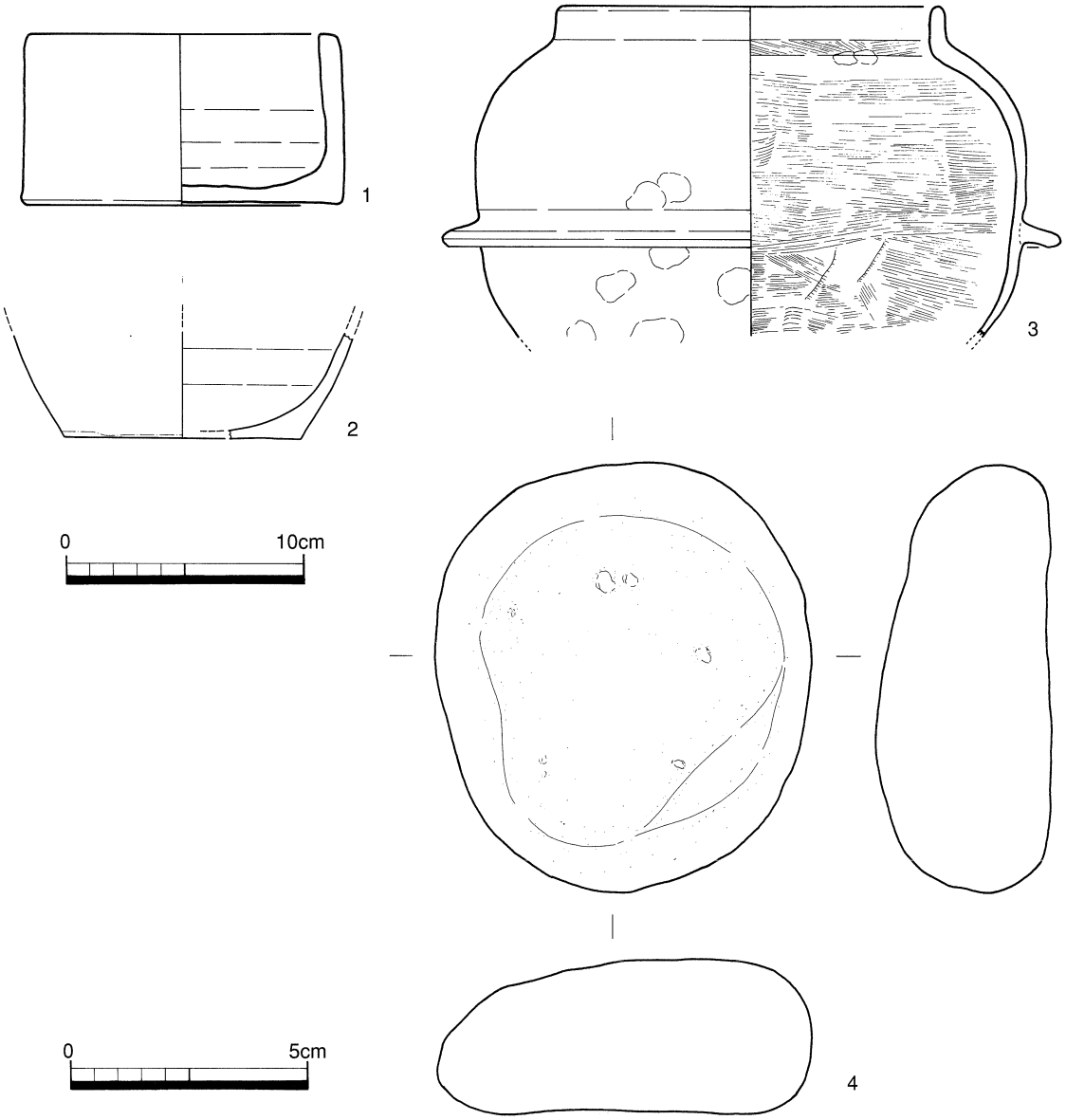
SK1030・1031・1032出土遺物（第288・289図）

1はSK1032の埋甕で，土師質製である。2はSK1030の埋甕で，陶質製である。共に底部が欠損した状態で出土した。3・6は，SK1030甕内から出土した。3は備前鉢である。6は石英質の扁平な石で，側面部に敲打痕が認められる。4・5は，検出時の遺物である。2は大谷焼の底部。3は土師質の釜である。



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SK1032	1	土師質	甕		口:46.0 高:60.0	石英・長石・雲母		内外:にぶい橙7.5Y6/4		内外:ナデ 底外面:ハケメ		
SK1030	2	陶	甕		口:38.4 高:38.0 底:38.0	石英・長石		外面;にぶい橙5YR6/4 内面上半:淡黄2.5YR8/4 下半:橙5YR6/6		外面・内面下半:ナデ 内面上半:指頭圧痕		

第288図　SK1030・1032出土遺物実測図・観察表



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SK1030	1	陶	鉢	備前	口:11.1 高:7.1 底:13.3	細	赤7.5R4/6	赤7.5R4/6		内面:ロクロナデ		
B区西半第2回精査	2	陶	甕	大谷	底:9.95	細	にぶい赤褐2.5YR4/3	外面:極暗褐7.5YR2/3				
B区西半第2回精査	3	土師質	羽釜		口:15.6	精良	褐灰10YR5/1	褐灰10YR5/1		内・外口縁部:ロクロナデ 外面:ロクロナデ・指押さえ 内面:ハケメ		煤付着
SK1030	4	石	火打石									

第289図　SK1030・1031・1032出土遺物実測図・観察表

SK1009（第268・270図）

A区東端部，第1面で確認した遺構である。但し，大半を第2面SK2020として掘削し，遺物が取り上げられている。検出した標高は1.40～1.47m前後，底面の標高は1m前後（SK2020）を測る。検出長は東西方向で約2.3m，南北方向で約0.9mを測る。平面は長方形で，断面は船底形である。所属時期は，出土遺物より18世紀後半～19世紀前葉に考えられる。

SK1009出土遺物（第290図）

1は肥前系陶器碗。陶胎染付である。2は肥前系磁器碗である。3は備前灯明皿である。4は陶器茶入で，大谷焼と考えられる。

SK1002（第268図）

A区南部，第1面で確認した遺構である。検出した標高は1.48m前後，底面の標高は1.3m前後を測る。検出長は東西方向で約0.8m，南北方向で約0.56mを測る。平面は隅丸方形である。所属時期は，検出面より19世紀前葉以降と考えられる。

SK1002出土遺物（第290図）

5・6は，土師質土器皿。橙色系の胎土で器高は低い。底部は回転糸切りである。

SP1013（第268図）

A区南部，第1面で確認したピットである。検出した標高は1.43m前後，底面の標高は1.30m前後を測る。SA1001P－10を壊す。径約0.4mの円形として検出した。所属時期は，出土遺物から明治時代と考えられる。

SP1013出土遺物（第290図）

7は京・信楽系陶器碗である。8は，産地不明の磁器碗。銅板転写による装飾が認められる。9は肥前系磁器碗。うがい茶碗である。

SP1023（第268図）

A区南部，第1面で確認したピットである。検出した標高は1.40m前後，底面の標高は1.32m前後を測る。検出長は東西方向で約0.3m，南北方向で約0.4mを測る。平面は隅丸方形である。

SP1023出土遺物（第290図）

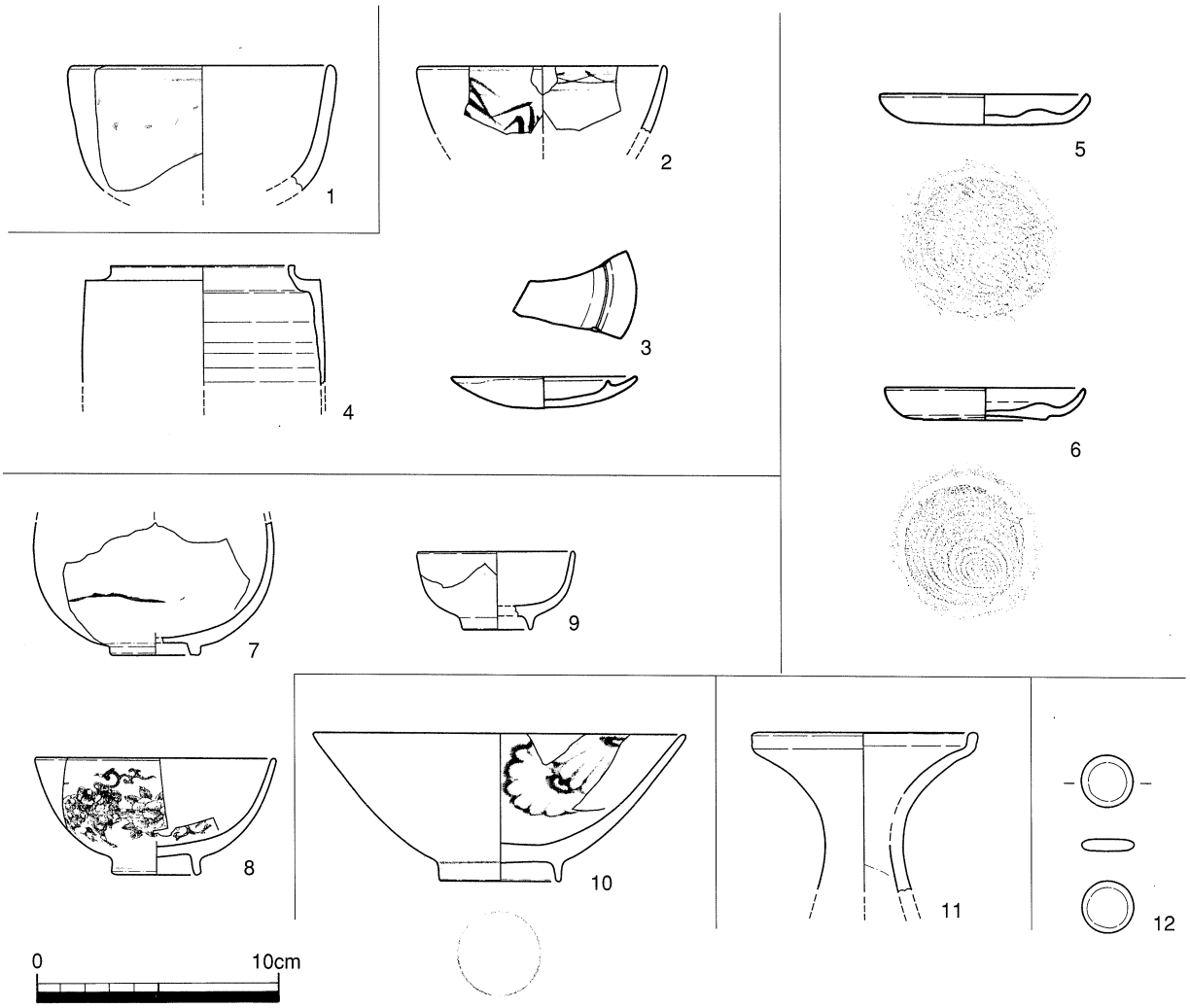
10は肥前系磁器小坏である。

SX1001・1002（第268図）

C区南部，第1面で確認した遺構である。検出した標高は1.31～1.51m，底面の標高は1.40m前後を測る。検出長は，SX1001が東西に約5.5m，南北に約4.1m，SX1002が東西に約1.5m，南北に約4.5mを測る。平面は不整形で，SD1003・SA1001を壊す。両遺構とも瓦片を含み固くしまった埋土で，地固めを行う整地痕の可能性が考えられる。所属時期は，遺構の前後関係により，明治時代以降（県庁建設時）の所産と考えられる。

SX1001・1002出土遺物（第290図）

11は肥前系磁器仏花瓶である。12は碁石である。



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SK1009	1	陶胎染付	碗	肥前	口:10.55	細	灰白10YR6/1	内外:透明釉	呉須:暗青オリーブ灰		大橋Ⅳ期	
SK2020	2	磁	碗口縁部	肥前	口:10.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色	外面:竹笹 内面:四方襷		
SK2020	3	陶	灯明皿	備前	口:7.5 高:1.2	細		外面:赤褐10R4/4 内面:暗赤褐2.5YR3/4		内・外口縁部:ロクロナデ 外底:ケズリ		
SK2020	4	陶	茶入	大谷	口:7.55	細	赤褐10R4/3	内外:黒褐5YR2/1				
SK1002	5	土師質	皿		口:8.4 高:1.5 底:6.4	精良	橙5YR7/8	橙5YR7/8		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り	18c後半	
SK1002	6	土師質	皿		口:8.1 高:1.2 底:5.0	赤色粒	橙5YR7/6	橙5YR7/6		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		内外に有機物付着
SP1013	7	陶	碗	京・信	底:3.50	細	灰白色	内外:灰オリーブ5Y5/3	上絵:赤・緑			
SP1013	8	磁	碗	肥前系	口:9.70 高:4.75 底:3.40	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:青			銅板転写,高台内にアルミナ砂付着
SP1023	9	磁	小杯	肥前	口:6.30 高:3.20 底:27.0	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色			
SP1013	10	磁	碗	肥前	口:15.00 高:6.00 底:4.75	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色			内外に被熱痕
SX1001	11	磁	仏花瓶	肥前	口:9.20	微	灰白色	内外:透明釉				内面に被熱痕
SX1002	12	陶	碁石		全長:2.25 厚:0.45		黒					

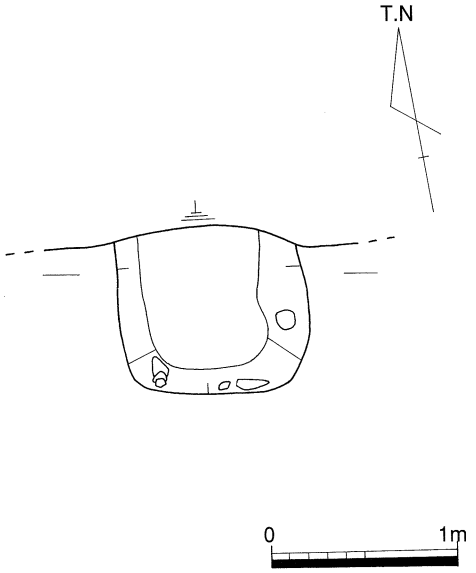
第290図　SK1009・2020・1002・SP1013・1023・SX1001・1002出土遺物実測図・観察表

SK 1006（第291図）

A区北部，第１面で確認した遺構である。検出標高は1.43m前後，底面の標高は1.03m前後を測る。検出長は東西方向で約1.0m，南北方向で約0.9mを測る。北部を撹乱により壊される。平面は隅丸方形である。所属時期は，出土遺物より幕末～明治時代と考えられる。

SK 1006出土遺物（第295図）

３は陶器鉢である。見込みに砂目が認められる。４は信楽系陶器甕口縁部。５は五徳である。６は土師質土器鉢。７は焼塩壺である。板作りのものである。



第291図　SK 1006平面・断面図

SK 1024（第８図）

A区北部，第１面で確認した遺構である。検出した標高は1.14～1.28m，底面の標高は1.10m前後を測る。検出長は東西方向で約1.1m，南北方向で約1.7mを測る。北部を撹乱により壊される。平面は楕円形である。所属時期は，出土遺物より幕末～明治時代と考えられる。

SK 1024出土遺物（第295図）

１・２は軟質施釉陶器土瓶及び蓋である。赤釉を施すもので，蓋の裏側に「屋島」の刻印が認められ，屋島焼と考えられる。

SK 1026（第287図）

B区西部，第１面で確認した遺構である。検出した標高は1.26～1.34m，底面の標高は1.20m前後を測る。検出長は東西方向で約1.0m，南北方向で約0.7mを測る。平面は楕円形である。所属時期は，B区第１面の整地状況から19世紀前葉以降の所産に考えられる。

SK 1026出土遺物（第296図）

８は土師質土器甕底部である。

SP 1041（第277図）

D区西部，第１面で確認したピットである。検出した標高は1.25m前後，底面の標高は1.05m前後を測る。径約0.3mの円形として検出した。

SP 1041出土遺物（第296図）

９は砥石である。

SD 1002（第277図）

D区西部，第１面でSB 1001に南面して，確認した溝状の遺構である。検出した標高は1.25～1.34m，底面の標高は1.22m前後を測る。検出長は約5.3m，検出幅は0.3～0.5mを測る。東部は

撹乱により壊される。埋没時期は，SB1001と同様に明治時代と考えられる。

SD1002出土遺物（第296図）

10は漳州窯系青花碗である。11は肥前系磁器蓋である。

SP1049（第277図）

D区西部，第1面で確認したピットである。検出した標高は1.29m前後，底面の標高は1.18m前後を測る。検出長は東西方向で約0.3m，南北方向で約0.8mを測る。平面は楕円形に検出された。底面に根石が認められる。

SP1049出土遺物（第296図）

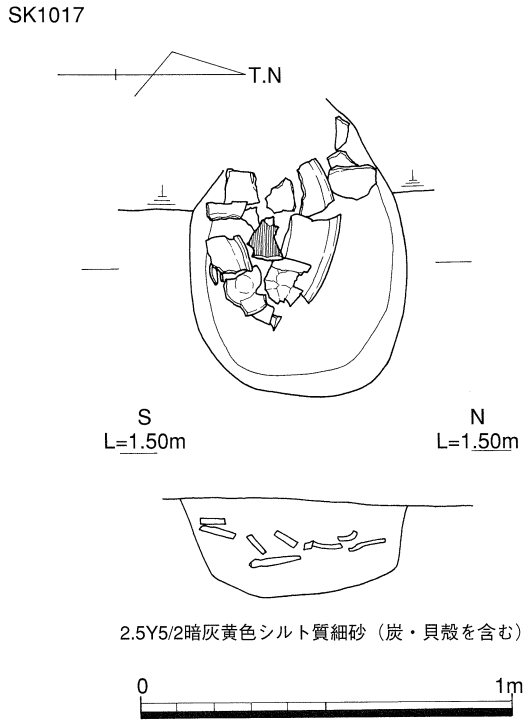
12は京・信楽系陶器碗である。外面には，大膳家の家紋が藍色で絵付けされる。13は管状の土錘である。

SK1017（第292図）

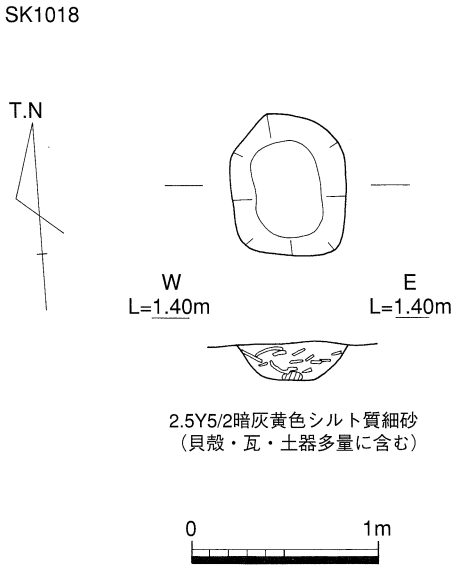
C区中央部，第1面で確認した土坑である。検出した標高は1.37m前後，底面の標高は1.16m前後を測る。検出長は東西方向で約0.5m，南北方向で約0.6mを測るが，東部を撹乱により壊される。平面は円形で，断面は箱形である。所属時期は，出土遺物より明治時代の所産と考えられる。

SK1017出土遺物（第297図）

1は肥前系磁器碗である。2は瀬戸・美濃系陶器碗である。3・4は，瀬戸・美濃系磁器碗である。5は京・信楽系陶器蓋で，SK2038の出土品と接合関係を有する。6は軟質施釉陶器で，屋島焼と考えられる。8は土師質の土能である。9・10は，瓦質土器焙烙である。



第292図　SK1017平面・土層図



第293図　SK1018平面・土層図

SK 1018（第293図）

D区東端部，第１面で確認した遺構である。検出した標高は1.28m前後，底面の標高は1.07m前後を測る。検出長は東西方向で約0.6m，南北方向で約0.7mを測る。平面は隅丸方形で，断面はU字形である。埋土には瓦片及び貝等の残滓が認められる。所属時期は，出土遺物より幕末～明治時代の所産と考えられる。

SK 1018出土遺物（第298図）

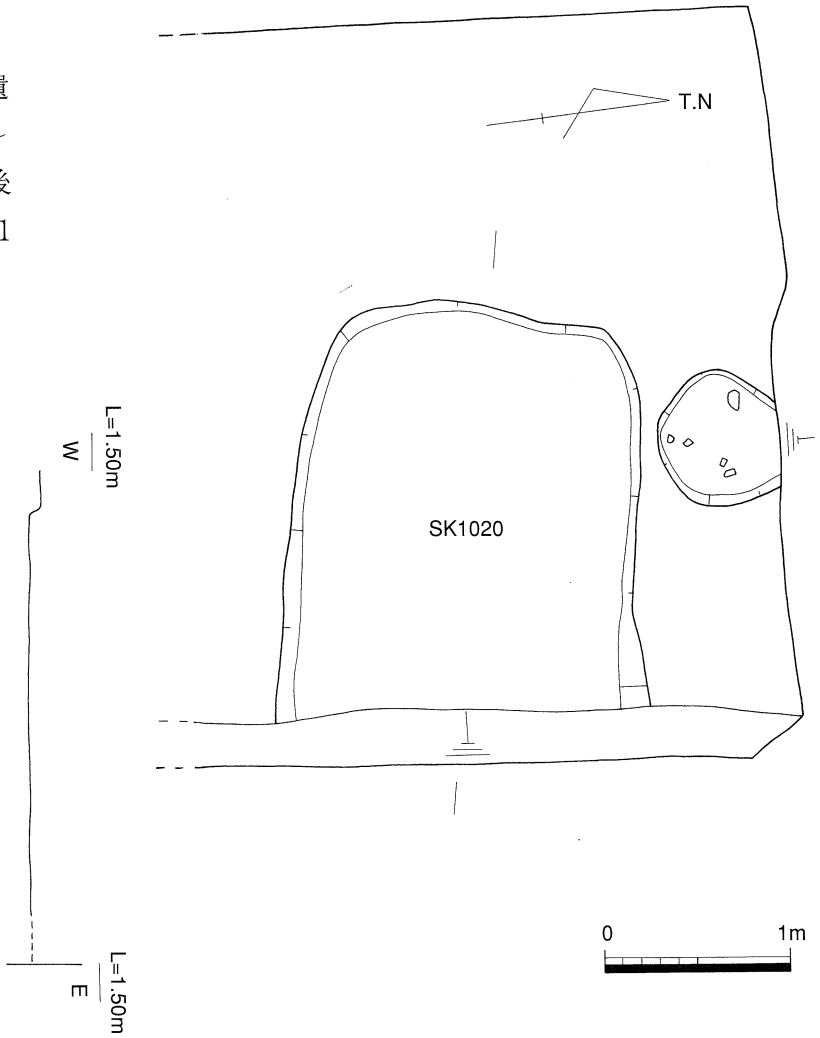
１・２・７は，肥前系磁器である。碗（１），鉢（２），瓶（７）がある。３～６は，瀬戸・美濃系磁器である。碗（４），小坏（５），皿（６）がある。８は焜炉類。９は壺形の土師質土器である。

SK 1020（第294図）

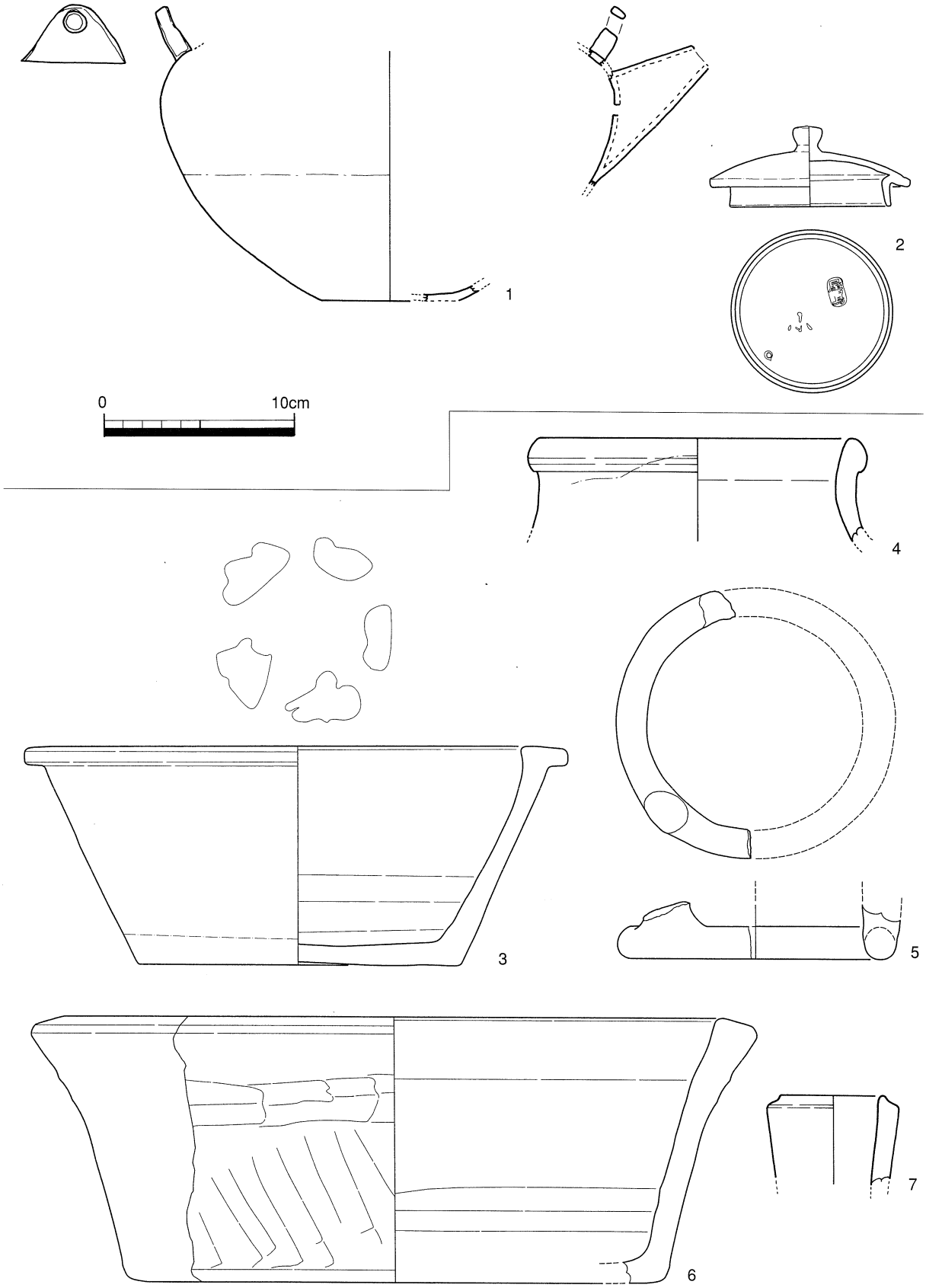
E区北部，第１面で確認した遺構である。検出した標高は1.18～1.28m，底面の標高は1.16m前後を測る。検出長は東西方向で約2.1m，南北方向で約1.8mを測る。平面は長方形として検出したが，東部が調査対象外となっており，全容は不明である。

SK 1020出土遺物（第299図）

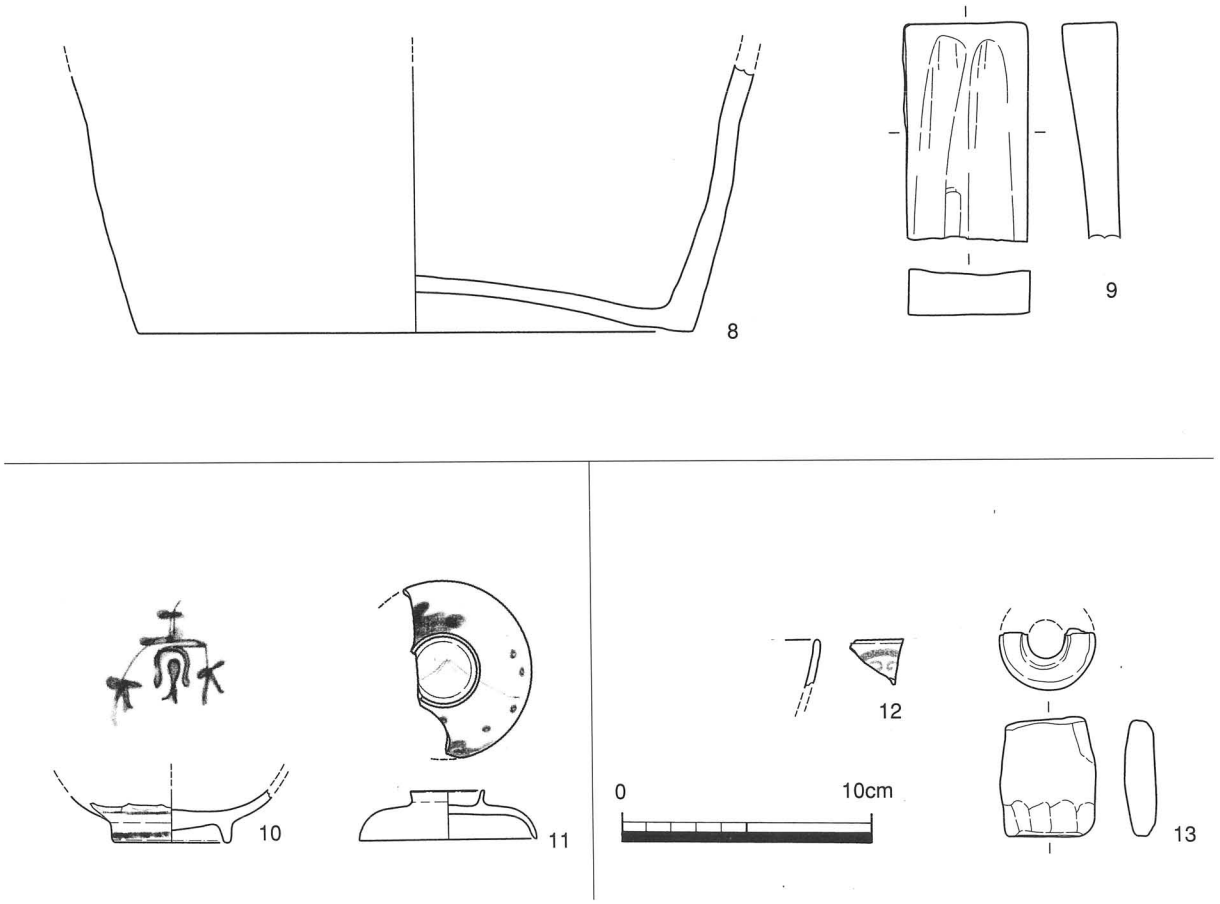
１・２は軒丸瓦である。



第294図　SK 1020平面・断面図

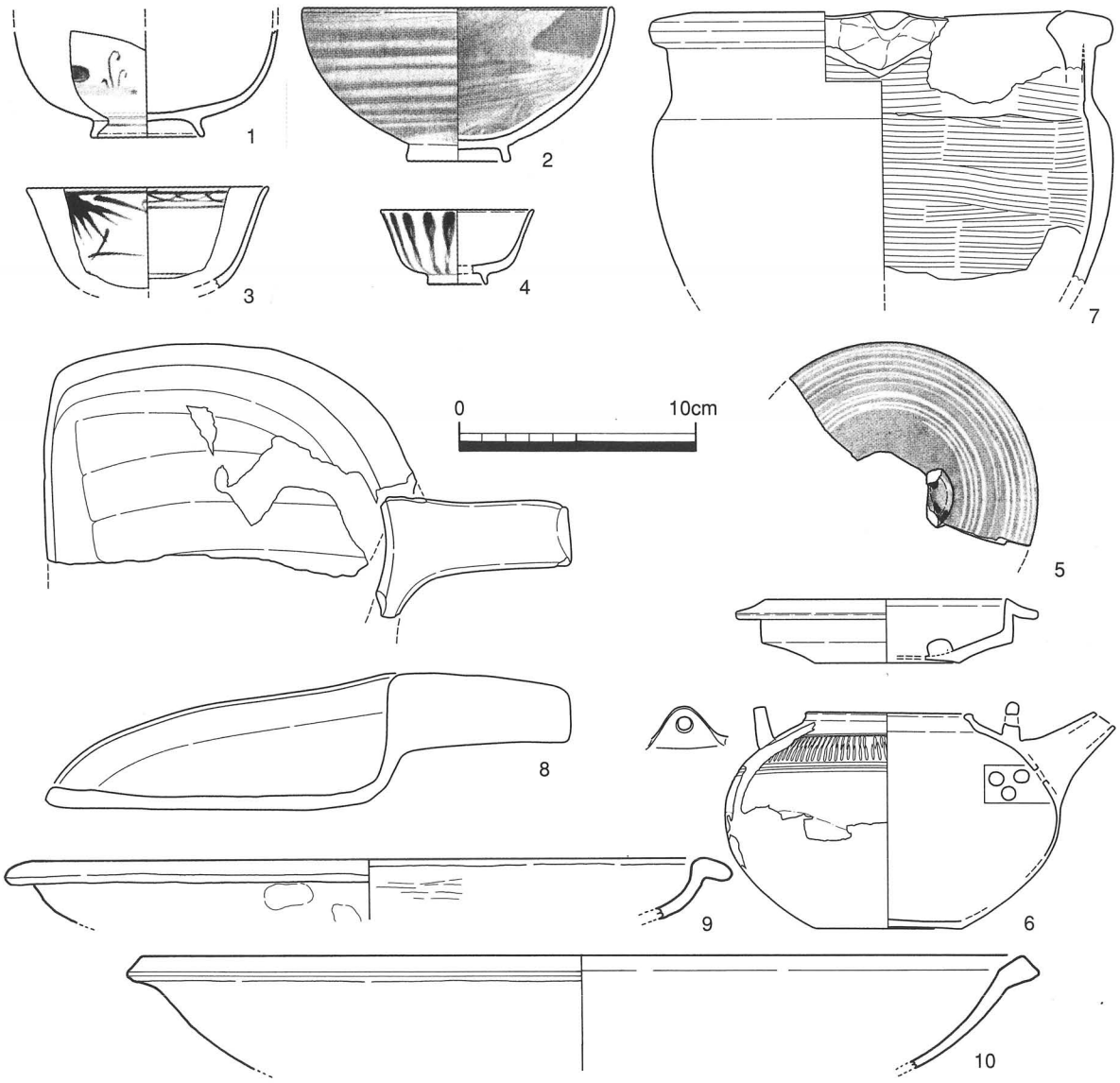


第295図　SK1024・1006出土遺物実測図



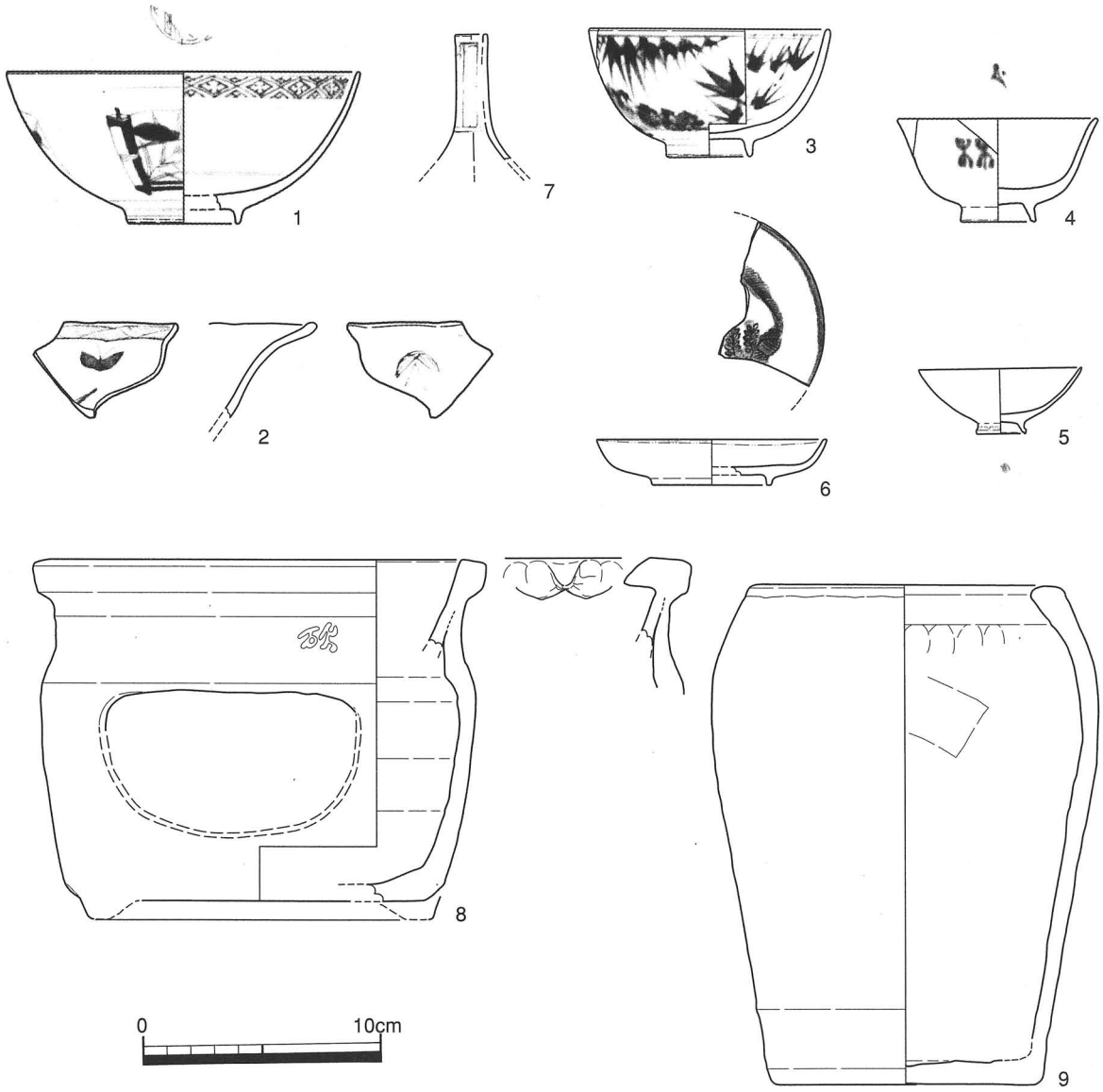
遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SK1024	1	陶	土瓶片	屋島		細	橙2.5YR6/8	明赤褐2.5YR5/8		内面:ロクロナデ		屋島焼 煤付着
SK1024	2	陶	蓋	屋島	最大径:10.55 高:4.20 底:8.20	細	明赤褐2.5YR5/6	外面:明赤褐2.5YR5/8				内面に「屋島」「小」の刻印有
SK1006	3	陶	鉢		口:28.0 高:11.45 底:16.8	細	にぶい赤褐2.5YR4/3	内外:暗褐10YR3/3				見込みに砂目5ヶ所
SK1006	4	陶	甕口縁部	信楽	口:15.8	石英	オリーブ黒5Y2/2	灰黄2.5Y6/2				
SK1006	5	土師質	五徳			中	にぶい橙5YR6/4	内外:浅黄2.5Y7/3				
SK1006	6	土師質	鉢		口:34.4 高:13.8 底:26.0	中	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6		内面・外上半:ロクロナデ 外下半:板ナデ		
SK1006	7	土師質	焼塩蓋口縁部		口:4.9	微砂粒	橙2.5YR6/8	橙2.5YR6/8		内面:布目痕	18c後半	板作り
SK1028	8	土師質	甕底部		底:22.00	中	橙7.5YR7/6	橙7.5YR7/6		内面:ナデ		
SP1041	9	石	砥石									
SD1002	10	磁	碗底部		底:4.50	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色			漳州窯
SD1002	11	磁	蓋	肥前	つまみ部:2.9 高:1.95 底:7.0	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色			
SP1049	12	磁	碗口縁部	京・信		細	灰白2.5Y7/1	内外:灰白N8/0	上絵:青	外面:中陰四つ葵		理兵衛焼
SP1049	13	陶	土錘	備前	全長:4.10	細	灰赤2.5YR4/2	灰赤2.5YR4/2				

第296図　SK1024・1006・1026・SP1041・SD1002・SP1049出土遺物実測図・観察表



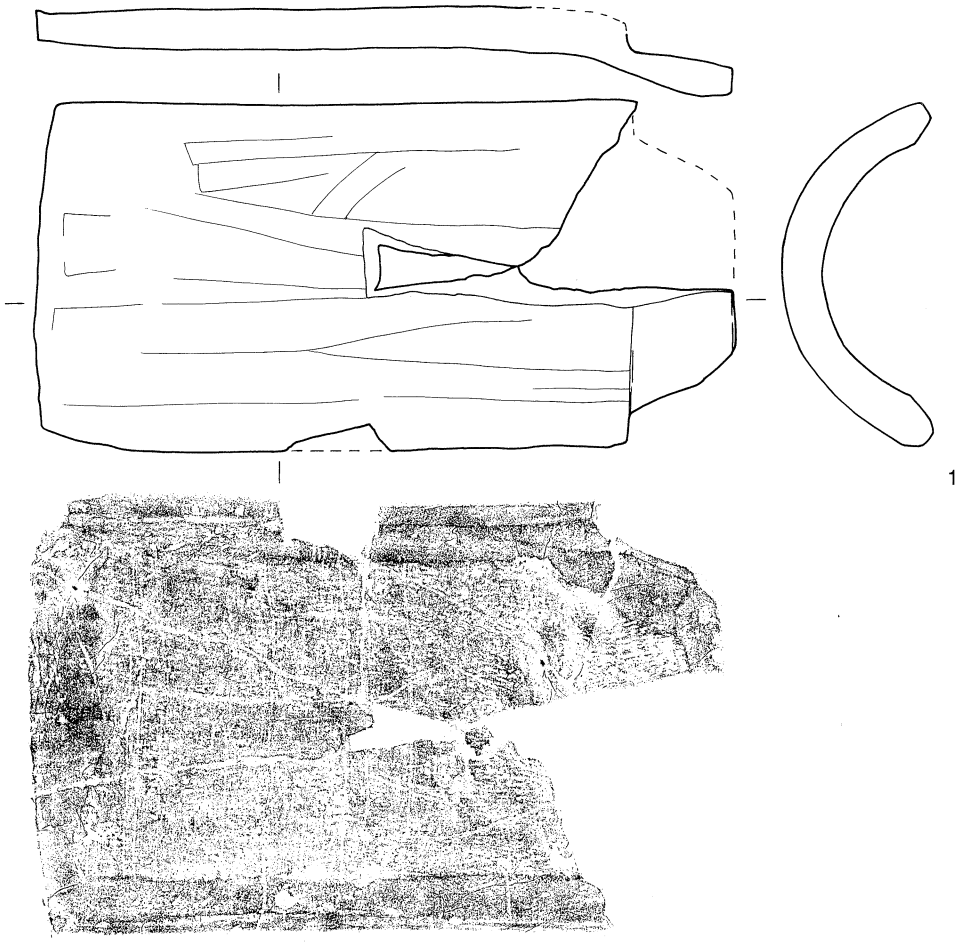
遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SK1017 N0.9	1	磁	碗	肥前	底:4.65	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色			腰張碗
SK1017 N0.2	2	陶	碗	瀬・美	口:13.00 高:6.45 底:4.00	細	淡黄2.5Y8/3	浅黄2.5Y7/4		外面:直線的な刷毛目 内面:打刷毛		
SK1017 N0.9	3	磁	碗	瀬・美	口:10.05	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:コバルト			
SK1017 N0.4	4	磁	小杯	瀬・美	口:6.40 高:3.10 底:2.40	微	灰白	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色			
SK1017 N0.9	5	陶	蓋	京・信	つまみ部:10.2 最大径:12.8 高:2.7	細	灰白2.5Y7/1	外面:オリーブ黄5Y6/4	上絵:白・青	外面:直線的な刷毛目		
SK1017 N0.6	6	陶	急須	屋島	口:6.80 高:9.50 底:6.20	細	褐7.5YR4/4	外面:明赤褐5YR5/8				底部に煤付着
SK1017 N0.6	7	土師質	七輪		口:19.00 高:11.20	中	にぶい褐7.5YR5/3	外面:明褐灰7.5YR7/2 内面:にぶい褐7.5YR5/3		内面:ハケメ		口縁外周内外に煤付着
SK1017 N0.6,9	8	土師質	十能		高:5.65	中	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄橙10YR6/4		内面:ナデ		内側に煤付着
SK1017 N0.6	9	土師質	焙烙		口:28.0	微砂粒		外面:黒褐7.5YR3/1 内面:灰褐7.5YR6/2		内・外口縁部:ロクロナデ 外面:指押さえ 内面:ハケメ		外面に煤付着 内面に有機物付着
SK1017 N0.6	10	瓦質	焙烙		口:37.4	微砂粒		内外:黒N2/0				

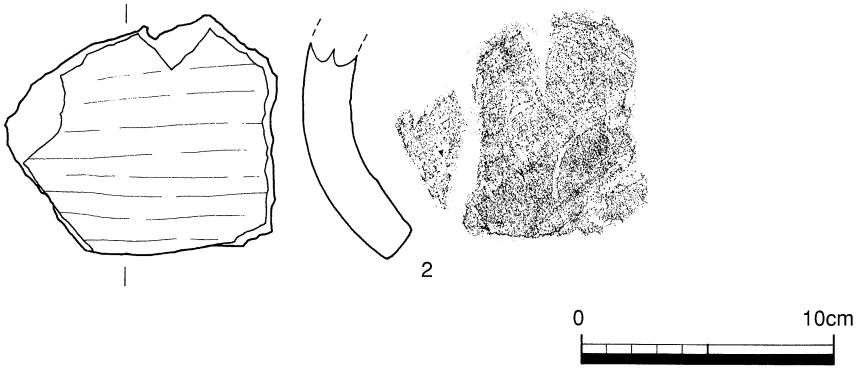
第297図　SK1017出土遺物実測図・観察表



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
SK1018	1	磁	碗	肥前	口:14.70 高:6.30 底:4.50	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色		大橋Ⅳ期	
SK1018	2	磁	鉢口縁部	肥前		微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色			
SK1018	3	磁	碗	瀬・美	口:9.90 高:5.25 底:3.35	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色	内外:笹		
SK1018	4	磁	碗	瀬・美	口:8.20 高:4.30 底:3.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:青色			
SK1018	5	磁	小杯	瀬・微	口:6.60 高:2.70 底:2.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色			
SK1018	6	磁	皿	関西系	口:9.55 高:1.90 底:4.80	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:青,口紅:極暗赤褐5YR2/4			
SK1018	7	磁	瓶	肥前	口:3.20	微	灰白色	内外:透明釉	上絵:赤			
SK1018	8	土師質	七輪		口:19.0 高:15.0 底:14.5	中	灰白5Y7/1	外面:灰白5Y7/1 内面:にぶい褐7.5YR5/4		外面:板状ナデ		口縁外周内外に煤付着
SK1018	9	土師質	火鉢		口:13.0 高:20.9 底:10.6	中	にぶい褐7.5YR5/3	にぶい褐7.5YR5/3		内面:指押さえ、板ナデ		

第298図　SK1018出土遺物実測図・観察表





遺構名	報文番号	遺物種別	法量(cm)			胎土	色調		調整		焼成	備考
			長さ(現存長)	厚さ	幅(現存幅)		断面	器面	内面	外面		
SX1020	1	丸瓦	27.6	1.6	13.5	砂礫少	灰白N7/0	暗灰N3/0	コビキB ゴザ状圧痕		良	
SX1020	2	丸瓦	10.6	1.9	9.5	砂礫	灰白2.5Y7/1	灰N4/0	布目	板ナデ	良	被熱

第299図　SK1020出土遺物実測図・観察表

Ｃ区南西部第３面整地層

Ｃ区の南西部，第３面で確認した整地である。検出した標高は約1.00ｍで，厚さ10㎝程の堆積層で遺物を包含する。下位のＳＥ3004・3005・ＳＤ3007を被覆し，これらの遺構の上層部と同様の堆積物として認められる。道路状の整地とした水平堆積層の下位に存在し，屋敷内に広がって認められた。前後関係を示す遺構では，上記の遺構より後出し，ＳＫ3014，ＳＸ3002に先行している。遺物は古相のものも含むが，凡そ16世紀末葉の所産と考えられる。

Ｃ区南西部第３面整地層出土遺物（第300図）

遺物はコンテナに1/4程出土した。中世以来の土師質土器が主体を占める他，備前，瀬戸・美濃系陶器が認められる。１は中国産青磁である。２は瀬戸・美濃系陶器皿である。３は備前甕口縁部である。４～７・９は，土師質土器である。把手付鍋（４），擂鉢（５），羽釜（６・７），鍋脚部（９）がある。８は亀山系瓦質土器鍋である。

Ａ区第３面整地層

Ａ区，第３面で確認した整地である。当初は，濁らず遺物を包含しないため近世遺構の地山層と考えていた。しかし下位にＳＸ4001，ＳＥ3001が認められ，ＳＸ3002の一部を被覆する大規模な整地層であることが判明した。確認した標高は約1.00ｍである。厚さ40㎝程で，北に向かい緩やかに流れ込む。おそらく大きく窪むＳＸ4001～ＳＸ3002の東部までを，埋め立て造成する目的に用したものと考えられる。当整地層の時期は，ＳＸ4001及びＳＸ3004・3005との前後関係により17世紀中葉と考えられる。これらの状況や絵図との関連を考慮すると，松平藩政になって（1642年），生駒時代の屋敷地が統合される際の所産と推定される。

Ａ区第３面整地層出土遺物（第301図）

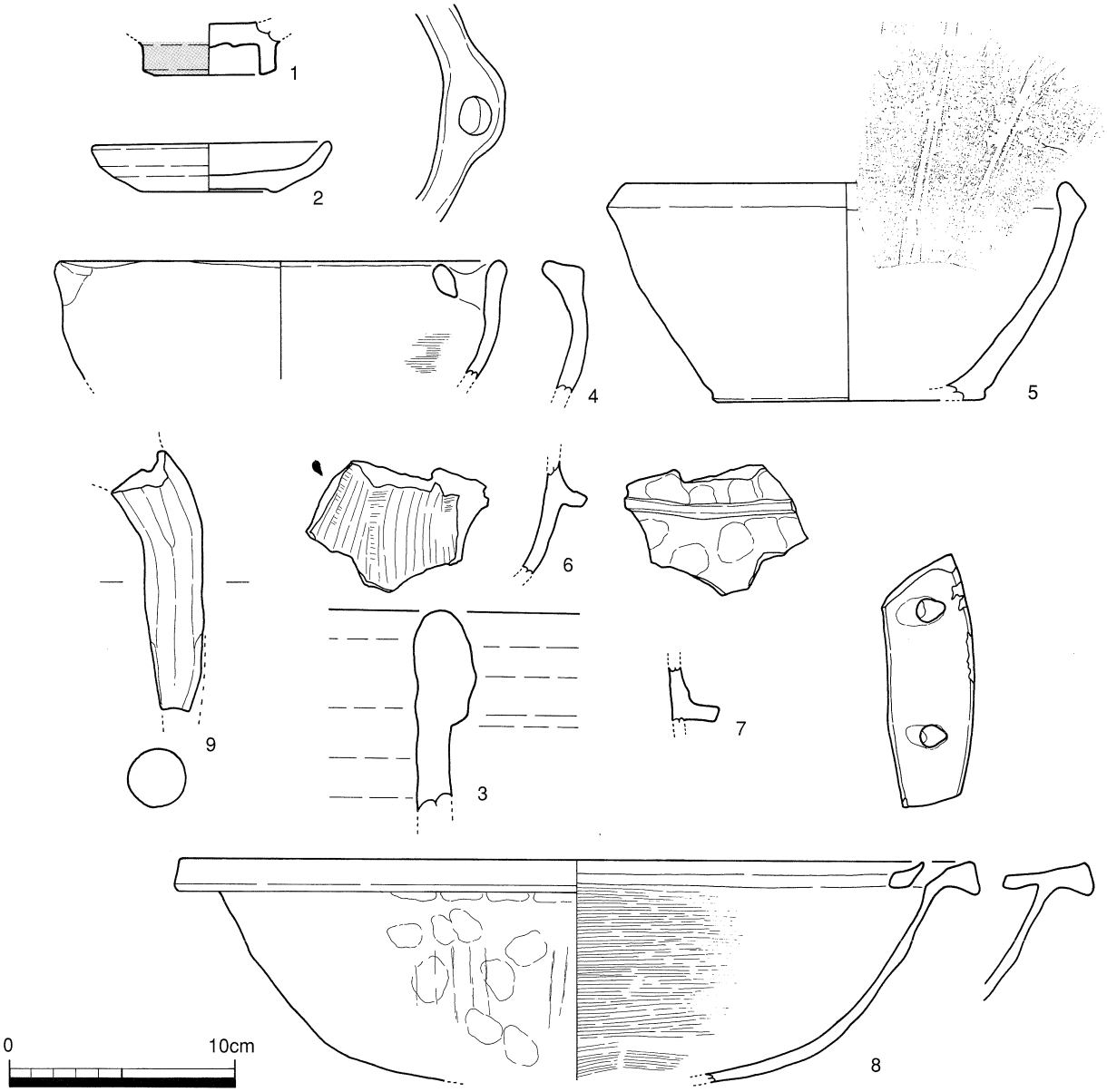
若干量であるが遺物の出土が認められた。１は肥前系陶器碗である。２は肥前系磁器皿。見込に虫（蝶？）を描く。３・４は，備前擂鉢である。

道路整地

Ａ・Ｃ・Ｅ・Ｆ区で認められた道路と考えられる整地である。上位では細く締まった砂及びシルト質土の互層が築地状にみられ，その下位はやや厚い堆積となるシルト質層が水平に堆積する。下位の堆積については，屋敷内の整地と比べて整った土質の堆積層が水平状に認められるもので，直接，道路と判断できるような特徴的な堆積層ではなく人為的な整地によるものかは明瞭ではない。

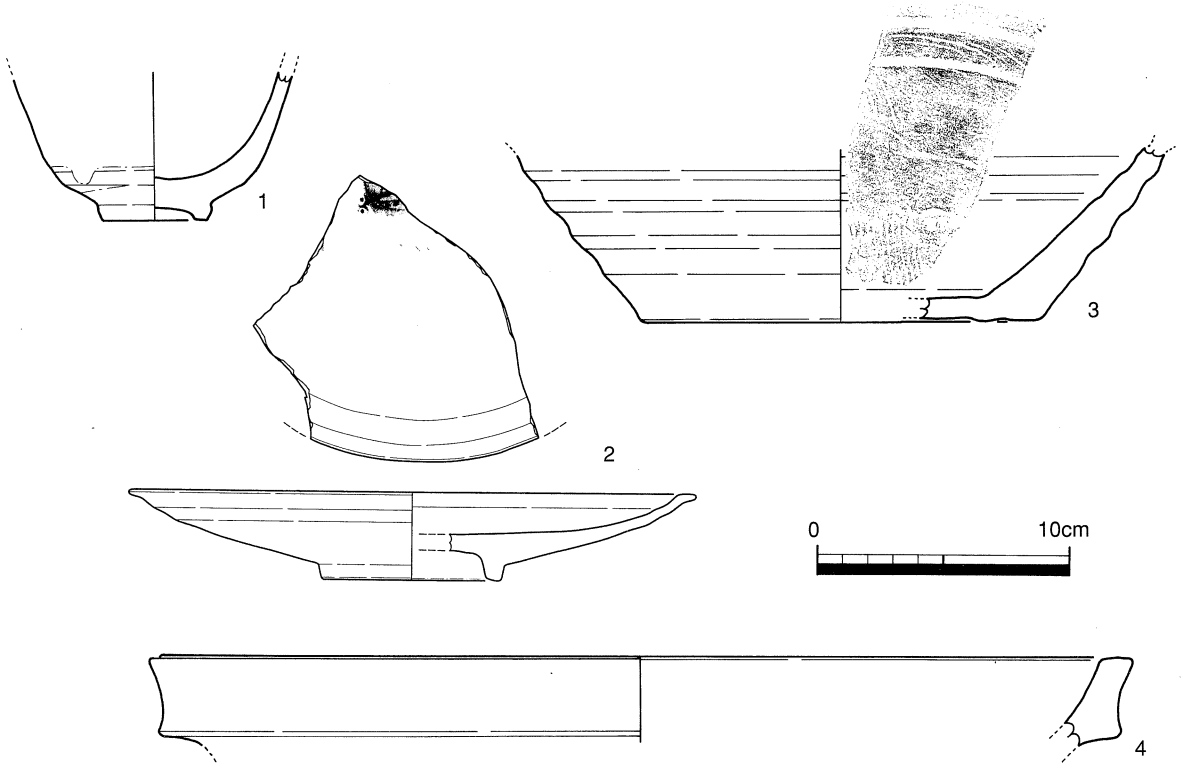
道路整地出土遺物（第302・303図）

調査の工程上，大半を機械により掘削したため遺物の取り上げは的確には行っていないが，１～３が第３面までのもので，４～13が，第１面までの機械掘削時の出土遺物である。１は肥前系陶器皿である。２は肥前系陶器火入である。３は肥前系磁器青磁皿である。４～９は肥前系磁器青磁皿である。５は，外面に「□に□小町」と赤色絵されており，紅猪口に考えられる。８は大形の壺である。10は瀬戸・美濃系磁器皿。木型打込みにより成形される。11は京・信楽系陶器端反碗である。12は産地不明陶器蓋。13は焼塩壺蓋である。



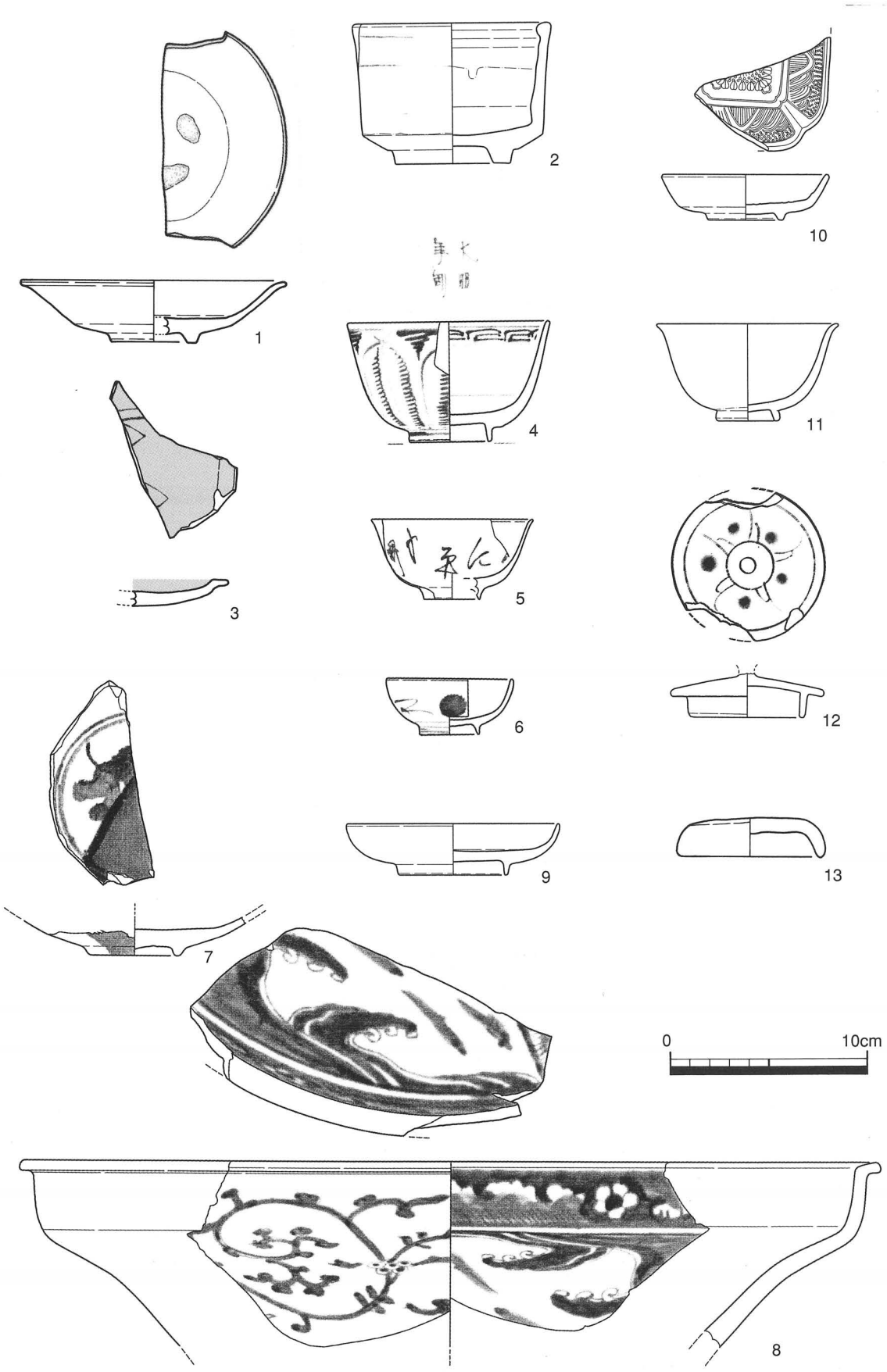
遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
南西隅灰色シルト整地	1	磁	碗底部	中国	底:5.8	微	灰白N7/0	オリーブ灰10Y6/2		内面:ケズリ		龍泉窯?
南西隅灰色シルト整地	2	陶	皿	瀬・美	口:10.3 高:2.1 底:5.8	細	灰白5Y8/1	淡黄7.5Y7/3			大窯 3段階	釉剥ぎ
南西隅灰色シルト整地	3	陶	甕口縁部	備前		細		外面:黒褐5YR3/1 内面:暗赤褐2.5YR3/3				
南西隅灰色整地	4	土師質	外耳付鍋		口:9.3	砂粒少	明赤灰2.5YR7/2	明赤灰2.5YR7/2		外面口縁部:ロクロナデ 内面:ハケメ,板ナデ		煤付着
南西隅灰色シルト整地	5	土師質	擂鉢		口:19.1 高:9.5 底:12.0	細	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2		外面口縁部:ロクロナデ 内面:ハケメ		
南西隅灰色シルト整地	6	土師質	羽釜			微砂粒		外面:浅黄橙10YR8/4	外面:浅黄橙10YR8/3	外面:指押さえ 内面:ハケメ		
南西隅灰色シルト整地	7	土師質	羽釜			微砂粒	浅黄橙10YR8/4	浅黄橙10YR8/4		外面:ナデ,ハケメ 内面:ナデ		煤付着
南西隅灰色シルト整地	8	瓦質	焙烙		口:34.8	微砂粒		内外:黒5Y2/1				
南西隅灰色シルト整地	9	土師質	脚部			微砂粒	にぶい黄橙10YR5/3	にぶい黄橙10YR5/3				

第300図　C区南西部第3面整地層出土遺物実測図・観察表



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
にぶい黄色砂礫	1	陶	碗	肥前	底:4.1	細	灰N5/0	灰白7.5Y8/1 暗オリーブ7.5Y4/3			大橋Ⅱ期	
にぶい黄色砂礫	2	磁	皿	肥前	口:22.40 高:3.50 底:7.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色	内面:昆虫	大橋Ⅱ・2期	初期伊万里
にぶい黄色砂礫	3	陶	擂鉢	備前	底:15.8	細	橙5YR6/6	橙5YR6/6		外面:ロクロナデ		内外面に被熱痕
にぶい黄色砂礫	4	陶	口縁部	備前	口:37.5	細		内外:極暗赤褐2.5YR2/2				

第301図　A区第3面整地層出土遺物実測図・観察表



第302図　道路整地出土遺物実測図

遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
道路整地	1	陶	皿	肥前	口:13.2 高:3.1 底:4.3	細	灰白N7/0	オリーブ灰10Y6/2		高台畳付・糸切り痕	大橋Ⅱ期	見込みと高台に砂目2ヶ所
道路整地	2	陶	碗	肥前	口:9.55 高:7.15 底:5.80	細	黄灰2.5Y6/1	内外下半:暗赤褐2.5YR3/3 内外上半:オリーブ灰5GY6/1			大橋Ⅲ期	
道路整地	3	磁	皿	肥前		微	灰白N8/0	明緑灰5G7/1			大橋Ⅱ-2期	青磁 陰刻
道路整地	4	磁	碗	肥前	底:4.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色	内面:「大明年制」		
道路整地	5	磁	碗	瀬・美	口:8.10 高:4.05 底:2.80	微	灰白色	内外:透明釉	上字:暗褐7.5YR3/3			
道路整地	6	磁	小杯	肥前	口:6.30 高:2.90 底:3.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色			
道路整地	7	陶	皿底部	肥前	底:4.40	細	灰白7/0	内外:灰10Y6/1 極暗赤褐5YR2/4	呉須:淡青色		大橋Ⅳ期	
道路整地	8	磁	壷口縁部	肥前	口:43.10	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色	外面:唐草		
道路整地	9	磁	皿	肥前	口:10.60 高:2.62 底:5.40	微	灰白色	内外:透明釉			大橋Ⅲ期	
道路整地	10	磁	皿	瀬・美	口:8.25 高:2.30 底:3.70	微	灰白色	内外:透明釉				型押成形
道路整地	11	陶	小杯	京・信	口:9.00 高:4.90 底:3.00	細	灰白7.5Y7/1	内外:灰白7.5Y7/2				
道路整地	12	陶	土瓶蓋		最大径:7.75 底:5.60	細	灰黄2.5Y7/2	外面:灰白5Y8/1	上絵:緑・オリーブ黒5Y3/2			
道路整地	13	土師質	焼塩蓋		口:7.1 高:2.0	微砂粒	橙2.5YR6/8	橙2.5YR6/8				被熱痕有

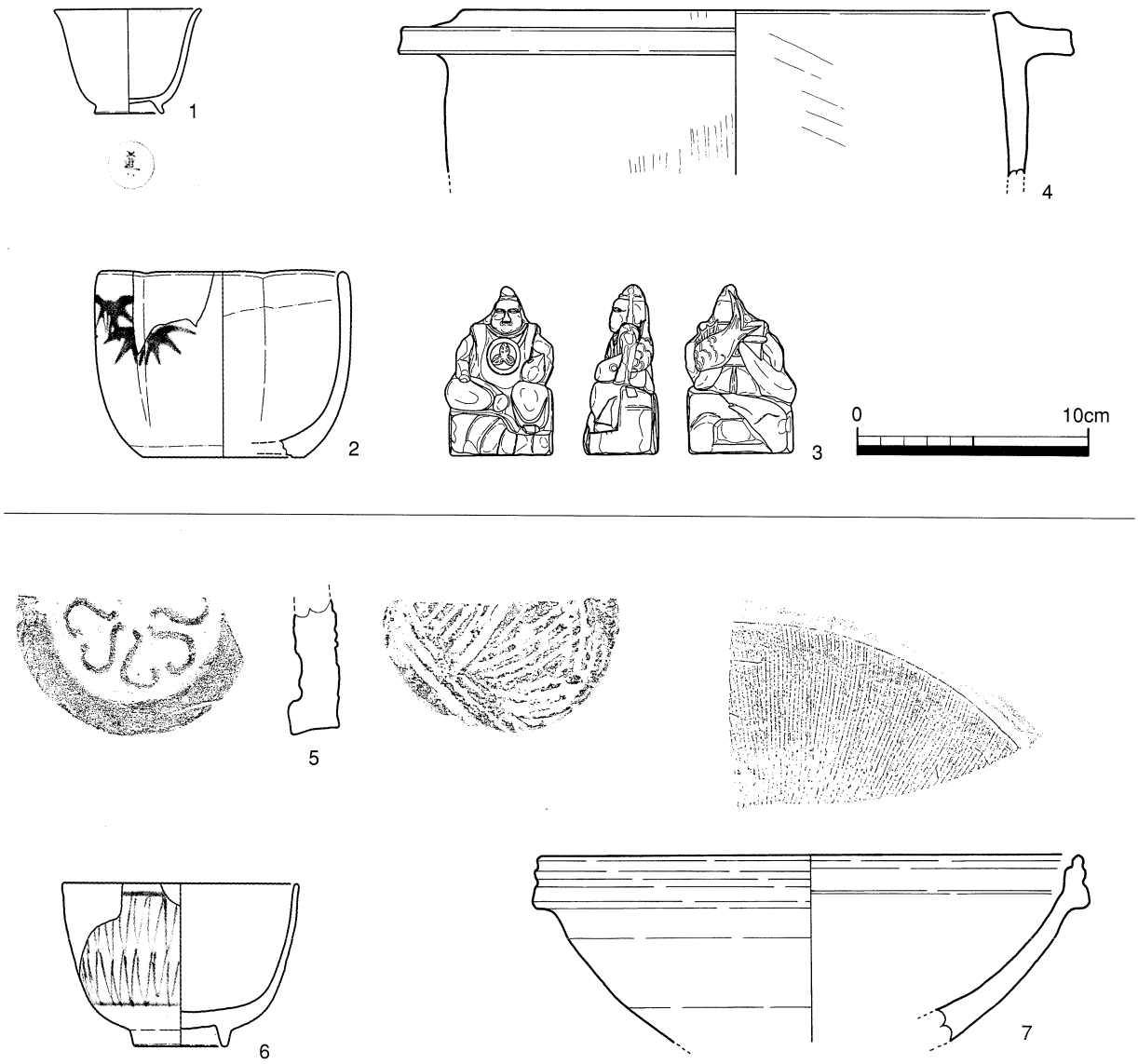
第303図　道路整地出土遺物実測図・観察表

機械掘削及び人力掘削中出土遺物（第304～310図）

1は磁器小坏である。高台内に「道八」の銘が認められる。讃窯は藩の御庭焼として，藩主が京焼の名工仁阿弥道八を招き東讃三本松で開窯したと伝えられている。道八焼と呼ばれる讃窯との関連が推察される遺物である。2は京・信楽系陶器火入である。3は恵比寿さん。4は土師器羽釜である。平安時代の所産で，F区より出土している。5は，大膳家の家紋瓦である。A区，第2面で出土した。6は肥前系磁器碗である。7は堺・明石産の擂鉢である。

8～20（18を除く）は，C区第1面から焼土上面までの掘削時の出土遺物である。8～17は，肥前系磁器である。碗（8～12），小坏（13・14），皿（15～17）がある。16は，大皿で見込に鹿を描く。高台内には，一重方形枠内に「福」の銘款と4箇所のハリ支えの痕跡が認められる。19は土師質土器皿である。20は碁石である。18は焼土掘り下げ中に出土した肥前系陶器皿である。口縁部は溝縁で，見込に砂目が認められる。

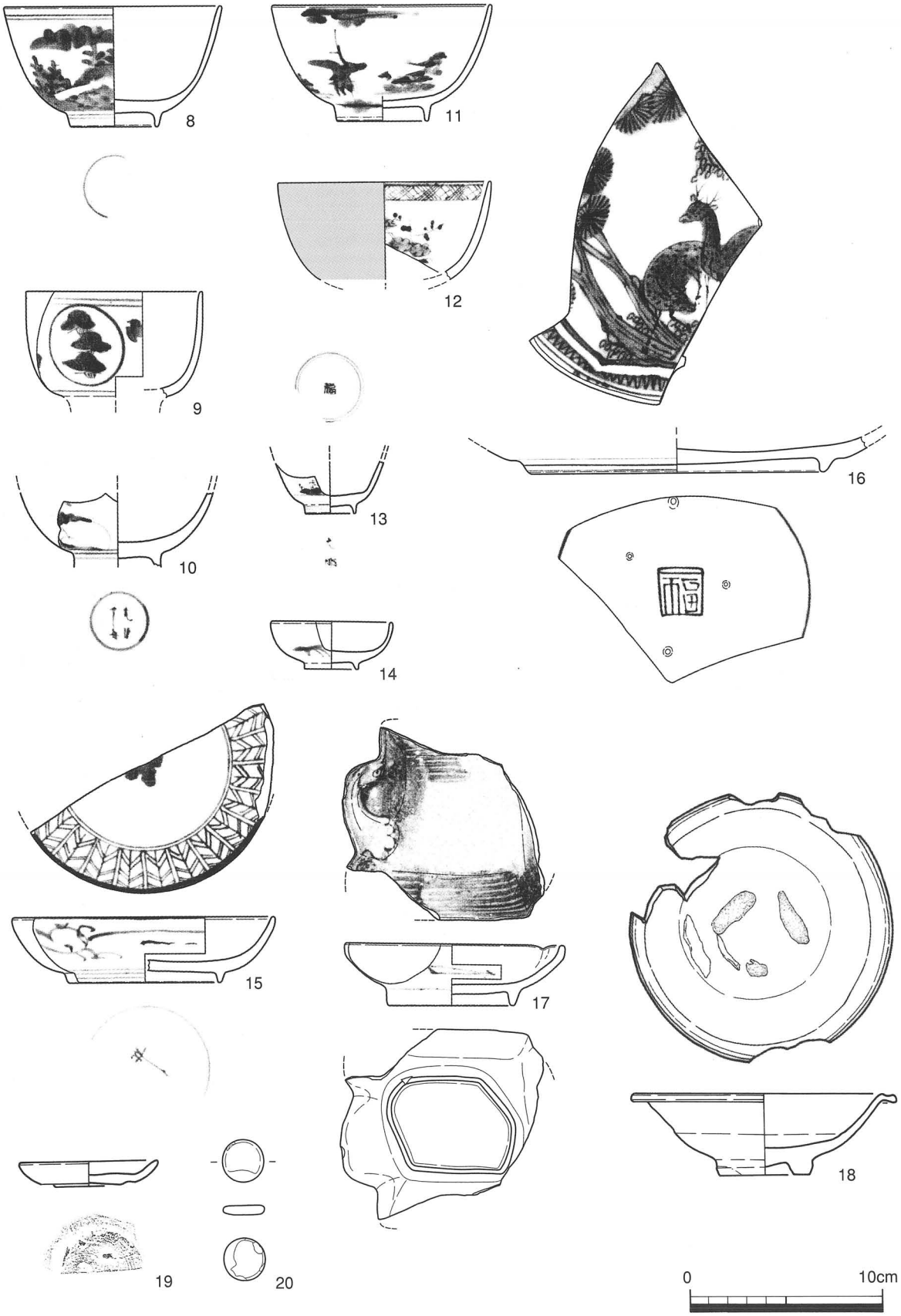
21～37は，第2面までの掘削中に出土した遺物である。21は，肥前系陶器碗である。22は肥前系陶器火入れである。23は肥前系磁器碗である。内外に瑠璃釉を施す。器面には，上絵の痕跡が残る。24は肥前系磁器碗。青磁で高台内無釉である。25は備前大甕口縁部である。26は産地不明陶器向付である。器面は赤褐色に焼き締まり，外面に陰刻し灰白色の釉を掛ける。口縁端部には刻目を施す。27は肥前系磁器皿である。見込と畳付に砂目が認められる。28は景徳鎮窯系青花皿底部である。29は肥前系陶器皿である。銅緑釉を施す。



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
第1回	1	磁	小杯		口:6.20 高:4.45 底:2.80	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色		19c	讃窯製品
第1回	2	陶	火入		口:10.20 高:7.85 底:7.00	細	浅黄2.5Y7/3	内上:外オリーブ黄5Y6/3	呉須:オリーブ5Y4/2			型作り
第1回	3	土師質	人形			細	にぶい橙7.5YR7/3	内外:にぶい橙7.5YR7/3				前後型合わせ キラコ付着
F区 第1回	4	土師質	羽釜		底:23.4	赤色粒多	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2		外面:ナデ、ハケメ 内面:板ナデ		
第2回	6	磁	碗	肥前	口:10.00 高:6.90 底:3.80	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:暗青色		大橋Ⅲ期	高台内にアルミナ砂付着
第2回	7	陶	擂鉢	堺・明石	口:23.0	細		外面:にぶい赤褐2.5YR4/4 内面:赤褐10R4/3		内・外口縁部:ロクロナデ 外面:ナデ		

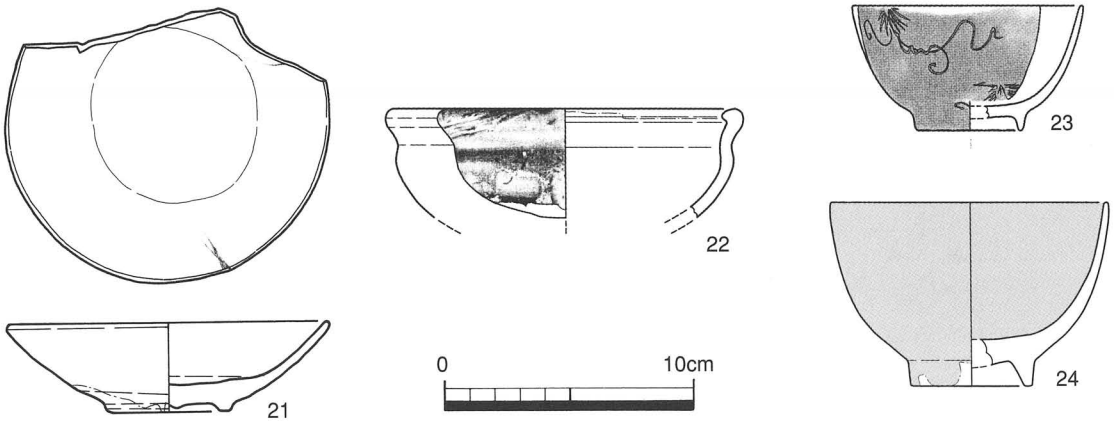
遺構名	報文番号	遺物種別	法量(cm)			胎土	色調		調整		焼成	備考
			長さ(現存長)	厚さ	幅(現存幅)		断面	器面	内面	外面		
第2回	5	家紋瓦	10.5	2.2	―	砂礫	灰N6/0	灰白10Y7/1			良	中除四つ葵

第304図　機械掘削・人力掘削中出土遺物実測図・観察表（その1）

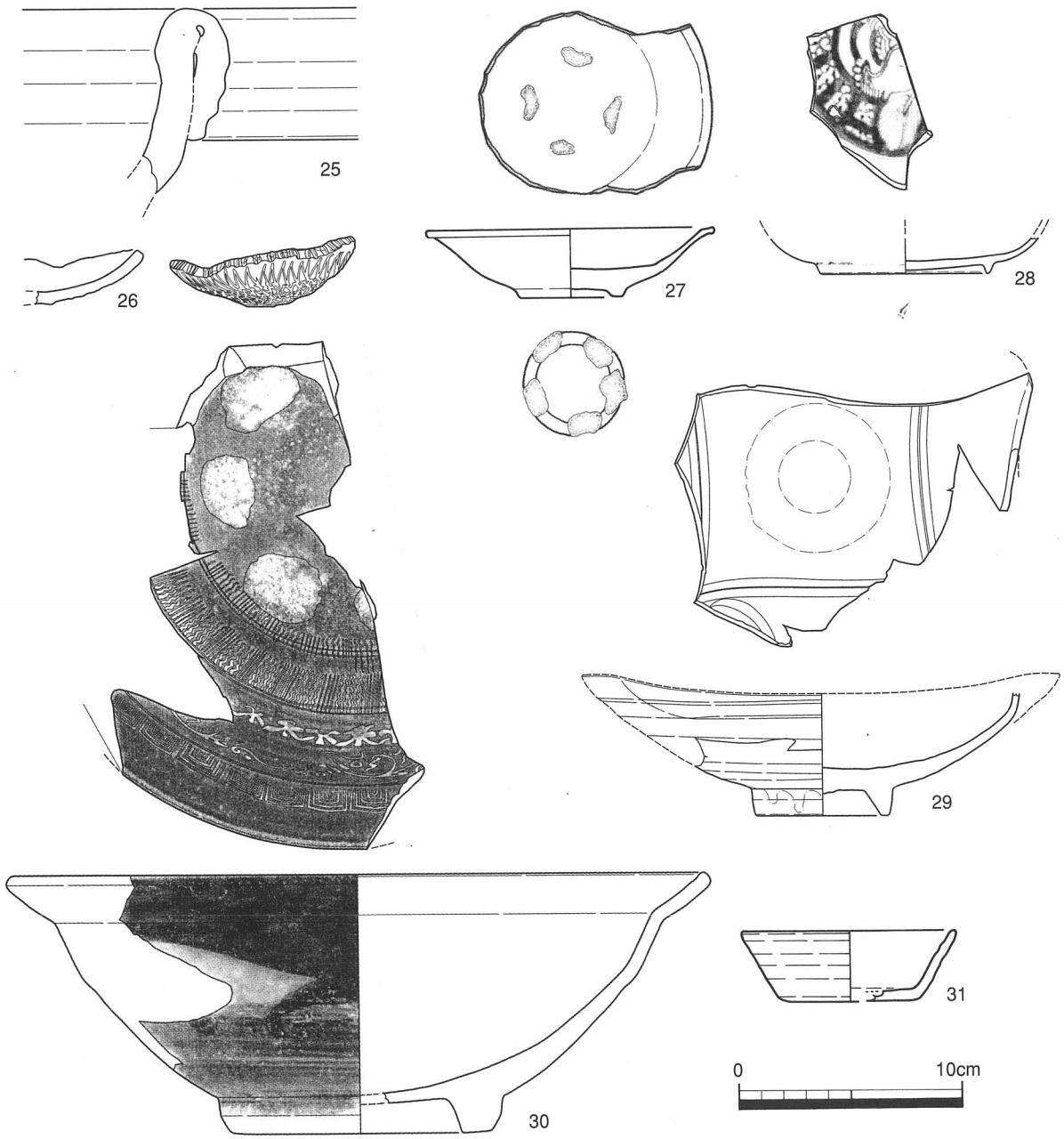


第305図　機械掘削・人力掘削中出土遺物実測図（その２）

遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
第1面以下～焼土面	8	磁	碗	肥前	口:11.00 高:6.15 底:4.40	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色		大橋Ⅱ期	
第1面以下～焼土面	9	磁	碗	肥前	口:9.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色	外面:松	大橋Ⅳ期	
第1面以下～焼土面	10	磁	碗底部	肥前		微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・明青色			底部に銘款有
第1面以下～焼土面	11	磁	碗	肥前	口:11.10 高:5.42 底:2.30	微	灰白色		呉須:明青色	外面:鶴		
第1面以下～焼土面	12	磁	碗	肥前	口:10.90	微	灰白色	外面:明オリーブ灰2.5GY 7/1 内面:透明釉	呉須:淡・暗青色 口紅:褐7.5YR4/4	内面:四方襷 草木	大橋Ⅳ期	青磁
第1面以下～焼土面	13	磁	小杯底部	肥前	底:2.50	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡・暗青色			高台内に銘款
第1面以下～焼土面	14	磁	小杯	肥前	口:6.10 高:2.45 底:2.70	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:淡青色	外面:笹文	大橋Ⅳ期	
第1面以下～焼土面	15	磁	皿	肥前	口:13.60 高:3.40 底:7.80	微	灰白色	呉須:淡・暗青色 口紅:黒7.5YR7/1	内面:五弁花		18c末～ 19c初	小広東併行
第1面以下～焼土面	16	磁	皿底部	肥前	底:15.00	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色	内面:鹿・松	大橋Ⅲ期	底部に銘款有 ハリ支え
第1面以下～焼土面	17	磁	変形皿	肥前	口:11.15 高:3.20 底:6.30	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明・暗青色		大橋Ⅲ期	糸切り細工
C区焼土掘下	18	陶	皿	肥前	口:13.4 高:4.25 底:4.6	細	浅黄橙10YR8/3	にぶい黄橙10YR7/3		外面:ロクロナデ 外底・外面下半:ケズリ	大橋Ⅱ期	見込に砂目3ヶ所と溶着痕
第1面～焼土面	19	土師質	皿		口:7.0 高:1.3 底:3.4	中	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		内外:ロクロナデ 外底・回転糸切り	18c後半～	
第1面以下～焼土面	20	石	碁石		全長:2.20 厚さ:0.5							
第2回	21	陶	皿	肥前	口:12.7 高:3.6 底:5.1	細	浅黄橙7.5YR8/6	灰白2.5Y7/1		外面下半:ロクロナデ 外底・ケズリ	大橋Ⅱ期	見込み・高台に砂目3ヶ所
第2回	22	陶	鉢口縁部		口:14.20	細	暗赤10YR3/4	外面:灰白10YR8/2 明黄褐2.5Y6/6			大橋Ⅲ期	二彩
第2回	23	磁	碗		口:9.00 高:4.90 底:4.00	微	灰白色	外面:瑠璃釉 内面:透明釉	上絵:痕跡のみ			
第2回	24	磁	碗	肥前	口:11.00 高:7.35 底:4.80	微	灰白色	内外:明オリーブ灰2.5 GY7/1			1640～ 50年代	高台内無釉,青磁

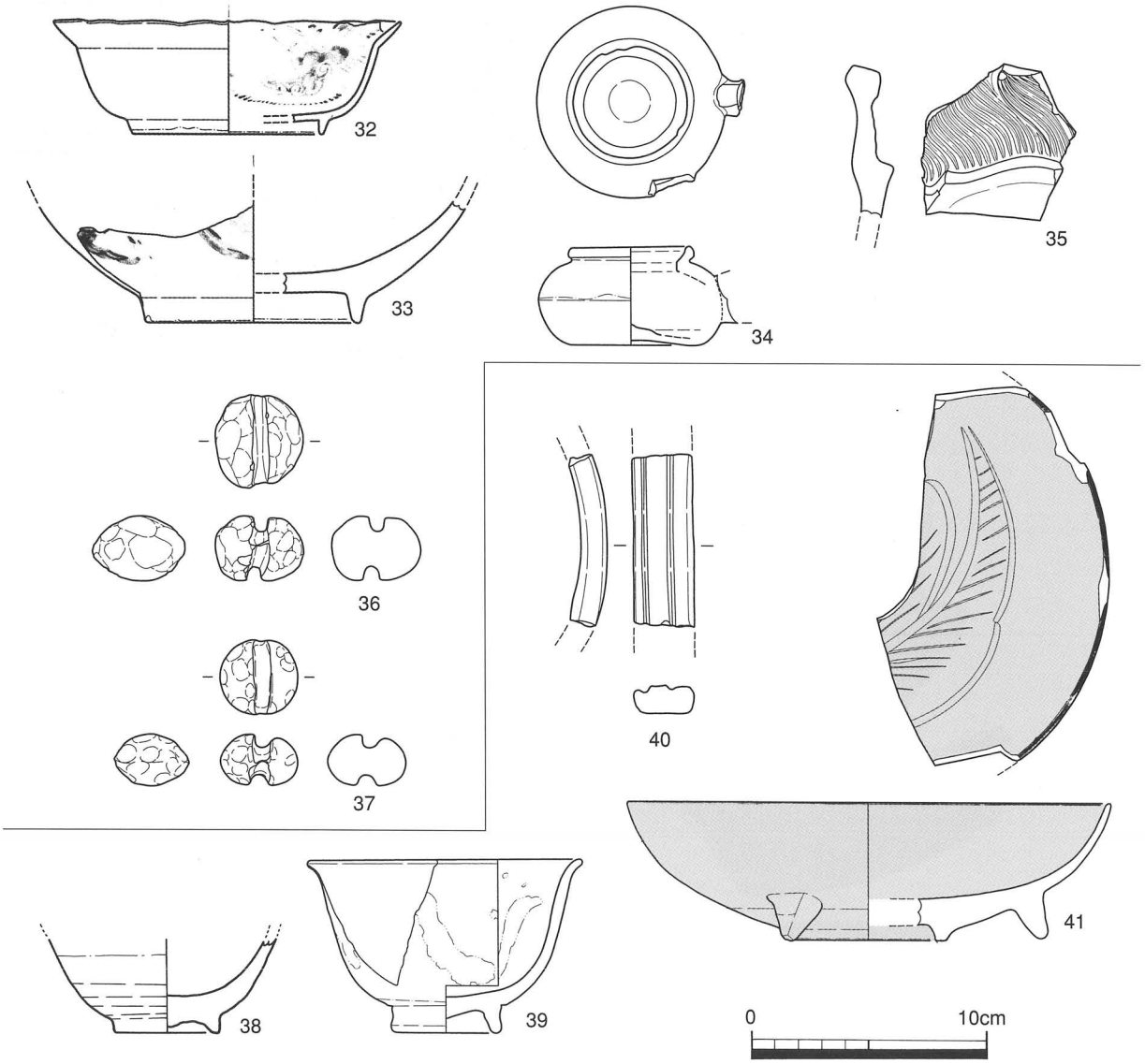


第306図　機械掘削・人力掘削中出土遺物実測図・観察表（その3）



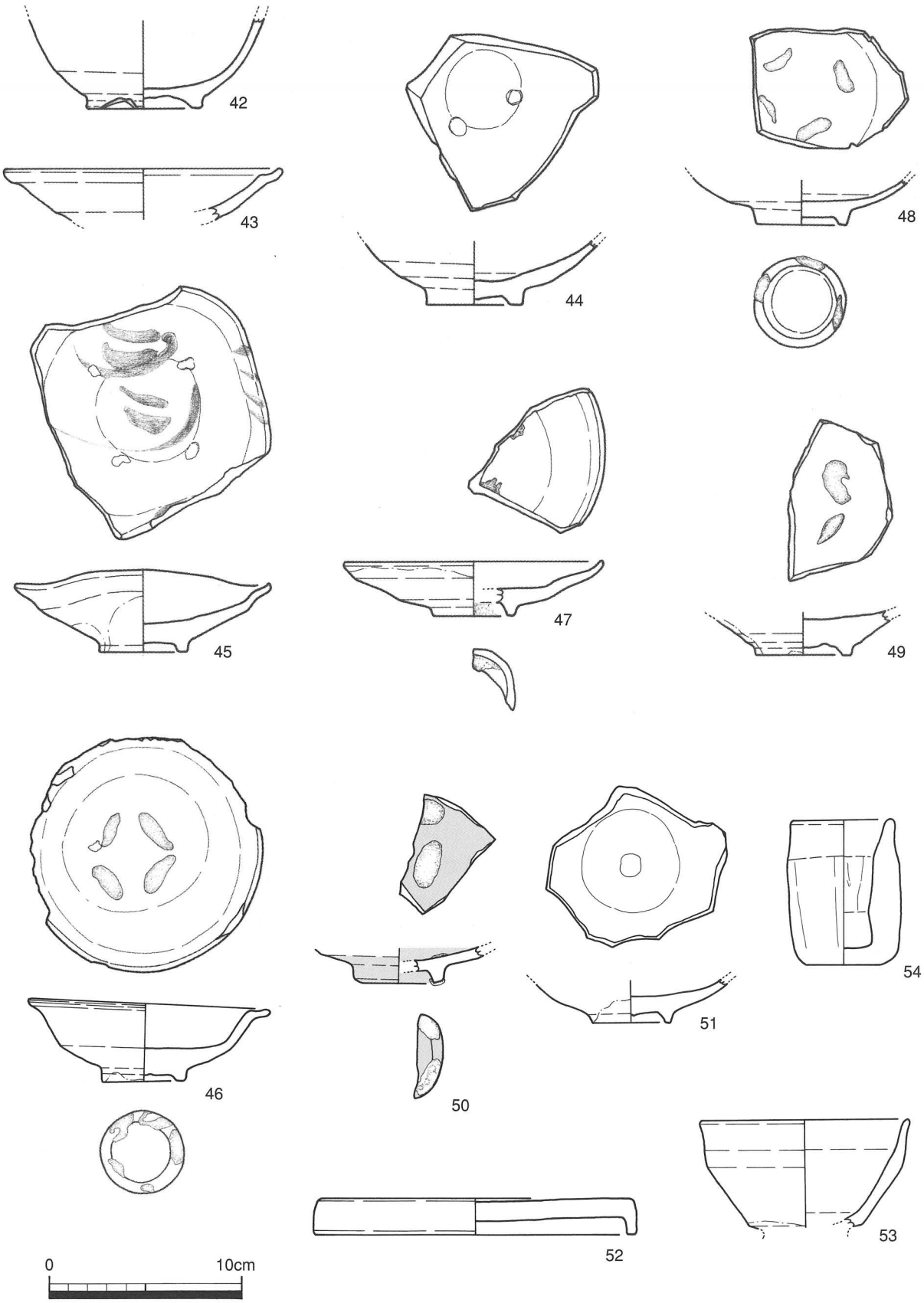
遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
第2回	25	陶	甕口縁部	備前		細	赤褐10R4/4	外面:暗褐10YR3/3 内面:赤褐10R4/4				
第2回	26	陶	向付			細	灰N6/1	外面:灰白7.5Y8/1 内面:暗赤10R3/4	呉須:暗オリーブ灰 2.5GY3/1			
第2回	27	陶	皿	肥前	口:13.0 高:3.0 底:4.5	細	灰白5Y7/1	灰白7.5Y7/1			大橋Ⅱ期	見込みと高台畳付に砂目 全面施釉
第2回	28	磁	皿底部	肥前	底:7.40	微	灰白色	内外:透明釉	呉須:明青色			景徳鎮 畳付に砂粒付着
2回D区	29	陶	皿	肥前	底:5.75	細	灰白10YR8/1	内外:銅緑釉 緑灰10GY5/1		内面:ヘラ彫り 蛇の目釉剥	大橋Ⅲ期	蛇の目釉剥ぎ砂粒付着, 高台内無釉
2回	30	陶	皿	肥前	口:31.1 高:11.45 底:11.7	細	赤褐10R4/4	内・外下:灰褐5YR4/1 外下:極暗褐10R2/3			大橋Ⅲ期	見込みに3ヶ所の砂目
2回	31	土師質	杯		口:9.4 高:3.1 底:6.4	赤色粒	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4		内外:ロクロナデ 外底:回転糸切り		内面に被熱痕

第307図　機械掘削・人力掘削中出土遺物実測図・観察表（その4）



遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須、上絵)	調整	製作年代	備考
第2回	32	磁	小鉢		口:14.70 高:4.75 底:8.00	微	灰白色	内外:乳白色	上絵:赤			柿右衛門
第2回	33	磁	底部		底:9.00	細	灰白色	内外:透明釉	色絵:茶・赤			高台内にアルミナ砂付着
第2回	34	陶	急須?		口:5.00 高:4.18 底:5.20	細	灰白N7/1	内外:暗赤褐10R3/3		底部:回転糸切り		
第2回	35	磁	破片			細	灰白5Y8/1	内外:灰白2.5Y7/1				
第2回	36	土師質	土錘		全長:3.80	細	にぶい橙7.5YR7/3					
第2回	37	土師質	土錘		全長:3.30	細	にぶい橙7.5YR7/3					
第2回	38	陶	碗底部	肥前	底:4.4	細	赤橙10R6/6	灰白N7/0			大橋Ⅱ期	
第3回	39	陶	碗	瀬美	口:11.30 高:7.35 底:4.30	細	灰白2.5Y8/2	内外:暗赤褐5YR3/6	釉掛:黒7.5YR2/1			天目碗
第2回	40	陶	把手			細	灰5Y6/1	内外:暗褐7.5YR3/3				
SX3002	41	磁	皿	肥前	口:20.0 高:5.8 底:6.6	微	灰白N8/1	内外:明緑灰10GY7/1	口紅:暗赤10R3/6	内面:芭蕉文	大橋Ⅲ期	三股青磁,三足有 高台内に砂粒付着

第308図　機械掘削・人力掘削中出土遺物実測図・観察表（その5）



第309図　機械掘削・人力掘削中出土遺物実測図（その６）

遺構名	報文番号	遺物種別	器種	産地	法量(cm)	胎土	色調1(胎土)	色調2(釉薬、内外色調)	色調3(呉須,上絵)	調整	製作年代	備考
第3回	42	陶	碗底部	肥前	底:6.0	細	灰白10YR8/2	灰白2.5Y8/1				
トレンチ	43	陶	皿口縁部	肥前	口:14.2	細	にぶい橙7.5YR7/3	灰白2.5Y7/1		外面下半:ケズリ	大橋Ⅱ期	被熱痕有
第3回	44	陶	皿底部	肥前	底:5.0	細	灰白2.5Y8/1	灰白5Y8/1			大橋Ⅰ-2期	見込みに胎土目2ヶ所
第3回	45	陶	向付	肥前	口:13.3 高:4.2 底:4.6	細	橙2.5YR6/6	灰褐7.5YR5/2	鉄絵:黒褐5YR3/1		大橋Ⅰ-2期	見込みに胎土目
トレンチ	46	陶	皿	肥前	口:12.5 高:4.4 底:4.2	細	灰白2.5Y8/2	灰白7.5Y7/2			大橋Ⅱ期	見込みに砂目4ヶ所
第3回	47	陶	皿	肥前	口:13.2 高:2.8 底:4.0	細	灰N6/0	灰7.5Y5/1			大橋Ⅱ期	見込みと高台内側に砂目
第3回	48	陶	皿底部	肥前	底:4.6	細	灰白10YR8/2	淡黄2.5Y8/4		外底:ケズリ	大橋Ⅱ期	見込み・高台に砂目4ヶ所
第3回	49	陶	皿底部	肥前	底:5.0	細	灰白N7/0～にぶい赤褐7.5YR6/3	明オリーブ灰2.5GY7/1		外底:ケズリ 外面下半:ロクロナデ	大橋Ⅱ期	見込みに砂目2ヶ所と溶着痕
トレンチ	50	磁	皿底部		底:4.6	微	灰白N8/0	明緑灰7.5GY7/1				青磁,見込み・高台に砂目2ヶ所
第3回	51	陶	皿底部	肥前	底:4.1	細	にぶい黄橙10YR7/3	オリーブ黒7.5Y3/2		外面下半:ロクロナデ 外底:ケズリ 内底:蛇の目釉剥		高台内外に砂粒付着
第3回	52	陶	蓋		口:16.5 高:1.85	細		天井部:赤7.5R4/6 以外:浅黄2.5Y7/4				天井部以外も浅黄の下に赤の釉塗布
第3回	53	陶	碗	肥前	口:10.5	細	浅黄橙10YR8/4	黒10YR1.7/1				天目碗
第3回	54	土師質	焼塩壺		口:4.9 高:7.5 底:3.9	微砂粒	橙5YR7/6	橙5YR7/6		内・外口縁部:ヨコナデ 外面:板ナデ		輪積成形

第310図　機械掘削・人力掘削中出土遺物観察表

30は肥前系陶器で，三島手のものである。31は土師質土器坏である。32は肥前系磁器鉢である。器壁が薄く，乳白色の器面に赤絵を施す。33は肥前系磁器底部である。外面に色絵が認められる。34は備前水滴である。35は京・信楽系陶器である。器種は不明。36・37の有溝土錘は，同形のものがSK3021に認められる。40は京・信楽系陶器把手部である。

38・39・41～53は，第3面までの掘削中及びトレンチ溝より出土した遺物である。38は肥前系陶器碗である。39は瀬戸・美濃系陶器碗である。41は三股窯青磁である。口錆で，内面に芭蕉文を施す，三足となる脚が付く。42は肥前系陶器碗である。43～51は肥前系陶器皿である。45は絵唐津向付である。52は軟質施釉陶器蓋。赤褐色の釉が施される。53は唐津天目碗である。54は焼塩壺で，輪積成形のものである。

第 4 章　自然科学的分析

高松城跡（松平大膳家上屋敷跡）出土漆器の材質・技法

くらしき作陽大学 北野信彦

1、 はじめに

本遺跡の発掘調査区は、高松城大手門前といった城郭内でも重要な地点に所在する。当該地点付近は、各種城下絵図を参照すると一貫して上級武家拝領屋敷地跡に比定される区画であり、生駒時代には生駒河内（3160石）、松平時代には、当初は彦坂織部（6000石）、その後は松平大膳の上屋敷跡などに比定されている。発掘調査の結果、江戸時代における上級武家地関連の遺構や遺物が大量に検出され、このなかには江戸時代の比較的古い段階の年代観が与えられる漆器資料も多く含まれていた。今回、高松市教育委員会の御厚意により、これら遺跡内から出土した漆器資料の材質・技法に関する分析調査を行う機会を得た。本報では、その調査結果を報告する。

2、 出土漆器資料の分析調査

各種出土生活什器の内でも飲食器（椀・蓋・皿類）は、衣・食・住のなかにおいて「食」という我々の日常・非日常の生活の在り方と密接に関わる資料（物質文化財）である。それと即応するためか遺跡から出土する什器類の内、漆器・陶磁器ともに飲食器が占める割合が極めて高い。このような飲食器資料の材質や製作技法と、使用階層や使用状況との関連性が把握されれば、これらが出土した遺構・遺跡の性格、即ちそこで生活していた人々の暮らしぶりの一端がある程度推定されよう。ところが同じ飲食器である陶磁器資料に比較して漆器資料は、木胎・下地・漆塗膜面からなる脆弱な複合遺物であるため、検出・実測調査・保存や保管などの取り扱いに苦慮する場合が多い。加えて陶磁器資料における古窯跡に対応するような生産地遺跡も検出されにくいため、これまで一部の資料の肉眼観察に留まる調査が多かった。しかし、このような取り扱いが厄介と考えられる漆器資料も視点をかえてみてみると、木胎・塗り・加飾などの、材質や製作技法に関する属性が多く、これらの品質は自然科学的手法を用いた調査で、より客観的にとらえ易い。このような漆器資料の生産技術面を調査することは、個々の資料の性格を正確に把握する上で有効な方法であり、これらが出土した遺構・遺跡の性格自体を考える上でも意味があるものと考えている（注１）。

本報では、これらの調査の一環として、漆器資料の形態、漆塗り面の状況を表面観察した後、⑴用材選択、⑵木取り方法、⑶漆膜面の漆塗り構造、⑷色漆や蒔絵加飾の使用顔料、などの項目別にわけた文化財科学的な調査を行った。以下、その調査方法と調査結果を記す

2.1 調査方法

2.1.1、用材選択（樹種同定）

樹種の同定作業は、出土木材の細胞組織の特徴を生物顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、カミソリの刃を用いて遺物本体をできるだけ損傷しないように、破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片を作成した。切片はキシレン・サフラニンにより脱水および染色して検鏡プレパラートに仕上げた。

2.1.2、木取り方法

挽き物類である漆器の木取り方法の調査は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時に行なった。

2.1.3、漆膜面の塗り構造

まず肉眼で漆器資料の漆塗り表面の状態を観察した後、実体顕微鏡を用いた細部の観察を行なった。次に1㎜×3㎜程度の漆膜片を漆器資料から採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイトGY1251 J.P.，ハードナーHY837）に包埋した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ・塗り重ね構造・顔料粒子の大きさ・下地の状態等について金属顕微鏡による観察を行った。

2.1.4、色漆の使用顔料および蒔絵材料の定性分析

色漆に用いられた顔料および蒔絵材料である金属粉の無機物に関する定性分析には、先の漆膜片をカーボン台に取り付け、日立製作所S−415型の走査電子顕微鏡に堀場製作所EMAX−2000エネルギー分散型電子線分析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザー）を連動させて用いた。分析設定時間は500秒とした。

2.1.5、分析結果の集計方法

個々の漆器資料からもっとも一般的な8つ（Aタイプ）もしくは9つ（Bタイプ）の材質や製作技法上の優劣ランクの項目を抽出し、それぞれの比率を総個体数の中で計算する。この結果をレーダーチャート方式で図化するものである。

（Aタイプ集計方法）

レーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・ブナ材などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の材質および製作技法上の特徴を取り、それと相対する左側には、朱・サビ下地・ケヤキおよびシオジ材などの優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にランク的にもケヤキおよびシオジ・ブナ材のほぼ中間に位置すると考えられるトチノキ材の占有比率(%)をそれぞれ配置した。

この配置で示されるレーダーチャートは、その重点が右に寄るほどランク的に廉価な資料が多いことを、左に寄るほど優品資料の占める割合が高いことを示す。

（Bタイプ集計方法）

レーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・スズ（Sn）粉・石黄（As_2S_3）粉などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の材質および製作技法上の特徴をとり、それと相対する左側には、朱・サビ下地・金（Au）粉などの優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にはランク的にもほぼ中間に位置すると考えられる銀（Ag）粉の占有比率(%)をそれぞれ配置した。

2.2 調査結果

今回調査を行った出土漆器は、椀・蓋型の挽き物類および器物である板物類を中心とした日常生活什器類、合計78点である。これらの帰属年代は、出土状況の層位や共伴国産陶磁器の編年観から、16世紀末〜17世紀初頭期の近世初頭期（生駒時代）と17世紀中葉を中心とする江戸時代前期頃（松平時代の彦坂邸期）の2段階に分類されている。以下、生産技術面からみた出土漆器の項目別に調査結果を述べる（表1）。

2.2.1、用材選択

本漆器資料の内の挽き物類の用材には、ぶな科ブナ属16点・同コナラ節8点・同クリ1点・にれ科ケヤキ7点・もくせい科シオジ7点・とちのき科トチノキ29点・もくれん科ホオノキ4点・

No.	器型	樹種	木取り方法	表面塗り技法			塗り構造		使用顔料			備考	遺構番号
				内	外	文様	内	外	内	外	文様		
1	椀破片	トチノキ	A	赤	赤	外ー紋ー黒	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ	ベンガラ		引掻き技法	SX3002
2	碗(小)型	トチノキ	A	黒	黒	外ー絵ー赤	Ⅰ	Ⅱ			朱	鶴竹松文様	SX3002
3	碗型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3002
4	碗型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3002
5	碗型	ブナ	A	赤	黒	外ー絵ー赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ		SX3002
6	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤・黄	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		朱・As＋S		SX3002
7	碗型	コナラ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱				SX3002
8	碗型	ブナ	B	赤	黒	外ー絵ー赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ	鶴亀文様	SX3002
9	碗型	コナラ	B	赤	赤		Ⅲ	Ⅲ	朱	朱		穴開き	SX3004
10	碗型	トチノキ	A	赤	赤	外ー紋ー黒	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ	ベンガラ		引掻き技法	SX3002
11	碗型	ホオノキ	B	赤	黒	外ー紋ー赤・黄	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ・As＋S		SX3002
12	碗型	ブナ	B	赤	黒	外ー絵ー赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ	鶴亀文様	SX3002
13	碗型	ホオノキ	B	赤	黒	外ー紋ー赤・黄	Ⅰ	Ⅱ			ベンガラ・As＋S		SX3002
14	碗型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					SX4001
15	碗型	サクラ亜属	B	黒	黒	外ー絵ー赤	Ⅰ	Ⅱ			朱		SX3003
16	碗型	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅴ	Ⅴ	朱	朱			SX3003
17	碗型	ヒノキ		黒	黒	外ー蒔絵ー金	Ⅴ	Ⅵ			ベンガラ＋Au		SX3004
18	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ	草花文様・簿	SX3004
19	碗型	コナラ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3004
20	碗型	コナラ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3005
21.1	碗型	コナラ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3005
21.2	碗型	シオジ	C	赤	赤		Ⅹ	Ⅹ	朱	朱			SX3005
22	碗型	ブナ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3005
23	碗型	ブナ	A	赤	黒	外ー絵ー赤	Ⅰ	Ⅱ	朱		朱		SX3003
24	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ	花文様	SX3005
25	碗型	トチノキ	A	赤	赤	外ー紋ー黒	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ	ベンガラ		引掻き技法	SX3002
26	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ	草文様	SX3002
27	碗型	ホオノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3002
28	碗型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3001
29	碗型	コナラ	A	赤	黒		Ⅲ	Ⅰ	ベンガラ				SX3004
30	碗型	トチノキ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3002
31.1	碗型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3001
31.2	碗型	トチノキ	A	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					SX3001
32.1	碗型	カエデ属	B	赤	黒	外ー絵ー赤	Ⅴ	Ⅵ	朱		朱		SX3002
32.2	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤・黄	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		朱・As＋S		SX3002
32.3	碗型	ケヤキ	A	黒	黒		Ⅶ	Ⅶ					SX3002
32.4	碗型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3002
32.5	碗型	シオジ	B	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					SX3002
32.6	碗型	コナラ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱				SX3002
32.7	碗型	ホオノキ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3002
32.8	碗型	シオジ	A	赤	赤		Ⅹ	Ⅹ	朱	朱			SX3002
32.9	碗型	トチノキ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱				SX3002
33	碗型	ケヤキ	B	黒	黒		Ⅶ	Ⅶ					SX3002
34.1	碗型	ブナ	B	赤	黒	外ー絵ー赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ		SX3002
34.2	碗型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱				SX3002
35	碗型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱				SX3002
36	碗型	ブナ	B	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					SX3002
37.1	碗型	シオジ	B	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ	ベンガラ			SX3005
37.2	碗型	ブナ	A	赤	赤		Ⅹ	Ⅹ	朱	朱			SX3005
38	碗型	トチノキ	A	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ	ベンガラ			SX3002
39	碗型	ケヤキ	B	赤	黒		Ⅶ	Ⅶ	朱			布着せ補強	SX4001
40.1	碗型	シオジ	A	赤	赤		Ⅹ	Ⅹ	ベンガラ	ベンガラ			SX3002
40.2	碗型	ブナ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3002
40.3	碗型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅹ	Ⅹ	朱				SX3002
41	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ		SX2008
42	碗型	ブナ	B	赤	黒	外ー絵ー赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ		SX3002
43	碗型	ブナ	B	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					SX3002
44	碗型	シオジ	B	赤	赤		Ⅹ	Ⅹ	朱	朱			SX3002
45	碗型	トチノキ	B	赤	黒	外ー絵ー赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ	引掻き技法	SX3002
46	碗型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱				SX3002
47	碗型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ					SX3001
48	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤・黄	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ・As＋S		SX3002
49	碗型	コナラ	A	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3006
50.1	碗型	ブナ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3002
50.2	板物	スギ		赤	赤		Ⅴ	Ⅴ	朱	朱			SX3002
50.3	碗型	トチノキ	A	赤	黒	外ー絵ー赤	Ⅰ	Ⅱ	ベンガラ		ベンガラ		SX3002
51.1	碗型	ブナ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3002
51.2	碗型	ヒノキ		赤	黒		Ⅴ	Ⅶ	朱				SX3002
52	碗型	トチノキ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3004
53	碗型	ブナ	A	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ	ベンガラ			SX3002
54.1	碗型	ブナ	B	赤	赤		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ	ベンガラ			SX3002
54.2	碗型	ケヤキ	B	赤	赤		Ⅶ	Ⅶ	朱	朱		布着せ補強	SX3002
55	碗型	ケヤキ	A	黒	黒		Ⅹ	Ⅹ					SX3002
57	碗型	シオジ	A	赤	赤		Ⅹ	Ⅹ	朱	朱			SX3002
58	碗型	ブナ	A	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	ベンガラ				SX3002
59	碗型	ケヤキ	B	黒	黒		Ⅰ	Ⅰ					SX3002
A	碗型	クリ	B	赤	黒		Ⅰ	Ⅰ	朱				
B	碗型	膜面のみ		赤	赤		Ⅴ	Ⅴ	朱	朱			

表 1

ばら科サクラ亜属１点・かえで科カエデ属１点の広葉樹９種類が、その他器物にはひのき科ヒノキ２点・すぎ科スギ１点の針葉樹３種類、合計12種類が確認された。樹種別に木材的組織・工作の難易・割れ狂い・色光沢・塗りなどを考慮に入れて本漆器資料の使用状況をみてみると、吟味された最優材であるケヤキ・シオジ・ヒノキ材などと、加工や入手の容易さという大量生産の点からみて一般性が高いと考えられる適材であるトチノキ・ブナ・コナラ・スギ材などの２つのグループに分かれた（表２）。これらの占有率を総点数の中でみてみると、前者であるシオジ・ケヤキ・ヒノキ材があわせて20.8％、後者のトチノキ材が37.7％・ブナ材が20.8％・コナラ材が10.4％であり、本資料の場合、基本的には後者の比率が高い。ところが各遺跡別の一括出土漆器の場合、前者が10％前後に留まる例が多く、本資料では比較的前者の占有率も高いため特徴の一つといえよう（写真１）。

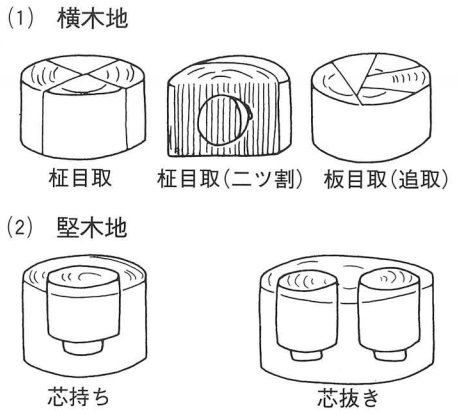
さて、筆者によるこれまでの全国の近世出土漆器の用材選択性に関する調査結果では、挽き物である漆器椀・蓋・皿類の樹種には、近世初頭段階の古い時期の資料には樹種の多様性が見られ、江戸時代中期以降にはケヤキ（江戸時代前期段階ではシオジ材が多い）・トチノキ・ブナの３樹種の占有率が高く一般的となる（注２）。この結果を参考にして本漆器資料の用材の使用状況をみると、シオジ・クリ・コナラ節など比較的近世の初期段階に出現がみられる樹種の占有率が高く、本漆器資料の基本的な年代観を考える上で参考となろう。

２.２.２、木取り方法

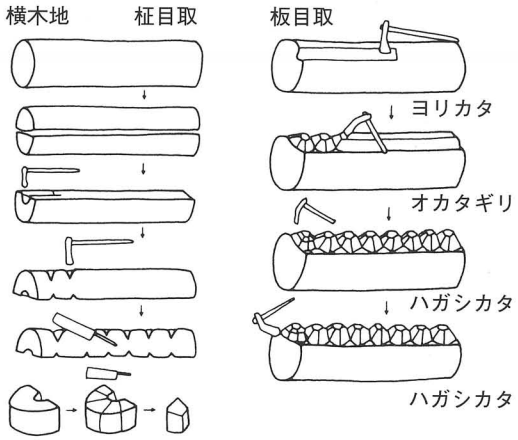
本資料の内、挽き物類の木取り方法は、横木地と竪木地に大別され、その大半は板目取りもしくは柾目取りの横木地であった。挽き物類である近世出土漆器の木取り方法は、竪木地に比較して横木地を用いる例が大半であり、竪木地の場合も木芯を外した材を利用する例が一般的である（図１）。これは木材の割れ狂い、収縮等を考慮に入れて漆器自体の品質を重視したため、不都合な木取り方法が自然淘汰された結果と考えている。本漆器資料の木取り方法をそれぞれの樹種との関連性でみてみると、トチノキ材は横木地板目取りが優勢であり、ブナ材は横木地板目取り柾目取り両方ともほぼ同じ程度であった。一般にトチノキ材は、芯を中心にして割れ狂いの多い赤味（心材）が広がり、表皮に近い部分にシラタとよばれる白い部分（辺材）がある。シラタは、多く取れても四寸（約12㎝）程度しか利用できないので、椀木地ではおのずと椀を伏せたような形で木地を取る板目取りの方法が適している。一方、ブナ材は芯に近いところまで利用が可能なので、木の狂いが少なく木地が多く取れる柾目取り・板目取りどとらでもよいという口承資料がある（注３）。この点からも、本資料の木胎製作の工程が、一貫してそれぞれ材の性質を考慮に入れた可能性が指摘される。

２.２.３、漆塗膜面の塗り構造

漆器表面の漆塗り技法は、大きく分けて無文様で地塗りのみの資料と、家紋等の漆絵文様を地外面に描く資料、さらには蒔絵等きわめて高度な漆工技法をもつ資料に分かれた。これらの漆膜面の塗り構造、特に各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、ピークがほとんど見出だされない資料と、粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料の２種類に分けられた。これらをさらに金属顕微鏡で観察することで、前者は炭粉を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地、後者は細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）であると認識した（注４）。次に、地の漆塗り層は、いずれも簡便な１層塗りから２～３層塗りの多層塗の資料まで見出だされ、基本的には炭粉下地に単層塗の極めて簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料が中心であるものの、



1　横木地と堅木地の要領
（橋本鉄男『ろくろ　ものと人間の文化史31』－1979－より原図引用）



2　近世会津木地師の木取りの方法
（須藤護『日本人の生活と文化(木)
暮らしの中の木器』－1982－より原図引用）

図１　近世以降の漆器（挽き物類）の木取り方法

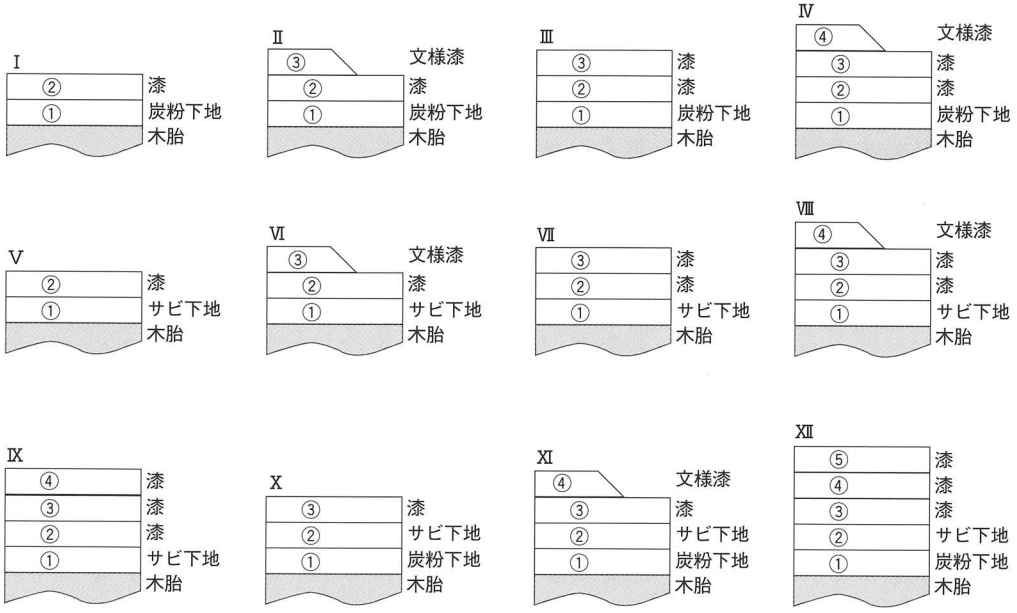


図２　漆塗り構造の分類

A 環孔材	a.ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが靭性もあり、木皿など薄手の物に適する。
B 散孔材	b.サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ類、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なくて、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c.ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
	e.エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

表２　ろくろ挽き物の用材分類一覧表

橋本鉄男『ろくろ　ものと人間の文化史31』－1979－などを参考にして作成

サビ下地に多層塗構造をもつ堅牢性を重視した優品資料も23.5％と比較的高い占有率であり、この点は本漆器資料の特徴の一つといえよう（注５）。なお金泥状や赤色系の色漆による家紋や漆絵の加飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた（図２）（写真２）。

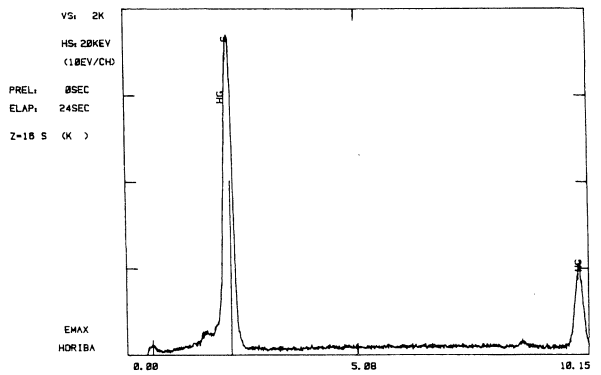
２.２.４、赤色系漆の性質

赤色系漆の使用顔料は、定性分析と顕微鏡観察の結果、それぞれベンガラ（酸化第二鉄Fe_2O_3）、朱（水銀朱HgS）、さらには両者を併用して用いる３種類の異なる赤色系漆であると理解した（図３）。ベンガラ・朱ともに赤色系顔料としての歴史は古い。しかし近世漆器の色漆顔料としては、通常近世初頭～江戸時代前期頃の資料では、朱を多用する事例が多いが、その後、江戸時代中期以降には幕府朱座を中心とした統制物資であった朱に比較して、人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラの方が廉価で一般的となる（注６）。本漆器資料の場合、簡素で一般的な塗り構造を持つ資料にはベンガラを用いる事例が多いものの、全体的にみると朱の占有率も比較的高かった。この点も本資料の帰属年代を考える上で参考となろう。

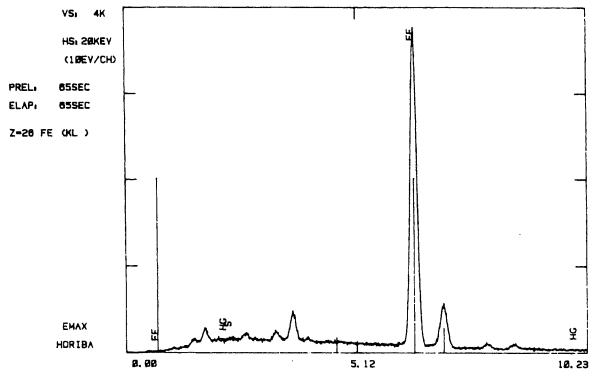
２.２.５、蒔絵加飾材料の材質

表面観察において金粉もしくは金泥状による家紋や漆絵等の蒔絵状加飾部分を定性分析した結果、Au（金）が認められる資料とAs＋s（As_2S_3：石黄、三硫化二砒素）が見出だされた（図３）。

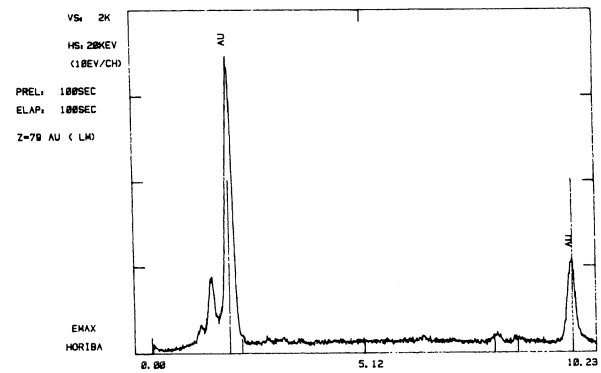
筆者のこれまでの出土蒔絵漆器の蒔絵状加飾材料の分析結果では、金（Au）自体を使用する資料は数％程度で少ない。一方、大多数の近世出土漆器では銀・スズ・石黄等の代用金蒔絵材料で



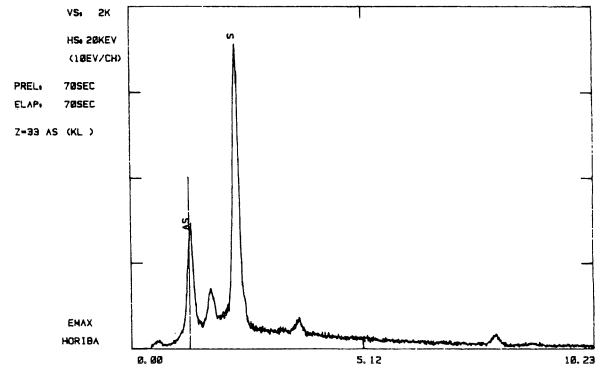
赤色系漆　朱（HgS）



赤色系漆　ﾍﾞﾝｶﾞﾗ（Fe_2O_3）



蒔絵加飾（金彩）　金（Au）



蒔絵加飾（金彩）　石黄（As_2S_3）

（図３）電子線マイクロアナライザー（ＥＰＭＡ）分析結果

あること。これら金粉以外の蒔絵粉の材質は、石黄→銀→スズへと年代別に使用状況が変化することが判明している。すなわち、金粉以外の蒔絵粉の材質では、帰属年代がやや古い17世紀初・前期～中期頃の資料群では石黄粉が、17世紀後半の特に元禄年間以降の資料群では銀粉の比率が高くなる。そして江戸時代後期～幕末期にはスズ粉蒔絵が多く見出される（注７）。この点を考慮に入れて本資料を見てみると、金自体の使用は認められずいずれも石黄粉が使用されていた。そのため本漆器の材質・技法面からみた本資料の帰属年代は、17世紀中期頃に求められよう。

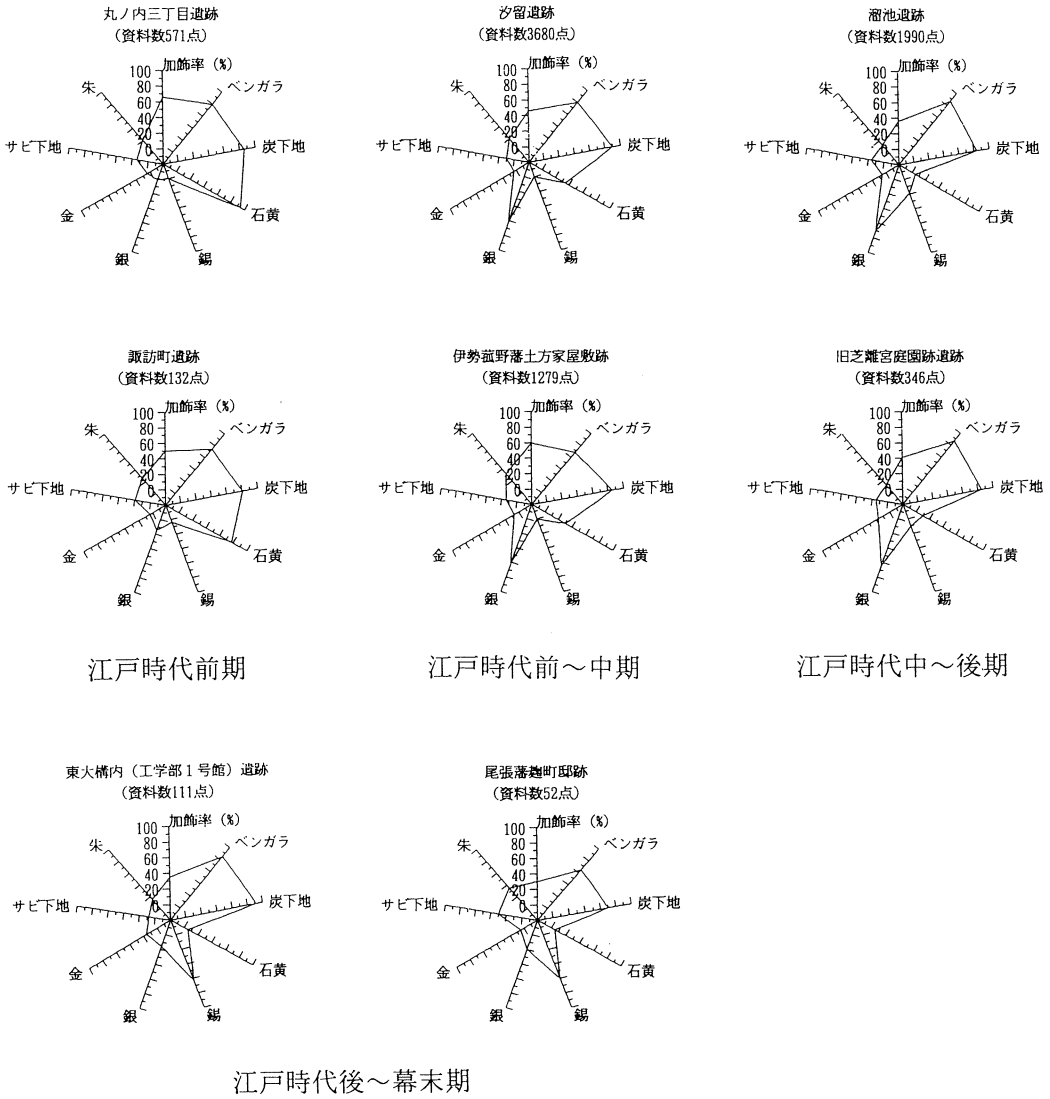
３、考察

以上、前章では項目別に各出土漆器資料の材質および製作技法の在り方をみた。その結果、本漆器資料は、木胎・漆塗り技法・使用顔料ともに簡素な素材からなる極めて一般的で廉価な日常什器類から、吟味された素材になる堅牢で複雑な漆工技法を有する優品資料に至るまで、幾つかのランク別のグループに分類された。このような漆器資料のグループ毎の違いは、文化的背景を含むそれぞれの漆器資料の製作年代、これらを使用しさらには投棄した使用階層の社会的・経済的背景(生活様式)、地域性、什器類の使用目的や方法、さらには個々の漆器生産地の技術、などさまざまな条件が反映されたものであろう。とりわけ本漆器資料を構成する材質・技法の傾向は、樹種・赤色系漆や金泥状加飾の使用顔料の構成要素には近世初頭～江戸時代前期頃の比較的初期段階の特徴が多くみられた。この点は、本資料の編年観を考える上で有力な調査結果と言えよう。

次に本報では、生産技術面からみた一括出土漆器資料における組成の傾向を把握するため、本漆器資料および㈶香川県埋蔵文化財センター発掘調査のおなじ高松城郭内の上級武家屋敷跡出土漆器資料、さらには比較資料として同じ四国の国元城下町における武家地関連遺跡である新蔵町一丁目遺跡・福島二丁目遺跡・旧動物園跡遺跡（いずれも阿波徳島城下町の武家地関連遺跡）、高知城下屋敷跡遺跡（土佐高知城下町の武家地関連遺跡）を一連のレーダーチャート方式による集計作業を行った。

その結果、これらの基本的な材質・製作技法の組成の傾向はいずれも実用に即した生活什器類である飲食器類を中心としていることが理解された（図５）。これは、これら遺跡出土の漆器資料の性格自体が、非日常のハレの食事に供せられるような特別の什器類（伝世品として長期間大切に保管管理される場合が多い）とは異なり、普段の食生活で多用され、かつ割合簡単に廃棄されたであろう日常什器類が中心であることに由来しよう。その一方で本遺跡出土漆器資料をはじめとする国元城下町の武家私邸である武家地関連遺跡出土漆器資料は、武家江戸参府江戸表の藩邸跡や高知城下屋敷跡遺跡等の公的空間のそれとは異なり、全体的にやや優品の占有率が高い傾向が見出される。この結果は本資料を使用し投棄した家自体の好み傾向や什器調達方法の特徴によるものなのか、単に出土資料の偏在性によるものなのかは、現時点では判明しないが、本漆器資料における一つの傾向と言えよう。

次に、個々の出土漆器資料について若干の検証を加える。⑴炭粉下地を施した上に極めて薄い赤褐色系もしくは黒色系漆や朱漆を一層塗布する資料（資料No. 3，5，7，9，19，20，21.1，23，29，32.5，32.6，32.9，36，40.2，43，46，49，50.1，51.1，54.1，58など)、⑵ケヤキ材に布着せ補強し、その上にサビ下地を数回施し、黒ー朱の地漆塗りの塗重ねを行うような堅牢性を重視した根来系漆器（資料No. 39，54.2）、⑶シオジ材に炭粉下地ーサビ（泥系）下地を施し、朱漆を一層塗布するが⑵とおなじ朱漆器でもやや簡便なタイプの資料（資料No. 21.2，40.1，44，57)、⑷加飾部分に引掻き技法を用いた資料（資料No. 1，10，25，45)、⑸鶴亀文様のセ

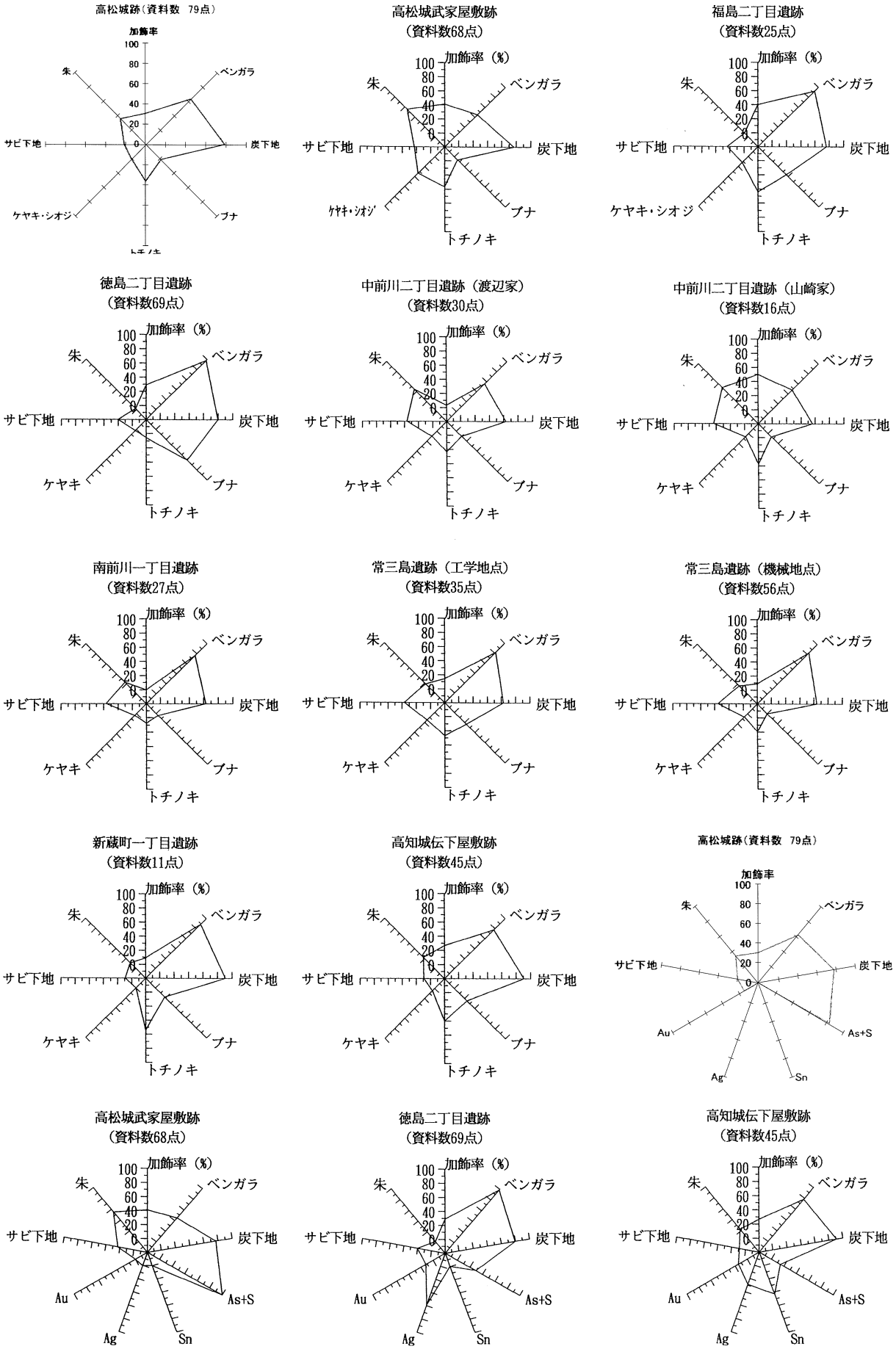


（図４）各遺跡にみられる年代別蒔絵材料の変遷

ット関係が見出される資料（資料No. 8, 12）などは、いずれも近世初頭期の漆工技法の特徴を有する資料群といえる。一方、⑹加飾の家紋や漆絵に石黄を使用する資料（資料No. 6, 11, 13, 48）、⑺資料No.18の一点ではあるが、高台底に「露に薄」の草花文様をベンガラ加飾する江戸系の漆器椀類などは、江戸時代前期の17世紀中葉期頃の漆工技法の特徴を有している。

今後は、さらに調査事例を充実して高松城下町関連遺跡出土漆器資料の全体的な傾向を把握すること、同時に陶磁器類をはじめとする他の共伴遺物や遺構の性格との相互関連性を総合的に比較・検討していくことが必要である。この一連の検討作業を行うことが、本資料の性格をさらに的確に理解する上で大切なことであろう。

（謝　辞）本調査を行なうにあたり、高松市教育委員会文化部文化振興課の小川賢氏をはじめとする各先生方、㈶香川県埋蔵文化財センター、高知県文化財団埋蔵文化財センター、㈶徳島県埋蔵文化財センター、徳島市教育委員会、徳島大学埋蔵文化財調査室など、多くの諸機関や方々には資料調査の件で大変お世話になりました。厚く謝意を表します。



（図５）各遺跡における一括出土漆器資料の組成（集計例）

（注）

(1) 北野信彦（1993）「日常生活什器としての近世漆器椀の生産と消費」『食生活と民具』p.81－101、日本民具学会編　雄山閣出版

北野信彦（2000）「生産技術面からみた近世出土漆器の生産・流通・消費」『日本考古学　第９号』p.71－96、日本考古学協会、吉川弘文館、等を参照されたい。

(2) 橋本（1979）の調査では、近世以降のろくろ挽き物である漆器類の用材には、早晩材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材ではあるが靭性がある材を適材であるとしている。

橋本鉄男（1979）『ろくろ　ものと人間の文化史31』法政大学出版局

北野信彦（2000）「近世出土漆器椀の用材に関する一考察」『考古学と自然科学　第38号』p.47－66　日本文化財科学会

(3) 須藤（1982）の調査によると、近世以降の近江系（小椋谷）木地師による挽き物類の木取り方法の場合、横木地板目取りはトチノキ地帯に、同柾目取りはブナ地帯に定着し、その細かい技術は、個々の集団に受け継がれてきたとしている。

須藤護（1982）『日本人の生活と文化、暮らしの中の木器』日本観光文化研究所編　ぎょうせい

(4) なお一部の資料については細かい粘土や珪藻土をにかわ等に混ぜて用いる泥下地（堅下地・本下地より堅牢性に欠ける）の可能性もある。しかし出土資料のにかわと生漆の明確な科学的識別が技術的に困難な現在、両者をまとめてサビ下地とした。

北野信彦（1993）「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・Ｉ－文献史料からみた量産型漆に使用する混和剤を中心として－」『古文化財の科学 第３８号』p.65－79、古文化財科学研究会

(5) このような近世漆器の製作技法の在り方を示す民俗事例の１つに、新潟県糸魚川市大所の小椋丈助氏による実用に即した近世木地師、漆器椀の製作技法に関する口承資料がある。それによると［上品］布着せ補強（椀の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く）～サビ下地（砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布）～下塗り（生漆）～上塗り（生漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆）の工程をふみ、人一代は持つ堅牢なもの。［下品］炭粉下地（柳や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地）～上塗り（生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物を多く混入している粗悪な漆）。［中品］下品とほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆を濃く塗布したりミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い。などとしており、各漆器ランク別の工程をよく示している。文化庁文化財保護部編（1974）『木地師の習俗　民俗資料選集２』国土地理協会

(6) 江戸時代における朱とベンガラの価格表を検討してみると、江戸時代前期段階には両者海外輸入品が多いためか、相対価格差はほとんど見られない。しかし江戸時代後期頃の段階では、両者に約30倍ほどの相対価格差が見られ、とりわけ朱の高価さと入手困難さが指摘される。

北野信彦（2000）「朱・ベンガラ　項目」『日本民俗大辞典（下巻）』福田アジオ編、吉川弘文館

(7) 寛延四年（1751）の『名古屋諸色直段集，寛延四未年小買物諸色直段帳』には、漆器の休漆技法別の価格が記載されている。この史料では、布着せ蝋色塗（上品）：常溜塗（中品）：常拭漆塗（下品）の相対価格差は、約51：3.4：１と算定される。また、伊勢菰野藩土方家菩提寺である見性寺の見性寺文書には、伊勢桑名の塗物商ぬし興に提出させた見積書があるが、それによると家紋加飾に使用された金・銀・錫粉蒔絵の相対価格比率は、約18：６：１と算定される。いずれの事例からも生産技術面（ここでは材質や製作技法）の違いにより、漆器には明確な価格差が存在したことが理解される。

北野信彦・肥塚隆保（2000）「近世出土蒔絵漆器の材質・技法に関する調査」『考古学と自然科学 第38号』p.67－92、日本文化財科学会

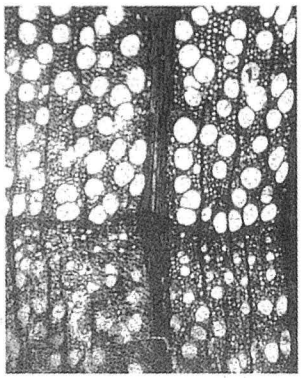
（参考文献）

(1) 沢口吾一：“日本漆工の研究”（1996）、美術出版社。

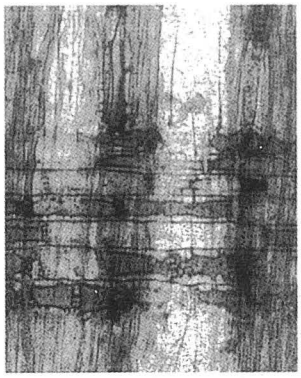
(2) 灰野昭郎：“漆工（近世編）日本の美術８　第231号”（1985）、至文堂。

(3) 光芸出版社編：“うるし工芸辞典”（1978）

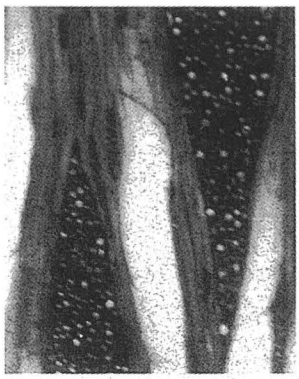
ぶな科ブナ



木口（30×）

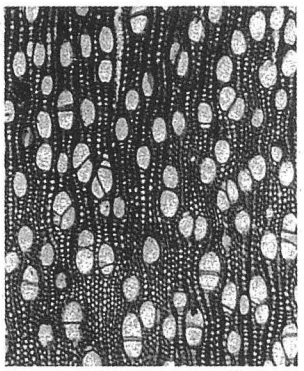


柾目（100×）

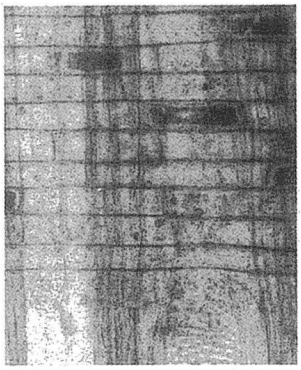


板目（50×）

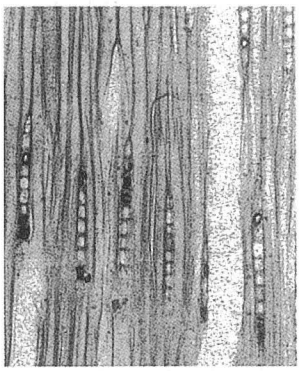
とちのき科トチノキ



木口（30×）

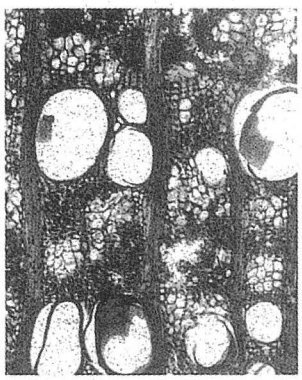


柾目（100×）

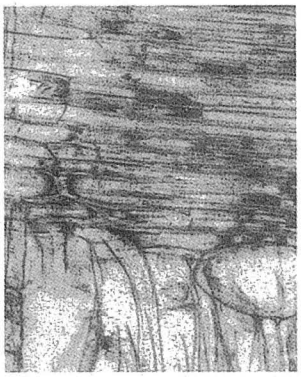


板目（50×）

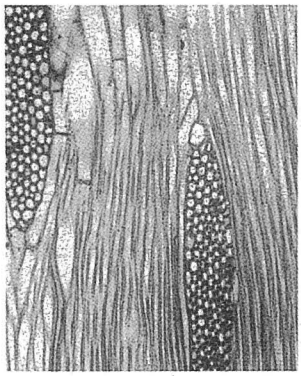
にれ科ケヤキ



木口（30×）

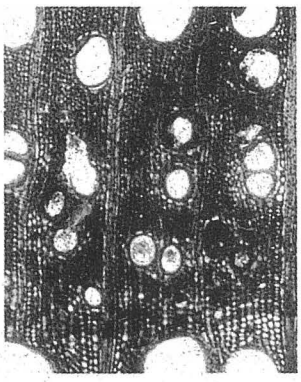


柾目（100×）

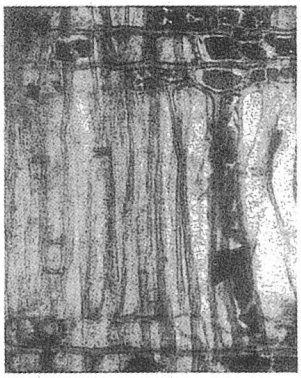


板目（50×）

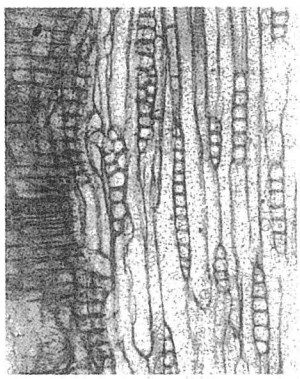
もくれん科シオジ



木口（30×）



柾目（100×）

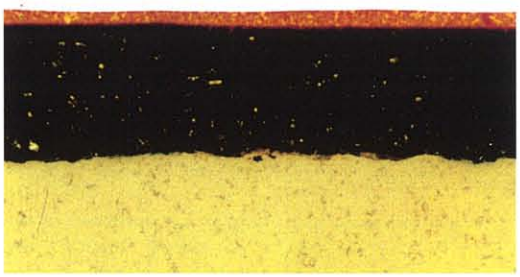


板目（50×）

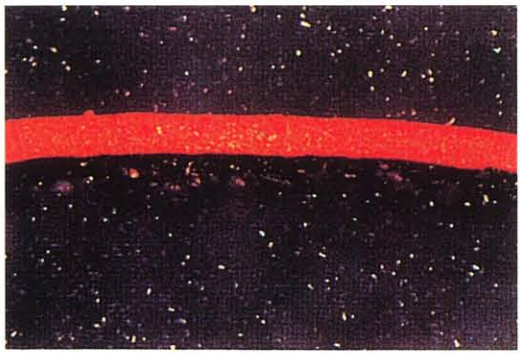
（写真１）主要用材の顕微鏡写真

黒色系漆（Ⅰ）（×50）

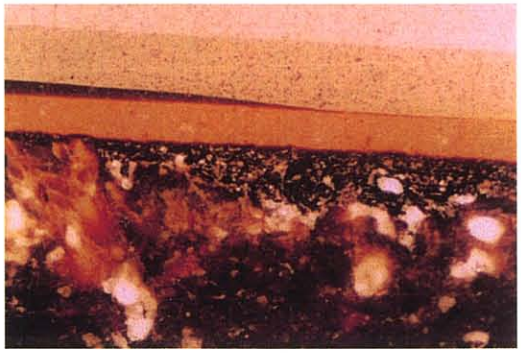
黒色系漆（Ⅰ）（×50）



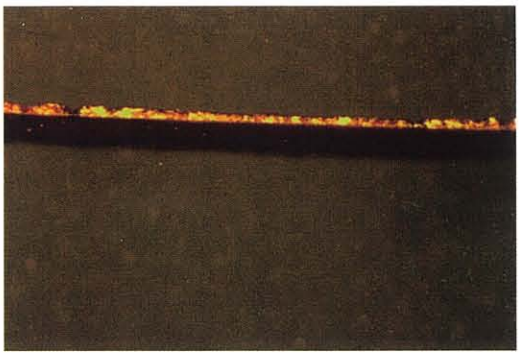
赤色系(朱)漆（Ⅰ）（×50）



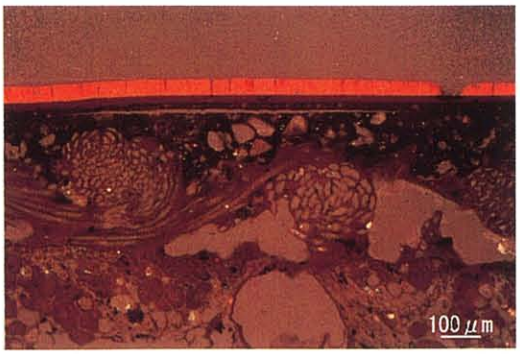
赤色系(ベンガラ)漆（Ⅰ）（×100）



有加飾漆(ベンガラ漆＋黒色絵漆)（Ⅱ）（×100）



有加飾漆(黒色系漆＋石黄加飾漆)（Ⅱ）（×100）



赤色系(朱)漆・布着せ補強（Ⅶ）

赤色系(朱)漆・布着せ補強（Ⅶ）（×50）

（写真２）塗装膜面の塗り構造の分類

第5章　まとめ

第１節　遺構の変遷　（第311～313図）

以下，調査結果より弥生時代後期及び平安時代のものと，それ以後の主要遺構を５期に分け，当地点での変遷を考察する。

弥生時代後期及び平安時代

調査では，弥生時代後期及び平安時代の遺構を若干ではあるが検出した。周辺部に遺構の事例がなく現状では不明な点もあるが，当期の弥生土器は，高松城下の調査で比較的多くの出土例が認められる。後期になり遺跡数が飛躍的に増加する平野部の状況をみれば，当地周辺点でもそうした状況下に想定され，今後の調査で集落の所在が判明することが期待される。平安時代の遺構では，既に南接する調査地点（香川県埋蔵文化財調査センター2003『高松城　丸の内地区』）で当該期の遺構基盤層が存在することが指摘され，今回の調査により裏付けられた。確認された溝は条里地割りとは方向が異なり，平野部より条里施工が遅れる可能性がある。野原庄となる以前の段階に想定され，当該期についても海浜部である当地点周辺まで生活域が及ぶことが明確となった。

Ⅰ期　築城以前～17世紀初頭

近年，高松城下の調査では中世期の遺跡が随所で確認され，高松城下が中世期の集落（港町）を基盤とした状況が想定されるようになった。南接の調査地点『高松城　丸の内地区』では中世前葉の井戸が２基確認され，今回の調査地点でも中世末葉に廃絶する井戸（SE3004，3005）及び溝（SD3007）が確認され，また近世の遺構に混入品として散見される中世期の遺物から，当地点周辺でも中世段階の遺跡の存在が想定される。当調査では中世の遺構が南部において末葉期の整地により廃絶したことが確認され，以後との画期がうかがわれる。また西半部では，東西方向の溝状遺構に考えられるSX3007及び南北方向の溝SD3009が検出されている。SX3007については，後出のSX3002の底面で認められる痕跡の方向及び規模からＬ字形に屈曲していた可能性も考えられる。SD3009との関係は不明な点もあるが，両溝は一定の規模を有しており，区画溝であった可能性が推察される。SX3007の出土遺物は，唐津を含む等上述の中世遺構のものとは様相が異なっており，生駒時代の初段階まで存続していたか，あるいは生駒時代初期の所産と考えられる。中世末葉のSD3007を含め，これらの主軸が条里方向（高松平野では，真北より約８°東へ傾く）にほぼ合致し，後出の区画及び現状で認められる地割りと異なる。現況の城下地割及び『高松城下図屏風』（図版55）をはじめ松平時代の絵図では曲輪の北面，中堀のラインはほぼ東西に水平であるが，南面となる外堀のラインは，条里地割に合致した傾きをもつ。当地点は後出の遺構及び立地から，やがて曲輪の北面，中堀のラインに規制される状況を読み取ることができるが，生駒時代初期段階では古い地割りを踏襲していた可能性も考えられる。この様な条里地割は，現況でも外堀以南及び曲輪内においても若干認められる。

Ⅱ期　17世紀前葉（生駒時代）

大型遺構SX3002，SX4001の存在が際立つ。直接，区画を示すものではないが，遺構南限及び調査地南西隅に位置する井戸（SE3007）から，後出の様な南北及び東西の道路の存在も推定される。この道路については生駒時代末期の『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』（図版53）と松平時代初期の『高松城下図屏風』で変化なく描かれ，現況でその推定に矛盾は生じない。また生駒

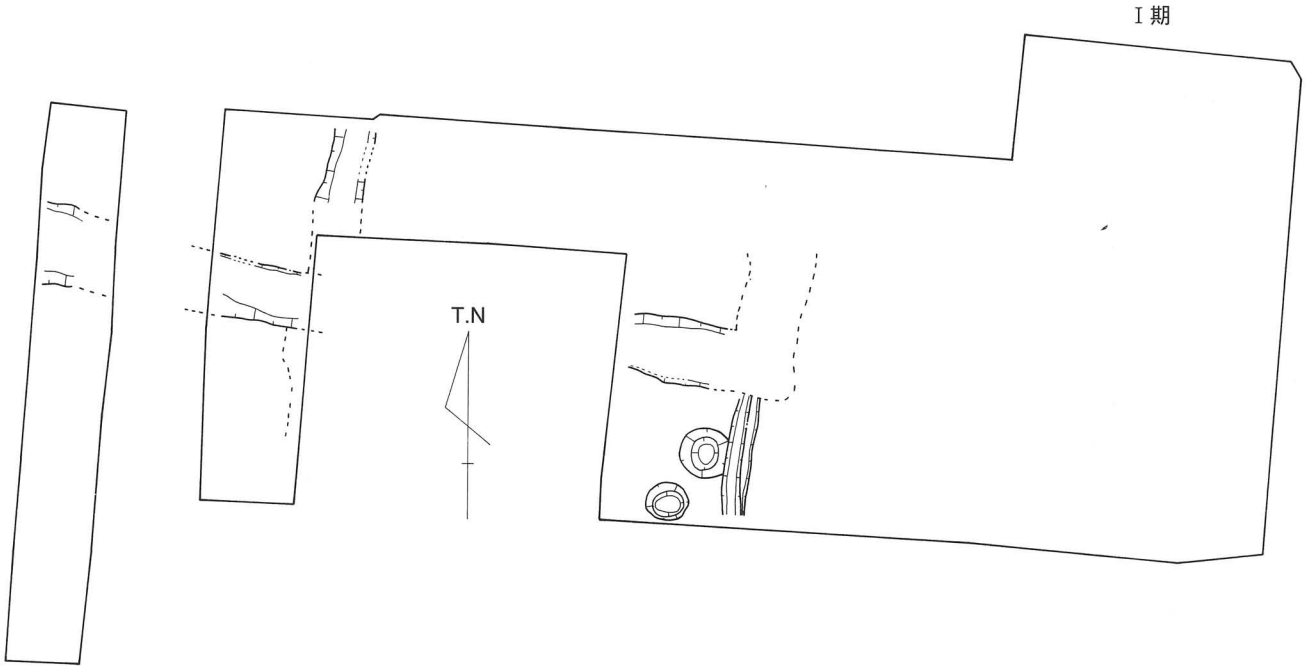
時代の絵図では，当調査地点に２或いは３つの区画の存在が比定される。当絵図によれば，西端の屋敷地が張り紙のため不明だが，中央部は空閉地，東に北村興惣右衛門の屋敷が見られる。ゴミ捨場の様相となるSX3002に，土地利用の状況から空閉地の可能性もあるが，区画として明瞭なものではない。その一方，松平時代ではこれら複数の屋敷割りが，広大な屋敷へ統合される状況を文献資料及び調査結果で認められる。さらに東西道路を挟み南接する調査地点（『松平大膳家中屋敷跡』及び『高松城　丸の内地区』）で，生駒時代～松平時代初期の南北方向の区画溝が確認された結果からは，当該期の屋敷割りが復元できる可能性が指摘される。しかし当地点では南北方向の区画は検出されず，後出する松平期の屋敷の東限についても調査範囲外に想定される結果となっている。また生駒時代～松平時代の過渡期に推定される『讃岐国高松城図寛永十七年生駒家封地没収大洲藩主加藤泰興当時』の絵図によれば，屋敷割りが細部で変化した可能性も考えられ，現状で当期の詳細な屋敷割りの復元は難しいと言わざるをえない。

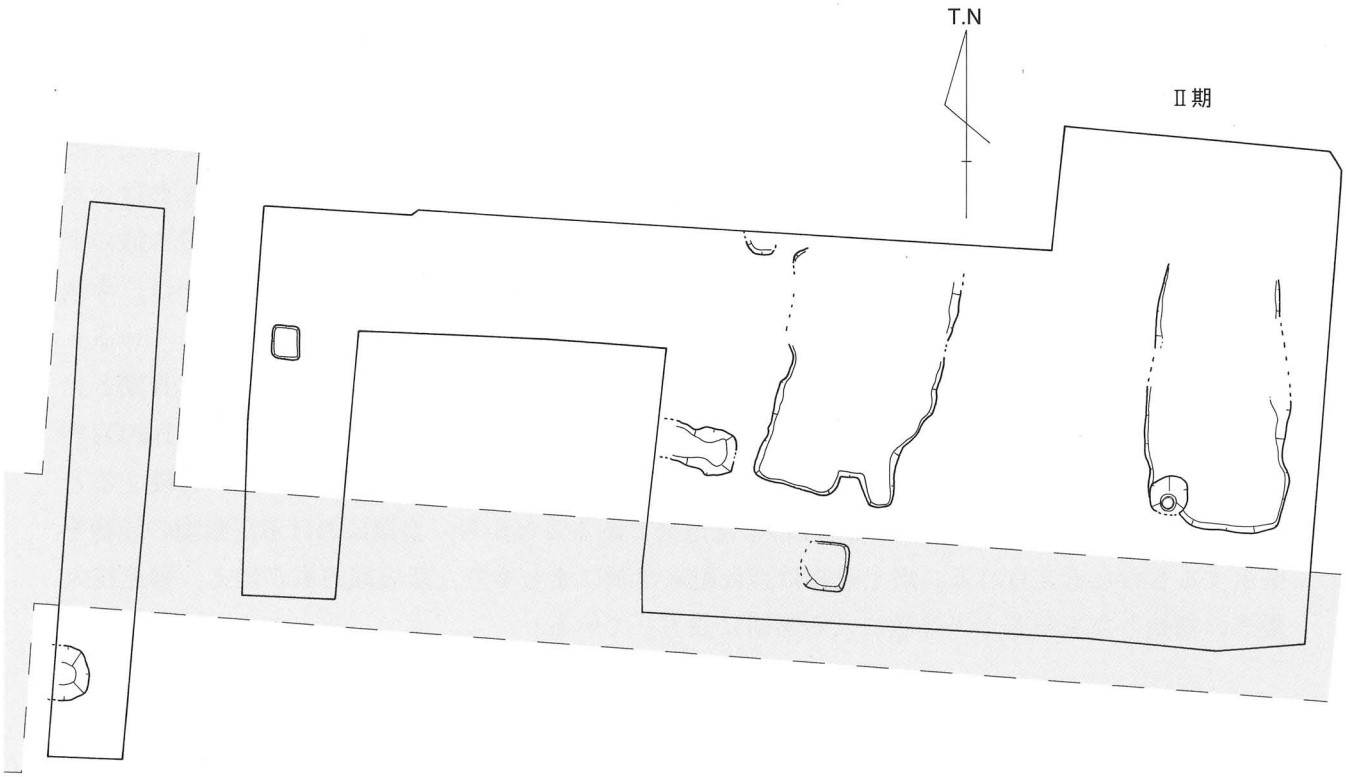
Ⅲ期　17世紀中葉～18世紀前葉

松平時代に入り，生駒期の複数の屋敷割が１区画の屋敷地に統合される。17世紀中葉，頼重時代の城下を詳細に描いたとされる『高松城下図屏風』がある。当絵図によれば，調査地点は大きな屋敷の裏庭部分に相当し，確認された東西方向の溝（SD2003）及び道路がその南限と考えられる。また調査地西端部で南北方向の道路が南に位置する屋敷に突き当たり，鍵形となる様子が絵図と一致して認められる。屋敷内で確認された遺構については，基本的に次期へと踏襲される内容と考えられる。中央部及び北東部隅で，Ⅳ期の終わりに埋没する窪地が存在する。遺構として明瞭な形で検出できなかったが，状況として池状の施設が推定される。北東隅SX3005では木簡資料が出土し，当屋敷が頼重の重臣，彦坂織部邸であることが特定される成果を得た。中央部では，Ⅳ期の終わりに廃棄土坑となるSX2008・3001と同一プランとなる杭列が認められ，その底及び西岸部には導水施設に想定されるSE3003－②，SE3003が検出されている。これらの遺構は，区画溝SD2003と同様に屋敷の基本的な施設であるため，松平時代当初より設置された可能性が考えられるが，Ⅳ期と重複するため，その詳細な設置時期には検討を要する。とりわけ上水施設については，頼重時代に敷設されたと伝わるが，『高松城下図屏風』で曲輪内に貯水池のような箇所が見られず，また配管に竹樋という後出的な構造が当該期に遡りうるのか否かは，今後の調査の進展による。その他屋敷境の施設として，焼土層より下位でSB2002を検出している。単独で建物となるのか後出のような長屋となるかは不明だが，礎石の基盤の状況からはⅣ期と比べ小規模な上部構造が推定される。東部で検出された溝状の遺構SD2006については，SB2002や後出するSA2001の北面のライン上に開削されており，またSA2001（SB2001）に付随するとみられる石列状の遺構SD2004，2005の下位遺構であることから，当期における屋敷境の建物を暗示するものと考えられる。出土遺物は17世紀末葉頃にまとまり，彦坂織部家が絶え，御連枝大膳家の創始となる頼芳が当屋敷に入る画期に該当している。

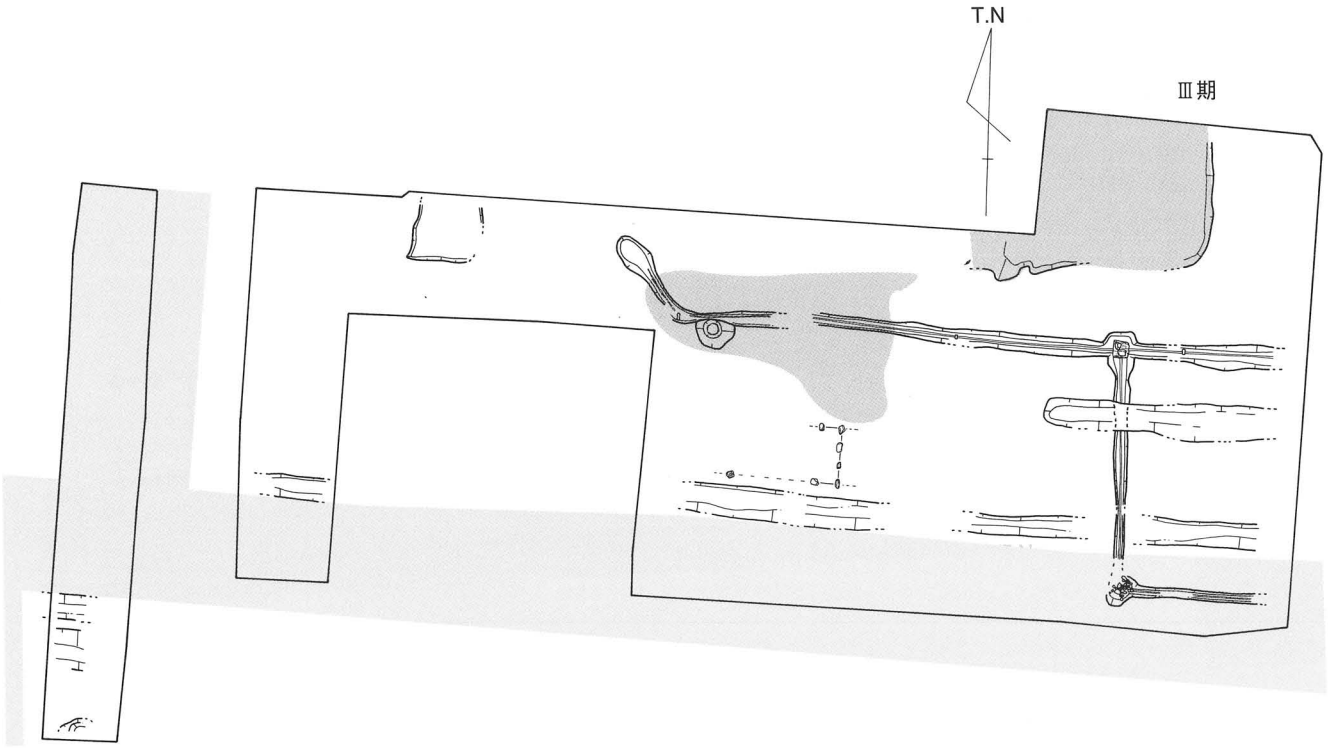
Ⅳ期　18世紀前葉～19世紀前葉

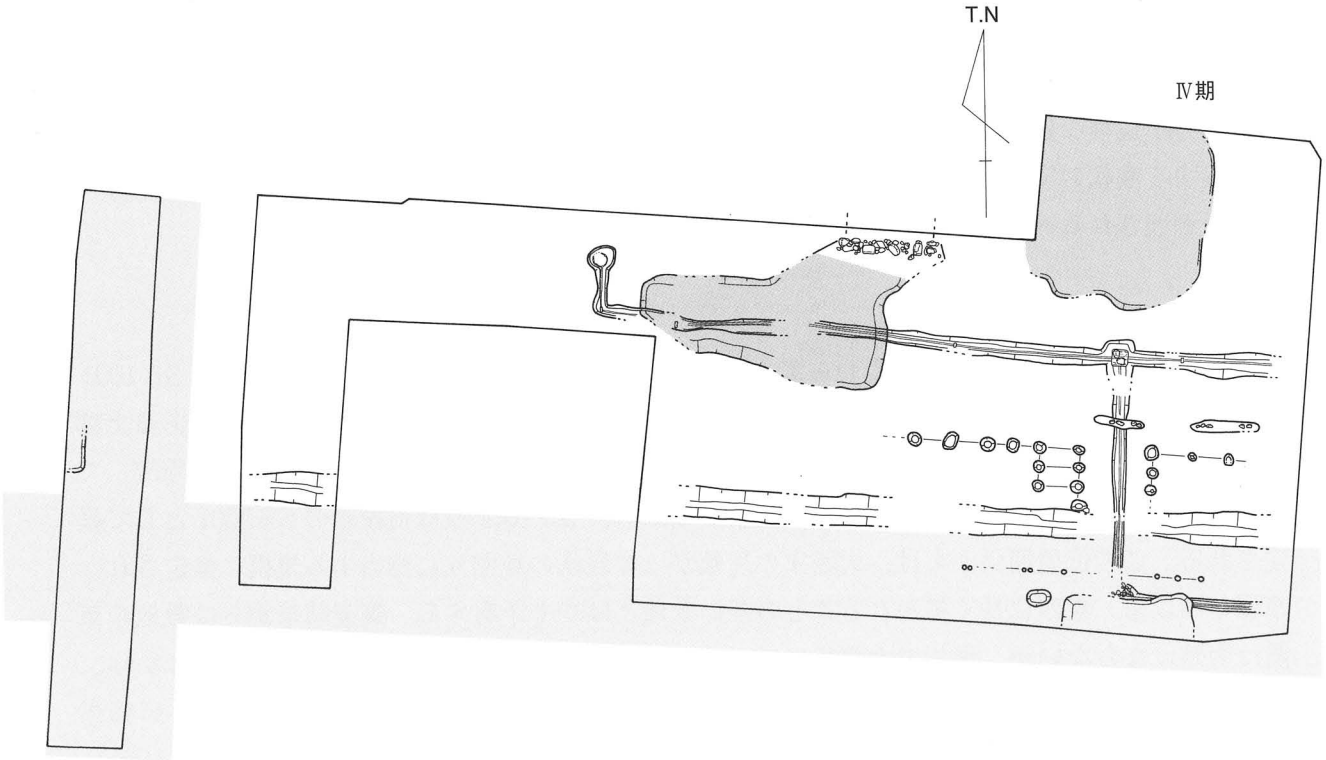
屋敷境の溝が焼土を前後としSD2003からSD1001に付け替えられた段階を初現と想定される。屋敷内の有様は根本的な変化が見られず，上述したように基本的には前段階を踏襲した状況と考えられる。屋敷地の区画では，調査地の南西端に想定された屋敷が南北方向の道路に吸収され，



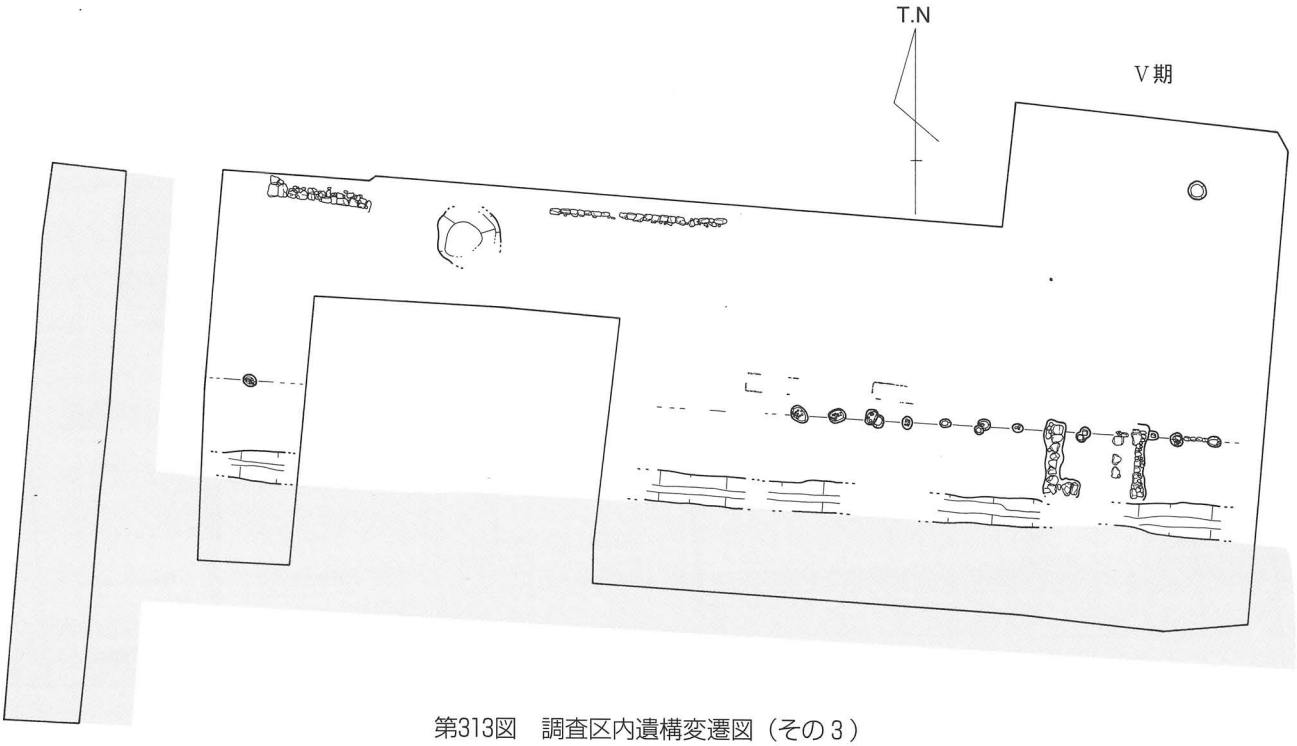


第311図　調査区内遺構変遷図（その１）





第312図　調査区内遺構変遷図（その２）



第313図　調査区内遺構変遷図（その３）

十字の交差点となる大きな変化が認められる。遺物量が少なく調査結果のみで明確な時期比定は難しい。そこで絵図について見ると『高松城下図屏風』から享保年間の『高松城下図』（図版56）まで空白となるが，この間に十字の道路へ変化したと考えられる。現状では，焼土がSD1003への付け替えの契機となること，道路の変更に４つの屋敷地が関与することから，享保３年(1718)の高松大火が画期としては最も可能性が高い。屋敷内では，次期に踏襲されるSA2001，SB2001が屋敷境の施設としてあり，その南面の道路上に小規模な柵が見られる。また池（SX2008）に南面し小規模な建物に想定されるSX2010がある。当期の下限は，SX2008及び調査地北東部に位置する池状の窪みが完全に埋没する時期であり，なおかつ門の南に位置するSK2095に伴い上水枡が壊される等，前段階以来の上水施設が廃絶する19世紀前葉が推定される。

V期　19世紀前葉～19世紀末

屋敷割りそのものは前段階と変わらず，屋敷境の施設もほぼ同様に認められる。長屋SA1001は，前段階より西方へ伸びる状況が明瞭となり，門と考えられるSB1002はより重量のある上部構造に耐える土台に付け替えられる。『高松市街古図（文化年間頃高松城下図）』（図版57）では，大膳家屋敷の南面屋敷境に門らしき建物が描かれ，SB1002或は前段階のSB2001として推定される。この位置関係からは，大膳家の屋敷がほぼ現状の地割りに相当する規模に推定され，享保年間以来，東西に長く描かれることの多い敷地とはやや矛盾する。調査結果からは敷地の東限は明確にならないが，現状で大膳家について敷地の増減を示す記録は認められないことから，むしろ現状の地割りとほぼ一致し描かれた『讃岐高松城下絵図（弘化年間）』（図版58）に相当する規模の敷地であった可能性が高い。屋敷内では，北部に建物（SB1001）や石列（SZ1001），井戸（SE2001，2002），屋敷内での小規模な区画（SX1003，1004）等が認められるが，前段階に池状の窪地は埋められ大半は空閑地状に見られる。

第２節　絵図・文献から見た大膳家の歴史と屋敷地の変遷（第314～318図）

第１節「遺構の変遷」をもとに，ここでは絵図や文献から大膳家の歴史と屋敷地の変遷について検討したい。なお絵図の時期については，森下友子1996「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要』Ⅳに依拠する。

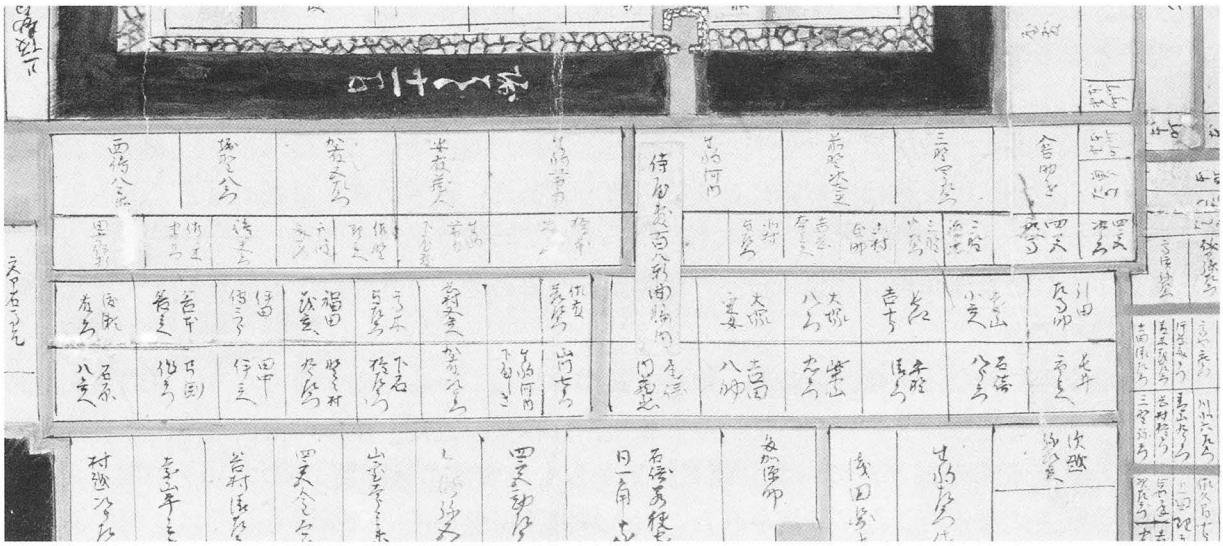
Ⅰ期

この時期は，高松城築城以前にあたるため，絵図は認められない。資料からは，応徳３年（1086），白河天皇の退位に伴い，野原郷内の勅旨田が立券されて野原庄が成立していることがわかる。この頃と考えられる遺構・遺物は今回の調査でも確認できた。近年多く実施された香川県埋蔵文化財調査センターの調査では，高松城東ノ丸地点で15世紀頃と考えられる漁民の墓が確認され，この南に続く香川県歴史博物館建設地点でも同様に漁民の墓が検出されている。高松城西側では，浜ノ町遺跡で14世紀から15世紀前半を中心とする居館跡が確認され，白磁四耳壺埋納遺構を検出している。また，西の丸町地区では，12世紀から13世紀前葉と考えられる湊関連施設が検出されている。平成14年度高松市教育委員会によって調査が実施された西の丸地区では，12～16世紀の集落跡を検出した。また，溝から「野原濱村无量壽院」と記された文字瓦が出土しており，この地点が，「野原濱村」であったことや天文年間（1532～1555）にあったとされる無量寺院の存在を裏付けた。今回の調査でも中世と考えられる遺構・遺物を確認した。それらはほぼ城下築造直前のものと考えられる。また，14～15世紀と考えられる瓦も出土しており，弥生時代終末・古代・中世と続く集落の存在が想定される。その外，遺構は確認されていないものの，弥生土器・須恵器・須恵質土器・土師質土器は，ほとんどの調査地点から出土しており，高松城周辺の中世以前が明らかになりつつある。

Ⅱ期

戦国時代の動乱を経て，天正16年（1588），生駒親正により高松城築城が始まった時から，寛永17年（1640）生駒騒動により生駒氏が出羽国矢島に転封されるまでの時期に当る。

絵図には寛永15・16年（1638・1639）に描かれたとされる『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』がある。調査区は御城の南，北に「生駒河内」，南に「北村興惣右衛門」，その西には空閑地，



第314図『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』

さらに西には張り紙が認められる一角である。「生駒河内」は石高3160石を有する生駒氏一族である。母は生駒一正の娘「山里」で，中納言猪熊教利に嫁いで生まれた子であるが，教利早世したため連れ帰り，一正が撫育したものとされる。「北村興惣右衛門」は石高600石を有しており，生駒騒動時は逆意方であったとされる。調査区内では，屋敷地の境を画する溝等は検出されなかったが，SX4001の西辺が直線状に北に伸びていることから，ここに境が存在したと想定することも可能である。そうすると，平成13年度に当調査地の南側で実施された香川県埋蔵文化財調査センターの調査（丸の内地区）で検出された「大塚采女」「大塚八右衛門」の屋敷地を画す溝を延伸した位置に屋敷地の境が想定されるわけであるが，そうした場合，絵図では東隣の「前野次太夫」「吉岡太郎兵衛」と境をなす事になり，次時期の遺構･遺物や資料との齟齬が認められる。現状では，絵図『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』は，その屋敷境については，正確性を欠いているものと理解したい。

Ⅲ期

松平頼重入府から亨保３年（1718）高松大火までをこの時期とする。

生駒騒動の後，大洲城主加藤出羽守，今治城主松平美作守，西條城主一柳丹波守がそれぞれ統治していたが，寛永19年（1642），水戸藩の長子松平頼重が高松12万石藩主として入府した。この時期の絵図として，『高松城下図屏風』がある。

『高松城下図屏風』は1650年代前半に描かれたと考えられているもので，絵図からは生駒時代，生駒河内と南３軒だった屋敷は１軒になっていることが認められる。『生駒家廃乱記』からは，「生駒河内」「北村興惣右衛門」「前野助之丞」の屋敷が，松平家の大老「彦坂織部」の屋敷となったことが認められる。屋敷数と拝領者に『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』とは齟齬を認めるが，『讃岐国高松城図寛永十七年生駒家封地没収大洲藩主加藤泰興当時』の絵図では，北に「生駒河内」南の東側に「北村興惣右衛門」その西側に「前野助之丞」とあり，『生駒家廃乱記』と一致している。

彦坂織部は頼重の常陸下館時代からの家臣で，石高6000石の大老であり，その嫡男織部黒年は頼重の姪を妻に娶っている。

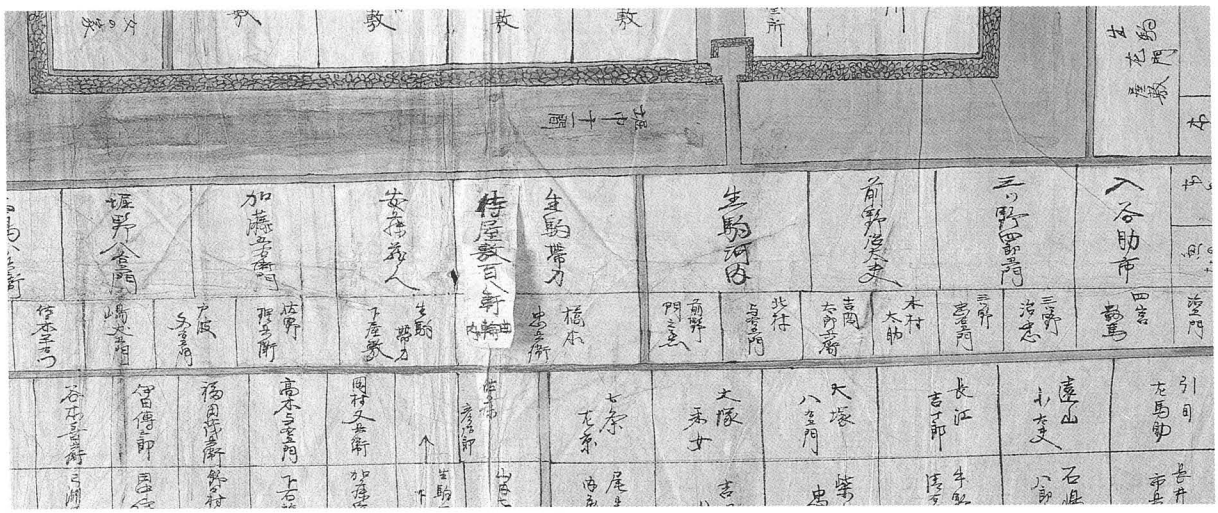
その後，貞亨４年（1687）彦坂家は継嗣なく断絶となり，翌年，松平頼重の庶子，松平頼芳が入居する。この後，御連枝として頼芳の孫頼垣は第４代藩主となり，その弟頼央・至央は阿波藩主の養子となっている。

Ⅳ期

享保３年（1718）の火事は江戸時代最大の火事と言われ，城下の武家屋敷のほとんどを焼き尽くしたとされる。

『高松城下図』は享保年間（1716～1736）に描かれたもので，『高松城下図屏風』と大きな地割の変更を認める。

屋敷の南を東西に伸びる道は，前時期，西側で鍵型を呈していたものがなくなり，東の南北道路まで３軒であった屋敷は２軒となっている。また，「松平左近殿」屋敷の南西と南，さらに東に用水と思われるものが描かれている。調査結果からも道南側の区画溝（SD2010）が埋められた後，整地され道になったことが確認された。大火以前，屋敷の囲いは掛塀もしくは土塀であったものが，以後，御城火除けのため屋敷の並びを中堀から５間南に寄せ，腰瓦で再建したという。



第315図『讃岐国高松城図　寛永十七年生駒家封地没収大洲藩主加藤泰興当時』

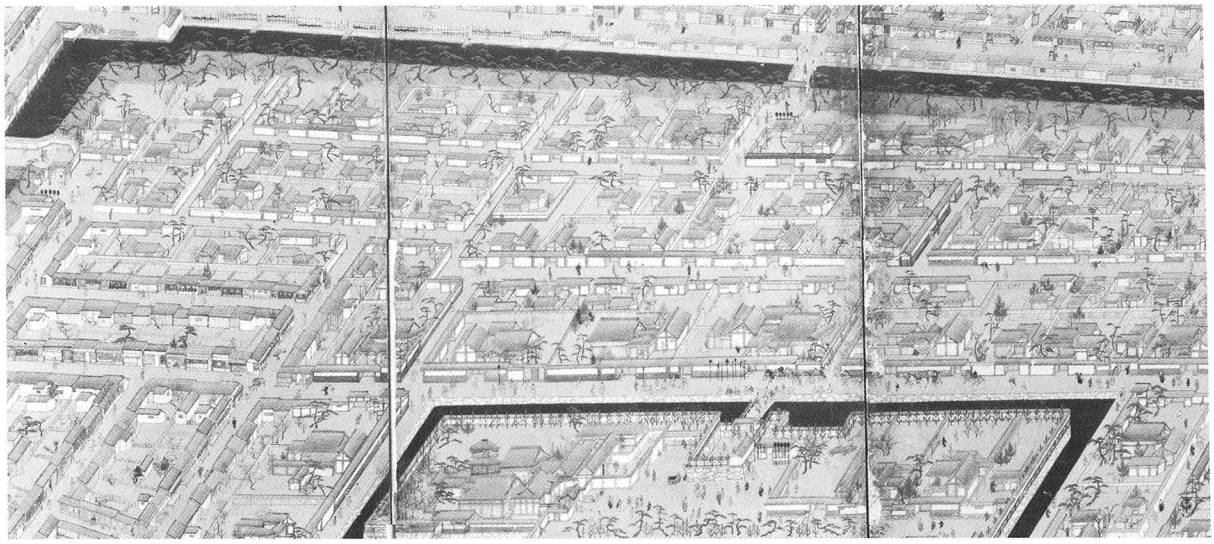
（『小神野夜話』）大火後，再建された門や塀は柱穴を持ったものになったことが確認された。なお，『高松城下図』にみられる「左近様」は頼芳の嫡男「頼凞」である。また，東西道路を挟んで南に見られる「左近様中屋敷」は，平成13年度に高松市教育委員会によって発掘調査が実施された地点（前述　松平大膳家中屋敷地点）であるが，彦坂家時代，その嫡男のために，松平半右衛門屋敷を召し上げ，屋敷を建てている（『小神野夜話』）が，それが，後に代々松平家の中屋敷になったものと思われる。調査の際，頼昌時代の宴のゴミ穴を検出している。

宝暦９年（1754），松平家は継嗣なく，第５代藩主頼恭の庶子，頼昌が養子となり家督を継ぐ。頼昌は明和２年（1765），「大膳」に名前を改め，5000石に加増される。絵図『日本興地南海道郡郷部讃州高松地図』はこの頃のものと考えられる。頼昌にも継嗣がなく，寛政１年（1789），弟頼裕の長子頼格が養子となり，家督を継ぐ。その後，天保７年（1836）嫡子頼覚が家督を継ぐのをもって，Ⅳ期が終わるものとする。

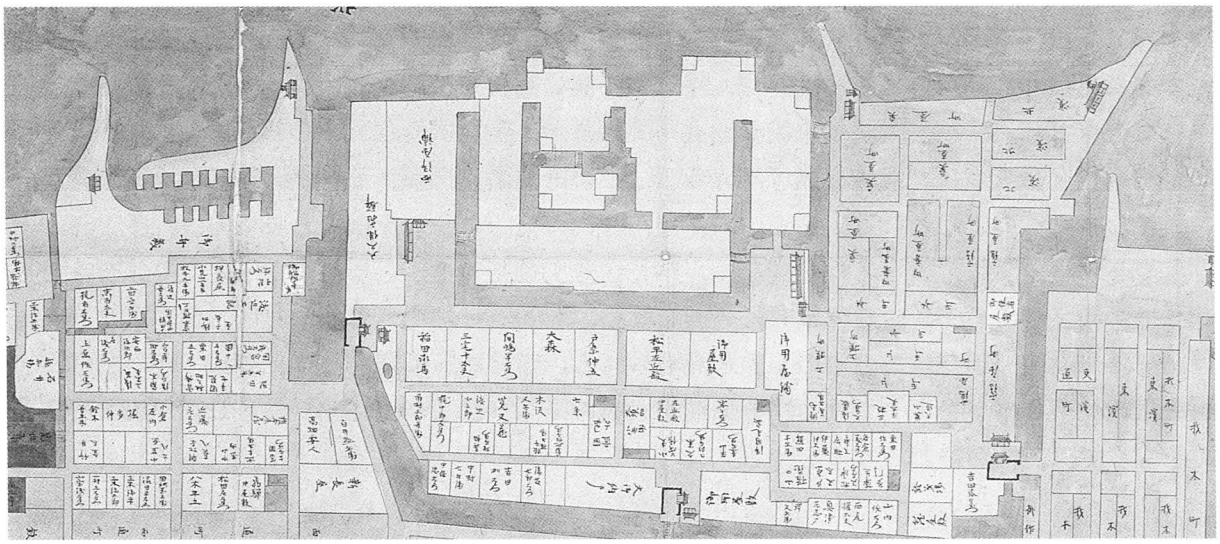
Ⅴ期

天保７年（1836）を上限とする。この時期と考えられる絵図に『東讃高松絵図』『天保15年高松之図』『安政４未年高松之図』がある。これらの絵図はいずれも「頼覚」の時期に描かれたもので，地割等に変化はみられない。「頼覚」は後，「大膳」を名乗り，幕末には藩主頼聡にかわり二条城の警衛や禁門の変では日之門外の守衛にあたったり，第１次長州征伐にも出兵した。このような状況の下，元治２年（1865）嫡子頼利が家督2000石を継いでいる。慶応３年（1867）の大政奉還，翌年，明治新政府となるなど激動の後，明治４年（1871）高松藩は高松県となるが，数ヶ月後には丸亀県を合併して香川県となる。しかし明治６年（1873）には名東県（阿波・淡路国）に併合。再び明治８年（1875）には香川県になり，翌年には愛媛県に併合される。そしてようやく明治22年（1888）に至って分県独立を果たし，明治27年（1894）香川県庁が「大膳家」跡に建設される。

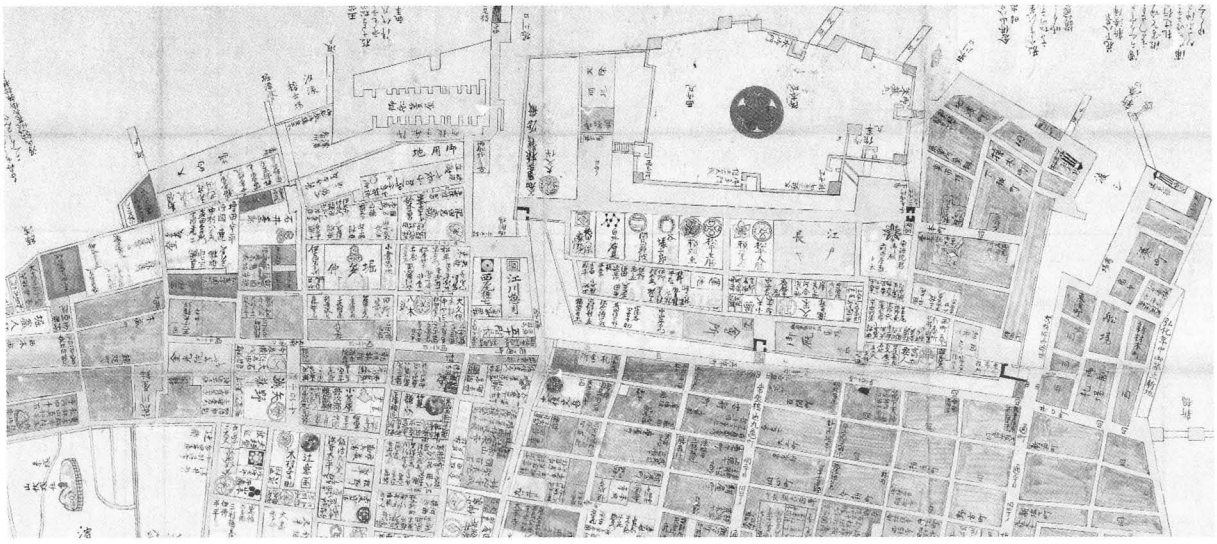
明治15年（1882）の『高松市街地図』では，外堀が幅半分程度に埋められた様子が認められ，「大膳家」のあった一区画は「江戸ナガヤ」との記載が認められることから，これ以前に言い伝えどおり四番町のほうへ移転したものと考えられる。



第316図『高松城下図屏風』



第317図『享保年間高松城下図』



第318図『東讃高松絵図』

引用文献・主要参考文献

飯田町遺跡調査会 1995 『飯田町遺跡』

大嶋和則 2002 「高松城跡（松平大膳家中屋敷）発掘調査報告書」高松市教育委員会

大橋康二 1994 『古伊万里の文様』理工学社

大阪市文化財協会 1998 『住友銅吹所跡発掘調査報告書』

小野正敏 1082 「15，16世紀の染付碗，皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究No. 2 』日本貿易陶磁研究会

香川県教育委員会 1987 『高松城東の丸跡発掘調査報告書』

九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』

北山健一郎 1999 『香川県立博物館建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センター

財団法人　小谷城郷土館 2000 『シンポジウム　焼塩壷の旅―ものの始まり堺－』

佐賀県立九州陶磁文化館 1984 『国内出土の肥前陶磁』

佐賀県立九州陶磁文化館 1996 『土と炎－九州陶磁の歴史的展開－』

佐賀県肥前古陶磁窯跡保存対策連絡会 1999 『肥前古陶磁窯跡　基礎調査・基本方針策定報告書』

佐藤　隆 2000 「実年代資料　大坂」『第12回　関西近世考古学研究会大会　近世の実年代資料』

佐藤竜馬 2000 『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』㈶香川県埋蔵文化財調査センター

佐藤竜馬 2002 『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第４冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』㈶香川県埋蔵文化財調査センター

鋤柄俊夫・森毅 1999 「豊臣期大坂城跡における三ノ丸築造以前の基準資料」『大阪市文化財協会研究紀要』第２号　大阪市文化財協会

千代田区飯田町遺跡調査会ほか 2001 『飯田町遺跡』

東京大学埋蔵文化財調査室編 1990 『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書３　東京大学本郷構内の世紀医学部付属病院地点』

豊田　基 1982 「讃岐のやきもの」『日本やきもの集成10　四国』平凡社

成瀬晃司 2000 「江戸遺跡における実年代資料」『第12回　関西近世考古学研究会大会　近世の実年代資料』

難波洋三 1992 「徳川大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究』第９

乗岡　実 2002 『大坂城三之曲輪跡－表町一丁目地区再開発ビル建設に伴なう発掘調査－』岡山市教育委員会

藤沢良祐 1993 『瀬戸市史　陶磁史篇』瀬戸市

藤好史郎 1996 『高松港頭土地区画整理事業平成７年度埋蔵文化財発掘調査概報　高松城跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか

古野徳久ほか 2000 『平成11年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告　高松城跡（西の丸町）・浜の町遺跡』㈶香川県埋蔵文化財調査センターほか

堀内秀樹 1997 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学校内遺跡調査研究年報Ⅰ　1996年度』東京大学埋蔵文化財調査室

松本和彦 2002 「高松城跡出土の京・信楽系陶器と理兵衛焼」『第４回　四国城下町研究会　四国・淡路の陶磁器Ⅱ－理兵衛焼と京焼－』

松本和彦 2003 『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第５冊　高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』㈶香川県埋蔵文化財調査センター

松本和彦 2003 『高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　高松城跡（丸の内地区）』㈶香川県埋蔵文化財調査センター

松本和彦 2002 「四国地方－香川県－」『第12回九州近世陶磁学会　国内出土の肥前陶磁　西日本の流通を探る』九州近世陶磁学会

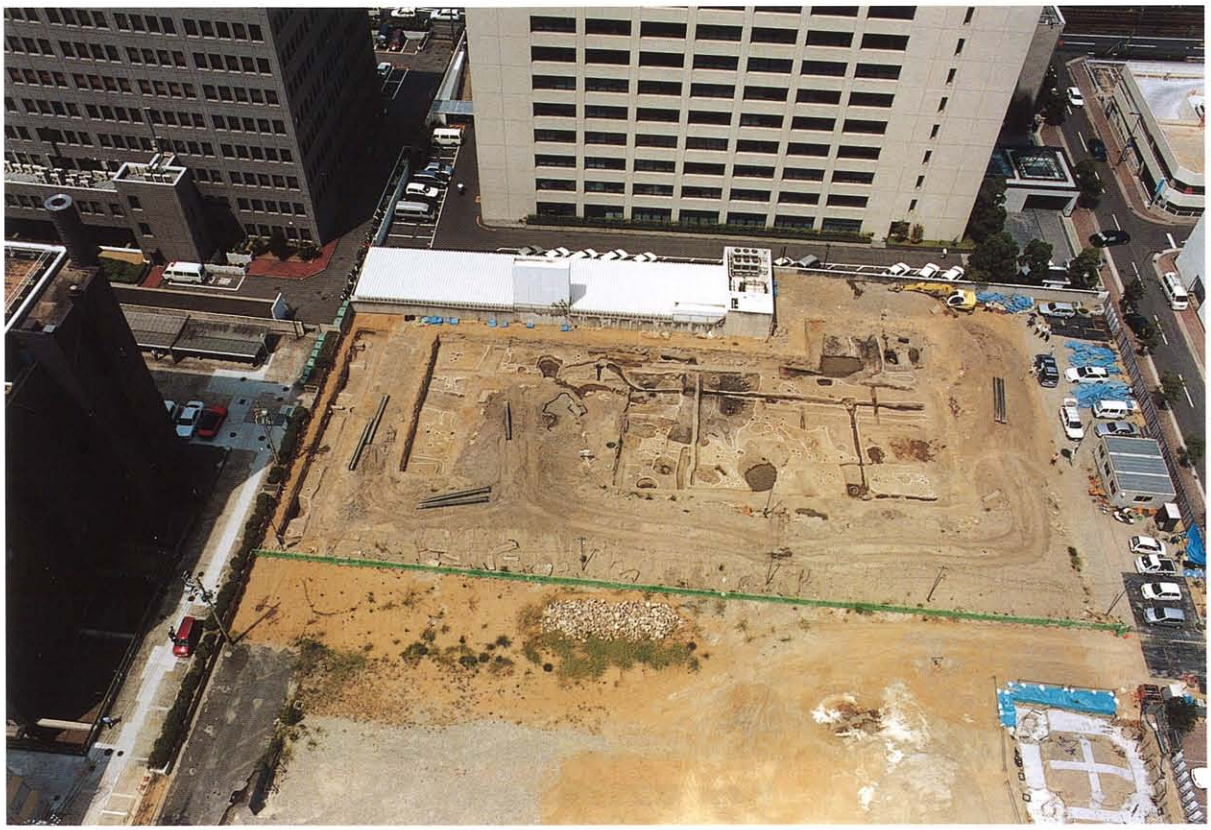
森　毅 1992 「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究』第９　財団法人　大阪史文化財協会

森下友子 1996 「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要』Ⅳ　㈶香川県埋蔵文化財調査センター

森田克行 1984 『摂津　高槻城』高槻市教育委員会

森村健一 1995「福健省　州窯青花・五彩・瑠璃地の編年」『大阪府埋蔵文化財協会』

調査区（南西方向から）



調査区近景（南方向から）

図版2

第３面　調査区全景（右が南）

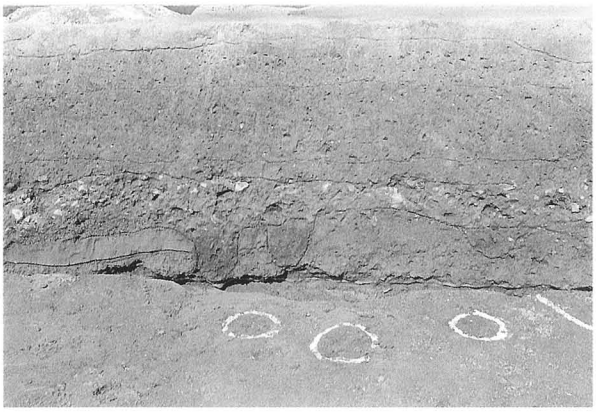
第２面　調査区全景（左が南）

図版4

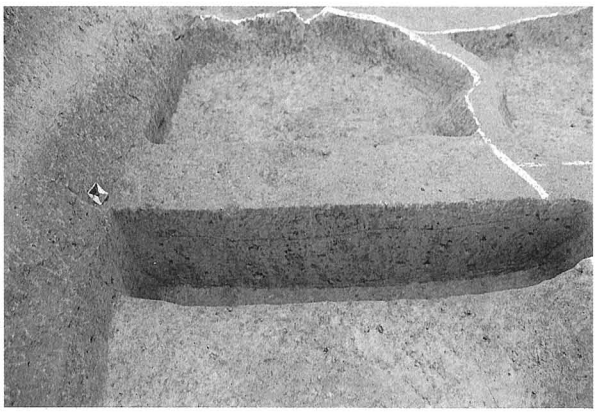
第１面調査区全景（四電ビルより）

SB 1002 完掘状況（上が南）

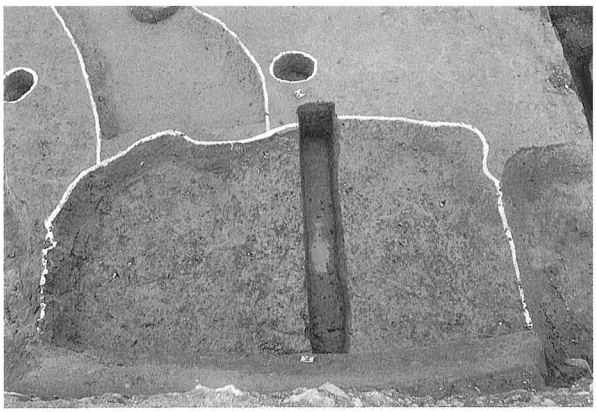
第５面Ａ－Ｃ区柱穴群（南方向から）



弥生柱穴群　断面

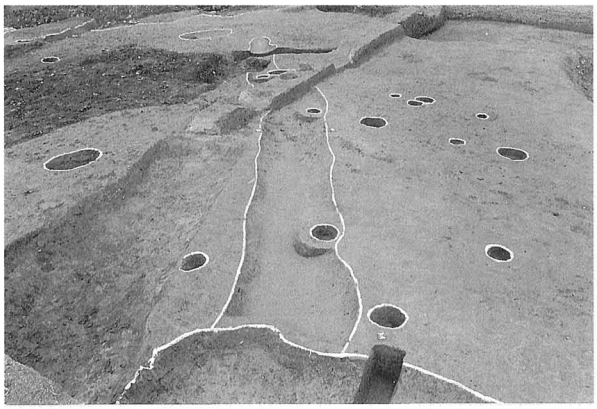


SK4001　断面



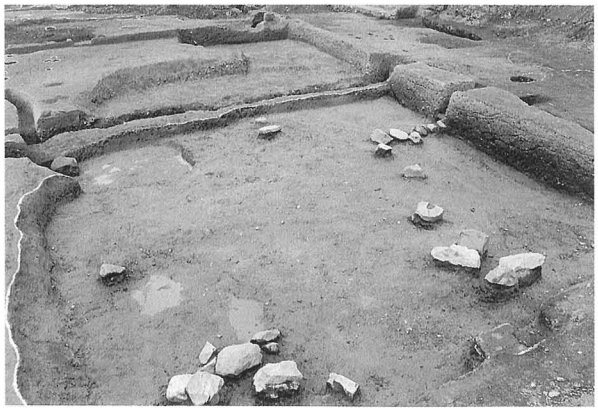
SK4001（南方向から）

SD4001　断面



SD4001（南方向から）

SX4001　断面



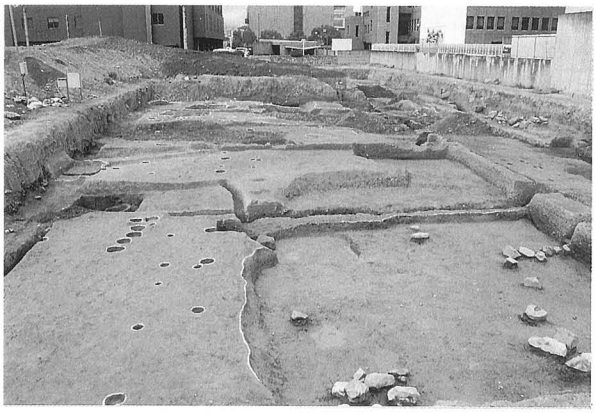
SX4001（東方向から）

図版6

F区　第3面完掘（南方向から）

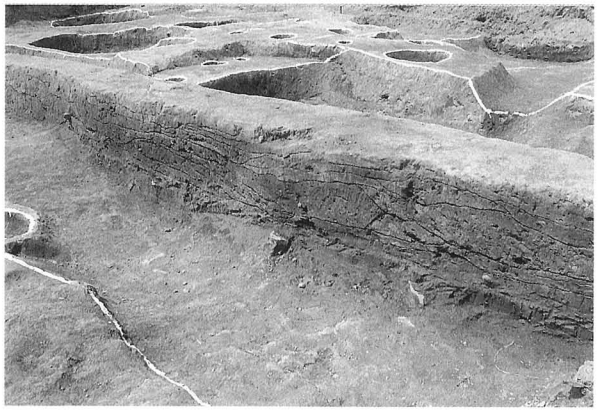
E区　第3面完掘（南方向から）

SX3002（北方向から）



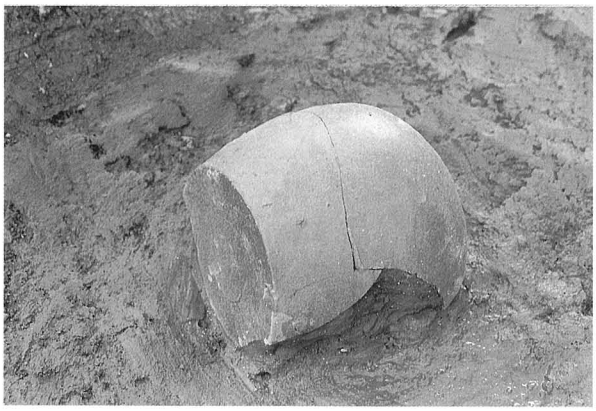
SX4001（東方向から）

SX3002　断面



SX3002　断面

SX3002 遺物出土状況



SX3002 遺物出土状況